

經濟学史学会編

經濟学史学会 50年史

經濟学史学会

經濟学史学会 50 年史

經濟学史学会

まえがき

経済学史学会は、1950年4月22日の第1回大会の初日の総会によって発足した。発企人は、堀経夫、久保田明光、舞出長五郎、大塚金之助、坂本彌三郎、高橋誠一郎の6先生であり、当初の会員は123名であった（なんと123名中、2000年6月現在、久保芳和、小林昇、杉原四郎、菱山泉、水田洋先生等18名の方が現会員である）。

50周年のこの2000年には、11月に第64回目の大会を開くことになっており、会員数841名、5つの地方部会をもち、年報も来年度の第39号から年2回の発行にしようとしている。学会ニュースと会員名簿を発行し、英文論集を出版し、ホーム・ページJSJETをもち、学会推薦の日本学術会議会員を擁している。アメリカやイギリス、オーストラリア、韓国に同種の学会があるが、日本の経済学史学会が歴史も古しい、はるかに大きい。

日本の経済学史学会は経済学史研究のメッカとして、優れた研究業績を生み出しており、日本の経済学をリードする錚々たる経済学者を輩出している。また多数の新進の経済学者を育てている。運営は私が知る限り学問を中心にかわめて民主的・公平であり、透明である。

経済学史学会はこの50年の間にどんな歩みをして今日のこのような学会になったのだろうか。50年の歴史を知れば、私たちはそこに先輩たちの知恵と努力の跡を見いだすであろうし、また今後に向けての活力や指針を得ることも出来るであろう。また歴史の重みを知るだけでも我々を育ててきた学会を大切にしなければという思いに至るであろう。

このような考えから1996年に、常任幹事会や幹事会で、経済思想史辞典(馬渡尚憲委員長)、記念講演会(竹本洋委員長)、データベース(八木紀一郎委員長)と並ぶ50周年事業の1つとして50年史の編集刊行が計画された。

担当者には二人の元代表幹事が選ばれた。そして特に中村廣治・元代表幹事のお骨折りによって完成したのが、この『経済学史学会50年史』である。ご承知のように、経済学史学会は、1961年に『日本における経済学史研究十年の歩み——経済学史学会十年史』を出している。1980年には『経済学史学会30年史』を出している。従って50年史は3回目の学会史であるが、データ

だけで言っても50年史が30年史より厚くなるのは当然である。30年史は約100ページであるが、この50年史は200ページ以上になっている。それだけに、追加20年のデータを丹念に収集し、整理するという作業に加えて、本文すべてを執筆された中村・元代表幹事のご苦勞は並々ならぬものがあったと推察され、深く感謝したい。それと同時に、この『経済学史学会50年史』が多くの会員に参照され利用されて、学会の一層の充実や発展に結びついていくことを期待したい。

2000年6月

代表幹事 馬 渡 尚 憲

目 次

まえがき

第1部 経済学史学会の50年

はじめに	3
1 学会創立から確立にいたる時期：1950年代（昭和20年代後半～30年代前半）	4
2 整備充実期：1960年代（昭和30年代後半～40年代前半）	8
3 安定的発展期：1970年代～80年代（昭和40年代後半～平成元年）	12
4 多様化と改革の時期：1990年代（平成2年～11年）	17
むすびに代えて	21

第2部 資 料

I 会 則（付 会則内規）	25
付録A 経済学史学会入会勧誘状	29
付録B 経済学史学会会則（1950年4月22日，創立総会制定）	30
II 役員および事務局	32
A. 幹事，監事，事務局等	32
B. 名誉会員（2000年6月現在）	42
C. 経済学史学会推薦日本学術会議会員	42
III 会員数の変動	44
IV 学会費と学会会計（1999年度会計報告）	46
A. 学会費の推移	46
B. 経済学史学会1999年度会計報告	46
V 大会研究報告（大会期間中の特別講演・公開講演等を含む）	47
VI 大会共通論題・フォーラム一覧	103
A. 共通論題	103
B. フォーラム	104
VII 大会開催校一覧	105
VIII 国際会議，公開講演会等	106

IX	外国人による特別講演	108
X	学会刊行物	109
	A. 論文集	109
	B. 定期刊行物（現在刊行中のもの）	114
	C. 学会史	114
	D. 経済学古典の復刻	114
	E. その他（廃刊となった定期刊行物等）	115
XI	『年報』における特集・学会展望・研究動向等リスト	115
	A. 特集	115
	B. 学会展望, 研究動向	116
	C. 論文	120
XII	声明書・訴え・要望書	123
XIII	国際学会派遣	128
XIV	部会活動	129
	1 北海道部会	129
	2 東北部会	130
	3 関東部会	135
	4 関西部会	152
	5 西南部会	176

人名索引

第 1 部

経済学史学会の50年



第1部 経済学史学会の50年

はじめに

経済学史学会は1950（昭和25）年4月に創設され、2000（平成12）年春に創立50周年を迎えた。これを記念する学会事業の一環として、『10年史』、『30年史』に続いて『50年史』の刊行が議され、その運びとなった。

学会の歴史を語る基本史・資料は、学会編集の『日本における経済学史研究十年の歩み——経済学史学会十年史』（1961〔昭和36〕年5月）および『経済学史学会30年史』（1980〔昭和55〕年11月）である。その後の学会活動を示す資料としては、『経済学史学会年報』（1963〔昭和38〕年創刊）が重要であり、近年、さらに「経済学史学会ニュース」（1992〔平成4〕年7月、第1号発行、翌93年より年2回）と「経済学史学会大会報告集」（第59回全国大会、1995〔平成7〕年以降）が加わる。この『50年史』の叙述（第1部）と資料（第2部）は、多くをこれらに負っている。本史は、紙幅の制約上、前半30年の詳細については『30年史』に譲り、主な事柄に限定して大要を述べるにとどめ、主として上記の『年報』以下の資料に依拠して、後半20年の学会諸活動の記述に力点が置かれている。

学会50年の歴史は、さまざまな視角から幾つかの時期に区分できらうが、会員数の動向をはじめ、全国大会の態様の変化（複数会場の設置、共通論題の多様化、フォーラム新設等）、さまざまな活動の組織化と多様化（『年報』を例にとると、責任編集校制から幹事会のもとでの編集委員会制に変わり、書評の充実、会員投稿論文の掲載等、内容上大きく変貌している。2001年〔第39号〕以降は年2回発行の予定。）、学会内組織の改編・充実（とくに幹事会のもとでの常設4委員会の設置）等を指標にして、おおよそ次の4期に区分することができよう。

- 1 創立から確立にいたる時期：1950年代（昭和20年代後半～30年代前半）
- 2 整備充実期：1960年代（昭和30年代後半～40年代前半）
- 3 安定的発展期：1970年代～80年代（昭和40年代後半～平成元年）
- 4 多様化と改革の時期：1990年代（平成2～11年）

そうしてこの第4期は、この時期に始まった「英文論集」の発刊も含めて、21世紀に向けた学会の新たな歴史を刻む起点をなすように思われる。

「50年史」の取纏めに当っては、歴代代表幹事からさまざまな補正・助言等をいただいた。また資料の一部を田中敏弘・田中秀夫両会員から補完していただいた。なお残るに違いない問題点は、一部は資料欠落のためもあるが、主として執筆者（中村廣治）の責任である。会員諸氏のご宥恕を乞う次第である。

なお、以下の叙述においては、文中、一切の敬称を省かせていただく。ご了承ください。

1 学会創立から確立にいたる時期：1950年代（昭和20年代後半～30年代前半）

経済学史・思想史の研究は、1930(昭和5)年代から第二次大戦の終結(1945[昭和20]年8月)までの厳しい思想・言論の弾圧のもとに、時流にくみしない良心的な研究の一つの拠り所であった(イギリス古典派研究を中心とする戦前の優れた成果を想起せよ)。

敗戦による学問・研究の自由の復活とともに、生活の窮乏が衣食を求めさせたのに劣らず、思想・知識の渴望が自由・民主・改革の諸思想、諸学説の翻訳・研究書等を求めさせた。なかでもマルクス研究の復興はめざましく、これが社会・経済思想、学説の歴史的研究に対する関心をさらに強めた。このような状況のもとに、専門学会の創設が久保田明光(早稲田大)、堀経夫(関西学院大)により話し合われ、高橋誠一郎(慶応義塾大)、舞出長五郎(東京大)、大塚金之助(一橋大)、坂本彌三郎(神戸大)を加えた6人が「発企人」(すべて故人)となって、1950(昭和25)年1月、学会加入の「勧誘状」を全国の関係者に送付した。それによると、学会設立の趣旨は、経済学史研究のため相互に「切磋琢磨」し、欧米に比して「必ずしも劣らない」研究水準をさらに「高め」ることにあつた(第2部「資料」編, I「付録A」, 参照)。寄せられた入会希望者は、およそ100名にのぼつた。

同年4月22日午前10時、早稲田大学政治経済学部において創立総会が開催された。参加者42名。堀が「開会の辞」を述べ、高橋座長の司会のもとに、

久保田が挨拶と経過報告を行った後、「発企人」の用意した「会則」（案）が審議、決定された（「資料」I、「付録B」、参照）。その特色は、「会則」の第1に、学会の「目的」を広く「経済学史、経済思想史の研究」と規定したことにある。いうまでもなく、狭く経済理論の歴史（経済学説史）に限定せず、その背後の人間観・社会観・歴史観等の研究も包括する意図を示したのである。その初志は、現会則の「目的」、「経済学史、社会・経済思想史の研究」によって、いっそう鮮明に示されている。役員には幹事、常任幹事および代表幹事が置かれる。通例の理事、常任理事、会長（理事長）の名称を避けたところに、「会則」の第2の、いわば「市民社会的」特色がある。第3は、当初から全国大会（年1回、ただし当初13年間は春秋2回）のほかに「地方部会」を設ける途を開いている点である。

役員選出は選挙によらず、発企人に一任され（「資料」II、参照）、高橋発企人が「顧問」（現在の「名誉会員」）、発企人を中心とする幹事7名（代表幹事・久保田、第4期まで重任）が推薦・承認された。ちなみに、第2期の幹事（8名）までは推薦制により、ほぼ第1期役員が重任した。しかし会員の増加も与かって、選挙による幹事選任の声が強まり、第3期（1954〔昭和29〕年5月～56〔昭和31〕年5月）の役員は、54年5月開催の第9回大会（横浜国立大）第1日の会員総会における出席会員の投票により幹事20名、当期から置かれることになった監事2名が選出された。この選挙方法は、幹事の増員・連記制等の改訂が行われたが、第17期（浜林正夫代表幹事、1983〔昭和58〕年4月から2年間）までの15期、30年間続いた。第18期（羽鳥卓也代表幹事、1985〔昭和60〕年4月から2年間）の役員選挙から郵便投票制に変わり、現在にいたっている（歴代役員については、「資料」II「役員および事務局」、参照）。

創立会員総数は、創立総会時の入会申込者10名を加えて123名（「資料」III「会員数の推移」、参照）。1999（平成11）年9月発行の「会員名簿」にいたるまで50年の会員歴を重ねている会員の氏名だけを列挙すると、相見志郎、梅谷泰夫、大石泰彦、大野精三郎、木村正身、久保芳和、小谷義次（2000年5月逝去届出）、小林昇、杉原四郎、田添京二、田中真晴（2000年6月逝去）、田村秀夫、出口勇蔵、菱山泉、平井俊彦、福原行三、堀川マリ子、

松尾博，水田洋，溝川喜一（50音順）の20名である。

創立時の学会年会費は200円であった（「資料」IV「学会費と学会会計」，参照）。

また本学会は，創立以前に発足した日本経済学会連合（1950年1月設立）のオリジナル・メンバーとしての加入が承認され，今日にいたっている。

第1回研究報告（4月22～23日）の論題，報告者については「資料」V「大会研究報告」に譲るが，リカードウ関連・3，ケネー・1，重商主義関連・1，計5報告であった。以後13年間，全国大会は春秋2回，東西交代（第2回・京都大，第3回・東京大）で開かれた。これは年1回の現在も慣例となっている（「資料」VII「大会開催校一覧」，参照）。創立翌年秋の第4回大会（関西学院大）において，はじめて「共通論題 古典学派と重商主義」が設けられた。

事務局は，初代代表幹事の久保田が属する早稲田大学に置かれ，これも慣例となった。

この時期について特筆すべきは，まず，会員数の着実な増加が挙げられる。最初の1年は19名の増加にとどまったが，その後は年々急激に増加し（30～70余名入会），1956（昭和31）年11月には創立時会員数の3倍（384名）を超え，学会の基礎が固まった（前掲「資料」III，参照）。

次に，「会則」第3条の本会の行う「事業」中の地方部会が，早々に関東・関西両部会として発足したことである。関東部会は，実質上，学会創立の翌年，1951（昭和26）年10月（東京大）に始まるが，会員総会の承認（第6回大会，1952年11月，神戸大）を経た正規の発足は，関西部会の第1回（関西学院大）と同時の1952（昭和27）年12月（早稲田大）からである。それぞれ年2～3回開催され，今日にいたっている。数年遅れて1956（昭和31）年1月開催の第1回例会（九州大）をもって西南部会も発足し，年2回の例会が続いている（「資料」XIV「地方部会活動」，参照）。

同条に掲げられた公開講演会は，マルクス生誕135年・没後70周年記念（東京大，1953〔昭和28〕年10月10日）が最初である。次いで1956（昭和31）年11月の第14回大会（同志社大）の際にJ.S.ミル生誕150年記念講演会が催され，またケネー経済表200年記念の講演会が58年5月に立教大学，同年11月

には理論経済学会との共催で同志社大学において行われた（「資料」VIII「国際会議，講演会等」，参照）。

「会則」第2条の本案の「目的」に掲げられた「国際交流」は、1953（昭和28）年2月の関西部会第2回例会でのC. W. コール(米国，アマースト・カレッジ)の「フランス重商主義」の講演，同年ローマで開催の「国際学会連合」への久保田の出席を皮切りに，双方向の流れが始まった（「資料」XIV「部会活動」，XIII「国際学会派遣」，参照）。

この時期に着手された事業に、「わが邦における経済学古典文献調査及び研究」がある。現在のインターネットによる容易な文献検索とは隔絶して，当時は，国内所蔵の古典文献の所在さえ必ずしも分からず，また研究者のそれらへのアクセスも容易ではなかった。これを打開する一助としてこの事業が企画・着手されたが，予想以上の長年月を要し，その後，事実上，学会の手を離れる（1997年に丸善からその一半が公刊された）。また学会の企画のもとに古典の復刻も行われたが，学会の刊行としてではなく，堀の責任でハル（Hull）版『ペティ著作集』（*The Economic Writings of Sir William Petty*, 2 vols.），スミスの『道徳感情論』（*The Theory of Moral Sentiments*）およびJ. スチュアートの『原理』初版（*The Principles of Political Oeconomy*, 2 vols.）があいついで復刻され，会員の便宜に供された。

このように経済学史学会は、「会則」に掲げた大半の事業に，草創数年のうちに着手し，内外に本案の存在を示して着実な発展の基礎を築いたのである。

戦後10年を経た1956（昭和31）年は，さまざまな意味で一つの画期をなす（同年の『経済白書』の「もはや戦後ではない」に象徴されるように）が，なによりもそれは，戦後復興を終え，いわゆる「高度成長」の時代にはいったことにある。この年は，学会にとっては1949（昭和24）年に発足した新制大学の大学院修士課程修了者が本学会に入会し，会員として活動し始めた年に当たる。

会員数は1954〔昭和29〕年11月に300名を超え，1957〔昭和32〕年5月には400名を超えた。しかしその後暫く，ほとんど停滞する。この状況については，1959（昭和34）年5月に発足したマルクス経済学研究者を主な会員と

する「経済理論学会」の影響も考えられなくもないが、本学会の発展にはほとんど支障を来さなかった。同年11月から、再度、増勢を回復するからである。これは、固有の学会として本学会が地歩を確立したことを如実に示すものといえよう。

この時期の学会全体としての研究動向を大会報告に即してみると、イギリス古典学派に次いでイギリス重商主義、フランス重農主義関連が多い。マルクスおよびマルクス主義関係も少なくない。しかし当初から、フランス古典学派、初期社会主義思想やアメリカ、日本の思想に関する報告も行われている。このようにイギリスを中心とする欧米の経済・社会思想に関する報告が大多数を占め、ドイツ、ロシア関係は少ない。いわゆる近代経済学関係の報告はごく少数であった。共通論題についてもほぼ同様の傾向がみられ、ヨーロッパ、とくに「経済学の母国」としてのイギリス研究の比重が大きい。

2 整備充実期：1960年代（昭和30年代後半～40年代前半）

1960（昭和35）年に会員数は500名を超え、最初の10年間で4倍に増えて第1次のピークに達する。しかしその後の5年間は減少し続け、67（昭和42）年11月にはかろうじて400名の大台に踏みとどまった。翌68年以降は再び増勢に転じた。これ以降は、主として会費滞納者の整理（自然退会）等により微減を示すことはあるが、増加の趨勢を保ち続けている。

高度成長による年々の物価上昇に所得の伸びが及ばず、とくに交通費の高騰による年2回の学会出席が会員の重い負担となり、学会費の滞納も増えた。この時期の前半に見られる会員数の減少は、会費滞納により退会となる猶予期間を5年から2年に短縮し、会計の整理を図ったことによるところが大きい。学会費は1959（昭和34）年度から300円に引上げられたが、3年後の62年度には、一挙に600円に倍増され、翌63年度にはさらに1,000円に引上げられた。しかし、最後の引上げは『経済学史学会年報』創刊のためである（後述、参照）。

この時期の特筆すべきことは、まず、学会の性格をさらに拡大する「会則」の改正が行われたことである。すなわち、1960〔昭和35〕年5月の第21回大会（日本大）の総会において、「会則」第2条の本会の「目的」が「経

済学史、経済思想史の研究」から「経済学史、社会・経済思想史」に拡大され、関連して第4条（組織）も「経済学史、社会・経済思想史の研究者をもって組織する」と改められた。現「会則」は、これをそのまま引き継いでいる。

同年11月の第22回大会（名古屋大）では、すべての報告に対する予定討論者（「プログラム」に記載）を置く新機軸が採られ、討論の活性化が図られた。以後、この方法は共通論題に定着する。

学会出席の負担を軽減するため、大会開催数を年1回にすることが最初に議されたのも、この大会においてである。第25回大会（1962〔昭和37〕年5月、東京経済大）で翌年度から年1回と決定された。自然退会となる学会費滞納期間を5年間から2年間に短縮し、会計の整理を行うことも、ここで承認された。

大会開催回数の減少が学会活動の減退とならないよう、部会活動をいっそう充実させることが第26回大会（同年11月、香川大）で申し合わされ、三地方部会は、それぞれ活動を強化した。従来関東部会は、1回・1報告、年3～4回の例会であったが、63〔昭和38〕年からは、そのうちの1回を2～4報告の研究大会として行った。関西部会は数年間「関西部会通信」（1959〔昭和34〕年9月～1963〔昭和38〕年7月、第12号で廃刊、『年報』に移管）を発行していたが、年2回の部会例会と1回の部会研究大会を開くこととし、それが近年までの慣行となった（1995年以降は年2回）。西南部会は、年2回の部会例会の翌日に有志の研究会を行うことが慣例となり、また「西南部会報」（1963〔昭和38〕年～72〔昭和47〕年まで年1回発行。部会報告要旨が『年報』に掲載されることになり、「西南部会通信」〔不定期、会員消息中心〕に変わったが、数号で廃刊）も発行された。

また事務局と会員間の連絡を密にするため、『経済学史学会ニュース』が、1961〔昭和36〕年3月から発行されるが、これは『年報』に移管される形で1968〔昭和43〕年4月の第8号までで中絶した。現在の『経済学史学会ニュース』は、事実上、学術研究誌への『年報』の変貌に伴う上記『ニュース』の復活・拡大版ともいえようか。学会史として最初の『日本における経済学史研究十年の歩み——経済学史学会十年史』（経済学史学会十年史刊行

会，A5版，[iv+131] ページ) が公刊されたのは，同年5月のことである。

この時期に始まった事業のうち最も重要な意味をもつのは，機関誌『経済学史学会年報』の発刊である。機関誌の発行については，すでに創立時の「会則」第3条第4項に掲げられていたが，第26回大会(1962[昭和37]年11月，香川大)時の総会において，次年度からの発行が決定された。名称は『経済学史学会年報』，年1回，秋の大会開催直前に発行，毎年編集委員会を組織することなどが同時に決まった。創刊号の編集は，林治一(神戸大)，河野健二(京都大)，重田晃一(関西大)，杉原四郎(同左)および田中真晴(京都大)の5会員が担当した。最初の委員会は翌年1月に開かれ，編集方針等を決定し，5月の幹事会に提案して承認を得，同年11月の第27回大会(武蔵大，年1回大会の最初)で「創刊号」(B5版，横組，本文2段組，62ページ)が出席会員に配布された。その後紙幅は次第に増加し，内容も編集委員会の在り方もさまざまな改革が加えられたが，型式自体は今日まで引き継がれている。

「創刊の辞」(堀経夫代表幹事)に続く本文は，学会展望，研究余滴，書評，文献抄録，学界ニュース，部会通信および会員消息からなる。学界展望論文(執筆者)は重農主義(渡辺輝男，吉原泰助)，古典学派(平瀬巳之吉，中村賢一郎)，初期社会主義(水田洋)であった。「文献抄録」が本誌の特色の一つをなす。多くの研究機関が予算の制約上多数の外国雑誌を購入できなかった当時，この文献抄録は，多くの会員に研究上の便宜を与えた(インターネット時代を迎えた現在ではその使命を終え，また科学研究費・学術定期刊行物助成の申請条件の変更に伴い，99[平成11]年11月，第63回大会[熊本学園大]の総会において，その後続の「書誌」欄が第38号(2000年11月，発行予定)から廃止され，同時に2001年(第39号)から『年報』の年2回発行が決まる)。この『年報』発行を機に，1963[昭和38]年から学会費が600円から1,000円に一挙に引き上げられたことは，すでに触れた。

公開講演会，海外交流等も引き続き行われた。そのほかに学会は，人権を脅かし，学問・思想の自由を侵す法案に反対の「声明」を出している。1958[昭和33]年の「警職法案」反対の「声明」が最初で，次いで「大学管理法

案]について(1962[昭和37]年)。いずれも詳細は「資料」VIII「国際会議、公開講演会等」、XII「声明書、訴え、要望書」、XIII「国際会議派遣」に譲る。

また学会幹事の選挙方法についてもさらに工夫が加えられた。6地方区(北海道・東北、関東、東海・北陸、近畿、中・四国、九州)から各1名の幹事を選び、残る14名を全国1区として選出する、という方法である(第6期[堀経夫代表幹事]役員、1960[昭和35]年5月～62年5月)。しかしこれにも不備があることが分かり、1期限りで地方区は廃止され、地方を考慮して選出するということになった。前に述べたように、第27回大会からは年1回、11月開催に改められ、これに伴う特例として第7期(堀経夫代表幹事)の任期が1962(昭和37)年5月～64年11月に、約半年延長された。次回の第28回大会(1964[昭和39]年11月、大阪府立大)における第8期(1964[昭和39]年11月～66年11月)の役員選挙から、15名連記で幹事30名(従来20名)、単記で監事2名を選ぶことになった。

この期に始まった『年報』は号を追うごとに充実し、とくに「文献抄録」がそうであった。大会開催の場合と同様に、『年報』編集も担当会員の学会への奉仕として行われた。その労苦の一端を記して、編集に携わった歴代編集委員へのホメイジをしたい。

①前年の5月または6月の幹事会(通称、春の幹事会)で編集責任校が決まる。同校所属会員ならびに近傍の会員によって編集委員会が組織される。編集方針案(特集を組む場合はそのテーマ、学会展望のテーマ等)を秋(通例、11月)の幹事会で承認を得、作業が本格化する。②前年末ないし年明け早々に全幹事に書評対象書の推薦を依頼し、抄録に採りあげるべき外国雑誌論文と抄録(200字以内)執筆者を選定する。論文・書評・文献抄録等の執筆依頼(引き受けてもらえない場合は、電話等で別の適任者に当る)、書評書の国内外出版社への寄贈依頼等の煩瑣な手順を済ませ、③夏休を半ば返上する形で原稿の整理・督促、レイアウト、各執筆者への初校依頼、編集委員による二校、三校等の作業に追われる。④大会開催10日ないし1週間前に製本が届き、開催校に所要部数を発送して漸く安堵する。このようなマニュアルが出来上がるまでの歴代編集委員の労苦は並大抵ではなかったろう、と推

察される。

この期間には、第28回大会（1964〔昭和39〕年11月、大阪府立大）の折、「マックス・ウェーバー生誕100年記念」（日本社会学会・土地制度史学会協賛）、第31回大会（1967〔昭和42〕年11月、早稲田大）の際には、「マルクス『資本論』刊行百年記念」の講演会が、それぞれ開催される。後者と並行して、同じく記念論文集の『『資本論』の成立』（岩波書店、1967年）が刊行された（「資料」VIII「国際会議、公開講演会」、X「学会刊行物」、参照）。

国際交流も引き続き行われたが、詳細は「資料」VIII「国際会議、公開講演会」、IX「外国人による特別講演」、XIII「国際学会派遣」に譲る。

1968（昭和43）年末から、いわゆる学園紛争が起こり、その影響を免れた大学はほとんどない。一度だけ、学会もその余波を被る。69年11月の第33回大会の開催校は横浜市立大学であったが、大学構内に会場を設けるのが危ぶまれ、この大会に限って横浜市立磯子会館で行われた。しかしここでも、大会報告の途中、壇上が会員を含む数名の覆面した青年によって一時占拠され、本会の大学臨時措置法案反対の声明（69年6月、「資料」XII「声明書、訴え、要望書」、参照）だけでは不十分であり、研究報告会場を同法案討論の場とするように要求された。暫く出席会員との間に激論がかわされたが、やがて報告が再開された（次期に属するが、その後、第53回大会（1989〔平成元〕年11月、九州大）第1日午後第1会場のひとつの報告が、当の司会者によって妨げられる不測の事態が生じたことがある）。

3 安定的発展期：1970年代～80年代（昭和40年代後半～平成元年）

70年代に入ると会員数は明らかに増勢を強め、1972（昭和47）年には500名の大台を回復する。75（昭和50）年に600名に達し、80年には約680名に増加する。この間、70年に会費は1,000円から1,500円に、73年に2,500円、75年から3,000円、さらに80年からは5,000円に引上げられたが、会員の増勢はまったく損なわれなかった。73年以降の会費引上げに際しては、院生会費（73年：2,000円、75年：2,500円、80年：3,000円）が設けられ、負担の軽減が図られた（ただし、85年度から一律5,000円）。以降、学会財政は80年代を通

じて安定的に推移した（ちなみに経験則としては、臨時の出費〔例えば記念事業〕なしに、年度末に次年度繰越金が100万円を割り込むと黄信号、年度初めの大会開催校への「大会費」支出等に支障を来す恐れがある）。

この期に先立つ67年から『年報』出版費の一部を科学研究費・学術定期刊行物助成金を毎年申請し、交付されるようになるが、「文献抄録」掲載はその必須条件の一つであった（他にも、学会が主として会員の会費収入で運営されていることなどの条件がある）。全会員の研究テーマを知り、相互の研究の便を図るとともに、抄録を多数の会員の協力によって作製するため、1970（昭和35）年の「会員名簿」から各会員の研究テーマを載せた大型名簿（B5版、従来はA5版）が発行される。抄録関係誌も当初の70誌から87誌（1969年）、115誌（1971年）と大幅に増え、助成金も当初の10万円から30万円に次第に増額された。

この時期の大きな変化の一つは、第11期まで、代表幹事は、初代・久保田明光4期（1950〔昭和25〕年4月～58〔昭和33〕年5月）、第二代・堀経夫5期（1958年5月～68〔昭和43〕年11月）、第三代・出口勇蔵2期（68年11月～1972〔昭和47〕年11月）と重任が繰り返されたが、第四代（第12期：72年11月～74〔昭和49〕年11月）の小林昇から1期ごとに交代し、学会活動の活発化を図ることが申し合わされたことである。以降、1期・2年ごとに第13期・水田洋、第14期・杉原四郎、第15期・杉山忠平、第16期・真実一男、第17期・浜林正夫、第18期・羽鳥卓也、第19期・田中真晴、第20期・吉澤芳樹へと引き継がれる。このうち、第15期（1978〔昭和53〕年11月～81〔昭和56〕年3月）だけは、学会の会計年度（従来11月～11月）を通例の年度に合わせるため、特例として任期が約半年延長された。

この時期の特筆すべき出来ごとは、1976（昭和51）年に、研究領域が近接する「社会思想史学会」の創設である。本学会の「会則」は、「経済学史、社会・経済思想史」の研究を目的に掲げているから、「経済理論学会」創立の際よりも大きな影響を受けるのではないかと懸念された。しかし、同年から翌年にかけての1年だけ、僅かの会員数の減少（18名）を見ただけでほぼ杞憂に終わり、78年11月には早くもそれ以前（約630名余）を上回る（651名）。

1971（昭和46）年から、全国大会の運営方法に工夫が加えられる。それまでは、主として開催校の会員を中心とする協議に委ねられていたが、同年11月の第36回大会（松山商科大、現在、松山大）から常任幹事の一人がプログラム委員としてその編成に参加することになり、以後90年代半ばの制度変更まで、これが慣例となる。幹事会前後に常任幹事会が開かれるようになったのも、この頃からである。

地方部会の活動も活発に続けられたが、とくに西南部会では、高木暢哉の主導で同部会編の『近代経済学史研究』（ミネルヴァ書房、1972年）および『経済学史研究』（同、1973年）が出版された。また以前から北海道・東北部会の設立が意図されていたが、奇しくも学会創立30周年の1980（昭和55）年6月に、東北地方（新潟県を含む）をカヴァーする東北部会が設立された（北海道在住会員の希望により、同会員には関東部会の案内が引き続き送られた）。これによって、北海道を除く全地域に部会が設置されることになった（なお、懸案の北海道部会は次期末の1999〔平成11〕年9月に新設された）。

1976〔昭和51〕年は『国富論』出版200年に当る。これを記念して同年8月、論文集『『国富論』の成立』（岩波書店、[xi+421+xx] ページ）が出版され、記念公開講演会も同年11月の第40回大会（九州大）において開催された。また79（昭和54）年9月には、「河上肇生誕100年記念」の講演会が、経済理論学会と共催で同志社大学において行われた（「資料」VIIIおよびX、参照）。

この時期の学会としての国際交流については「資料」VIII「国際会議、公開講演会等」、IX「外国人による特別講演」およびXIII「国際学会派遣」に譲るが、高度成長の結果として外貨制限が緩和されたことも与かって、個人として「イギリス経済思想史会議」（HET）、「アメリカ経済学史学会」（HES）等に出席し、報告する会員（在外研究中の会員を含む）が次第に増え始める（『年報』、次いで『ニュース』掲載の「国際学会」報告、参照）。また外国人研究者の招聘も、1970年代後半に恒例化し、大会または部会等で特別講演が行われた（詳しくは、資料V「大会報告」、IX「外国人による特別講演」およびXIV「部会活動」、参照）。

学会は1980（昭和55）年4月に創立30周年を迎え、同年11月に『経済学史

学会30年史』(経済学史学会, [v+91+v] ページ。編集委員: 出口勇蔵, 小林昇, 水田洋, 杉原四郎, 田中敏弘。本文: 出口, 資料: 田中) を刊行した。また記念出版として、『日本の経済学——日本人の経済的思惟の軌跡』が企画され, 諸般の事情で数年遅れたが, 1984 (昭和59) 年11月に東洋経済新報社から刊行された ([xii+345] ページ。内容・執筆者等は「資料」X「学会刊行物」, 参照)。

『年報』は18号を重ね, 本会の発展は順風を帆に受けるようであった。会員数は1982 (昭和57) 年に730名に達し, 1989 (平成元) 年には800名を超えた。

80年代の大きな制度改革は, 次期幹事選挙が前年の全国大会初日の会員総会出席会員による投票制から, 第18期 (1985 [昭和60] 年4月から2年間) 選挙以降, 郵便投票制へ変更されたことである。総会における選挙は, 出席できなかった会員の意思が反映されないだけでなく, 隔年ごとに, 大会運営のほかに選挙に伴う余分の負担 (開票作業, 翌朝の結果発表資料作成等) が開催校会員にかかるからである (望ましい改革であったが, 郵便投票制になって以降, 投票率が従来より低くなっただけでなく, 回を重ねるごとに漸減の傾向を示しているのは残念である)。

全国大会の研究報告は, 1970年代は概して2日間・2会場で行われ, 自由論題・共通論題合わせて10~17の報告が行われたが, 80年代に入ると, 会員数の増加に伴う報告希望の増大に対処するため, 83 (昭和58) 年11月の第47回大会 (広島大) で3会場開設が試みられ, 自由論題20, 共通論題3およびA. W. コーツの特別講演が組まれた。翌84年11月の第48回大会 (東北大) も3会場で自由論題23, 共通論題3, M. ブラウグの特別講演が行われた。その後開催校の都合等もあって, 暫く2会場が続いたが, 90年代に3会場制が復活し, 92年11月の第56回大会 (京都産業大) 以降, ほぼこれが定着する。

イギリス古典学派やマルクス関連の報告が多かった70年代に対して, 80年代は多様化の始期と特徴づけることができる。それらに並んで, イギリスの非古典派, スコットランド啓蒙, ドイツ, フランス, アメリカ, イタリア, 日本の経済思想の研究が加わり, 研究の範囲は大きく広がるとともに専門化し, アソシアシオン, 環境, 発展途上国問題への関心等, 多様化が進む。前

者について大づかみにいえば、ケネー、スミス、マルクスの相対化、彼らの周辺への関心の高まりといえよう。後者は、勿論、現代的関心の反映である。同時に近現代の経済学への関心も大きく前進する。あるいはその源流が辿られ、あるいはその始祖達のメンガー、ワルラス、マーシャル等が論じられ、次世代のケインズ、シュンペーター、ハイエクらがしばしば論題に登場する。まさに百花斉放。これらの多種・多彩な研究は、いずれも次の90年代に引き継がれ、ますます増幅する。

『年報』編集について、89（平成元）年から一つの重要な改革が行われた。同年の第27号（津田内匠編集委員長）から多様な研究領域の幾つかを選んで内外の研究を紹介・論評する「研究動向」欄が新設され、あわせて会員の公募論文がレフェリー2名の審査を経て掲載されることになった。以降90年代にかけて、とくに「経済学史学会ニュース」の発行（1992年創刊）と連動して、『年報』は大きく変貌することになる。

この時期の学会に関連するひとつの重要な制度変更は、学術会議の改編である。学会幹事会は、1983（昭和58）年6月、「日本学術会議法の改正についての要望」を決議し、関係方面に送付した。この法改正は結局成立し、学術会議会員の選出は、第13期（1985年）以降、登録会員の選挙制から学術会議登録学術団体の推薦制に変わる。本学会は1965（昭和40）年・学術会議第7期以降、会員候補を推薦（すべて当選）してきたが、制度変更（学術会議第13期、1985〔昭和60〕年以降）に伴い、総会の承認を経て推薦人2～3名を出し、学術会議会員候補1名を推して、每期、学術会議会員を出している（「資料」II「役員及び事務局」、C、参照）。

また、第19期（1987〔昭和62〕年4月～89〔平成元〕年3月、田中真晴代表幹事）の88年11月の幹事会（専修大）で、幹事会構成の若返りを促進するため、次期（第20期、1989年4月～1991〔平成3〕年3月、吉澤芳樹代表幹事）から幹事被選挙資格に年齢制限（任期開始時に満70歳未満）をもうけ、代表幹事経験者はその直後の1期だけ被選挙資格をもつ、というように改められた（「資料」I「会則」（付）「会則内規」、参照。この幹・監事定年制は、第24期〔1997年4月～99年3月、根岸隆代表幹事〕の役員選挙からさらに満68歳未満に引下げられる）。

88年天皇の病篤く、「恐懼・自粛」の風潮が全国的に「醸製」された。第52回大会（11月3～6日、専修大）の会員総会でこの状況について批判的声明をという緊急提案があり、大会日程終了後の会員臨時総会で「声明」が議決された（「資料」XII, 9, 参照）。

国際交流も盛んとなり、学術会議（研究連絡委員会）または経済学会連合による国際学会への公的派遣は勿論、私的にそれらへ参加する会員の数は年を追うごとに増えた（『年報』、後「経済学史学会ニュース」の「国際学会報告」、参照）。

4 多様化と改革の時期：1990年代（平成2～11年）

今期に本会は着実に発展し、幾つかの重要な改革を行った。会員数は93（平成5）年に800名を超え、ほぼ年ごとに漸増し、2000年6月現在、自然退会等を処理した後、841名に達している。この間に幹事会を中心とする学会諸活動が広がり、諸委員会（常置・臨時）への会員の積極的な参加を求めたため、諸経費の支出がふくらみ、学会財政が逼迫する。1985〔昭和60〕年度以来10年ぶりに、95〔平成7〕年度に学会費が5,000円から6,000円に、重ねて97〔平成9〕年度に6,000円から8,000円に引上げられた。しかしこれは、学会活動の拡充に伴う必要経費として会員の理解が得られ、会員数増勢のブレーキにならなかった。本学会のレーゾン・デートルの確固たることを示すものといえよう。

1990（平成2）年は学会創立40周年に当たるため、第20期（1989〔平成元〕年4月～91年3月、吉澤芳樹代表幹事）に記念論文集が企画された。編集委員会（荒牧正憲委員長）が設置され、92（平成4）年に経済学史学会編『経済学史——課題と展望』（九州大学出版会、B5版、[iv+256+ii]ページ）が出版される（内容・執筆者については、「資料」X「学会刊行物」、参照）。

90年代は、いわば「制度疲労」を起こしている本学会改革の時期であった。大きな一連の改革が3つ行われた。第1に、第21期（1991〔平成3〕年4月～93年3月、田中敏弘代表幹事）に、『年報』第30号（1992〔平成4〕年）の編集以降、従来の編集責任校制から、幹事会のもとでの編集委員会制

(津田内匠委員長)に移行したことである。「書評」欄が一挙にほぼ倍増し、全体の紙幅も従来の目安の120ページを大幅に超える(168ページ)。これに連動して、『経済学史学会ニュース』が創刊(正確には、復刊)された。続く第22期(1993[平成5]年4月~95年3月、津田内匠代表幹事)の第31号(馬渡尚憲編集委員長)から「全国大会報告」要旨の掲載をやめて「大会プログラム」に譲り、「地方部会報告」要旨も「経済学史学会ニュース」(第2号以降)に掲載することにより、『年報』は、編集委員会の依頼する論文・研究動向、会員投稿論文および書評からなる、名実ともに学術研究誌となった。

加えて、95年の第59回大会(西南学院大)から大会における討論を充実させるため、1報告あたり6ページのフル・ペーパーを複写した「大会報告集」を大会開催前に全会員に届けることになったが、これは第2の改革に関連するので、その際にあらためて述べる。これに伴って、従来の「大会プログラム」は廃止され、プログラムだけ上記の「ニュース」夏季号(7~8月発行)に掲載することになった。

第2の改革は、大会の組織・運営の改革を図る大会運営検討委員会(中村廣治委員長)が第22期に幹事会のもとに設置され、その答申を一部修正のうえ、常任幹事1名を委員長とする大会組織委員会が幹事会のもとに設けられることになった。本委員会に①開催校代表1名を含むプログラム小委員会、②共通論題・フォーラム小委員会および③大会報告集小委員会を置き、幹事および会員を委員とする。④共通論題とフォーラムを隔年に設け、組織者を置いて少なくとも1年以上前から準備を進める。⑤フル・ペーパーを複写した大会報告集を大会開催の1ヶ月前に全会員に届ける。⑥原則として3会場制とし、自由論題報告数を増やし、報告申込の要件を緩和することになった。これによって、検討委員会の委員が一部交代して大会組織委員会が組織される。こうして現行スタイルの大会が第59回大会(95年10月、西南学院大)からスタートした。

これに続く第3の改革は、94年10月の第58回大会(武蔵大)前日の幹事会で、幹事選挙、代表幹事選出方法等の再検討が提案され、次期幹事会(第23期、1995[平成7]年4月~97年3月、中村廣治代表幹事)に引き継がれた

ことに始まる。95年6月の幹事会で「学会組織検討委員会」（津田内匠委員長）が設置され、①幹事選挙につき、④選挙管理委員会の要否、⑥幹事重任期間制限の可否、②幹事被選挙資格（70歳未満）の適否、③常任幹事重任期間制限の可否、④代表幹事選出方法、⑤幹事会・常任幹事会の職務および各種委員会との関係の明確化（必要ならば、委員会の新設を含む）、⑥名誉会員制存続の可否、が諮問される。またこの幹事会で2000年の50周年記念事業を企画立案することも決定された。

学会組織検討委員会は会合を重ね、95年10月末の第59回大会（西南学院大）前日の幹事会に、大要、次の「第一次報告」を答申する。①④幹事選挙のため選挙管理委員会を設ける。①⑥幹事重任期間に制限を設ける。重任は3期（6年）までとする。なお、移行措置として、現幹事は現在、全員第1期在任中とみなす。②幹事被選挙資格定年は、幹事任期開始年度初めで満68歳未満に引下げる。③常任幹事会は、年報編集委員長、大会組織委員長、英文論集編集委員長等の各種常置委員会委員長と代表幹事をもって構成する。各委員長は、幹事の中から幹事会が選任する。④代表幹事は、幹事の互選により、幹事会での二段階投票によって選出する。従来慣行（東西交替制）はとらない。⑤についてはさらに検討し、⑥の名誉会員制については、2000年以後は新たに設けない方向で検討する。

このうち、①⑥については幹事会で疑義が出たが、結局、④まですべて承認され、所要の「会則内規」の改正が行われ、翌日の会員総会において「会則」改正（選挙管理委員会の設置等）が承認された。このうち①⑥については、その後の2度の幹事選挙の結果、幹事会の構成がそれほど変わらず、そのまま次期（第26期、2001〔平成13〕年4月～2003〔平成15〕年3月）幹事選挙を2000年夏に行えば、学会活動の継続に支障を来す恐れがあることから、99年11月の第63回大会（熊本学園大）総会において、現幹事中の重任3期目以上の半数を重任2期目とみなす移行措置が提案、承認された（「資料」Iの「会則」附則3、「ただし」以降、参照）。

96年6月開催の幹事会に、引き続き上記の⑤と⑥に関する「第二次報告」が出され、常設の委員会として「学术交流委員会」を新設すること、現行名誉会員制は存続するが、名誉会員は2000年以降新たに設けないことが、委員

会から提案された。幹事会で新委員会の名称が「企画交流委員会」に変更された以外は、原案通り承認され、同年11月開催の第60回大会の総会（中央大）で所要の会則改正（附則4）が承認された。

ここで英文論集編集委員会と企画交流委員会について述べる必要がある。英文誌は90年代当初から幹事会の話題となっていたが、93年6月の幹事会で英文誌検討委員会（根岸隆委員長）が設けられ、実現に向けて進み始めた。同委員会は、同年11月の第57回大会（金沢大）時の幹事会に、『年報』自体の英文機関誌化には諸種の問題があり、むしろわが国の研究を紹介する統一テーマ、トピックス等で数年おきに単行本形式の論文集を刊行することを答申する。幹事会と総会はこれを承認し、英文論集刊行委員会（田中敏弘委員長）が設置された。同委員会は、テーマの設定、諸論題の構成や執筆者の決定、出版社との交渉等、多くの問題に対処して、結局、杉原四郎・田中敏弘編の *Economic Thought and Modernization in Japan* と題する英文論集第1集を、1998年に Edward Elgar 社から刊行した（詳しくは資料 VII, 参照）。その間、第24期（1997〔平成9〕年4月～99年3月、根岸隆代表幹事）に、これと並行して歴史学派を統一テーマとする第2集の作業が進められ、塩野谷裕一編で2000年に刊行の予定である。第3集も第25期（1999〔平成11〕年4月～2001年3月、馬渡尚憲代表幹事）にスコットランド啓蒙研究をテーマに、坂本達哉・田中秀夫編集のもとに現に進行中である（2002年秋までに出版の予定）。こうして、事実上、2年ごとに英文論集を刊行し、国際的に情報を発信する体制が整いつつある。

企画交流委員会（馬渡尚憲委員長）は、内外の学界との交流、本学会の諸事業の企画立案を職務とする。国際学会情報の収集と会員への伝達、差し迫った50周年事業の一環としての『経済思想史辞典』の具体化（企画、編集等、馬渡編集委員長）等を担当する。常設の4委員会（年報編集、大会組織、英文論集、企画交流の各委員会、各委員長＝常任幹事）体制は、第24期（根岸隆代表幹事、1997〔平成9〕4月～99〔平成11〕年3月）から正規に発足した。

50周年事業は第23期に企画立案され、上記の『辞典』をはじめ、記念講演会（責任者・竹本洋）の開催、データベース作成（責任者・八木紀一郎）、

および「50年史」（責任者・中村廣治）出版が決定され、いずれも第24・25期を通じて着実に進行中である。そのうち『辞典』は2000年6月に丸善から出版された。記念講演はすでに成案（演題「経済学史学会50年を回顧して」、講演者・水田洋）を得て、創立50周年記念の第64回大会（2000年11月11～12日、一橋大国立キャンパス）時に行われることになっている。また同大会で行われる予定の記念シポジウム「市場経済の理解と評価——経済学史研究の立場から」も論題・報告者が決定している。『経済学史学会50年史』（第1部「経済学史学会の50年」、第2部「資料」）も同「大会報告集」とともに10月初めに会員に配布される予定である。

90年代後半には大会3会場制が定着し、毎回、自由論題報告は20を超え、大会第2日午後には共通論題（西暦偶数年）または3フォーラム（同奇数年）が交互に行われている。その多彩な様子は大会報告に関する「資料」V、XI「共通論題・フォーラム一覧」から明らかであろう。近年の一つの特徴は、引き続きスコットランド啓蒙への関心が持続する一方、一連の関連するドイツ歴史学派、アメリカ制度学派、進化経済学への関心が高まっていることである。

特筆すべきことは、99〔平成11〕年9月25日、北海道大学において、かねてから待望の北海道部会が設立され、年2回の研究報告会を開くことが決定され、第1回研究報告会が行われた（資料XIV「部会活動」、参照）。創立ほぼ半世紀後に漸く全国に部会が存在することになった。

むすびに代えて

経済学史学会50年の歴史を顧み、21世紀を展望する現在、本学会の遺産として引き継ぐべき幾つかの貴重な財産がある。第1は、学会創立以来、報告や発言・討論等が思想・年齢等を問わず自由に行われる雰囲気である。第2は、幹事会を中心としながら、会員の学会運営・活動への参加を広く求め、学会の民主的運営と活動に努めてきたことである。第3に、創立以来、学会自体が、思想（哲学、倫理、宗教を含む）・理論・政策・歴史という重層的でしかも広範な分野にまたがる、いわば学際的な性格を保持し続けていることである。これらは創立以来の会員の創意と努力の蓄積のうえに確立してい

る貴重な財産であって、21世紀に引き継がれ、さらに発展させられるべきものであろう。国内的にはネイション・ワイドに組織された地方部会の活動、公私にわたる会員の国際交流を含め、さらに創意と工夫が重ねられて、時代の提起する多様な諸課題に柔軟に対応することが求められている。わが国の研究を国際的に紹介するとともに、情報として発信する英文編集の発刊が学会活動の柱のひとつに定着し、継続・拡充されなければならないことは、いうまでもない。

市場経済は、さまざまな課題を提起してやまない。未解決の南北問題、地球環境問題、資源・人口問題等をはじめとして、勃興しつつあるアジア経済も米欧日中心の世界経済システムに挑戦し、新たな問題を提起せずにはいないであろう。その意味から、ほとんど未開拓のアジア・アラブ諸思想の研究は、学会に課された現在・近未来の課題のひとつといえよう。ますます加速する現実の変化のなかで、歴史と現実が新たな思想的・理論的創造と営為の糧を与える泉であることをやめない以上、会員の真摯な研究と協力を基礎に、学会の前途は、21世紀においてさらに不断に切り拓かれ続けるであろう。多様化し、拡大する研究集約の場として、また国際的に情報を発信する拠点として、学会の果たす役割は、ますます重く、大きくなるに違いない。

第 2 部

資 料

第2部 資 料

I 会 則 (付 会則内規)

経済学史学会会則

(1950年4月施行, 以後数次にわたり改正。1999年11月現在)

名 称

第1条 本会は経済学史学会と称する。

目 的

第2条 本会の目的は次の通りである。

1. 経済学史, 社会・経済思想史の研究
2. 内外の学界との交流

事 業

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 研究報告会の開催
 - イ. 毎年1回適當の地および時に全国大会を開く。必要に応じて臨時の大会を開くことができる。
 - ロ. 別に定めるところによって地方部会を開くことができる。
2. 公開講演会の開催
3. 内外の経済諸学会との連絡
4. 機関誌の発行
5. その他本会の目的を達成するために必要な事業

会 員

第4条 本会は経済学史, 社会・経済思想史の研究者をもって組織する。

第5条 本会に入会しようとする者は会員2名の紹介により代表幹事に申し込み, 幹事会の承認を受けなければならない。

第6条 会員は年会費8,000円を納めなければならない。

第7条 会員は機関誌の配布をうける。

第8条 会員は書面により代表幹事に通告すれば退会することができる。

会費を2年間滞納したものは退会とみなす。ただし、滞納分を納入することにより会員資格を回復することができる。

名 誉 会 員

第9条 会員であって多年経済学史学の発達に貢献のあったものは、幹事会の推薦により総会の承認を経て名誉会員とすることができる。

役 員

第10条 会務を処理するために幹事若干名を置く。

第11条 幹事は会員の郵便投票により会員中より選挙する。

第12条 前条の選挙を行うため選挙管理委員会を置く。

委員の任期は2年とし、幹事会が会員中より若干名を委嘱する。

第13条 幹事の任期は2年とする。

再任を妨げないが、連続して3期（6年）を超えないものとする。

第14条 本会の常務を処理するために幹事中より常任幹事若干名を互選する。

第15条 本会の代表として代表幹事を置く。

代表幹事は幹事会において選任する。

その選任方法は幹事会において別に定める。

第16条 本会に監事2名を置く。

監事の選出については第11条を準用する。

監事の任期については第13条を準用する。

総 会

第17条 本会は毎年1回会員総会を開く。

幹事会が必要と認めるときまたは会員の3分の2以上の請求があるときは臨時総会を開く。

第18条 代表幹事は総会の議事、会場および時期を定め、あらかじめこれを会員に通知する。

第19条 常任幹事は幹事会の議を経て総会において、会務および会計の報告をする。

第20条 総会における議長はその都度会員中より選挙する。

第21条 総会における決定は本会則においてとくに定めてある場合のほか出

席会員の過半数による。可否同数の場合は議長がこれを決定する。

会則の変更および本会の解散

第22条 本会則の変更または本会の解散は幹事の過半数または会員15名以上の提案により、総会出席会員の3分の2以上の賛成を得なければならない。

会 計 期 間

第23条 本会の会計期間は毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

附 則

1. 幹事のうち2名を日本経済学会連合の評議員として会員総会においてこれを決定する。ただし緊急やむをえない場合はこの限りではない。
2. 本会の事務局は1999年4月から2001年3月まで東北大学経済学部（馬渡研究室）内に置く。
3. 第13条の規定にかかわらず、現幹事（任期1995年4月1日～1997年3月31日）は全員第1期在任中とみなす。ただし、2000年の幹事選挙時に3期目の幹事のうち2分の1を2期目と見なす移行措置をとる。
4. 第9条の規定にかかわらず、学会創立50年（紀元2000年）以降は新たに名誉会員を置かないものとする。ただし、現行名誉会員制は存続するものとする。

（付）会 則 内 規 （1986年4月施行，87年11月，88年11月，89年11月，96年6月，97年5月一部改正）

1. 第5条の入会申込資格は大学卒業後2年以上を経過したもの、またはそれに準ずる者とする。入会申込は次期幹事会の10日前までに事務局になされなければならない。
2. 第9条の名誉会員とされうるのは、原則として、常任幹事を5期以上つとめた者、あるいは代表幹事をつとめた者であって、次年度開始のときに70歳に達している者とする。名誉会員は会費を課されることなく、会員としての権利を保有する。ただし、幹事および監事には選出されえないものとする。
3. 第10条の幹事若干名とは約30名とする。

4. 第11条の幹事の選挙は15名連記投票による。選挙は、幹事会の委嘱する事務局近傍の5名の会員により構成される選挙管理委員会が行う。委員の重任は認めない。投票用紙と被選挙人名簿は大会プログラムに同封して郵送する。ただし、被選挙人名簿に記載される者は、幹事の任期開始の時に満68歳未満である会員に限られる。代表幹事の経験者については10項に従う。

開票は選挙管理委員会が行い、選挙管理委員長が当選者の氏名を総会と事務局に報告する。事務局はその氏名を次号の経済学史学会ニュースおよび会員名簿に記載する。

5. 第13条の幹事の任期は選挙の翌年の4月1日から開始するものとする。
6. 幹事の任期中であっても、病気その他の理由のために幹事会でやむをえないと認められた者は、辞退することができる。

辞退の結果生じた欠員は補充しない。

7. 第14条の常任幹事若干名とは5名とする。代表幹事と下記の各委員会委員長をもって当てる。

- 1) 年報編集委員長
- 2) 大会組織委員長
- 3) 英文論集委員長
- 4) 企画交流委員長

各委員会委員長は幹事会において選任する。

8. 第15条の代表幹事の選任は幹事会における二段階投票による。第一段の投票により幹事全員の過半数の得票者がある場合は、第二段の投票を行うことなく、当該者を代表幹事に選任する。最多得票数が過半数に満たない場合は、上位得票者若干名(3名)を被選挙者として第二段の投票を行い、比較多数の得票者を代表幹事に選任する。最多得票数が同数の場合は、当該の2名について再度投票を行い、比較多数の得票者を代表幹事に選任する。
9. 代表幹事に事故あるときは、常任幹事会で代行者を選任する。
10. 代表幹事経験者は幹事に選出されないこととする。ただし、現代表幹事は次期のみ幹事に選出されうる。

11. 第16条の監事の選挙は2名連記投票により、なるべく東日本1名、西日本1名として行う。投票、開票および当選者の発表は幹事選挙に準ずる。監事の任期の開始期日は幹事に準ずる。
病气その他の事故で監事に欠員が生じたときは、次点者を繰り上げて監事とする。
12. 地方部会の開催に必要な通信費・印刷費などは部会の請求により実費が補助される。
13. 会員以外の希望者に対する年報の頒価は、個人については1部1,500円、機関については1部2,000円とし、名簿の頒価は一律年会費相当額とする。
14. この内規の改廃は幹事会の過半数の賛成を得なければならない。

付録 A 経済学史学会入会勧誘状

拝啓 益々御清栄の御事と御慶び申し上げます。陳者今般私共相諮り、経済学史の研究の爲めにお互いに協力して切磋琢磨する機会をもちたいと考えまして、茲に経済学史学会を創設することになりました。御承知の様に、この分野におけるわが国の研究にも欧米のそれに比べて、必ずしも劣らぬものを見ることが出来る様になって参りましたが、この機会に同学の方々と共に協力して、更に一層その水準を高めたいと念願しておる次第であります。

つきましては私共のこの主旨に御賛成下さいまして、入会していただくことができますならば真に幸甚に存ずる次第です。

尚御手数乍ら同封の葉書にて賛否の御返事をいただきたいと存じます。目下学年末も近づき何かと御多忙の御事と存じますので、詳細な点につきましてはなるべく近い機会に第一回総会を開きまして、御協議していただく予定でおります。

昭和二十五年一月

右発企人 (ABC 順)

堀 経 夫
久保田 明 光
舞 出 長五郎

大塚 金之助

坂本 彌三郎

高橋 誠一郎

付録 B 経済学史学会会則（1950年4月22日、創立総会制定）

（名 称）

第 一 条 本会は経済学史学会と称する

（目 的）

第 二 条 本会の目的は左の通りである

- 一 経済学史，経済思想史の研究
- 二 内外の学界との交流

（事 業）

第 三 条 本会は前条の目的を達成するために左の事業を行う

- 一 研究報告会の開催
 - イ 毎年一回適当の地及び時に全国大会を開く
必要に応じて臨時の大会を開くことがある
 - ロ 別に定めるところによって地方部会を開くことができる
- 二 公開講演会の開催
- 三 内外の経済学諸学会との連絡
- 四 機関誌の発行
- 五 その他本会の目的を達するために必要な事業

（会 員）

第 四 条 本会は経済学史，経済思想史の研究者をもって組織する

第 五 条 本会に入会しようとする者は会員二名の紹介により常任幹事に申込み総会の承認を受けなければならない

第 六 条 会員は会費として毎年四月（五月以降に入会した者は入会の時）に貳百円を納めなければならない

第 七 条 会員は機関誌の実費配布をうける

第 八 条 会員は書面により常任幹事に通告すれば退会することができる

（顧 問）

第九條 会員であつて多年経済学史学の發達に貢献のあつたものは幹事会の推薦により總會の承認を経て顧問とすることができる

(役員)

第十條 会務を処理するため幹事若干名を置く

第十一條 幹事は会員總會において会員中より選挙する

第十二條 幹事の任期は二ケ年とする

第十三條 本会の常務を処理するために幹事中より常任幹事若干名を互選する

第十四條 常任幹事の中一名を本会の代表者として代表幹事と称する

(總會)

第十五條 本会は毎年一回会員總會を開く

幹事会が必要と認める時又は会員の三分の二以上の請求がある時は臨時總會を開く

第十六條 幹事会は總會の議事、会場及時間を定め予めこれを会員に通知する

第十七條 常任幹事は總會において会務及び会計の報告をする

第十八條 總會における議長はその都度委員中より選挙する

第十九條 總會における決定は本会則において特に定めてある場合のほか出席会員の過半数による。可否同数の場合は議長がこれを決定する

(会則の変更及び本会の解散)

第二十條 本会則の変更又は本会の解散は幹事の過半数又は会員十五名以上の提案により総出席会員三分の二以上の賛成を得なければならない。

(会計期間)

第二一條 本会の会計期間は毎年四月一日より翌年三月三十一日までとする

(附則)

第二二條 幹事の中二名を日本経済学会連合の評議員として会員總會においてこれを決定する。但緊急已むをえない場合はこの限りではない

第二三條 本会の事務局は当分の間早稲田大学政治経済学部(久保田研究室)内に置く

II 役員および事務局

A. 幹事、監事、事務局等

1 1950 (昭和25)年4月-1952 (昭和27)年5月 (第1回-第5回大会)
代表幹事 久保田明光 (事務局 早稲田大, 事務責任者 山川義雄・松田寛)
幹事・常任幹事 (*は常任幹事を示す ABC順, 以下同じ)

堀 経夫* 岸本誠二郎 久保田明光* 舞出長五郎* 野村兼太郎

大塚金之助 坂本彌三郎 (以上7名)

顧問 高橋誠一郎 (1950 [昭和25]年4月 創立総会)

日本経済学会連合評議員 堀 経夫 大塚金之助

経済学研究連絡委員会委員 大塚金之助

2 1952 (昭和27)年5月-1954 (昭和29)年5月 (第5回-第9回大会)
代表幹事 久保田明光 (事務局, 事務責任者は1に同じ)

幹事・常任幹事

堀 経夫* 岸本誠二郎 久保田明光* 舞出長五郎 野村兼太郎

大河内一男* 大塚金之助 坂本彌三郎 (以上8名)

3 1954 (昭和29)年5月-1956 (昭和31)年5月 (第9回-第13回大会)
代表幹事 久保田光明 (事務局, 事務責任者は2に同じ)

幹事・常任幹事

遊部久蔵 大道安次郎 出口勇蔵 平瀬巳之吉 堀 経夫* 岸本誠二郎*

小林 昇 越村信三郎* 久保田明光* 久留間鮫造 舞出長五郎

水田 洋 野村兼太郎 大河内一男 大塚金之助* 坂本彌三郎

白杉庄一郎 高島善哉 内田義彦 横山正彦 (以上20名)

監 事 徳増栄太郎 上田辰之助

[1954 (昭和29)年5月第9回大会より総会での直接選挙となり, 幹事20名, 常任幹事7名, 監事2名となる]

日本経済学会連合評議員 大塚金之助 堀 経夫

経済学研究連絡委員会委員 大塚金之助

4 1956 (昭和31)年5月-1958 (昭和33)年5月 (第13回-第17回大会)
代表幹事 久保田明光 (事務局, 事務責任者は3に同じ)

幹事・常任幹事

遊部久蔵* 大道安次郎 出口勇蔵 平瀬巳之吉 堀 経夫* 石原忠男*

(31年11月-33年5月, 常任幹事) 岸本誠二郎* 小林 昇 越村信三郎

久保田明光* 久留間鮫造 舞出長五郎 水田 洋 野村兼太郎

大河内一男* (31年5月-同年11月, 常任幹事) 大塚金之助*

白杉庄一郎 高島善哉 内田義彦 横山正彦*

監 事 徳増栄太郎 上田辰之助 (31年5月-31年11月) 関未代策 (31年11月-33年5月)

日本経済学会連合評議員 久保田明光 越村信三郎

経済学研究連絡委員会委員 大塚金之助

5 1958 (昭和33) 年5月-1960 (昭和35) 年5月 (第17回-第21回大会)

代表幹事 堀 経夫 (事務局 関西学院大, 事務責任者 久保芳和)

幹事・常任幹事

遊部久蔵* 大道安次郎 出口勇蔵 平瀬巳之吉 堀 経夫* 石原忠男

岸本誠二郎* 小林 昇 越村信三郎* 久保田明光* 舞出長五郎

水田 洋 長洲一二 大河内一男 大塚金之助 白杉庄一郎 高木暢哉

高島善哉 内田義彦 横山正彦*

監 事 関未代策 徳増栄太郎

日本経済学会連合評議員 久保田明光 越村信三郎

経済学研究連絡委員会委員 大塚金之助

6 1960 (昭和35) 年5月-1962 (昭和37) 年5月 (第21回-第25回大会)

代表幹事 堀 経夫 (事務局は5に同じ。事務責任者 久保芳和 田中敏弘)

幹事・常任幹事

遊部久蔵* 大道安次郎 ○出口勇蔵* ○狭田善義 平瀬巳之吉

堀 経夫* 岸本誠二郎* 小林 昇* 越村信三郎* 久保田明光*

○水田洋 長洲一二 大塚金之助 白杉庄一郎 ○末永茂喜 杉原四郎

○高木暢哉 内田義彦 ○山川義雄 横山正彦*

監 事 関未代策 徳増栄太郎

顧問 坂本彌三郎 舞出長五郎 久留間鮫造 (1961〔昭和36〕年5月,

第23回大会)

〔幹事中の○印は地方選出6名を示す。地方区は、北海道・東北地区、関東地区、東海・北陸地区、近畿地区、中国・四国地区、九州地区〕

7 1962(昭和37)年5月-1964(昭和39)年11月(第25回-第28回大会)

代表幹事 堀 経夫(事務局は6に同じ。事務責任者 田中敏弘)

幹事・常任幹事

遊部久蔵* 出口勇蔵* 平瀬巳之吉 平田清明 堀 経夫* 河野健二
木村正身 岸本誠二郎* 小林 昇* 越村信三郎 久保芳和 久保田明光
水田 洋* 長洲一二 大塚金之助 末永茂喜 杉原四郎 高木暢哉
内田義彦* 渡辺輝雄 横山正彦(以上21名)

監 事 関未代策 山川義雄

〔1962(昭和37)年、第26回大会まで、大会は年2回。昭和38年、第27回大会から年1回11月に開催、昭和38年5月から同年11月まで役員任期延長さる。〕

日本経済学会連合評議員、久保田明光 岸本誠二郎

経済学研究連絡委員会委員 岸本誠二郎

8 1964(昭和39)年11月-1966(昭和41)年11月(第28回-第30回大会)

代表幹事 堀 経夫(事務局、事務責任者は7に同じ)

幹事・常任幹事

相見志郎 遊部久蔵* 出口勇蔵* 浜林正夫 狭田喜義 羽鳥卓也
林 治一 平瀬巳之吉* 平田清明 堀 経夫* 河野健二 木村正身
岸本誠二郎* 小林 昇* 越村信三郎 久保芳和 久保田明光*
松川七郎 真実一男 水田 洋* 長洲一二 大野信三 末永茂喜
杉原四郎* 杉山忠平 高木暢哉* 内田義彦* 渡辺輝雄 山川義雄
横山正彦(以上30名)

監 事 石原忠男 関未代策

顧問 大塚金之助(昭和39年11月、第28回大会)

〔1964(昭和39)年11月、第28回大会より、幹事30名となる。15名連記投票による。監事は単記投票。〕

日本経済学会連合評議員 久保田明光 岸本誠二郎

経済学研究連絡委員会委員 岸本誠二郎

9 1966 (昭和41) 年11月 - 1968 (昭和43) 年11月 (第30回 - 第32回大会)

代表幹事 堀 経夫 (事務局, 事務責任者は8に同じ)

幹事・常任幹事

相見志郎 遊部久蔵* 出口勇蔵* 浜林正夫 狭田喜義 羽鳥卓也
林 治一 平井俊彦 平田清明 堀 経夫* 河野健二* 木村正身
岸本誠二郎* 小林 昇* 越村信三郎 久保芳和 久保田明光 松川七郎
真実一男 水田 洋* 長洲一二 末永茂喜 杉原四郎* 杉山忠平
高木暢哉* 田中敏弘 内田義彦* 渡辺輝雄 山川義雄 横山正彦

監 事 石原忠男 関未代策

日本経済学会連合評議員 久保田明光 岸本誠二郎

経済史学研究連絡委員会委員 岸本誠二郎

10 1968 (昭和43) 年11月 - 1970 (昭和45) 年11月 (第32回 - 第34回大会)

代表幹事 出口勇蔵 (事務局 京都大, 事務責任者 平井俊彦)

幹事・常任幹事

相見志郎 遊部久蔵 出口勇蔵* 浜林正夫 狭田喜義 羽鳥卓也*
林 治一 平井俊彦 平瀬巳之吉 平田清明* 堀 経夫 河野健二*
岸本誠二郎* 小林 昇* 越村信三郎 久保芳和 久保田明光 松川七郎
真実一男 水田 洋* 大野精三郎 末永茂喜 杉原四郎* 杉山忠平
高木暢哉* 田中真晴 田中敏弘 内田義彦* 渡辺輝雄 山川義雄

監 事 石原忠男 関未代策

顧問 堀 経夫 久保田明光 (昭和44年11月, 第33回大会)

日本経済学会連合評議員 久保田明光 小林 昇

経済史学研究連絡委員会委員 小林 昇

11 1970 (昭和45) 年11月 - 1972 (昭和47) 年11月 (第34回 - 第36回大会)

代表幹事 出口勇蔵 (事務局は10に同じ。事務責任者 平井俊彦 田中真晴)

幹事・常任幹事

相見志郎 遊部久蔵* 出口勇蔵* 浜林正夫 狭田喜義 羽鳥卓也*
林 治一 平井俊彦* 平瀬巳之吉 平田清明 河野健二* 岸本誠二郎

小林 昇* 越村信三郎 久保芳和 松川七郎 真実一男 宮崎犀一
 水田 洋* 大野精三郎 佐藤金三郎 末永茂喜 杉原四郎* 杉山忠平
 高木幸二郎 高木暢哉* 玉野井芳郎 田中真晴* 内田義彦* 渡辺輝雄
 山川義雄 (以上31名)

監 事 石原忠男 関未代策

日本経済学会連合評議員 小林 昇 遊部久蔵

経済史学研究連絡委員会委員 小林 昇

12 1972 (昭和47) 年11月 - 1974 (昭和49) 年11月 (第36回 - 第38回大会)

代表幹事 小林 昇 (事務局 立教大, 事務責任者 立入広太郎)

幹事・常任幹事

相見志郎 荒牧正憲 遊部久蔵* 出口勇蔵 浜林正夫 狭田喜義
 羽鳥卓也 平井俊彦 平瀬巳之吉 平田清明 菱山 泉 入江 奨
 河野健二* 小林 昇* 久保芳和 真実一男 水田 洋* 岡田純一
 良知 力 佐藤金三郎 杉原四郎* 杉山忠平 高木暢哉* 玉野井芳郎
 田中真晴* 田中敏弘 都築忠七 内田義彦* 山崎 怜 (以上29名)

監 事 林 治一 石原 忠男

顧問 岸本誠二郎 (1973 [昭和48] 年11月, 第37回大会)

日本経済学会連合評議員 小林 昇 遊部久蔵

経済史学研究連絡委員会委員 浜林正夫

13 1974 (昭和49) 年11月 - 1976 (昭和51) 年11月 (第38回 - 第40回大会)

代表幹事 水田 洋 (事務局 名古屋大)

幹事・常任幹事

相見志郎 荒牧正憲 遊部久蔵* 出口勇蔵 浜林正夫* 狭田喜義
 服部文男 羽鳥卓也 平井俊彦 平瀬巳之吉 平田清明 菱山 泉
 入江 奨 河野健二 木村正身 小林 昇* 久保芳和 真実一男
 水田 洋* 岡田純一 佐藤金三郎 杉原四郎* 杉山忠平 高木暢哉*
 玉野井芳郎 田中真晴* 田中敏弘 内田義彦 山崎 怜 横山正彦

監 事 林 治一 石原忠男

日本経済学会連合評議員 小林 昇 遊部久蔵

経済史学研究連絡委員会委員 浜林正夫

14 1976 (昭和51)年11月 - 1978 (昭和53)年11月 (第40回 - 第42回大会)
代表幹事 杉原四郎 (事務局 甲南大, 事務責任者 田中真晴)

幹事・常任幹事

相見志郎 荒牧正憲* 遊部久蔵 (1977 [昭和52]年12月) 出口勇蔵
浜林正夫* 狭田喜義 羽鳥卓也* 早坂 忠 平井俊彦 平田清明
菱山 泉 入江 奨 河野健二 小林 昇 真実一男 宮崎犀一
水田 洋 永井義雄 中村廣治 岡田純一* 杉原四郎* 杉山忠平*
高木暢哉* 玉野井芳郎 田村秀夫 田中真晴* 田中敏弘 内田義彦
和田重司 吉沢芳樹

監 事 林 治一 石原忠男

日本経済学会連合評議員 小林 昇 遊部久蔵 (1977 [昭和52]年12月まで)
経済史学研究連絡委員会委員 岡田純一 浜林正夫

15 1978 (昭和53)年11月 - 1981 (昭和56)年3月 (第42回 - 第44回大会)
代表幹事 杉山忠平 (事務局 静岡大, 事務責任者 重田澄男)

幹事・常任幹事

荒牧正憲 浜林正夫* 羽鳥卓也* 早坂 忠 平井俊彦 平田清明
菱山 泉 飯田 鼎 入江 奨 河野健二 小林 昇 久保芳和
松尾 博 真実一男* 宮崎犀一 水田 洋 中村廣治 岡田純一
佐藤金三郎 杉原四郎 杉山忠平* 玉野井芳郎 田村秀夫* 田中真晴*
田中敏弘 津田内匠* 内田義彦 山崎 怜 横山正彦 吉沢芳樹*

監 事 溝川喜一 立入広太郎

顧 問 出口勇蔵 高木暢哉 (1978 [昭和53]年11月, 第42回大会)

[1980 (昭和55)年3月現在, 顧問は, 高橋誠一郎 坂本彌三郎 久留間
鮫造 堀 経夫 岸本誠二郎 出口勇蔵 高木暢哉の7名である]

[役員は任期は会計年度に合せるため, 今期に限り, 昭和56年3月まで延
長された。]

日本経済学会連合評議員 岡田純一 (昭和54年11月まで)

津田内匠 (1979 [昭和54]年11月から) 田村秀夫

経済史学研究連絡委員会委員 浜林正夫 田村秀夫

16 1981 (昭和56)年4月 ~ 1983 (昭和58)年3月 (第45回大会 ~ 第46回

大会)

代表幹事 真実一男 (事務局 大阪市立大, 事務責任者 服部容教)

幹事・常任幹事 (50音順, 以下同様)

荒牧正憲* 飯田 鼎 入江 奨 内田義彦 岡田純一 河野健二
久保芳和 小林 昇 佐藤金三郎 杉原四郎 杉山忠平 田中敏弘
田中真晴* 玉野井芳郎 田村秀夫* 津田内匠* 永井義雄 中村廣治
羽鳥卓也* 浜林正夫* 早坂 忠 菱山 泉 平井俊彦 平田清明
松尾 博 水田 洋 宮崎犀一 山崎 怜 吉澤芳樹* 和田重司

監 事 立入広太郎 溝川喜一

日本学術会議会員 (経済学史学会推薦) 田村秀夫 平井俊彦

経済学史研究連絡委員会委員 田村秀夫 津田内匠

日本経済学会連合評議員 浜林正夫 吉澤芳樹

17 1983 (昭和58) 年 4 月～1985 (昭和60) 年 3 月 (第47回大会～第48回
大会)

代表幹事 浜林正夫 (事務局 一橋大, 事務責任者 神武庸四郎)

幹事・常任幹事

荒牧正憲* 岡田純一 川島信義 河野健二 久保芳和 小林 昇
佐藤金三郎 杉原四郎 杉山忠平 田中正司 田中敏弘* 田中真晴*
玉野井芳郎 田村秀夫* 津田内匠* 永井義雄 中村廣治 狭田喜義
羽鳥卓也* 早坂 忠 菱山 泉 平井俊彦 平田清明 真実一男
水田 洋 宮崎犀一 山崎 怜 吉澤芳樹* 和田重司

監 事 船越経三 溝川喜一

日本学術会議会員 (経済学史学会推薦) 田村秀夫 平井俊彦

経済学史研究連絡委員会委員 田村秀夫 津田内匠

日本経済学会連合評議員 田村秀夫 吉澤芳樹

18 1985 (昭和60) 年 4 月～1987 (昭和62) 年 3 月 (第49回大会～第50回
大会)

代表幹事 羽鳥卓也 (事務局 関東学院大, 事務責任者 星野彰男)

幹事・常任幹事

荒牧正憲* 飯田 鼎 伊東光晴 川島信義 河野健二 小林 昇

佐藤金三郎 杉原四郎 杉山忠平 田中正司 田中敏弘* 田中真晴*
 玉野井芳郎 田村秀夫* 津田内匠* 永井義雄 中村廣治 服部文男
 浜林正夫 早坂 忠 菱山 泉 平井俊彦 平田清明 真実一男
 水田 洋 宮崎犀一 山崎 怜 吉澤芳樹* 和田重司

監 事 船越経三 溝川喜一

日本学術会議会員（経済学史学会推薦） 狭田喜義

日本学術会議経済理論研究連絡委員会委員 田村秀夫 吉澤芳樹

日本経済学会連合評議員 田村秀夫 津田内匠

19 1987（昭和62）年年4月～1989（平成元）年3月（第51回大会～第52
 回大会）

代表幹事 田中真晴（事務局 甲南大，事務責任者 田中秀夫）

幹事・常任幹事

荒牧正憲* 飯田 鼎 伊東光晴 川島信義 佐藤金三郎 杉原四郎
 杉山忠平 田中正司 田中敏弘* 田村秀夫* 津田内匠* 時永 淑
 永井義雄 中村廣治* 根岸 隆 橋本昭一 服部文男 羽鳥卓也
 浜林正夫 早坂 忠 菱山 泉 平井俊彦 真実一男 馬渡尚憲
 水田 洋 宮崎犀一 山崎 怜 吉澤芳樹* 和田重司

監 事 溝川喜一 渡辺源次郎

日本学術会議会員（経済学史学会推薦） 狭田喜義，88年より 時永 淑

日本学術会議経済理論研究連絡委員会委員 杉山忠平 田村秀夫，のち，
 根岸 隆 吉澤芳樹

日本経済学会連合評議員 田村秀夫 津田内匠

20 1989（平成元）年4月～1991（平成3）年3月（第53回大会～第54回
 大会）

代表幹事 吉澤芳樹（事務局 専修大，事務責任者 酒井 進）

幹事・常任幹事

荒牧正憲* 飯田鼎 伊東光晴 大森郁夫 川島信義 竹本 洋
 田中正司* 田中敏弘* 田中真晴 田村秀夫* 津田内匠* 永井義雄
 中村廣治* 根岸 隆 橋本昭一 早坂 忠 菱山 泉 平井俊彦
 平田清明 星野彰男 馬渡尚憲 宮崎犀一 宮崎義一 八木紀一郎

山崎 怜 山中隆次 和田重司

監 事 溝川喜一 渡辺源次郎

日本学術会議会員（経済学史学会推薦） 時永 淑（任期中の90年4月逝去）

日本学術会議経済理論研究連絡委員会委員 田中正司 根岸 隆

日本経済学会連合評議員 田村秀夫 津田内匠

21 1991（平成3）年4月～1993（平成5）年3月（第55回大会～第56回大会）

代表幹事 田中敏弘（事務局 関西学院大，事務責任者 井上琢智）

幹事・常任幹事

荒牧正憲* 飯田 鼎 伊東光晴 大森郁夫 川島信義 塩野野祐一

住谷一彦 千賀重義 竹本 洋 田添京二 田中正司* 田村秀夫*

津田内匠* 永井義雄 中村廣治* 根岸 隆 橋本昭一 菱山 泉

平井俊彦 平田清明* 星野彰男 馬渡尚憲 宮崎犀一 八木紀一郎

山崎 怜 山田鋭夫 山中隆次 吉澤芳樹 和田重司

監 事 佐々木晃 溝川喜一

日本学術会議会員（経済学史学会推薦） 山崎 怜

日本学術会議理論研究連絡委員会委員 田中正司 根岸 隆

日本経済学会連合評議員 田村秀夫 津田内匠

22 1993（平成5）年4月～1995（平成7）年3月（第57回大会～第58回大会）

代表幹事 津田内匠（事務局 一橋大，事務責任者 西沢 保）

幹事・常任監事

荒牧正憲* 飯田裕康 伊東光晴 井上琢智 大森郁夫 川島信義

塩野野祐一 関源太郎 千賀重義 高 哲男 竹本 洋 田中正司*

田中敏弘 田村秀夫 中村廣治* 永井義雄 新村 聡 根岸 隆*

橋本昭一 服部正治 菱山 泉 星野彰男 馬渡尚憲* 宮崎犀一*

八木紀一郎 山崎 怜 山田鋭夫 山中隆次* 和田重司

監 事 佐々木晃 溝川喜一

日本学術会議会員（経済学史学会推薦） 伊東光晴

日本学術会議経済理論研究連絡委員会委員 玉井龍象 山中隆次

日本経済学会連合評議員 根岸 隆 和田重司

23 1995（平成7）年4月～1997（平成9）年3月（第59回大会～第60回大会）

代表幹事 中村廣治（事務局 熊本学園大，事務責任者 村松茂美）

幹事・常任幹事

荒牧正憲 有江大介 安藤隆穂 飯田裕康 伊東光晴 大森郁夫
川島信義 栗田啓子 坂本達哉 塩野谷祐一 関源太郎 千賀重義
高 哲男 竹本 洋* 津田内匠 永井義雄 新村 聡 西沢 保
根岸 隆* 橋本昭一 服部正治 深貝保則 星野彰男 馬渡尚憲*
八木紀一郎* 山崎 怜 山田鋭夫 山中隆次* 和田重司 渡会勝義

監 事 田添京二 橋本比登志

日本学術会議会員（経済学史学会推薦） 伊東光晴

日本学術会議経済理論研究連絡委員会委員 玉井龍象 山中隆次

日本経済学会連合評議員 根岸 隆 和田重司

24 1997（平成9）年4月～1999（平成11）年3月（第61回大会～第62回大会）

代表幹事 根岸 隆（事務局 青山学院大，事務責任者 石井信之）

幹事・常任幹事（各委員会委員長）

有江大介 安藤隆穂 飯田裕康 池尾愛子 井上琢智 大森郁夫
音無通宏 川島信義 栗田啓子 小柳公洋 坂本達哉 塩野谷祐一*
関源太郎 千賀重義* 高 哲男 竹本 洋 永井義雄 中村廣治
新村 聡 西沢 保 橋本昭一 服部正治 深貝保則 星野彰男
馬渡尚憲* 八木紀一郎* 山田鋭夫 和田重司 渡会勝義

監 事 橋本比登志 山崎 怜

日本学術会議会員（経済学史学会推薦） 田中 敏弘

日本学術会議経済理論研究連絡委員会委員 星野 彰男

日本経済学会連合評議員 根岸 隆 和田 重司

25 1999（平成11）年4月～2001（平成13）年3月（第63回大会～第64回大会）

代表幹事 馬渡 尚憲（事務局 東北大，事務責任者 本吉 祥子）

幹事・常任幹事（各委員会委員長）

有江大介 安藤隆穂 飯田裕康 池尾愛子 井上琢智 内田 弘
 大森郁夫 音無通宏 川島信義 栗田啓子 坂本達哉* 塩野谷裕一
 関源太郎 千賀重義 高 哲男* 竹本 洋 田中秀夫 永井義雄
 新村 総 西沢 保 根岸 隆 橋本昭一 服部正治 平井俊顕*
 深貝保則 星野彰男 八木紀一郎* 山田鋭夫 和田重司 渡会勝義
 監 事 橋本比登志 山下 博

日本学術会議会員 田中敏弘

日本学術会議経済理論研究連絡委員会委員 星野彰男

日本経済学会連合評議員 和田重司 栗田啓子

B. 名誉会員（2000年6月現在）

出口勇蔵 小林 昇 水田 洋 杉原四郎 真実一男 羽鳥卓也
 田村秀夫 浜林正夫 吉澤芳樹 荒牧正憲 田中敏弘

（逝去顧問，名誉会員，同上）

高橋誠一郎 坂本彌三郎 舞出長五郎 久留間鮫造 大塚金之助
 堀 経夫 久保田明光 岸本誠二郎 高木暢哉 大河内一男
 高島善哉 大道安次郎 杉山忠平 田中真晴

C. 経済学史学会推薦日本学術会議会員 [1965年以降。(全)は全国区、(地)は地方区]

第7期 (1965~68) 河野 健二 (全)
 第8期 (1968~71) 河野 健二 (全) 水田 洋 (地)
 第9期 (1971~74) 水田 洋 (全) 高木 暢哉 (全)
 第10期 (1974~77) 高木 暢哉 (全) 浜林 正夫 (全)
 第11期 (1977~80) 浜林 正夫 (全) 平井 俊彦 (全)
 第12期 (1980~85) * 平井 俊彦 (全) 田村 秀夫 (全)
 第13期 (1985~88) 狭田 喜義
 第14期 (1988~91) 時永 淑**
 第15期 (1991~94) 山崎 怜

第16期 (1994～97) 伊東 光晴

第17期 (1997～2000) 田中 敏弘

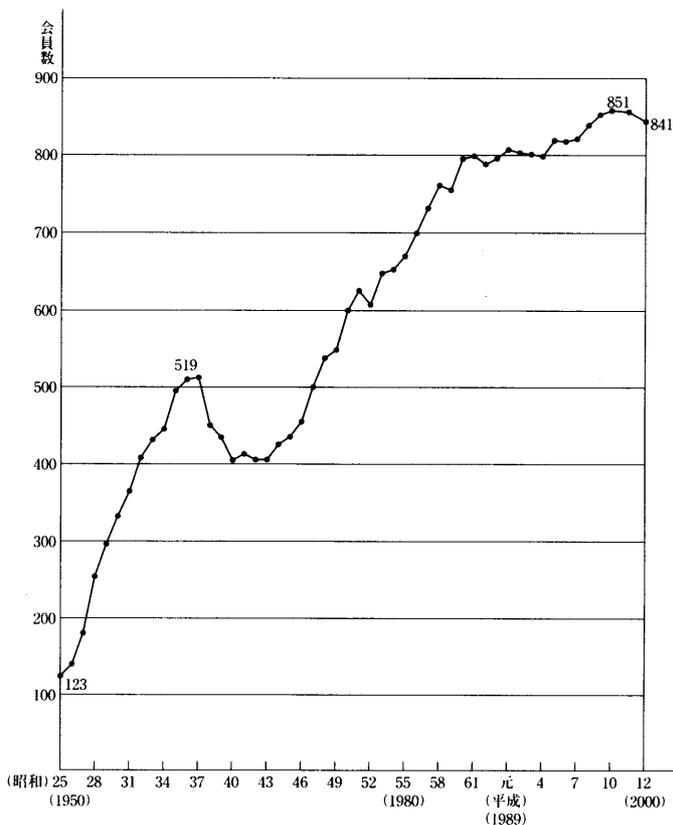
* 日本学術会議制度変更のため、任期1年半延長

** 任期中の1990年4月、逝去

Ⅲ 会員数の変動

年 月	会員数	年 月	会員数
1950 (昭和25) 4	123	1967 (昭和42) 11	412
50 (昭和25) 12	127	68 (昭和43) 11	(415)
51 (昭和26) 5	142	69 (昭和44) 11	(429)
51 (昭和26) 11	152	70 (昭和45) 11	439
52 (昭和27) 5	175	71 (昭和46) 11	(461)
52 (昭和27) 11	209	72 (昭和47) 11	(500)
53 (昭和28) 5	254	73 (昭和48) 11	(544)
53 (昭和28) 11	273	74 (昭和49) 11	553
54 (昭和29) 5	297	75 (昭和50) 11	(604)
54 (昭和29) 11	314	76 (昭和51) 11	632
55 (昭和30) 5	335	77 (昭和52) 11	614
55 (昭和30) 11	349	78 (昭和53) 11	651
56 (昭和31) 5	364	79 (昭和54) 11	654
56 (昭和31) 11	384	80 (昭和55) 5	679
57 (昭和32) 5	403	80 (昭和55) 11	699
57 (昭和32) 11	413	81 (昭和56) 6	699
58 (昭和33) 5	439	82 (昭和57) 7	730
58 (昭和33) 11	456	83 (昭和58) 6	761
59 (昭和34) 5	445	84 (昭和59) 5	756
59 (昭和34) 11	482	84 (昭和59) 11	782
60 (昭和35) 5	493	85 (昭和60) 6	794
60 (昭和35) 11	505	86 (昭和61) 5	799
61 (昭和36) 5	513	87 (昭和62) 7	788
61 (昭和36) 11	519	88 (昭和63) 7	794
62 (昭和37) 5	510	89 (平成元) 7	803
62 (昭和37) 11	516	89 (平成元) 11	810
63 (昭和38) 11	450	90 (平成2) 7	803
64 (昭和39) 11	440	91 (平成3) 5	801
65 (昭和40) 9	409	92 (平成4) 6	799
66 (昭和41) 11	423	93 (平成5) 6	819

年 月	会員数	年 月	会員数
1993 (平成 5) 11	821	2000 (平成12) 6	841
94 (平成 6) 5	817	備考 1959 (昭和34) 年 5 月 経済 理論学会創立 1962 (昭和37) 年 5 月 自然 退会規定 5 ケ年滞納を 2 ケ年 に変更 1976 (昭和51) 年11月 社会 思想史学会創立 () 内は推 定数	
94 (平成 6) 10	822		
95 (平成 7) 6	820		
96 (平成 8) 6	836		
96 (平成 8) 11	846		
97 (平成 9) 5	832		
97 (平成 9) 11	847		
98 (平成10) 5	854		
99 (平成11) 11	851		



IV 学会費と学会会計 (1999年度会計報告)

A. 学会費の推移

1950年度 - 58年度	200円
1959年度 - 61年度	300円
1962年度	600円
1963年度 - 69年度	1,000円
1970年度 - 72年度	1,500円
1973年度 - 74年度	2,500円
	(院生 2,000円)
1975年度 - 79年度	3,000円
	(院生 2,500円)
1980年度	5,000円
	(院生 3,000円)
1985年度	一律5,000円, 院生会費廃止
1995年度	6,000円
1997年度	8,000円

B. 経済学史学会1999年度会計報告

収 支 決 算 書
(1999年4月1日~2000年3月31日)

収 入 の 部		支 出 の 部	
前期繰越金	602,435	大 会 費	400,000
会 費	6,730,000	部会補助費	156,998
年報売上	103,800	会 議 費	359,200
年報広告掲載料	240,000	刊行物編集費	976,130
文部省助成	260,000	年報編集発行費	1,846,184
利子収入	693	大会報告集印刷郵送費	388,330
大会報告集売上	0	事務局費	741,712
臨時収入(前年度未回収金等)	143,591	選 管 費	0
刊行物売上	4,800	会員名簿印刷費	262,500
		センター費	917,479
		経済学会連合分担金	35,000
		予 備 費	408,718
		支 出 合 計	6,492,251
		次 期 繰 越 金	1,593,068
合 計	8,085,319	合 計	8,085,319

V 大会研究報告（大会期間中の特別講演・公開講演を含む）

（所属の後の名誉：名誉教授，非：非常勤講師，院：大学院生の略）

第1回（1950〔昭和25〕年4月22-23日 早稲田大）

- 1 リカアドオと産業革命 隅谷三喜男（東京大）
- 2 価値論におけるリカアドオとベーリー 玉野井芳郎（東北大）
- 3 リカアドオの分配論について 堀 経夫（関西学院大）
- 4 マルクスの抽象的労働の概念 杉山 清（早稲田大）
- 5 「経済表」の現代的意義 越村信三郎（横浜国立大）
- 6 重商主義と近世国家の成立——歴史派的重商主義観の批判—— 白
杉庄一郎（滋賀大）

第2回（1950〔昭和25〕年12月9日 京都大）

- 1 アダム・スミス以前の自由貿易論について 相見志郎（同志社大）
- 2 チュルゴー及びコンジヤックの主観価値論 山川義雄（早稲田大）
- 3 イギリス重商主義の解体とスミス経済学の成立 田添京二（東京大）
- 4 フィジオクラットとルソオ 河野健二（京都大）

第3回（1951〔昭和26〕年5月5日 東京大）

- 1 リカアドオの不変の価値尺度論 遊部久蔵（慶応義塾大）
- 2 マルクスの価値形態論について 鈴木鴻一郎（東京大）
- 3 ケネー学説における政策的背景 菱山 泉（京都大）
- 4 リカアドオの論理構造 行沢健三（関西学院大）
- 5 重商主義の批判的体系としてのスミス国富論 内田義彦（専修大）

第4回（1951〔昭和26〕年11月8-9日 関西学院大）

共通論題 古典学派と重商主義

- 1 ベンジャミン・フランクリンと重商主義 久保芳和（関西学院大）
- 2 アダム・スミスと貨幣数量説の論理 堀家文吉郎（早稲田大）
- 3 イギリス・マアカンティリズムと国家論——トマス・ホブズを中
心として—— 水田 洋（名古屋大）
- 4 スミスとマアカンティリズム 小林 昇（福島大）

自由論題

- 5 アーノルド・トインビーの賃銀論 西村孝夫 (広島大)
- 6 自由貿易運動の発端としてのミル対スペンス市場論争 岡 茂男 (九州大)
- 7 マルクス剰余価値論の基本性格 杉原四郎 (関西大)
- 8 スミスの地代論について 溝川喜一 (京都大)
- 9 ジョン・ラスキン経済思想の一検討 木村正身 (香川大)

第5回 (1952〔昭和27〕年5月3-4日 慶応義塾大)

共通論題 人口論

- 1 フランクリンの人口に関する見解 渡辺国広 (慶応義塾大)
- 2 日本の人口及び人口研究の現状 寺尾琢磨 (慶応義塾大)
- 3 アメリカにおける人口理論の特質 大道安次郎 (関西学院大)

自由論題

- 4 マルサスの価値尺度論 入江 奨 (松山商科大)
- 5 社会思想家としてのマブリ 縫田清二 (横浜国立大)
- 6 フランクリンの価値論 三辺清一郎 (尾道短期大)
- 7 リチャード・ジョーンズの経済学 大野精三郎 (一橋大)
- 8 日本経済学史における歴史学派 住谷悦治 (同志社大)
- 9 重農主義学説の基本的性格 横山正彦 (東京大)

第6回 (1952〔昭和27〕年11月8-9日 神戸大)

- 1 重農学派の価値論 平田清明 (横浜国立大)
- 2 クニースにおける民族の問題 出口勇蔵 (京都大)
- 3 社会科学史としてみた経済学史 榊原 巖 (青山学院大)
- 4 初期マルクスの経済学研究 長洲一二 (横浜国立大)
- 5 マルクス恐慌論の若干問題 石原忠男 (中央大)
- 6 「資本論」における「価値法則」の展開 楠井隆三 (関西学院大)
- 7 リカアドオ蓄積論の構成——古典学派の完成—— 吉澤芳樹 (東京大)
- 8 ヒルファディングの信用理論について 古澤友吉 (横浜市立大)

第7回 (1953〔昭和28〕年5月2-3日 一橋大)

共通論題 経済学における「古典」理論と「近代」理論

- 1 アメリカ経済学の場合 大道安次郎（関西学院大）
- 2 経済学の5つの基本命題を中心として——生理学的解剖—— 平瀬
巳之吉（専修大）

自由論題

- 3 梅巖から堵庵へ——石門心学の経済思想史的一考察—— 多田 顕
（千葉大）
 - 4 ^{スコット}蘇格人アダム・スミス——スミス思想のよりよき理解のために——
上田辰之助（一橋大）
 - 5 フランクリンの奢侈論 三辺清一郎（尾道短期大）
 - 6 マルクスの恐慌論について 末永茂喜（東北大）
 - 7 ジョン・ロック経済理論の構成 羽鳥卓也（福島大）
 - 8 資本主義の限界状況におけるマルクスとウェーバー 武藤光朗（中央
大）
 - 9 「経済学批判」のプランについて 宮崎犀一（一橋大）
- 第8回**（1953〔昭和28〕年11月7－8日 福島大）

共通論題 リカアドウとマルサス

- 1 国際価値論としての比較生産費説 川尻 武（中央大）
- 2 マルサスとリカアドウ——思想史上の前後について 榊原 巖（青
山学院大）
- 3 リカアドウ「機械論」の成立と発展 真実一男（長崎大）
- 4 穀物法論争期におけるマルサスとリカアドウとの書簡上の利潤をめぐ
る論争 堀 経夫（関西学院大）

自由論題

- 5 アダム・スミスと「アメリカ体制」 大道安次郎（関西学院大）
- 6 室鳩巢の社会経済思想について——亨保期社会経済思想の一考察——
多田 顕（千葉大）
- 7 デュブュイの相対的効用理論について 柏崎利之輔（早稲田大）
- 8 生産力説の歴史的意味——フランス「百科全書」派の立場—— 河
野健二（京都大）
- 9 17世紀英国における価値及び価値理論 飯塚一郎（山梨大）

- 10 貨幣数量説の本質 加藤一夫 (秋田大)
- 11 トーマス・ウィルソンの経済論——利子・為替論を中心にして——
渡辺源次郎 (福島大)

第9回 (1954〔昭和29〕年5月8-9日 横浜国立大) (開催校は横浜国立大, 横浜市立大, 関東学院大, 神奈川大)

共通論題 マルサスとリカアドウ

- 1 マルサス・リカアドウ研究の意義と問題 岸本誠二郎 (京都大)
- 2 リカアドウとマルサスの論理構造 平瀬巳之吉 (専修大)
- 3 マルサスの価値論と再生産論 遊部久蔵 (慶応義塾大)
- 4 リカアドウの経済学説 玉野井芳郎 (東京大)
- 5 リカアドウにおける資本蓄積と恐慌 富塚良三 (福島大)
- 6 マルサスの社会動態論 中野 正 (法政大)

自由論題

- 7 リチャード・ジョーンズにおける生産的労働の概念 平野絢子 (慶応義塾大)
- 8 ジョサイア・タッカーと産業革命 小林 昇 (福島大)
- 9 江戸時代の正価思想 東晋太郎 (関西学院大)
- 10 価値形態論と交換過程論 久留間鮫造 (法政大)
- 11 資本論の体系について 梯 明秀 (立命館大)
共同報告「トマス・モア研究」
- 12 イギリス商業資本と「ユートピア」 田村秀夫 (中央大)
- 13 モアの農本的思想について 松田 寛 (早稲田大)

第10回 (1954〔昭和29〕年11月6-7日 関西大)

共通論題 経済学史の方法論 (シンポジウム) 司会 出口勇蔵 (京都大)

- 1 相沢秀一 (大阪私立大)
- 2 林 治一 (神戸大)
- 3 渡辺輝雄 (東京経済大)
- 4 横山正彦 (東京大)
- 5 島津亮二 (京都大)

自由論題

- 6 古典派の価値論について——特にリカードを中心として—— 入江 奨 (松山商大)
- 7 西鶴の『日本永代蔵』とディフォウの『イギリス商人大鑑』——東西経済思想の二つの典型—— 上田辰之助 (一橋大)
- 8 思想史上における司馬江漢 多田 顕 (千葉大)
- 9 レーニンの『市場理論』について 田中真晴 (京都大)
- 10 マルクスとスターリン 気賀健三 (慶応義塾大)
- 11 フランクリンと奴隷制度 三辺清一郎 (尾道短期大)

第11回 (1955〔昭和30〕年5月7-8日 中央大)

- 1 ミルトンの社会思想について 豆本 薫 (滋賀大)
- 2 マンデヴィルとアダム・スミス——経済学史におけるマンデヴィルの地位—— 田中敏弘 (関西学院大)
- 3 イギリスのスミス 大河内一男 (東京大)
- 4 ラザーシチェフの農奴制批判——その主著『ペテルブルグからモスクワへの旅』を中心として—— 渋谷一郎 (一橋大)
- 5 ベンサム経済理論の構造と発展 石本美代子 (高崎短期大)

共通論題 アダム・スミス

- 6 スミスとベンサム——両体系の構造対比—— 山下 博 (京都大)
- 7 スミスにおける自然的なるものの経済学的意味 大門一樹 (関東学院大)
- 8 アダム・スミスにおける国富について 森 茂也 (南山大)
- 9 スミス蓄積論の基本構成——リカードとの対比 富塚良三 (福島大)

第12回 (1955〔昭和30〕年11月5-6日 大阪市立大)

- 1 シスモンディからみたイギリス古典経済学 中野 正 (法政大)
- 2 学史研究と近代経済学 山田雄三 (一橋大)
- 3 マルクスの「剰余価値学説史」について 末永茂喜 (東北大)
- 4 社会思想史における藤樹 多田 顕 (千葉大)
- 5 経済学におけるイデアル・ティプス概念について 安藤英治 (成蹊大)

- 6 経済学教科書の意義について 岡本博之 (大阪市立大)
- 7 フランクリンの製造業論 三辺清一郎 (尾道短期大)
- 8 トーリー・フリー・トレードの解体 小林 昇 (立教大)

第13回 (1956〔昭和31〕年5月5-6日 法政大)

共通論題 古典学派一般

- 1 ルソーの経済思想 羽鳥卓也 (福島大)
- 2 リカードウの議会改革論と経済理論 吉沢芳樹
- 3 シスモンディ経済学の古典的性格について 平田清明 (横浜国立大)

自由論題

- 4 「アメリカ経済学会」の成立をめぐる——アメリカ経済学史の一節—— 大道安次郎 (関西学院大)
- 5 マルクス信用論の展開——「経済学批判綱要」をめぐる—— 石垣博美 (北海道大)
- 6 「経済学批判」体系における「賃労働」問題——『資本論』と「賃労働」の関係を中心として—— 井村喜代子 (慶応義塾大)
- 7 イギリス資本主義発展途上における清教主義経済倫理の変質 松浦高嶺 (高崎短期大)
- 8 独逸官房学派に関する一考察 武藤正平 (横浜国立大)
- 9 朱子学正学化の過程——寛政異学の禁研究序説—— 多田 顕 (千葉大)

第14回 (1956〔昭和31〕年11月2-3日 同志社大)

- 1 ジョン・ステュアート・ミルと社会主義思想 福原行三 (大阪府立大)
- 2 ヴェブレンにおける消費の思想について 渋谷行雄 (早稲田大)
- 3 リカアドオ“Essay on Profits”の一考察 中村廣治 (九州大)
- 4 松平定信の経済論 多田 顕 (千葉大)

共通論題 恐慌論

- 5 『恐慌論』を進めるについての前書き 石原忠男 (中央大)
- 6 近代景気循環理論の1つの型とそのシュムペーター理論 伊達邦春 (早稲田大)

- 7 シュビートホフの景気理論について 越座和夫 (東京都立大)
- 8 経済発展の一般理論——資本蓄積論の課題と方法—— 吉田義三
(大阪市立大)
- 9 恐慌論の基本問題 山本二三丸 (立教大)
- 10 恐慌論研究の方法について 石原忠男 (中央大)

第15回 (1957〔昭和32〕年5月11-12日 明治大)

- 1 フリードリッヒ・リストの「経済発展段階」の概念に関する問題 酒
枝義旗 (早稲田大)
- 2 ルイス・ロバーツの外国貿易論とその経済史的意義 西村孝夫 (大阪
府立大)
- 3 ジェームズ・ハリントンの経済思想 浜林正夫 (小樽商大)
- 4 ルカーチのイデオロギー論 平井俊彦 (京大)

共通論題 経済発展と資本蓄積の理論

オーガナイザーの言葉 越村信三郎 (横浜国立大)

- 5 スミス蓄積論と利潤率低下法則の問題 藤塚知義 (武蔵大)
- 6 フランス古典派経済学の資本蓄積論——シスモンディを中心とし
て—— 大島雄一 (名古屋大)
- 7 経済発展にかんする最近の近代理論について 宮崎義一 (横浜国立
大)
- 8 マルクス体系における資本の流通過程と変動 高木暢哉 (九州大)
- 9 ソヴィエト連邦における経済発展と蓄積の理論 野々村一雄 (一橋
大)
- 10 総括——資本蓄積論の問題点とその意義 越村信三郎 (横浜国立大)

第16回 (1957〔昭和32〕年11月16-17日 関西学院大)

- 1 鎌田鵬 (石門心学者) の思想について——徳川後期思想史研究——
多田 顕 (千葉大)
- 2 経済学移植の社会的地盤——明治経済学の場合—— 大道安次郎
(関西学院大)
- 3 特別講演 The Rise of Classical Sociology Ronald L. Meek
- 4 イギリス経済学と海運 伊坂市助 (関東学院大)

- 5 W.ゴドウィンとW.タムソン——資本主義批判史の展開に寄せて—— 白井 厚 (慶応義塾大)
- 6 ベンジャミン・フランクリンの自由主義の性格 三辺清一郎 (尾道短期大)

第17回 (1958〔昭和33〕年5月10-11日 立教大)

公開講演

- 1 重農主義学説の階級的基盤 横山正彦 (東京大)
- 2 ケネー経済表の諸表式 坂田太郎 (一橋大)

自由論題

- 3 生産的労働と所得 金子ハルオ (東京大)
- 4 戦後における理論模型の1つの発展方向——消費函数論争に寄せて—— 清水川繁雄 (明治大)
- 5 マルクス恐慌論の一考察——景気循環と固定資本投資—— 林 直道 (大阪市立大)
- 6 デイドロと保護主義 吉田静一 (関西大)
- 7 イギリスにおける初期急進主義思想——ロバート・ウォーレスについて—— 永井義雄 (名古屋大)
- 8 最近のフランスにおけるマルクス研究について 岡田純一 (聖心女子大)
- 9 明治前期移入社会科学とアメリカ「社会科学運動」との系譜関係 早瀬利雄 (横浜市立大)

第18回 (1958〔昭和33〕年11月2-3日 立命館大)

共通論題 ケネー研究

- 1 経済表(原表)の構想 渡辺輝雄 (東京経済大)
- 2 ケネー経済表の現代的意義 越村信三郎 (横浜国立大)
- 3 重農主義とフランス革命 河野健二 (京都大)
- 4 ケネーの賃金論 狭田喜義 (広島大)
- 5 ケネー学説における一問題 菱山 泉 (京都大)
- 6 経済表と範式との相互補足の解釈 橋本純二 (徳島大)

自由論題

- 7 「特殊」な不況とニュー・ディール財政政策 金田重喜 (京都大)
- 8 ホッブス自然法思想の近代性解釈をめぐって——とくにウォリナー氏の所論を中心として—— 田中正司 (横浜市立大)
- 9 経済学史研究の立場について 石川興二 (京都大)
- 10 労働価値説と現代資本主義——とくにマルクス地代論の誤りについて—— 堀江忠男 (早稲田大)
- 11 石門心学と武士階級 多田 顕 (千葉大)
- 12 古典派の根本的盲点の1つとしての開放, 封鎖両経済体系概念の区別 有田 稔 (関西大)

第19回 (1959〔昭和34〕年5月9-10日 専修大)

- 1 マルクス生産価格論の意義と限界——恐慌論の視角からする一考察—— 松岡寛爾 (名城大)
- 2 利子率法定論争と賃金——17世紀イギリスにおける—— 渡辺源次郎 (福島大)
- 3 スチュアート『原理』の歴史的背景 小林 昇 (立教大)
- 4 チャーチズムにおける労働者の性格とその思想 野地洋行 (慶応義塾大)
- 5 オーウェン主義の成立——恐慌観と労働価値=貨幣論を中心として—— 松田弘三 (立命館大)
- 6 サン・シモンの産業主義思想 坂本慶一 (京都大)
- 7 J.S. ミルの利潤論に関する一考察 杉原四郎 (関西大)
- 8 マックス・ウェーバーの農政論 山口和男 (甲南大)
- 9 寛政期社会思潮管見——松平定信を中心として—— 多田 顕 (千葉大)

第20回 (1959〔昭和34〕年11月7-8日 九州大) (開催校は九州大, 西南学院大, 福岡商科大)

- 1 国民所得分析と投入産出分析——乗数理論, 成長理論を中心に—— 村田安雄 (神戸商大)
- 2 古典的派恐慌論の発展形態 末永茂喜 (東北大)
- 3 フリードリッヒ・フォン・ゴットル教授の生活と業績について

酒枝義旗 (早稲田大)

- 4 マルクス体系における価値の概念 城座和夫 (東京都立大)
- 5 アダム・スミスの重商主義論 相見志郎 (同志社大)
- 6 現代資本主義論の方法について 馬場元二 (久留米大)
- 7 開かれた体系としての「資本論」 梯 明秀 (立命館大)
- 8 人口論者としての Giovanni Botero について 南亮三郎 (中央大)

第21回 (1960〔昭和35〕年5月14-15日 日本大)

- 1 経済学の冷戦的現状と学史的研究の世界性 石川興二 (京大)
- 2 現代資本主義分析の一視角 加藤泰男 (明治大)
- 3 第1部門優先的発展の法則——とくにマルクスの拡張再生産表式を中心—— 林 直道 (大阪市立大)
- 4 ハロッドの経済成長理論の一考察——いわゆる貨幣的経済理論との関連にて—— 三上正之 (中京大)
- 5 厚生経済における効用理論 有田一郎 (熊本大)
- 6 チューネンについての若干の考察 岡村邦輔 (日本大)
- 7 明治末期の河上 肇 内田義彦 (専修大)
- 8 国学者の経済論について 多田 顕 (千葉大)

第22回 (1960〔昭和35〕年11月4-5日 名古屋大)

- 1 イギリスにおけるマルクス主義——19世紀イギリス社会主義運動に関連して—— 飯田 鼎 (慶応義塾大)
予定討論 杉山忠平 (静岡大)
- 2 ジョン・ミラーのフランス革命観——とくに対仏干渉戦争批判の根拠について—— 山崎 怜 (香川大)
予定討論 小林 昇 (立教大)
- 3 ヘスとマルクス 山中隆次 (和歌山大)
予定討論 平井俊彦 (京大)
- 4 ウィルヘルム・ワイトリングの革命思想 森田 勉 (三重大)
予定討論 高橋正立 (京大)
- 5 「経済表」の論理と構造 吉原泰助 (東京大)
予定討論 平田清明 (名古屋大)

- 6 19世紀アメリカ経済学史における道德哲学の性格 早瀬利雄（横浜市立大）
予定討論 久保芳和（関西学院大）
- 7 商品の価値の「実体」とその「形態」——労働価値説の根本問題——
渡辺 昭（東京大）
予定討論 岡崎栄松（立命館大）
- 8 拡大再生産表式における固定資本の補填と蓄積基金の積立てについて
二瓶 敏（東京大）
予定討論 宮崎犀一（国学院大）
- 9 ヒルファーディング『金融資本論』の現代的評価——刊行50周年を
記念して——古沢友吉（横浜市立大）
予定討論 熊谷一男（一橋大）

第23回（1961〔昭和36〕年5月13-14日 東北大）（開催校は東北大，東北学院大）

- 1 寡占価格の性質について——現代資本主義と管理価格—— 池田一新（明治大）
- 2 ジョン・ケアリーの経済体制の構想 渡辺源次郎（福島大）
- 3 拡大再生産表式に関する一試論 高木幸二郎（九州大）
- 4 ウィリアム・モリスにおけるユートピア思想の性格 木村正身（香川大）
- 5 熊沢蕃山の社会経済思想とその潮流 多田 顕（千葉大）
- 6 土地生産物における一般的生産価格の形成——差額地代第一形態の理解のために—— 日高 普（法政大）
- 7 アダム・ファーフガスンと古典的政治経済学 大野精三郎（一橋大）
- 8 成長循環の概念図試作と近代理論の発展推移 伊坂市助（関東学院大）
- 9 経済学の発展について——マルクスとケインズ—— 玉野井芳郎（東京大）

第24回（1961〔昭和36〕年11月4-5日 和歌山大）

- 1 白杉博士の資本主義精神起源論——遺稿『近世西洋経済思想史』中

の一篇紹介—— 松尾 博 (滋賀大)

- 2 G. ミュルダールの価値判断論 浜崎正規 (立命館大)
- 3 独乙古経済学の特質 武藤正平 (横浜国立大)
- 4 ウィリアム・ウッドのアメリカ植民地にかんする見解について 宇治田富造 (立教大)
- 5 ジョージ・ラムズィにおける資本蓄積と労働者階級の生活について 蛭原良一 (新潟大)
- 6 イギリス労働運動の一側面——メカニックス・インスティテュートとその思想的背景—— 安藤悦子 (名古屋大)
- 7 Workable Competition と反トラスト法について 中山 大 (甲南大)
- 8 ケネーの「経済表範式」の生成 渡辺輝雄 (東京経済大)
- 9 生産資本循環と市場・恐慌分析視角 平田清明 (名古屋大)

第25回 (1962〔昭和37〕年5月12-13日 東京経済大)

- 1 プレハーノフのロシア資本主義論——『われわれの相違』を中心として—— 田中真晴 (京都大)
- 2 ジェイムズ・ミルの『商業擁護論』をめぐる諸問題 林登良雄 (下関市立大)
- 3 新しい経済学と河上 肇先生 石川興二 (京都大)
- 4 J. S. ミルの労働把握 高島光郎 (横浜国立大)
- 5 フランス経済思想研究の意義について (総括報告) 河野健二 (京都大)
- 6 農業革命と経済表 平田清明 (名古屋大)
- 7 19世紀初頭のフランス重商主義 吉田静一 (関西大)
- 8 サン・シモン派の思想と運動 坂本慶一 (京都大)
- 9 販路説の原型について——セイを中心にして—— 溝川喜一 (甲南大)
- 10 シスモンディ「経済学研究」における価値論と恐慌論について 岡田純一 (聖心女子大)

第26回 (1962〔昭和37〕年11月10-11日 香川大)

共通論題 労働価値論の端緒——W. ペティ『租税貢納論』公刊三百年

記念——

- 1 前言——初期労働価値論史上の問題点—— 小林 昇（立教大）
- 2 『租税貢納論』の構造 高野利治（関東学院大）
予定討論 田添京二（福島大）
- 3 ベティ労働価値説の起源について 松川七郎（一橋大）
予定討論 渡辺輝雄（東京経済大）
- 4 チャイルドとロック 平井俊彦（京大）
予定討論 渡辺源次郎（福島大）

自由論題

- 5 ジョン・ローの金融論の基本的性格——重商主義論の一変型——
赤羽 裕（東京大）
予定討論 吉田静一（関西大）
- 6 徳川時代における頼母子講思想の研究——田中丘隅・海保青陵を中
心に—— 森 静朗（日本大）
予定討論 多田 顕（千葉大）
- 7 モーゼス・ヘスの「人間疎外」の思想——とくにマルクスとの関係
について—— 畑 孝一（一橋大）
予定討論 重田晃一（関西大）
- 8 トマス・ホジスキンの資本主義批判について 鎌田武治（横浜国立
大）
予定討論 堀 経夫（関西学院大）
- 9 ロバート・オーエンの空想的社会主義——その基本的性格—— 永
井義雄（名古屋市立女子短大）
予定討論 松田弘三（立命館大）

第27回（1963〔昭和38〕年11月9-10日 武蔵大）

- 1 トマス・マン「財宝論」の理論的構造 遠山 馨（西南学院大）
- 2 エコノミストとしてのデイヴィッド・ヒューム 田中敏弘（関西学院
大）
- 3 スミス「国富論」における国家財政把握について 和田重司（一橋
大）

- 4 A. E. シェルビュリエ著「富か貧困か」(1840年刊, 183頁)における
労働者階級の窮乏化論について 蛭原良一(新潟大)
- 5 アンダアスの地代論について 西山久徳(明治大)
- 6 マルサスの価値および分配論 橋本比登志(関西学院大)
- 7 イギリス経験論の歴史的な性格——17世紀を中心として—— 浜林正
夫(小樽商大)
- 8 M. ウェーバーにおける労働問題把握の構造と特質 中村貞二(山口
大)

第28回 (1964〔昭和39〕年11月7-8日 大阪府立大)

- 1 M. ウェーバーと東洋における資本主義の精神 大野信三(明治大)
予定討論 東晋太郎(関西学院大)
- 2 林 子平の社会経済論——寛政期思潮との連関に於て 多田 顕(千
葉大)
予定討論 藤井定義(大阪府立大)
- 3 イギリス公債思想の一典型——ジェームズ・ステュアートの場合
戒田郁夫(関西大)
予定討論 川島信義(西南学院大)
- 4 ジョン・ロックのプロパティ論 田中正司(横浜市立大)
予定討論 平井俊彦(京大)
- 5 イギリス産業革命における労働者——メカニクス・マガジンの分
析—— 安川悦子(名古屋大)
予定討論 木村正身(香川大)
- 6 A. マーシャル『経済学原理』における準地代学説の発展 柏崎利之
輔(早稲田大)
予定討論 南方寛一(神戸大)
- 7 『国富論』における概念編成の問題——とくに第3編以降—— 宮
崎犀一(国学院大)
予定討論 和田重司(大阪経済大)
- 8 資本論体系と古典派競争論について 逢坂 充(九州大)
予定討論 金子 甫(桃山学院大)

第29回 (1965〔昭和40〕年9月25-26日 小樽商大)

- 1 ベイコンとペティ —— 教育思想を中心として —— 芳賀 守 (福島二高)
- 2 ジェイムズ・ステュアートの信用理論 —— その「土地銀行論」的性格 —— 川島信義 (西南学院大)
- 3 初期リカードウの分配論 羽鳥卓也 (福島大)
- 4 第一インターナショナルとドイツ労働運動 —— ドイツ労働運動における民主主義と社会主義 —— 飯田 鼎 (慶応義塾大)
- 5 ヘスとマルクス —— 疎外理論と経済学理論との交流の視点から —— 中野徹三 (札幌短期大)
- 6 古典派蓄積論の展開についての一考察 荒牧正憲 (九州大)

共通論題 経済学と歴史意識

- 7 チェルゴの歴史思想と政治経済学の形成 津田内匠 (一橋大)
- 8 スミス経済学における歴史主義 宮崎犀一 (国学院大)
- 9 フリードリッヒ・リストと経済学における歴史主義 小林 昇 (立教大)
- 10 マルクスにおける歴史意識と経済学 平田清明 (名古屋大)
- 11 経済学と歴史意識 —— ケインズを中心として —— 伊東光晴 (東京外国語大)

総括 出口勇蔵 (京都大)

第30回 (1966〔昭和41〕年11月12-13日 京都大)

- 1 ジョン・レイの思想と資本理論 林 治一 (神戸大)
予定討論 久保芳和 (関西学院大)
- 2 独逸旧歴史派経済学の有機体理論 赤羽豊治郎 (松商学園)
予定討論 出口勇蔵 (京都大)
- 3 ケインズ・学説史的接近の一方法 有田一郎 (熊本大)
予定討論 菱山 泉 (京都大)
- 4 J.F.ブレイの社会革命の思想 上野 格 (成城大)
予定討論 遊部久蔵 (慶応義塾大)
- 5 価値と価格 中村賢一郎 (明治大)

予定討論 山下 博 (同志社大)

共通論題 カール・マルクス

- 6 マルクスとヘーゲル 細見 英 (立命館大)
予定討論 良知 力 (法政大)
- 7 ブルードンとマルクス 森川喜美雄 (専修大)
予定討論 坂本慶一 (竜谷大)
- 8 マルクス経済学と俗流経済学 玉野井芳郎 (東京大)
予定討論 大熊信行 (神奈川大)
- 9 「労働賃金」について 大内秀明 (東北大)
予定討論 岡崎栄松 (立命館大)

総括討論司会 水田 洋 (名古屋大)

杉原四郎 (関西大)

第31回 (1967〔昭和42〕年11月11-12日 早稲田大)

- 1 マルクスの生産的労働論の生成について——その学説史的あとづけ—— 阿部照男 (中央大)
- 2 マルクスの教育思想と児童労働論との関係について 中野徹三 (札幌短期大)
- 3 『資本論』における弁証法 堀江忠男 (早稲田大)
- 4 『国富論』の編別構成についての一論 和田重司 (大阪経済大)
- 5 『第3の経済学』の学史的基礎 石川興二 (京都大)
- 6 澁澤栄一・論語・定信 多田 顕 (千葉大)
- 7 スチュアートにおける流通必要量概念の形成について——ヒューム数量説批判をめぐる問題—— 川島信義 (西南学院大)
- 8 ワルラスとマーシャル——方法論的比較—— 馬場啓之助 (一橋大)
- 9 ヒューム『イギリス史』の一考察 田中敏弘 (関西学院大)
- 10 ケネーにおける利潤範疇 横山正彦 (東京大)

第32回 (1968〔昭和43〕年11月9-10日 広島大)

- 1 ルネサンス社会思想の機能と構造 品川清治 (龍谷大)
- 2 Montchrétien: "Traicté de l'oeconomie politique" 1615における対外

商業政策論に関する一考察 岩根典夫（関西学院大）

- 3 アダム・スミスの同感の概念をめぐって 水田 洋（名古屋大）
- 4 マルサスの利潤論 羽鳥卓也（岡山大）
- 5 賃銀生存費説の解体 城座和夫（東京都立大）
- 6 リカードウ＝マルサス間の資本蓄積論争——穀物法論争下における—— 中村廣治（大分大）
- 7 マーシャルの労働市場分析について——主として労働供給を中心に—— 井出口一夫（福岡大）
- 8 ケインズ経済学と自由放任思想 有田一郎（熊本大）
- 9 現代経済成長理論の一考察——ケインジアン・アプローチの意義と限界—— 中村至朗（名古屋学院大）
- 10 市民社会と資本主義——貨幣の資本への転化をめぐって—— 平田清明（名古屋大）

第33回（1969〔昭和44〕年11月8－9日 横浜市立磯子会館 開催校横浜市立大）

- 1 ファーガスンにおける二つの道徳——ファーガスンの市民社会像—— 天羽康夫（名古屋大）
- 2 D. ヒュームの道徳哲学と政治理論 舟橋喜恵（同朋大）
- 3 古典派の利潤率低下問題 大内秀明（東北大）
- 4 J. S. ミルの資本蓄積論をめぐって 荒牧正憲（九州大）
- 5 日本における近代的職業倫理の生成について——鈴木正三，心学を中心として—— 多田 顕（千葉大）
- 6 17世紀フランスの対外膨張思想——デュ・ノワイエ・ド・サンマルタンの王立社会構想—— 西川 潤（早稲大）
- 7 マルクスの“世界認識”の方法的基礎 赤羽 裕（東京大）
- 8 ブレイとマルクス 上野 格（成城大）
- 9 商品物神性論の意義について——歴史理論としての商品論の総括—— 平田清明（名古屋大）

第34回（1970〔昭和45〕年11月7－8日 熊本商大）

- 1 再生産表式の形成過程について 高木 彰（岡山大）

- 2 有効需要の学史的的研究 有田一郎 (熊本大)
- 3 シュルツ・インフレ論の検討 中村賢一郎 (明治大)
- 4 シュンペーターの学説の現代的意義 玉野井芳郎 (東京大)
- 5 サン・シモンとフランス革命 広田 明 (名古屋大)
- 6 プルードンの経済学体系の方法について 佐藤茂行 (北海道大)
- 7 ヘスとマルクス 畑 孝一 (福島大)
- 8 資本回転論の成立と意義——市民社会の再生産論的研究のために——
山田鋭夫 (名古屋大)
- 9 リカードウの発展的社会像 吉沢芳樹 (専修大)
- 10 信用組合設立前後の論争 森 静朗 (日本大)
- 11 明治時代の経済雑誌 杉原四郎 (甲南大)
- 12 「近代経済学生誕」の経済学史的意義 林 治一 (神戸大)

第35回 (1971〔昭和46〕年11月13-14日 明治学院大)

共通論題 近代経済学百年の意義

- 1 マーシャルと経済学の歩み 保坂直達 (神戸商大)
- 2 ワルラス一般均衡理論における資本蓄積の問題 山下 博 (同志社大)
- 3 ワルラス・マーシャル・ケインズと日本 早坂 忠 (東京大)

自由論題

- 4 経済学における人間喪失 大能信行 (創価大)
- 5 チェインバレンとファーミン——その社会・経済思想について——
芳賀 守 (徳山大)
- 6 アダム・スミス『道徳感情の理論』における「共感」の構造 野沢敏治 (名古屋大)
- 7 J.S.ミルと新古典派理論——ミルの国際価値論を中心として——四
野宮三郎 (高崎経済大)
- 8 福沢諭吉の儒教批判論について 多田 顕 (千葉大)
- 9 賀川豊彦の信用組合観 森 静朗 (日本大)

第36回 (1972〔昭和47〕年11月11-12日 松山商大)

- 1 『資本論』の原稿について 佐藤金三郎 (大阪市立大)

- 2 プルードン相互主義の形成と展開 岩根典夫 (関西学院大)
 - 3 シュムペーターと近代経済学 大野忠男 (大阪大)
 - 4 ロバート・オウエンとロシアの思想家たち 今井義夫 (工学院大)
 - 5 パレート『社会均衡概念』の再評価 松浦 保 (慶応義塾大)
 - 6 1905年のロシア革命と日本の社会主義——ヨーロッパ労働運動の日本の社会主義への影響—— 飯田 鼎 (慶応義塾大)
 - 7 ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』と帝国主義認識 松岡利道 (大阪市立大)
 - 8 ヒルファディング『金融資本論』成立史に関する一考察 倉田 稔 (日本社会事業大)
 - 9 ウィリアム・ペティの経済理論 稲村 勲 (立命館大)
 - 10 スチュアート政策論とスミス基礎理論 和田重司 (中央大)
- 共通論題 リカードウ・シンポジウム**
- 11 リカードウ体系における価値論の意味 中村廣治 (大分大)
 - 12 リカードウ資本蓄積論の再検討 千賀重義 (香川大)
 - 13 リカードウ価値論と「社会の初期段階」羽鳥卓也 (岡山大)
「シンポジウム」司会 玉野井芳郎 (東京大)
- 討論者 真実一男 (大阪市立大) 時永 淑 (法政大) 森 茂也 (南山大)
坂本彌三郎 (神戸学院大) 溝川喜一 (京都大) 豊倉三子雄 (関西学院大)

第37回 (1973〔昭和48〕年11月8-9日 福島大)

- 1 マルクスにおける本源的所有と<ロシア・ミール>論——ゴェルケの学說的整理について 桂木健次 (九州大)
- 2 『ドイツ・イデオロギー』における市民社会論——持分問題にふれて—— 望月清司 (専修大)
- 3 マルクスとワルラスにおける『社会的富』概念の相違について 安藤金男 (名古屋市立大)
- 4 V. パレートにおける経済学と社会学 松嶋敦茂 (滋賀大)
- 5 ヒルデブラントにおける「歴史的方法」 橋本昭一 (関西大)
- 6 現代フランスに於ける自主管理思想の本質——その形態と特徴——

津島陽子（立命館大）

共通論題 帝国主義論

- 7 マルクス主義の修正と帝国主義論——エンゲルスとベルンシュタイン—— 淡路憲治（岡山大）
- 8 カウツキー帝国主義論の展開過程——植民政策論を中心にして—— 相田慎一（大阪市立大）
- 9 ヒルファディング帝国主義論における信用論の意義について 飯田裕康（慶応義塾大）

第38回（1974〔昭和49〕年11月8－9日 名古屋大）

- 1 山鹿素行の社会経済論 多田 颯（千葉大）
- 2 ハロッドの経済動学の発展に関する一考察——基本方程式の発展について—— 篠崎敏雄（愛媛大）
- 3 スミス『国富論』における海運 伊坂市助（関東学院大）
- 4 資源配分の学説史的考察における方法の問題——城座和夫教授の場合—— 大熊信行（創価大）
- 5 ネオ・オーストリア学派の資本理論 中村至朗（名古屋学院大）
- 6 アダム・スミスにおける地代と土地所有 鈴木 亮（佐賀大）
- 7 ミル経済学における社会の進歩——Stationary StateとAssociationの問題—— 四野宮三郎（高崎経済大）
 予定討論 永井義雄（金沢大）
- 8 『社会契約論』の世界と近代市民社会 渡辺茂樹（一橋大）
 予定討論 浅野 清（名古屋大）
- 9 市民社会理論の原型——フィルマー批判としての『政府論』の論理と構造—— 田中正司（横浜市立大）
 予定討論 星野彰男（関東学院大）

共通論題 レーニン・シンポジウム

司会 水田 洋（名古屋大）

- 10 問題提起 田中真晴（甲南大）
- 11 問題提起 服部文男（東北大）
- 12 問題提起 松岡 保（関西大）

共通論題 限界革命100年をめぐって

司会 岡田純一（早稲田大）

菱山 泉（京都大）

13 ワルラスの資本理論について 柏崎利之輔（早稲田大）

14 W.S. ジェヴォンズの科学方法論 井上琢智（関西学院大）

15 マーシャル『経済学原理』における理論と現実 藤田暁男（長崎大）
コメント 早坂 忠（東京大）

特別講演

16 スコットランド啓蒙とロシア フランコ・ヴェントゥーリ（Franco Venturi）

第39回（1975〔昭和50〕年11月8－9日 慶応義塾大）

- 1 アダム・スミスの「有効需要」概念とジェイムズ・ステュアート 大森郁夫（早稲田大）
- 2 イギリス革命期のユートピア像 田村秀夫（中央大）
- 3 『時事新報』社説を通して見た福澤諭吉の経済思想 多田 顕（千葉大）
- 4 産業循環論の形成過程について 高木 彰（岡山大）
- 5 アリストテレスにおける経済学の公準——アリストテレスの経済学史上の地位—— 玉野井芳郎（東京大）
- 6 ウェイクフィールド植民地論の基本性格 斉藤義介（成蹊高校）
- 7 ケネー『経済表』の一解釈 安藤金男（名古屋市立大）
- 8 明治初期信用組合思想導入過程の一考察 森 静朗（日本大）
- 9 国際価値論の系譜 木原行雄（東京経済大）
- 10 ウェーバーにおける個性と現実 藤岡孝四郎（大阪府立大）
- 11 河上 肇のJ.S. ミル論 杉原四郎（甲南大）

第40回（1976〔昭和51〕年11月6－7日 九州大）

- 1 西垣恒矩の信用組合思想 森 静朗（日本大）
- 2 拂波士著『主権論』をめぐって——明治初期における西欧思想受容の一局面—— 高橋真司（長崎造船大）

共通論題 アダム・スミス

- 3 『国富論』における富裕と安全 小柳公洋（北九州大）
予定討論 飯塚正朝（大阪市立大）
- 4 アダム・スミスにおける衡平の原理 星野彰男（関東学院大）
予定討論 田中 正司（横浜市立大）
- 5 日本における市民社会論史をめぐって 和田重司（中央大）
予定討論 浜林正夫（東京教育大）

自由論題

- 6 マルクスの Gattungswesen 概念について 田口卓郎左衛門（星雲学園）
- 7 トマス・ジェファソンの経済思想とアダム・スミス 白井 厚（慶応義塾大）

シンポジウム アダム・スミスとわれわれ

司会 河野健二（京都大）

小林 昇（立教大）

- 8 問題提起1 市民社会と小集団——民主主義の問題—— 水田 洋
（名古屋大）
- 9 問題提起2 アダム・スミス体系における country と market 玉野
井芳郎（東京大）

特別講演

- 10 *The Wealth of Nations* and the Origins of Ricardo's New Theory of Profist Samuel Hollander

第41回（1977〔昭和52〕年11月5－6日 東京大）

- 1 疎外論における類と個の論点について——フォイエルバッハ＝マルクス関係の一考察—— 山之内 靖（東京外国語大）
- 2 剰余価値の生産と資本の生産——『資本論』成立史上の一齣（1861～67年）—— 佐藤金三郎（横浜国立大）
- 3 A Long Debate on Capital Theory——資本理論に関する論争—— 中村至朗（名古屋学院大）
- 4 「転化問題」とスラッフア 松本有一（大阪市立大）
- 5 スラッフア理論と労働価値説 岸本重陳（横浜国立大）

- 6 サミュエル・ベイリーの価値概念について 吉田憲夫 (早稲田大)
- 7 W. トンプソンの経済学と「相互協働社会について」 蛭原良一 (新潟大)
- 8 ボリングブルックと18世紀イギリス・ラディカリズム 浜林正夫 (東京教育大)
- 9 アダム・スミスの「交換価値」とマルクスの「価値」 大淵素行 (新潟大)
- 10 「恐慌の必然性」はいかに「論定」すべきか—— 富塚良三
『恐慌論研究』の一批判—— 松田弘三 (東洋大)

共通論題 エコノミックスとポリティカル・エコノミー

司会 宮崎犀一 (東京女子大)

菱山 泉 (京都大)

開題 玉野井芳郎 (東京大)

- 11 Political Economy の射程 小林 昇 (立教大)
予定討論 羽鳥卓也 (岡山大)
- 12 18世紀フランスにおける《*économie politique*》について 木崎喜代治 (京都大)
予定討論 津田内匠 (一橋大)
- 13 古典経済学時代の Political Economy における二要因の伏在について
藤塚知義 (武蔵大)
予定討論 吉澤芳樹 (専修大)
- 14 エコノミックスとポリティカル・エコノミー—— 名称の変化と実質の変化—— 早坂 忠 (東京大)
予定討論 緒方俊雄 (中央大)

第42回 (1978〔昭和53〕年11月11-12日 千葉大)

- 1 スミスの<ドグマ>について——「分解」手法の意義とその批判——
宮川 彰 (東京大)
- 2 価値形態, 物神性, 交換過程を巡る諸問題—— 久留間氏の所説に寄せて—— 福原好喜 (駒沢大)
- 3 19世紀通貨論争と古典派経済学—— 国富増進の二つの道——

洪川則雄（東京大）

- 4 サミュエル・ハートリブの思想像について——特に宗教・社会・政治思想を中心に—— 芳賀 守（千葉商大）
- 5 リカードウ穀物モデル分配理論の変貌 羽鳥卓也（岡山大）
- 6 宇野派恐慌論の一検討 清水正昭（慶応義塾大）
- 7 ダルジャンソンとグルネ——「自由放任」論の二つの原型—— 津田内匠（一橋大）
- 8 『経済学・哲学草稿』における国民経済学批判の構成と論理について 三野村暢禧（拓殖大）
- 9 スミス分業論と交換性向の意味 中村賢一郎（明治大）
- 10 日本資本主義の経済倫理 佐藤武男（東京学芸大）
- 11 「マーシャルの問題」の再検討 緒方俊雄（中央大）
- 12 本多利明の重商主義思想——トーマス・マンとの対比において—— 矢嶋道文（関東学院大）
- 13 アダム・スミスの資本蓄積論に関する一考察 関源太郎（九州大）
- 14 横井小楠の経済思想——近代日本の原点としての経済思想—— 山崎益吉（高崎経済大）

共通論題 近代日本の経済思想

司会 河野健二（京都大）

多田 顕（千葉大）

羽鳥卓也（岡山大）

開題 河野健二（京都大）

- 15 福沢諭吉における経済的自由——とくにその初期について—— 杉山忠平（静岡大）

予定討論 長 幸男（東京外国語大）

- 16 柴 四朗の保護貿易論とナショナリズム 上野 格（成城大）

予定討論 杉原四郎（甲南大）

- 17 戦前日本社会政策学会の成立と衰亡 飯田 鼎（慶応義塾大）

予定討論 真実一男（大阪市立大）

第43回（1979〔昭和54〕年11月10-11日 南山大）

- 1 アダム・スミスにおける同感概念の構造 新村 聡 (東京大)
 - 2 アダム・スミスの「天文学史」について 只腰親和 (東京大)
 - 3 剰余価値実体論と剰余価値形態論 佐武弘章 (大阪府立社会事業短期大)
 - 4 マルクス「パリ草稿」とスミス 秋田 清 (九州大)
 - 5 マルサスの価値尺度論 中矢俊博 (南山大)
 - 6 カール・メンガーによる「メンシュリッヒエウイルトシャット人間の経済」の探究——自著『経済学原理』改訂にむけられた未完の作業—— 玉野井芳郎 (沖縄国際大)・八木紀一郎 (岡山大)
 - 7 コプデンの自由貿易論 熊谷次郎 (桃山学院大)
 - 8 アダム・スミスの重商主義批判——その階級的性格をめぐって—— 川島信義 (西南学院大)
 - 9 レオン・ワルラスの「所有の理論」における経済学的側面 安藤金男 (名古屋市立大)
 - 10 シスモンディの信用論 中宮光隆 (慶応義塾大)
 - 11 経済学における四つのパラダイム 木下富夫 (武蔵大)
 - 12 戦後の制度学派について 久保芳和 (関西学院大)
- 共通論題 プルードンとその周辺**
- 司会 水田 洋 (名古屋大)
野地洋行 (慶応義塾大)
- 開題 水田 洋 (名古屋大)
- 13 プルードンのアソシアシオン論 阪上 孝 (京都大)
予定討論 坂本慶一 (京都大)
 - 14 プルードンの金融制度改革論とその系譜 佐藤茂行 (北海道大)
予定討論 斉藤悦則 (一橋大)
 - 15 マルクスのプルードン批判について——集合力理論を中心に—— 津島陽子 (阪南大)
予定討論 山辺知紀 (金沢大)
 - 16 特別講演 Stuart and Keynes Paul E. Chamley

第44回 (1980〔昭和55〕年11月8 - 9日, 成城大)

自由論題

- 1 価値形態論の一側面——「価値物」・「価値体」の区別の意味と今後の課題 望月俊明（成城大）
- 2 アダム・スミスの〈経済表〉——『国富論』第2編の章別構成との関連で—— 酒井 進（専修大）
- 3 19世紀初頭におけるイギリス地主階級の穀物法批判 服部正治（立教大）
- 4 二月革命期における「営業の自由」論——シュルツ・シュヴァリエ著『労働の組織に関する書簡』（1848年）を中心に—— 上野 喬（会津短期大）
- 5 リカードの基本モデルについて 渡会勝義（明治学院大）
- 6 J.S.ミルの経済学方法論 馬渡尚憲（東北大）
- 7 ピューリタニズムの禁欲とスミスの人間観 梅津順一（国際キリスト教大）
- 8 マルクス・エンゲルスによるルソー宗教論 望月 通（愛知学院大）
- 9 現代資本主義の構造とその直面するディレンマ 小林弥六（筑波大）
- 10 アメリカ環境経済学における学史的的研究——Herman E. Dalyを中心にして—— 桂木健次（富山大）
- 11 『道徳感情論』第六版の道徳論とその性格 釜賀雅史（早稲田大）
- 12 スミスの思想形成において感性的人間把握が果たした役割について 鈴木信男（東京経済大）

共通論題：アメリカ経済学

司会：久保芳和（関西学院大）

松尾 博（滋賀大）

〈報告〉

- [I] アメリカ的経済思想の形成——トマス・ジェファソンを中心に—— 白井 厚（慶應義塾大）
- [II] F.リストとアメリカ 大谷津晴夫（上智大）
- [III] ヴェブレンと制度学派——現代アメリカ経済思想史へのひとつの接近—— 高 哲男（広島大）

〈予定討論〉

- [I] に対して 田中敏弘 (関西学院大)
 [II] に対して 高橋和男 (立教大)
 [III] に対して 佐々野謙治 (第一経済大)

第45回 (1981〔昭和56〕年11月7日-8日, 龍谷大)

自由論題

- 1 福澤諭吉と澁澤栄一の思想の研究——特に儒教との関連を中心に—— 多田 顕 (大東文化大)
- 2 矢内原忠雄と日本帝国主義研究 飯田 鼎 (慶應義塾大)
- 3 マルクスの弁証法的唯物論といわゆるマルクス・レーニン主義の相違について 川崎卓郎左衛門
- 4 物神性と物象化論 石塚良次 (専修大)
- 5 J. S. ミルの利潤論について——『試論集』と『原理』—— 深貝保則 (東京大)
- 6 A. マーシャル『経済学原理』における〈複合的地代〉概念定立の意味について 井田高之 (福岡大)
- 7 メンガーとノン・ワルラシアン・エコノミックス 根岸 隆 (東京大)
- 8 ヒルファディングと大衆ストライキ論争——帝国主義論史の一側面—— 河野裕康 (一橋大)
- 9 第一次大戦までのヒルファディングの帝国主義論 保住俊彦 (愛知大)
- 10 マルクスの恐慌分析と経済学批判体系——1850年代から1860年代へ—— 西村 弘 (専修大)
- 11 F. エンゲルスの『資本論』第三部第一, 二章編集——原草稿の調査を踏まえて—— 大村 泉 (東北大)
- 12 フランス革命期におけるスミス思想の導入——コンドルセの場合—— 安藤隆穂 (名古屋大)
- 13 W. シュルツにおける歴史認識の方法 植村邦彦 (熊本大)

共通論題: 経済学史における先進国・後進国問題

司会 水田 洋 (名古屋大)
宮崎犀一 (東京女子大)

〈報告〉

[I] 経済学と後進国——サー・ジェイムズ・ステュアートの場合——
小林 昇 (立教大)

[II] J.S.ミルにおける文明・先進国・後進国 熊谷次郎 (桃山学院大)

[III] マーシャルにおける世界経済の問題 早坂 忠 (東京大)

〈予定討論〉

[I] に対して 山崎 怜 (香川大)

[II] に対して 四野宮三郎 (静岡大)

[III] に対して 藤田暁男 (金沢大)

第46回 (1982〔昭和57〕年11月6日-7日, 東洋大)

自由論題

- 1 マンドヴィルの文明社会論 八幡清文 (一橋大)
- 2 アダム・スミス『諸国民の富』の成立と『道徳感情の理論』の改訂
川島信義 (西南学院大)
- 3 プルードンにおける信用改革論 斉藤悦則 (鹿児島県立短大)
- 4 労働の二重性論の成立過程について 柴田武男 (東京大)
- 5 J.ミル『英領インド史』の意義と分析視角 音無通宏 (中央大)
- 6 フランス革命と航海条例 山崎耕一 (武蔵大)
- 7 高田保馬の貧困・国民生活論と生産力重視思想 金田良治 (天理大)
- 8 アダム・スミスの分業論——「国家の空洞化」や「安価な政府」が
意味するもの—— 中谷武雄 (高知短大)
- 9 J.B.セイにおける市場の論理と社会の把握——イギリス古典派経済
学批判—— 栗田啓子 (早稲田大・院)
- 10 19世紀末ドイツの経済政策論争——「農=工立国」論を中心とし
て—— 田村信一 (北星学園大)
- 11 古典学派における資本蓄積と恐慌——リカードウ・マルサス論争を
中心に—— 松橋 透 (中央大)
- 12 マルサス『人口論』を論破するために 玉野井芳郎 (沖縄国際大)

13 ケインズ『一般理論』の成立過程 平井俊顕（専修大）

14 わが国へのケインズ経済学導入史——『インドの通貨と金融』から
第二次大戦終戦時まで—— 早坂 忠（東京大）

《共通論題》

テーマ：経済学における先進国・後進国問題

司 会：宮崎犀一（東京女子大）・田中真晴（甲南大）

開 題 田中真晴

報 告

[I] ミシェル・シュヴァリエの新世界論——フランス技術官僚の経済政
策論—— 上野 喬（福島県立会津短大）

[II] ハクストハウゼンのドイツ農政論 肥前栄一（東京大）

[III] ゲルツェンのロシア社会主義論 長縄光男

予定討論

[I] に対して 栗田啓子（早稲田大・院）

[II] に対して 田村信一（北星学院大）

[III] に対して 今井義夫（工学院大）

第47回全国大会（1983〔昭和58〕年11月12日－13日，広島大）

自由論題

- 1 マルクス「経済学批判」体系形成史の原理について 大石高久（拓殖大）
- 2 マルクスの「疎外」と「物象化」 山本広太郎（大阪市立大）
- 3 アダム・スミスの「価値尺度論」研究における若干の論点に関する諸見解 中川栄治（広島経済大）
- 4 A. スミスにおける価値論の構造——その不変の価値尺度論への論及を通して—— 飯田和人（明治大）
- 5 重商主義の価値法則論 山本英二（法政大）
- 6 19世紀前半のイギリスにおける「インフレーションニズム」と農業利害——アトウッドをめぐる農業家反ブリオニストたち—— 西沢保（一橋大）
- 7 資本一般と諸資本の競争 川本勝美（大阪経済大）

- 8 「1861-63年草稿」における『資本論』第1部草稿と第3部草稿との
関連について 原 伸子 (法政大)
- 9 再生産表式Ⅰ・Ⅱ部門転位 (第8稿) への歩み——資本循環論確立
を軸として—— 宮川 彰 (東京都立大)
- 10 アダム・スミスの道徳哲学と『道徳感情論』 川久保晃志 (札幌大)
- 11 スコットランド啓蒙思想とトマス・リード 篠原 久 (関西学院大)
- 12 リカードウの価値と分配の理論 水田 健 (法政大・院)
- 13 フランシス・ウェイランドの経済思想——経済と教育の関連を中心
に—— 藤原昭夫 (千葉商科大)
- 14 J. A. ホブソンの過少消費説 大水善寛 (國學院大)
- 15 ケインズと資本理論 曾我 純 (國學院大)
- 16 マルクスの「国際価値論」をめぐる諸問題 木原行雄 (東京経済大)
- 17 Hilferding に関する未紹介資料について 黒滝正昭 (宮城学院女子
大)
- 18 ミルとマルクス——方法の関係—— 馬渡尚憲 (東北大)
- 19 賃金基金説の条件とミルの基金説撤回 根岸 隆 (東京大)
- 20 B. H. チェーリンとツァーリズム——ロシア自由主義者の国家論
—— 杉浦秀一 (一橋大・院)

《共通論題》

テーマ：マルクスの経済学——形成史を通ずる全体像の把握——

司 会：服部文男 (東北大), 吉澤芳樹 (専修大)

《開題》

服部 文男

《報告》

- 1 『資本論』と初期マルクス 中川 弘 (福島大)
- 2 中期マルクスの経済学——『経済学批判要綱』を中心に—— 内田
弘 (専修大)
- 3 マルクス資本概念の再展開 平田清明 (京都大)

《予定討論》

- 1 に対して 山中隆次 (中央大)

2 に対して 山田鋭夫 (大阪市大)

3 に対して 向井公敏 (同志社大)

《一般討論》

《総括》 吉澤芳樹

《講演》

The Sociology of Knowledge as applied to the History of Economics

A. W. Coats (National Humanities Center, North Carolina, USA, and University of Nottingham)

第48回全国大会 (1984 [昭和59] 年11月10日 - 11日, 東北大)

《自由論題》

- 1 スミス科学論の思想的特質 只腰親和 (清真女子短大)
- 2 アダム・スミスの分業論と価値論——方法の観点から—— 酒井進 (専修大)
- 3 チェルゴー・マルサス・ベイリーにおける貨幣の必然性——価値形態論へのアプローチ—— 奥山忠信 (東北大)
- 4 シスモンディの恐慌論 中宮光隆 (熊本女子大)
- 5 経済学史通史の方法的基礎 石井信之 (青山学院大)
- 6 ミラノの貿易差額論争 堀田誠三 (日本福祉大)
- 7 リカードウ『原理』の構成問題 吉澤芳樹 (専修大)
- 8 リカードウ「賃金・利潤相反論」の確立過程 (1815年4月~16年1月)——部門別利潤率規定の止揚—— 中村廣治 (広島大)
- 9 リカードウ賃金論における2つの像 松崎昇 (筑波大)
- 10 リカードウの絶対価値概念——リカードウ労働価値論の方法—— 有江大介 (東京大・院)
- 11 ヘーゲルとリストとのコルポラチオン思想について 中西毅 (立教大)
- 12 ラッサール『公開書簡』をめぐる論争 篠原敏昭 (一橋大・院)
- 13 マルクス「経済表」の構造と意義 大友敏明 (慶應義塾大・院)
- 14 史的唯物論をめぐる歩み——マルクス・ウェーバー・アルチュセール—— 小林弥六 (筑波大)

- 15 J. ロー以降の貨幣論争——フランスにおける経済学の生成の一面—— 大田一廣 (淑徳大)
- 16 レオン・ワルラスの「科学的社会主義」について 中久保邦夫 (尾道短大)
- 17 ポーランド王国の経済的發展をめぐる「東方市場」論争について 神代光朗 (慶應義塾大)
- 18 T. ヴェブレンにおける慢性的不況の理論について 高 哲男 (広島大)
- 19 利率の調整不良——ヴィクセルとケインズ—— 池尾愛子 (一橋大)
- 20 ケインズ『一般理論』の成立過程——1933年から『一般理論』の生誕まで—— 平井俊顕 (専修大)
- 21 ヴェルサイユ条約におけるケインズとマントウ——戦間期ヨーロッパ政治経済思想の一側面—— 玉井龍象 (金沢大)
- 22 天野為之とJ.S. ミル 早坂 忠 (東京大)
- 23 昭和10年代の経済学史研究 杉原四郎 (甲南大)

《共通論題》

テーマ：シュンペーターとケインズ

司 会：小林 昇 (大東文化大), 菱山 泉 (京都大)

《開題》[1] 小林 昇

《開題》[2] 菱山 泉

《報告》

- 1 シュンペーターの問題と方法 塩野谷祐一 (一橋大)
- 2 シュンペーターにおける「資本主義過程」の探究 八木紀一郎 (岡山大)
- 3 使用者費用の意義——ケインズにおける時間—— 瀬地山敏 (京都大)

《予定討論》

- 1 に対して 大野忠男 (大阪学院大)
- 2, 1, 3 に対して 早坂 忠 (東京大)

3, 1, 2 に対して 根岸 隆 (東京大)

《総括》[1] 菱山 泉

《総括》[2] 小林 昇

《講演》

Mark Blaug (University of London), "What Ricardo said and What Ricardo meant."

第49回全国大会 (1985〔昭和60〕年11月9日-10日, 甲南大)

《自由論題》

- 1 スミス価値論の成立過程 新村 聡 (岡山大)
- 2 アダム・スミスの「実質価格」について 揚 武雄 (大阪経法大)
- 3 アダム・スミスの生産的労働論——第二規定の意味と「節約の美德」について—— 小沼宗一 (東北学院大)
- 4 『法学講義』治政論の主題と構造 田中正司 (一橋大)
- 5 穀物法論争期(1814-15)における経済理論——利潤理論の諸相—— 島 博保 (東北大)
- 6 「安価な政府」の思想と運動について 山崎 怜 (香川大)
- 7 フランス第二帝制期の生産力論——M. シュヴァリエの経済学講義録を中心に—— 上野 喬 (東洋大)
- 8 ルロワ=ポーリュールにおける帝国主義と植民地主義 西川 潤 (早稲田大)
- 9 カール・カウツキーのドイツ第二帝制論——政策思想を中心に—— 相田慎一
- 10 ポーランド王国の社会主義と民族問題 川名隆史 (一橋大)
- 11 ボワギルベール (Boisguilbert) と「政治算術」——英仏古典派経済学の初期交流の一端—— 津田内匠 (一橋大)
- 12 セイの経済学における『实用経済学全講義』の位置と意義 喜多見洋 (早稲田大・院)
- 13 「モーゼル危機」とマルクス——トリアーのマルクス—— 的場昭弘 (一橋大)
- 14 マルクスの実体概念と物象化論 真田哲也 (一橋大・院)

- 15 価値形態論と弁証法——西独における研究を中心に——坂口明義
(一橋大・院)
- 16 生産価格論争の原形——『資本論』第3巻公刊以前の論争——折原 浩 (武蔵大)
- 17 ドミトリエフ—ボルトケヴィッチの継承関係について 土井日出夫
(東京大・院)
- 18 メンガーの経済学の方法論的性格 東清二郎 (早稲田大・院)
- 19 リカードの価値論——『経済的で安定的な通貨案』を中心として——池田俊久 (福岡大・院)
- 20 J.S. ミル『経済学原理』における生産把握と後進諸地域 立川 潔 (中央大・院)
- 21 ソーントンの均衡理論批判とミル 根岸 隆 (東京大)
- 22 資本の理論：展望 中村至朗 (名古屋学院大)
- 23 負債としての資本論 桂木健二 (富山大)
- 24 フィヒテ『封鎖商業国家』の学史的意義 大崎正治 (國學院大)

第50回全国大会 (1986〔昭和61〕年11月8日－9日, 早稲田大)

《自由論題》

(第1日第1会場)

- 1 J. ロックの Property 論——*Two Treatises of Government* を中心に——古川順一 (早稲田大・院)
- 2 リカードウ新機械論の論理 遠藤哲広 (北海道大・院)
- 3 リカードウの機械論——失業と過剰生産をめぐって——出雲雅志
(東京大・院)
- 4 J.E. ケアンズによる古典的経済学方法論の定式化 佐々木憲介 (東北大)
- 5 ハイエクとワルラス体系——「経済学の知識」と『資本の純粹理論』をめぐって——池田幸弘 (慶應義塾大・院)
- 6 シュンペーターの道具主義 塩野谷祐一 (一橋大)

(第1日第2会場)

- 7 F. ソディーと N. ジョージエスキュレーゲンの理論——資源環境問

題の視角からの比較—— 神里 公（東洋大）

- 8 「国家学派」の形成と解体について—— ロシア自由主義国家論の考察—— 杉浦秀一（一橋大・院）
- 9 W. シュルツの所有の歴史理論——「三月前」期の共産主義批判と個体的所有—— 植村邦彦（熊本大）
- 10 唯物史観の成立と再構成 川崎卓郎左衛門
- 11 マルクス生産価格論の形成 鳥居伸好（愛知大・院）
- 12 アダム・スミス資本蓄積論の展開と「自然的自由の体系」 川島信義（西南学院大）

（大会第2日第1会場）

- 13 ボエーム＝バヴェルクの講義録における貨幣および信用論 塘 茂樹（慶應義塾大・院）
- 14 リカードウ労働価値論の再検討—— 成立の論理を中心に—— 中村廣治（広島大）

（大会第2日第2会場）

- 15 草創期経済学の一断面——『エディンバラ・レビュー』誌における Brougham の Lauderdale 批判から—— 小平民生（福島県立郡山商業高）
- 16 ケイムズ卿の封建制批判とスコットランド社会の改革—— Entail 問題を中心として—— 田中秀夫（京都大）

《共通論題》

テーマ：スコットランド啓蒙と経済学の成立

司 会：田中敏弘（関西学院大），山崎 怜（香川大）

はじめに 田中敏弘

《報告》

- 1 スコットランド啓蒙と道徳哲学——アダム・ファーガソンを中心に—— 天羽康夫（高知大）
- 2 スコットランド啓蒙とスミス『国富論』 野沢敏治（千葉大）
- 3 ドゥーガルド・ステュアートとスコットランド啓蒙思想——『経済学講義』をめぐる—— 篠原 久（関西学院大）

《予定討論》

- 1 に対して 関源太郎（九州大）
- 2 に対して 田中正司（一橋大）
- 3 に対して 星野彰男（関東学院大）

全体的討論 田添京二（福島大）

《一般討論》

おわりに 山崎 怜

第51回全国大会（1987〔昭和62〕年11月14-15日，関西大）

《自由論題》

（第1日第1会場）

- 1 ステュアート『原理』における経済循環の把握について 大友敏明（大月短期大）
- 2 スミスと自然科学の方法——「天文学史」のニュートン理解を通じて—— 長尾伸一（滋賀大）
- 3 ヒュームの政府論 舟橋喜恵（広島大）
- 4 フーリエの現代性 坂本慶一（京都大）
- 5 ミシェル・シュヴァリエの貨幣論——フランス自由貿易論者の特徴と限界—— 上野 喬（東洋大）

（第1日第2会場）

- 6 貨幣と社会的労働 遠山弘徳（大阪市立大・院）
- 7 カール・グルンとマルクス 村上俊介（専修大・院）
- 8 第一インターナショナルと土地問題——『賃金・価格・利潤』におけるウェストン批判 荒川 繁（東北大）
- 9 マインツ革命の歴史的的位置——ジャコバン・クラブと農民運動—— 寿福真美（法政大）
- 10 『有閑階級の理論』における経済社会分析の方法 高 哲男（広島大）

（第2日第1会場）

- 11 穀物法論争とスミス地代論 渡辺恵一（京都学園大）
- 12 リカードウの価値論 水田 健（法政大・非）

- 13 リカードウ機械論の再検討——「見解変更」の画期をめぐって——
羽鳥卓也（関東学院大）
- 14 最後の2章より見た初版『人口論』 橋本比登志（京都産業大）
- 15 J.S.ミル『原理』の目的と構成 馬渡尚憲（東北大）
- 16 J.S.ミルにおけるスミスのなものと社会主義的なもの 和田重司（中央大）

（第2日第2会場）

- 17 H.C.ケアリーの「アソシエーション」論再考 高橋和男（立教大）
- 18 限界革命の先駆者ゴッセン——労働論を中心として—— 安藤金男
（名古屋市立大）
- 19 科学者ジェヴォンズと近代経済学の形成 井上琢智（関西学院大）
- 20 フリードリッヒ・ウィーザーとオーストリア自由主義—— 八木紀
一郎（京都大）
- 21 ハイエクのスミス・ドグマ批判 土井日出夫（学振）
- 22 ケインズの主観主義——『若き日の信条』をめぐって—— 山崎弘
之（国土館大）

第52回全国大会（1988〔昭和63〕年11月5 - 6日，専修大）

◀自由論題▶

（第1日第1会場）

- 1 リカードウ経済学における資本と価値の理論 出雲雅志（東京大・院）
- 2 リカードウとJ.S.ミルにおける価値理論の構造 深貝保則（山形大）
- 3 マルサスの『人口論』と『経済学原理』 中西泰之（学振）
- 4 C.ダヴナントの財政政策思想 大倉正雄（拓殖大）

（第1日第2会場）

- 5 ゴッセンの価値理論の歴史的位置 川俣雅弘（慶應義塾大・院）
- 6 J.アンダスのスコットランド高地地方開発論 飯塚正朝（佐賀大）
- 7 テオドール・デザミの共産主義思想——初期マルクスの思想形成との関連で—— 長山雅幸（東北大）

- 8 福澤諭吉の実業観 長 幸男 (東京外国語大)
 9 ケインズの貨幣および物価の理論——『一般理論』第21章を中心として—— 中矢俊博 (南山大)

(第2日第1会場)

- 10 リカードウ機械論の構造 星野富一 (盛岡大)
 11 リカード価値論について——『原理』第1章の理論構造—— 竹永進 (横浜国立大・非)

(第2日第2会場)

- 13 経済的社会把握におけるアリストテレス的伝統 有江大介 (日本福祉大)
 14 M. ヴェーバーにおける社会経済学の視点と方法 宇佐見義尚 (アジア大)

《共通論題》

テーマ：経済学の成立——ジェイムズ・ステュアートを中心に——

司会：小林 昇 (大東文化大), 和田重司 (中央大)

前言 小林 昇

報告

- 1 《最初の貨幣的経済学》の理論構成 大森郁夫 (早稲田大)
 2 ポリティカル・エコノミーによる近代社会の発見 竹本 洋 (大阪経済大)
 3 ステュアートにおける「近代の危機」と政治経済学の成立 川島信義 (西南学院大)

おわりに 和田重司

《特別報告》

The growth of political economy in eighteenth century Britain

報告者：J. G. A. Pocock (Johns Hopkins Univ.)

司会者：水田 洋 (名城大)

第53回全国大会 (1989〔平成元〕年11月4 - 5日, 九州大)

《自由論題》

(第1日第1会場)

- 1 ロック『統治論』におけるプロパティについて 岡村東洋光（九州産業大）
- 2 自然神学と社会科学—— スミスはなぜ法の原理論を倫理学の主題としたのか—— 田中正司（神奈川大）
- 3 初期リカードウ価値尺度論の生成と展開—— 地金論争期のリカードウ再考—— 佐藤有史（慶應義塾大・院）
- 4 穀物法廃止後の穀物法論争—— J.S.ニコルソンとチェムバレイン・キャンペーン—— 服部正治（立教大）
- 5 ヒルファディングの価値論把握—— リカードウ価値論解釈との関連で—— 千賀重義（横浜市立大）

（第1日第2会場）

- 6 エリートの周流と経済変動—— パレート社会経済学の一モデル—— 駄田井正（久留米大）
- 7 ドイツ・マルクス主義派の「国民経済」観—— カール・カウツキーを中心に—— 相田慎一（専修大北海道短大）
- 8 『一般理論』形成過程とポストケインジアンによる因果構造分析 吉田雅明（京都大・院）
- 9 シュンペーター体系の構造分析 金指 基（日本大）
- 10 チウネンの自然賃金論 根岸 隆（東京大）

（第2日第1会場）

- 11 リチャード・ジョーンズの歴史的方法と資本蓄積論 鷺見研作（慶應義塾大・院）
- 12 マルクス拡大再生産論の基本問題—— 遺稿「第8稿」をいかに読むべきか—— 宮川 彰（東京都立大）
- 13 マルサス『人口論』と『経済学原理』との立体構成 近藤加代子（名古屋大・院）
- 14 リカードウとシスモンディの機械論について—— その類似点と相違点—— 蛭原良一（新潟大）
- 15 R.オウエンの政治思想と宗教批判 土方直史（中央大）
- 16 リカードウ価値論の新展開—— 『原理』第三版における——

中村廣治 (広島大)

(第2日第2会場)

- 17 マーシャル経済学体系と「代表的企業」——『経済学原理』を中心として—— 岩下伸朗 (九州大)
- 18 ボワギルベールの均衡の概念について 米田昇平 (下関市立大)
- 19 デュトの経済思想とフランス古典経済学 大田一廣 (阪南大)
- 20 革命と革命の間のカラブリア——ジュセッペ・マリア・ガランティとナポリ啓蒙の黄昏—— 奥田 敬 (一橋大)
- 21 ミシェル・シュヴァリエの1867年万国博覧会報告書『序論』について——フランス生産力論の系譜のなかで—— 上野 喬 (東洋大)
- 22 フランス革命と経済学 津田内匠 (一橋大)

第54回全国大会 (1990〔平成2〕年11月10-11日, 関東学院大)

(第1日第1会場)

- 1 A.フレッチャーと合邦期スコットランド 村松茂美 (熊本商科大)
- 2 ドウーガルド・ステュアートの学史的位罫 太田 要 (法政大・非)
- 3 ステュアートとスミスと経済学の成立 和田重司 (中央大)
- 4 アダム・スミスの方法をめぐって 田添京二 (関東学院大)

(第1日第2会場)

- 5 マルクス世界貨幣論の形成過程——「世界鑄貨」から「世界貨幣」へ—— 武井博之 (大阪経済大・院)
- 6 「絶対地代」をめぐるスミス・リカードウ・マルクス 佐藤滋正 (尾道短期大)
- 7 マルクスの「労働による商品の生産」 大野節夫 (同志社大)
- 8 シュムペーター自筆草稿『資本主義・社会主義・民主主義』の解説・編集と分析 米川紀生 (三重大)

講演 アダム・スミス——200年ののちに 水田 洋 (名城大)

(第2日第1会場)

- 9 シャルル・フーリエと文明社会の不和ないし経済的不平等を利用する技術について 大塚 昇三 (北海道大・研)
- 10 フランス土木公団のエンジニア・エコノミスト——19世紀半ばにお

ける公共事業と経済学——栗田啓子（小樽商科大）

- 11 フランシス・ホーナーの通貨論 奥田 聡（大阪府立大・院）
- 12 1815年版リカードウの外国貿易モデル 野口 旭（専修大）
- 13 リカードウ＝マルサス方法論争 馬渡尚憲（東北大）
- 14 福澤諭吉と徳富蘇峰——市民的徳性をめぐって—— 梅津順一（青山学院女子短大）

（第2日第2会場）

- 15 K. ヴイクセルの資本理論と金融理論 池尾愛子（國學院大）
- 16 A. マーシャルにおけるイギリス経験論——経済法則の概念を中心に—— 葛西孝平（名古屋経済大）
- 17 マーシャルとスペンサーとの関係——進化論的倫理学の形成をめぐって—— 磯川 曠（近畿大）
- 18 マーシャルの関税改革批判——イギリス産業上の主導権と関連して—— 斧田好雄（弘前大）
- 19 マーシャル経済学における「生活と進歩」の論理の意味するもの 藤田暁男（金沢大）
- 20 マーシャル研究の現況 橋本昭一（関西大）

第55回全国大会（1991〔平成3〕年10月19-20日，弘前大）

（第1日第1会場）

- 1 古典派経済学における用語論争——経済学と意味論—— 柳沢哲哉（東北大）
- 2 アダム・スミスの貨幣形成論——社会秩序と経済—— 市岡義章（名城大・非）
- 3 市民社会・国家・諸国民の富 野沢敏治（千葉大）
- 4 リカード体系とセー法則 遠藤哲広（九州共立大）
- 5 スラッファの価格理論について 菱山 泉（大阪産業大）

（第1日第2会場）

- 6 ガリアーニ価値論の再検討 黒須純一郎（明海大）
- 7 エルヴェシウスの功利主義 森村敏己（明治学院大・非）
- 8 イデオログの経済思想——ド・トラシを中心として——

池上 修 (大東文化大・非)

- 9 フランス初期社会主義の経済思想——C.ペクルの「国民的アソシオン構想」を中心に—— 岩本吉弘 (一橋大)
- 10 ミシェル・シュヴァリエの反特許権論——自由貿易運動の展開と限界—— 上野 喬 (東洋大)

(第2日第1会場)

- 11 ジェイムズ・ミルの経済理論——スミスからの継承とリカードウへの接続—— 近藤英次 (専修大)
- 12 銀行主義者としてのJ.S.ミル 竹内 洋 (桜美林大・東京都立大・非)
- 13 資本蓄積論におけるJ.S.ミルとK.マルクス 荒牧正憲 (福岡大・非)
- 14 『剰余価値学説史』におけるマルクスのマルサス剰余価値論批判について——一つの疑問—— 蛭原良一 (新潟大)
- 15 資本と労働 中村至朗 (名古屋学院大)

(第2日第2会場)

- 16 ワルラス経済学体系と《社会主義》——《平等》の理念と国家の役割—— 御崎加代子 (一橋大・院)
- 17 カール・メンガー『経済学原理』の成立 八木紀一郎 (京都大)
- 18 グスタフ・シュモラーの歴史的方法——とくにM.ヴェーバーとの関連で—— 田村信一 (北星学園大)
- 19 「文明社会」の光と影——二、三のスコットランド啓蒙知識人に則して—— 田中秀夫 (京都大)
- 20 バウリング版『ベンサム全集』の成立過程と編集問題 音無通宏 (中央大)

第56回全国大会 (1992〔平成4〕年11月7～8日, 京都産業大)

《自由論題》

(第1日第1会場)

- 1 チャールズ・ダヴナントにおける統治と経済 伊藤誠一郎 (慶應義塾大・院)

- 2 J. ステュアート「商業大国」盛衰の理論 川島信義（西南学院大）
- 3 アダム・スミスの自然法学と『道徳感情論』——プーフェンドルフ『人間と市民の義務』との関連で—— 森本 孝（慶應義塾大・院）
- 4 A. スミスの政治経済学再考 稲村 勲（札幌学院大）
- 5 J.S. ミルの理想的社会像と国家 前原正美（横浜国大・非）

（第1日第2会場）

- 6 コンベンショナル・ミニマム, モラル・ミニマム, ナショナル・ミニマム——『産業民主制論』の構造と論理—— 藤井 透（京大・学振）
- 7 再生産表式と資本循環 林 遵（国土館大・非）
- 8 ポーランドにおけるローザ『資本蓄積論』の研究について 神代光朗（慶應義塾大）

- 9 ヒルファディングの初期の経済政策思想 河野裕康（金城学園大）

- 10 後期ヒルファディングの経済学 倉田 稔（小樽商大）

（第1日第3会場）

- 11 自然の支配と法則——デカルトからフィジオクラシーまで—— 森岡邦泰（龍谷大・非）
- 12 J.A. ホブソンの市場論と有機的要素——1890年代における社会経済学の形成—— 姫野順一（長崎大）
- 13 シュンペーター『理論経済学の本質と主要内容』の理論的・方法的視点 林 康二（専修大・院）
- 14 米穀市場についての統計学的研究——日本における初期の経済学研究—— 池尾愛子（國學院大）
- 15 石橋湛山とその政治経済思想——大正デモクラシー期の経済思想 飯田 鼎

（第2日）

- 16 友愛主義社会の思想について（ポスト資本主義社会の第三の思想） 小林弥六（筑波大）

特別講演

Why Modern Economists Should Read Malthus's *Principles of Political Economy*. J. M. Pullen (University of New England, Australia)

《共通論題》 マルサス——古典学派における位置

司 会：溝川喜一（京都産業大）・根岸 隆（東京大）

報 告

- 1 スミスとマルサス 横山照樹（同志社大）
- 2 マルサスとリカードウ——スミスからの異なった展開—— 渡会勝義（明治学院大）
- 3 マルサスとJ.S.ミル——方法論と理論の関係—— 馬渡尚憲（東北大）

第57回全国大会（1993〔平成5〕年11月8～9日，金沢大）

《自由論題》

（第1日第1会場）

- 1 モンテスキューの社会理論 中江桂子（法政大・院）
- 2 ケイムズの自然神学——人間の自由意志から社会の自律へ—— 有江大介（日本福祉大）
- 3 A.スミスにおける「自然的自由の体制」の倫理的基礎 加藤寛孝（創価大）
- 4 アダム・スミスにおける経済学の成立 新村 聡（岡山大）
- 5 フランス重農主義とアダム・スミス——批判と継承の関係について—— 渡辺恵一（京都学園大）

（第1日第2会場）

- 6 セー価値論の構造——『概論』各版の推移と検討—— 畠田英夫（東北大）
- 7 ケインズの哲学と経済学 斎藤隆子（京都大・院）
- 8 経済動学の建設におけるケインズとハッロド 篠崎敏雄（岡山商大）
- 9 「後期」ヒックスの経済思想と市場理論 井上義朗（千葉大）
- 10 モダン・オーストリアンの市場プロセス理論——ネオ・クラシカルとポスト・ケンジアンとの間で—— 中村秀一（千葉経済大）

（第2日第1会場）

11 W.パルトニーの財政政策論 大倉正雄 (拓殖大)

12 J.S.ミルの平等財政原則 小林里次 (大月短期大)

(第2日第2会場)

13 近世日本の経済思想と「重商主義」——概念導入上の問題と検討——
井上琢智 (関西学院大)

14 若き研究者への委嘱——埋没すべからざる日本の経済学者について——
多田 顕 (千葉大・名誉)

《共通論題》 日本経済思想史

司 会：住谷一彦 (東京国際大)・宮崎犀一 (関東学院大)

序 説：日本啓蒙——類型論的=思想史的分析—— 住谷一彦

報 告 1 儒教的経済論の可能姓——片山蟠桃の場合—— 逆井孝仁
(立教大・名誉)

コメント 山崎益吉 (高崎経済大)

報 告 2 福澤と澁澤——明治啓蒙の一考察—— 長 幸男 (多摩大)

コメント 藤原昭夫 (千葉商大)

報 告 3 日本における「啓蒙の経済学」の思想的水脈——制度化研究
の視点から—— 松野尾裕 (愛媛大)

コメント 和田 強 (立教大・院)

結 語 宮崎犀一

第58回全国大会 (1994〔平成6〕年10月29-30日, 武蔵大)

《自由論題》

(第1日第1会場)

1 厚生経済学の展望 中村至朗 (名古屋学院大)

2 ボルトケヴィッチの生産価格論 平石 修 (札幌学院大)

3 リカードウの不変の価値尺度論 渡会勝義 (明治学院大)

4 ソーントンの貨幣分析 水田 健 (法政大)

5 J.ステュアートの金融論の一側面 奥田 聡 (岡山商科大)

(第1日第2会場)

6 旧IML (M) 所蔵のM=E文書 大村 泉 (東北大)

7 マルクス『経哲草稿』の全体的解明 川崎卓郎左衛門

- 8 市民社会・国家・資本主義経済 永谷 清 (信州大)
 9 A.スミスの「余剰はけ口論」再考 田中秀臣 (早稲田大・院)
 10 分業・共同・所有 新村 聡 (岡山大)
- (第1日第3会場)
- 11 ケネー再生産論の解析 八尾信光 (鹿児島経済大)
 12 商業の精神と一般的精神 中江桂子 (学振研)
 13 経済的衰退と自由貿易 服部正治 (立教大)
 14 ホートレーのケインズへの影響 小峰 敦 (一橋大・院)
 15 「ケインズ革命」考 平井俊顕 (上智大)

(第2日第1会場)

- 16 J.S.ミル相互需要説をめぐる問題 藤本正富 (南山大)
 17 J.S.ミルの商業社会と統治論 立川 潔 (成城大)

(第2日第2会場)

- 18 ヒルファーディングの遺稿の意義 黒滝正昭 (宮城学院女子大)
 19 ベルヌーリの反ツツフト論 上野 喬 (東洋大)

(第2日第3会場)

- 20 公理主義経済学 中山智香子 (早稲田大・院)
 21 ヴェブレンの制度進化の理論 佐々木晃 (日本大)

《共通論題》 ケネー生誕300年——経済表の理論的意義と現代的意義
 司 会：平田 清明 (鹿児島経済大), 菱山 泉 (福井県立大)

- 1 ケネー再生産論と自然的秩序 新宮 晋 (福井県立大)
 2 ケネーとその門下 井上泰夫 (名古屋市立大)
 3 古典経済学の復位とケネー経済表の理論的意義 菱山 泉
 4 ケネー経済表の社会的意義と現代的意義 平田清明

第59回全国大会 (1995〔平成7〕年10月28-29日, 西南学院大)

《自由論題》

(第1日第1会場)

- 1 自生的秩序と秩序を形成する主体概念の特性——マンデヴィルの自
 負心の見直しを通じて—— 中野聡子 (東海大)
 2 アダム・スミスの地代論 高 哲男 (九州大)

- 3 リカードウの経済思想と価値論 小沼宗一 (東北学園大)
- 4 貨幣理論におけるソートン-リカードウ-ヴィクセル的伝統 野口旭 (専修大)
- 5 価値論と物価論——リカードウ, ミル, ジェヴォンズ—— 千賀重義 (横浜市立大)

(第1日第2会場)

- 6 マクロ経済モデルの攪乱項と計量経済学 山崎好弘 (福岡大)
- 7 寡占価格理論の史的展開 依田高典 (甲南大)
- 8 レオン・ワルラスの「経済表」 安藤金男 (名古屋市立大)
- 9 一般均衡理論の形成に対するパレートの貢献について 川俣雅弘 (法政大)

(第1日第3会場)

- 10 環境勘定と経済学原理の転換 桂木健次 (富山大)
- 11 インターネットにおける経済学関係データベース——経済学史研究と電子情報—— 赤間道夫 (愛媛大)
- 12 ガリアーニの経済思想 堀田誠三 (名古屋経済大)
- 13 王政復古期フランスの産業主義と反産業主義——サン・シモンとシスモンディを中心に—— 岩本吉弘 (一橋大)
- 14 ネリ・サルヴァドリの利潤率低下論 平石 修 (札幌学院大)

(第2日第1会場)

- 15 シヴィック・ヒューマニスト・パラダイムのアダム・スミス像への批判——『近代の画期としての経済学の成立』という観点から—— 有江大介 (横浜国立大)
- 16 『国富論』の倫理学と商業社会の光と陰——『道徳感情論』と『国富論』再訪—— 田中正司

(第2日第2会場)

- 17 ネオ・リカーディアン の地代理論について 浅田統一郎 (中央大)
- 18 日本における「ケインズ経済学」の展開 池尾愛子 (國學院大)

(第2日第3会場)

- 19 ウェーバーのオリエント資本主義論 梅津順一 (青山学院女子短大)

20 シュンペーターの社会主義化論 米川紀生 (三重大)

《フォーラム》

第1会場：文明社会の光と影——スコットランド啓蒙の思想課題——

組織者：有江大介 (横浜国立大)・新村 聡 (岡山大)

- 1 タンプルの自然神学と実践道徳論——初期スコットランド啓蒙の思想課題—— 川久保晃志 (札幌大)
- 2 ヒュームにおける文明社会の危機と名誉革命体制の危機 坂本達哉 (慶應義塾大)
- 3 ジョン・ミラーにおける文明史と政治 田中秀夫 (京都大)

第2会場：イギリスの「経済的衰退」をめぐる——マーシャルとケインズ——

組織者：服部正治 (立教大)・西沢 保 (一橋大)

- 1 マーシャル経済学再考——動態的市場把握の含意—— 井上義朗 (千葉大)
- 2 「経済的衰退」とアシュリー, マーシャル 西沢 保 (一橋大)
- 3 第1次大戦後の経済・貨幣政策とケインズ——1919-1931年—— 玉井龍象 (金沢大)

第3会場：民族問題と経済学——ロシア革命前後の時期を中心に——

組織者：倉田 稔 (小樽商科大)・山中隆次 (中央大)

- 1 ドイツ・マルクス主義と民族問題——カウツキーを中心に—— 相田慎一 (専修大北海道短大)
- 2 オーストロ・マルクス主義と民族問題——オットー・バウアーを中心に—— 上条 勇 (金沢大)
- 3 民族問題からみたマルクス主義——ロシア・マルクス主義を中心に—— 太田仁樹 (岡山大)

第60回全国大会 (1996〔平成8〕年11月9-10日, 中央大駿河台記念館)

《自由論題》

(第1日第1会場)

- 1 J.B.セー体系における労働者問題 東 基樹 (名古屋大)
- 2 S.ホルンダーのJ.S.ミル論：11年目の評価 深貝保則 (神奈川大)

3 重商主義の信用創造論争 大友敏明 (山梨大)

4 ホブスンとケインズ 笹原昭五 (中央大)

(第1日第2会場)

5 ジョン・グレイの貨幣論 久保 誠 (慶應義塾大)

6 モリスにおける労働と芸術——没後100年によせて—— 出雲雅志
(松山大)

7 いかにも価値をとらえるか——リカードウ, ベイリー, マルクス——
永谷 清 (信州大)

8 企業の本質と形態——固定資本学説史から考える—— 河西 勝
(北海学園大)

(第1日第3会場)

9 社会科学のパラダイム転換 小林弥六 (筑波大)

10 『ドイツ・イデオロギー』の編集問題 渋谷 正 (鹿児島大)

11 F.リストの「幼稚産業保護論」をめぐって 関口 宏 (中央大)

12 W.ゾンバルト「理解的経済学」の再検討 恵谷 弘 (大阪産業大・
非)

特別講演：経済学・歴史・歴史主義 小林 昇 (名誉会員)

(第2日第1会場)

13 高野岩三郎の社会政策論の系譜 和田 強 (東京都立大)

14 19世紀ドイツ経済学の歴史的方法における方法なるもの B.P.ブリ
ダット (ヴィッテン=ヘルデッケ大)

(第2日第2会場)

15 アリストテレスの社会分析 森岡邦泰 (大阪商業大)

16 経済学史のなかのニュートン主義——「社会科学における実験の不
可能性」を中心に—— 長尾伸一 (広島大)

(第2日第3会場)

17 フィッシャーの経済学における交換方程式と利子率——彼の動態理
論の形成に即して—— 中路 敬 (学振)

18 完全競争と凸性の意味 荒川章義 (学振)

〈共通論題〉 歴史学派の世界

組織者：八木紀一郎（京都大）・住谷一彦（東京国際大）

開題 八木紀一郎

報告1 歴史学派の歴史意識：国民経済から資本主義へ 田村信一（北星学園大）

2 歴史主義・制度主義・進化主義 塩野谷祐一（社会保障研）

3 第一次大戦後における歴史派経済学と政策論 柳澤 治（東京都立大）

予定討論1 原田哲史（四日市大）

2 高 哲男（九州大）

3 小村 純（立教大）

総括 住谷一彦

第61回全国大会（1997〔平成9〕年11月8－9日，福井県立大）

《自由論題》

（第1日第1会場）

1 リカードウ新機械論の論理 星野富一（富山大）

2 リカードウの生産価格論 平石 修（札幌学院大）

3 1860年代におけるJ.S.ミルのアイルランド植民地論 池田和宏（成城大）

4 J.S.ミル所有論の構想——私的所有の観念の可変の視角から——高橋 聡（中央大）

（第1日第2会場）

5 トーマス・バーガーのヴェーバー理念型解釈——写実的科学の脱呪術化と模式的社会学の構築—— 鈴木章俊（専修大北海道短大）

6 ジェヴォンズの効用理論と生産費 阿部秀二郎（東北大）

7 ボーム＝バヴェルク国民経済学講義ノートの再構成について 塘茂樹（京都産業大）

8 L.S.エイメリーの帝国統治論 服部正治（立教大）

（第1日第3会場）

9 ケインズとラムゼイ——理論観から経済学方法論へ—— 山崎好裕（福岡大）

- 10 スラッファ『商品による商品の生産』の理論構造 八木久志（群馬大）
- 11 マルクス・スラッファ・ケインズ——「資本による資本の再生産」の構想—— 大野節夫（同志社大）
- 12 貨幣的経済理論の一潮流——ヴィクセル・コネクションの可能性—— 小峯 敦（新潟産業大）

（第2日第1会場）

- 13 アダム・スミスの教育論：市民社会と国家 中谷武雄（徳島大）

（第2日第2会場）

- 14 ロシアの1860年代の改革と協同組合思想——故玉井龍象さんの追悼のために—— 今井義夫（工学院大）

（第2日第3会場）

- 15 人間開発の理論的系譜 西川 潤（早稲田大）

《フォーラム》

（第2日午後）

第1会場 経済学における公正と効率——スミス、マルクス、ワルラス
組織者 新村 聡（岡山大）、服部正治（立教大）

- 1 アダム・スミスにおける公正と効率 新村 聡
- 2 マルクスにおける公正と効率 杉浦克己（東京大）
- 3 ワルラスにおける公正と効率 御崎加代子（滋賀大）

第2会場 Rudolf Hilferding——歴史としてのマルクス経済学の再検討

組織者 保住敏彦（愛知大）、相田慎一（専修大北海道短大）

- 1 ヒルファーディング『金融資本論』の新たな全体構造把握の試み——『金融資本論』から遺稿までの展開を踏まえて—— 黒滝正昭（宮城学院女子大）
- 2 ヴァイマル共和国のヒルファディング——同時代の経済理論家との関連で—— 保住敏彦
- 3 ルドルフ・ヒルファディングの経済理論的・思想的展開——『金融資本論』から「歴史的問題」へ—— 倉田 稔（小樽商大）

第3会場 1945年以降の日本の経済学——国際比較に向けて

組織者 池尾愛子（國學院大）

- 1 日本の経済学者の国際的貢献 川俣雅弘（法政大）・野口 旭（専修大）
- 2 日本の経済学者と経済政策 池尾愛子
- 3 Economics in Korea since 1945 チョイ・ヤン・パク（St. John's Univ.）

第62回全国大会（1998〔平成10〕年10月24－25日，札幌学院大）

《自由論題》

（第1日第1会場）

- 1 アダム・スミスの生産的労働と価値論 星野彰男（関東学院大）
- 2 アダム・スミスと真正手形説 佐藤有史（富山国際大）
- 3 マルサスの経済思想における貧困問題 渡会勝義（一橋大）
- 4 ジェイムズ・ミルの文明史観とインド統治論：『英領インド史』を中心に 近藤英次
- 5 J.S.ミル政治経済学と現代 前原正美（東洋女子短大）

（第1日第2会場）

- 6 限界生産力理論における完全分配定理の展開 川俣雅弘（法政大）
- 7 マーシャルにおける進歩と生活 小沼宗一（東北学院大）
- 8 ピグーの厚生経済学と倫理学 塩野谷裕一（社会保障・人口問題研）
- 9 ノーマン総裁とケインズ 小峯 敦（新潟産業大）
- 10 ケインズの経済学：理論史的視座からの一研究 平井俊顕（上智大）

（第1日第3会場）

- 11 高田保馬の勢力理論と日本経済 田中秀臣（上武大）
- 12 一般均衡の存在問題の研究史：日本から見た展開 池尾愛子（國學院大）
- 13 資本の回転期間と一般的利潤率：『資本論』第3巻におけるエンゲルスの補筆について 飯田裕康（慶応大）
- 14 マルクスとベンサム：「自由，平等，所有そしてベンサム」の解剖を通して 永井義雄（関東学院大）
- 15 初期マルクスの「自然主義」 工藤秀明（千葉大）

(第2日第1会場)

- 16 J.S.ミル『経済学原理』「国際価値論」新節の意味するもの 藤本正富(南山大・院)
- 17 租税における二つの平等：J.S.ミルとJ.R.マカロック 松井名津(大阪市立大・院)

(第2日第2会場)

- 18 ハロッド成長経路の安定性を巡る諸問題 杉山富士雄(文教大)
- 19 ケインズ『貨幣論』擁護としてのスラッフアのハイエク批判 小原英隆(明治大)

(第2日第3会場)

- 20 ジョン・レーの経済学：知識、不確実性、選択 若田部昌澄(早稲田大)
- 21 マックス・ウェーバーの責任倫理論 橋本 努(北海道大)

(第2日午後)

《共通論題》J.S.ミルと現代

解題・司会者：四野宮三郎・永井義雄(関東学院大)

第1報告：価値と分配 馬渡尚憲(東北大)

第2報告：功利と選好 内井惣七(京都大)

第3報告：統治の経済的役割 深貝保則(東京都立大)

第4報告：フェミニズムの射程 水田珠枝(名古屋経済大)

予定討論とリプライ

予定討論1 堂目卓生(大阪大)

予定討論2 塩野谷裕一(社会保障・人口問題研)

予定討論3 熊谷次郎(桃山学院大)

一般討論

総括 四野宮三郎・永井義雄

第63回全国大会(1999〔平成11〕年11月6-7日, 熊本学園大)

《自由論題》

(第1日第1会場)

- 1 リカードの分配論と成長の分析の理論構造 福田進治(立命館大・

院)

- 2 リカードウの公債論と等価定理 益永 淳 (中央大・院)
- 3 エティエンヌ・デュモンと彼のマニユスクリプト 喜多見洋 (大阪産業大)
- 4 マルクスと功利主義——マルクスによるベンサム批判を中心として—— 赤間道夫 (愛媛大)
- 5 マルクス「個体的所有」問題の一解決 篠原敏昭 (法政大・非)

(第1日第2会場)

- 6 シュンペーターの経済社会学——システム論再考—— 本吉祥子 (東北大・院)
- 7 シュンペーターの企業者および銀行家 田中 求 (日本大)
- 8 ミーゼスの経済学方法論——ロビンズとの比較—— 西村 崇 (慶応義塾大・院)
- 9 『大転換』以降のポランニーと遺稿『自由とテクノロジ』の構想 若森みどり (東京大・院)
- 10 大戦間期のオーストリアにおけるO.シュパンの経済思想 中山智香子 (熊本大)

(第1日第3会場)

- 11 経済雑誌『サラリーマン』の研究 田中秀臣 (上武大), 中村宗悦 (大東文化大)
- 12 熊本の石橋と地域開発 栗田 啓子 (東京女子大)
- 13 J. M. ケインズの政治経済思想における平等主義と平和思想について——イギリス新自由主義者 J. A. ホブソンとの共通性—— 八田幸二 (中央大・院)
- 14 ヘンダーソンの経済思想——ケインズからの離反—— 小峯 敦 (新潟産業大)
- 15 書物蒐集家・書誌学愛好家としての J. M. ケインズ 武者小路信和 (大東文化大)

(第1日第4会場)

- 16 明治中期におけるナショナリズムと経済思想——日本経済会と国家

経済会を中心に—— 三島憲之（慶応義塾大・院）

- 17 「十五年戦争」期政治経済学の再考—— 純粹経済学との距離でみた政治経済学の3つの類型—— 上久保敏（大阪工業大）

（第2日第1会場）

- 18 <犬儒の啓蒙>から<徳の共和国>へ—— フランチェスコ・マリオ・パガーノと1799年ナポリ革命—— 奥田 敬（甲南大）

（第2日第2会場）

- 19 ハイエク自生的秩序論における抽象的属性の批判的考察 張 博珍（龍谷大・非）

（第2日第3会場）

- 20 厚生経済学とは何か—— ピグーからA.センへ—— 本郷 亮（関西学院大・院）

（第2日午後）

《フォーラム》

第1会場：市場社会の形成とデイヴィッド・リカードウ

組織者：千賀重義（横浜市立大）、渡会勝義（一橋大）

開 題 中村廣治（九州産業大）

- 1 リカードウの救貧論と労働者階級—— 貯蓄銀行をめぐる議論を中心として—— 渡会勝義（一橋大）
- 2 リカードウ自由貿易論の政治経済学 水田 健（東日本国際大）
- 3 現金支払再開の政治学—— リカードウの地金支払案および国立銀行設立案の再考 佐藤有史（富山国際大）

討 論 者 丸山武志（大分大）

竹永 進（大東文化大）

出雲雅司（神奈川大）

総 括 千賀重義

第2会場：進化思想と経済学

組織者：高 哲男（九州大）、八木紀一郎（京都大）

開 題 八木紀一郎

- 1 マーシャルの進化経済学—— 「定型」の多様性と自発的学習——

藤井賢治（青山学院大）

2 ヴェブレンにおける制度進化論の累積的構造 高 哲男

3 ハイエクの進化論に関する考察 橋本 努（北海道大）

討 論 者 磯川 曠（近畿大）

池田幸弘（慶応義塾大）

総 括 八木紀一郎

第3会場：重商主義の再検討——なぜ、重商主義は現代まで生き続けるのか？——

組織者：竹本 洋（関西学院大）、大森郁夫（早稲田大）

開 題 大森郁夫

1 「スミス以前の経済学」への科学史的アプローチ——初期近代医学のアナロジーと方法に関連して—— 長尾伸一（名古屋大）

2 18世紀金融思想の再検討の視角——金融市場と資本市場—— 奥田 聡（大阪経済大）

3 近代のピボットとしての重商主義——経済的自由主義と国民国家—— 竹本 洋

討 論 者 伊東誠一郎（大月短期大）

大黒弘慈（龍谷大）

山崎 怜（岡山商科大）

総 括 田中敏弘（関西学院大・名誉）

VI 大会共通論題・フォーラム一覧

(論題下の数字は報告者数を示す。ただし、3回のシンポジウムを含む。)

A. 共通論題

- 1 古典学派と重商主義 (4) (1950年, 第4回)
- 2 人口論 (3) (1951年, 第5回)
- 3 経済学における「古典」理論と「近代」理論 (2) (1953年, 第7回)
- 4 リカアドウとマルサス (4) (1953年, 第8回)
- 5 マルサスとリカアドウ (6) (1954年, 第9回)
- 6 経済学史の方法論 (5) (1954年, 第10回)
- 7 アダム・スミス研究 (4) (1955年, 第11回)
- 8 古典学派一般 (3) (1956年, 第13回)
- 9 恐慌論 (6) (1956年, 第14回)
- 10 経済発展と資本蓄積の理論 (6) (1957年, 第15回)
- 11 ケネー研究 (6) (1958年, 第18回)
- 12 労働価値観の端緒——ウィリアム・ペティ『租税貢納論』公刊300年記念—— (4) (1962年, 第26回)
- 13 経済学と歴史意識 (5) (1965年, 第29回)
- 14 カール・マルクス (4) (1966年, 第30回)
- 15 近代経済学百年の意義 (3) (1971年, 第35回)
- 16 リカアドウ・シンポジウム (3) (1972年, 第36回)
- 17 帝国主義論 (4) (1973年, 第37回)
- 18 限界革命百年をめぐって (3) (1974年, 第38回)
- 19 レーニン・シンポジウム (3) (上に同じ)
- 20 アダム・スミス (3) (1976年, 第40回)
- 21 アダム・スミスとわれわれ (シンポジウム) (2) (上に同じ)
- 22 エコノミックスとポリティカルエコノミー (4) (1977年, 第41回)
- 23 近代日本の経済思想 (3) (1978年, 第42回)
- 24 ブルードンとその周辺 (3) (1979年, 第43回)
- 25 アメリカ経済学 (3) (1980年, 第44回)

- 26 経済学史における先進国・後進国問題 (3) (1981年, 第45回)
- 27 経済学史における先進国・後進国問題 (3) (1982年, 第46回)
- 28 マルクスの経済学——形成史を通ずる全体像の把握—— (3) (1983年, 第47回)
- 29 シュムペーターとケインズ (3) (1984年, 第48回)
- 30 スコットランド啓蒙と経済学の成立 (3) (1986年, 第50回)
- 31 経済学の成立——ジェイムズ・ステュアートを中心に—— (3) (1988年, 第52回)
- 32 マルサス——古典学派における位置—— (3) (1992年, 第56回)
- 33 日本経済思想史 (3) (1993年, 第57回)
- 34 ケネー生誕300年——経済表の理論的意義と現代的意義—— (4) (1994年, 第58回)
- 35 歴史学派の世界 (3) (1996年, 第60回)
- 36 J.S. ミルと現代 (4) (1998年, 第62回)

B: フォーラム

第1回: 第59回大会 (1995年, 西南学院大)

- 1 文明社会の光と影——スコットランド啓蒙の思想課題——
- 2 イギリスの「経済的衰退」をめぐって——マーシャルとケインズ——
- 3 民族問題と経済学——ロシア革命前後の時期を中心に——

第2回: 第61回大会 (1997年, 福井県立大)

- 1 経済学における公正と効率——スミス, マルクス, ワルラス——
- 2 Rudolf Hiferding——「歴史」としてのマルクス経済学の再検討
- 3 1945年以降の日本の経済学——国際比較に向けて

第3回: 第63回大会 (1999年, 熊本学園大)

- 1 重商主義の再検討——なぜ, 重商主義は現代まで生き続けるのか?——
- 2 市場社会の形成とデイヴィッド・リカードウ
- 3 進化思想と経済学

VII 大会開催校一覧

(数字は当該校開催の第○回全国大会を示す。大学名、開催順)

早稲田大学	1, 31, 50	和歌山大学	24
京都大学	2, 30	東京経済大学	25
東京大学	3, 41	香川大学	26
関西学院大学	4, 16	武蔵大学	27, 58
慶應義塾大学	5, 39	大阪府立大学	28
神戸大学	6	小樽商科大学	29
一橋大学	7, 64 (創立50周年)	広島大学	32, 47
福島大学	8, 37	横浜市立大学	33
横浜国立大学	9	熊本学園大学 (元熊本商科大学)	
(横浜市立大学, 関東学院大学, 神奈川大学と共催)			34, 63
関西大学	10, 51	明治学院大学	35
中央大学	11, 60	松山大学 (元松山商科大学)	
大阪市立大学	12		36
法政大学	13	千葉大学	42
同志社大学	14	南山大学	43
明治大学	15	成城大学	44
立教大学	17	龍谷大学	45
立命館大学	18	東洋大学	46
専修大学	19, 52	甲南大学	49
九州大学	20, 40, 53	関東学院大学	54
(20は西南学院大学, 福岡商科大 学・現福岡大学と共催)		弘前大学	55
日本大学	21	京都産業大学	56
名古屋大学	22, 38	金沢大学	57
東北大学	23, 48	西南学院大学	59
(23は東北学院大学と共催)		福井県立大学	61
		札幌学院大学	62

VIII 国際会議，公開講演会等

- 1 マルクス生誕135年，死後70年記念学術講演会（1953年10月10日 東京大）
 マルクス再生産論の展開 越村信三郎
 マルクスにおける人間の問題 大河内一男
 マルクスと現代の経済学 岸本誠二郎
- 2 ジョン・ステュアート・ミル生誕150年記念公開講演会（1956年11月1日 同志社大）
 J.S.ミルの生涯と業績 杉原四郎
 明治初期に及ぼしたミルの影響 堀 経夫
 社会思想史上のミル 出口勇蔵
 ミルにおける経済学と社会学 大道安次郎
- 3 ケネー経済表200年記念公開講演会（1958年5月10日 立教大）
 挨拶 久保田明光
 重農主義学説の階級的基盤 横山正彦
 ケネー経済表の諸表式 坂田太郎
- 4 ケネー経済表200年記念公開講演会（1958年11月1日 同志社大，理論経済学会と共催）
 挨拶 久保田明光
 ケネー経済表初版の推定 渡辺 建
 経済表の謎と経済学の使命 柴田 敬
- 5 マックス・ウェーバー生誕百年記念公開講演会（1964年11月6日 大阪府立大，日本社会学会，土地制度史学会協賛）
 開会の辞 堀 経夫
 ウェーバーの方法論について 出口勇蔵
 ウェーバーにおける宗教社会学の問題 森 東吾
- 6 マルクス『資本論』刊行百年記念講演会（1967年11月10日 早稲田大）
 開会の辞 大塚金之助
 『資本論』の生誕 佐藤金三郎

『資本論』とロシア 田中真晴

『資本論』百年随想 内田義彦

- 7 『国富論』200年記念公開講演会 (1976年11月5日 九州大)

アダム・スミスにおける人と物 出口勇蔵

アダム・スミス——人文学と経済学 内田義彦

- 8 河上 肇生誕100周年記念公開講演会 (1979年9月23日 同志社大, 経済理論学会と共催)

開会の辞 杉山忠平

日本経済学史における河上 肇 杉原四郎

- 9 スミス没後200年記念名古屋国際シンポジウム (1990年4月12-14日, 中京大, 経済学史学会協賛)

- 10 ローザ・ルクセンブルグ生誕120年記念国際シンポジウム (1991年11月2-3日, 中央大駿河台記念館, 経済学史学会協賛)

- 11 第4回国際功利主義学会 (1994年8月27-29日, 中央大駿河台記念館, 経済学史学会協賛)

- 12 ケインズ没後50年記念公開講演会「二十世紀とケインズ」(1996年4月20日, 中央大駿河台記念館, 学術会議, 経済学史学会, 経済理論学会共催)

司会 (伊東光晴) / 開会 (藤野正二郎) / ケインズ『一般理論』の衝撃——1930年代 (都留重人) / 反ケインズ主義の流れのなかで——1980年代 (吉川洋) / ケインズは死んだか (置塩信雄) / 閉会 (玉井龍象)

- 13 公開講演会「21世紀と資本主義」(1997年4月19日, 関西大100周年記念会館ホール, 学術会議, 経済学史学会共催)

演題・講師: 21世紀のアポリア (佐和隆行) / 「混合経済」と公共政策 (宮本憲一) / 21世紀と資本主義の変貌 (伊東光晴)

IX 外国人による特別講演

- 1 1953年2月7日（同志社大）第2回関西部会例会
Charles Woolsey Cole, French Mercantilism
- 2 1957年11月16日（関西学院大）第16回大会
Ronald L. Meek, The Rise of Classical Sociology
- 3 1963年5月26日（神戸大）関西部会大会
Hans H. Gerth, Max Weber Research in America
- 4 1968年2月8日（東京朝日新聞社講堂）
ルフェーブ（H. Lefebvre）, マルクスの思想における「構造」の概念
- 5 1969年5月24日（甲南大）関西部会と甲南大学経済学会との共催
クチンスキー（Jürgen Kuczynski）, マルクスと文学
- 6 1974年11月（名古屋大）第38回大会
ヴェントゥーリ（Franco Venturi）, スコットランド啓蒙とロシア
- 7 1976年11月7日（九州大）第40回大会
Samuel Hollander, *The Wealth of Nations* and the Origins of Ricardo's
New Theory of Profits
- 8 1977年3月22日（成城大）関東部会例会
Ronald L. Meek, Adam Smith and Karl Marx
- 9 1977年4月4日（京都大）関西部会大会
Ronald L. Meek, Karl Marx and Piero Sraffa
- 10 1978年4月3日（関西学院大）関西部会大会
Andrew S. Skinner, Adam Smith: The Functions of Government
- 11 1979年11月10日（南山大）第43回大会
Paul E. Chamley, Steuart and Keynes
- 12 1983年11月12日（広島大）第47回大会
A. W. Coats, The Sociology of Knowledge as Applied to the History
of Economics
- 13 1984年11月10日（東北大）第48回大会
Mark Blaug, What Ricardo Said and What Ricardo Meant

- 14 1988年11月5日（専修大）第52回大会
J. G. A. Pocock, *The Growth of Political Economy in Eighteenth Century Britain*
- 15 1992年11月8日（京都産業大）第56回大会
J. M. Pullen, *Why Modern Economists Should Read Malthus's Principles of Political Economy*

X 学会刊行物

A. 論文集

- ① 『資本論』の成立（岩波書店，1967年11月，v，428，xiv頁）

序文 代表幹事 堀 経夫

第1部 『資本論』の思想史的背景

1 イギリス

リカード派社会主義者とマルクス 遊部久蔵

J.S. ミルとアイルランド問題 高島光郎

2 フランス

経済学批判体系の形成とシモンド・ドゥ・シモンディ 吉原泰助

ブルードンとマルクス 森川喜美雄

3 ドイツ

マルクスとヘーゲル 細見 英

ヘスとマルクス 山中隆次

第2部 『資本論』形成の諸問題

1 1840年代

『聖家族』の経済学的意義 服部文男

労働疎外論と唯物史観 重田晃一

2 1850年代

『経済学批判要綱』における「資本と労働の交換」について 高木幸二郎

50年代マルクスの市民社会論 平田清明

3 1860年代

「経済学批判」体系と『資本論』

佐藤金三郎

1866年1月～1867年9月

杉原四郎

第3部 『資本論』第1巻の反響

はじめに

大塚金之助・杉山忠平

ドイツ

良知 力

ロシア

石川郁男

イギリス

都築忠七

フランス

津田内匠

あとがき 編集委員

遊部久蔵・杉原四郎・平田清明

英文レジュメ

② 『国富論』の成立（岩波書店，1976年8月，xi，421，xx頁）

序

代表幹事 水田 洋

第I部 思想史的序説

1 イギリス道徳哲学の系譜

水田 洋

2 スミスにおける有徳の人について

木崎喜代治

3 「スコットランド啓蒙」における「文明社会史」の成立

佐々木武

4 『道徳感情論』と『国富論』

田中正司

第II部 経済学史的序説

1 『国富論』と重商主義

浜林正夫

2 ジェームズ・ステュアート

和田重司

3 チュルゴ

津田内匠

第III部 『国富論』の分析

1 『国富論』における労働価値論の成立

藤塚知義

2 アダム・スミスの土地所有論

鈴木 亮

3 『国富論』における生産的労働と蓄積ファンド

羽鳥卓也

4 アダム・スミスの信用論の展開とスコティッシュ・ナショナリズム

川島信義

- 5 『国富論』における原始蓄積の把握について 小林 昇
 6 『国富論』体系と国家認識 山崎 怜

第Ⅳ部 『国富論』以後

- 1 初期マルクスとスミス 遊部久蔵
 2 近代経済学とスミス 岡田純一
 3 近代日本黎明期のスミス 杉原四郎

資料

- 同時代の書評について 杉山忠平
 英文レジュメ

③ 経済学史学会編『日本の経済学—日本人の経済的思惟の軌跡—』（東洋経済新報社，1984年11月，xii + 345ページ）

序 浜林正夫

序章 経済学の日本的土壌—徳川期の経済思想・試論 河野健二

第一部 生成と展開

- 第1章 日本社会政策学会と経済学研究 飯田 鼎
 第2章 戦間期の経済思想—二つの論争— 長 幸男
 第3章 戦時期の経済学 早坂 忠
 第4章 戦後の近代経済学 伊東光晴
 第5章 戦後のマルクス経済学 宮崎犀一

第二部 伝統と導入

- 第6章 明治以前の経済思想—近世経済思想研究史の問題点— 逆井孝仁

- 第7章 明治以降終戦時までの経済学史研究
 (明治～大正後期) 杉原四郎
 (大正後期～終戦) 溝川喜一

④ 学会創立40周年記念・経済学史学会編『経済学史—課題と展望』（九州大学出版会，1992年，(iv) + 256 + (ii) ページ）

序 (田中敏弘)

- I 方法の問題：経済学史の方法（石井信之）／方法論の成立（馬渡尚憲）／現代理論からみた経済学史（根岸 隆）

- II 啓蒙と経済学：アダム・スミスの道德哲学とスコットランド啓蒙（田中正司）／スコットランド啓蒙と経済学（田中秀夫）／フランス啓蒙思想とフランス「古典」経済学（安藤隆穂）／イタリア啓蒙と経済学（堀田誠三）
- III 古典派経済学の形成：ジェイムズ・ステュアート——現状と課題（渡辺邦博）／ジェイムズ・ステュアート研究をめぐって（竹本 洋）／アダム・スミス研究の現代的課題（新村 聡）
- IV 古典派経済学の展開：マルサスとリカードウ——「一般的過剰」論争研究管見（中村廣治）／スミスとリカードウにおける価値・分配論（水田 健）／リカードウとマルクス（千賀重義）／穀物法論争と経済学（服部正治）／J.S.ミルの経済思想におけるアート（深貝保則）／「通貨論争」後における貨幣・信用論の展開（金井雄一）
- V 社会主義、歴史主義と経済学：功利主義と経済学（永井義雄）／ブルードンとフランス社会主義（池上 修）／シスモンディの経済学（中宮光隆）／ドイツ初期社会主義と経済学（植村邦彦）／グスタフ・シュモラーとドイツ歴史学派（田村信一）／アシュリーとイギリス歴史学派の諸相（西沢 保）／ヴェブレンとアメリカの経済学（高 哲男）
- VI マルクスとマルクス主義：初期マルクス（澁谷 正）／『資本論』形成史（内田 弘）／マルクス価値論をめぐる論争——課題と展望（奥山忠信）／帝国主義論——マルクス以後の理論・思想史（竹永 進）／マルクス経済学——経済学史研究との関連で（飯田裕康）／現代資本主義論（山田鋭夫）／マルクスと現存社会主義（山中隆次）
- VII 近代経済学：功利主義と「近代経済学」（松嶋敦茂）／マーシャル（橋本昭一）／フランス近代経済学の形成——クルノー、エンジニア、ワルラス（栗田啓子）／オーストリア学派（池田幸弘・八木紀一郎）／一般均衡論と計量経済学の展開（池尾愛子）／アメリカ新古典派経済学——J.B.クラークを中心に（田中敏弘）
- VIII ケインズとケインジアン：ケインズ経済学の形成過程（平井俊顕）／古典派とポスト・ケインジアン（渡会勝義）／ケインズ経済学の現代への影響（根井雅弘）

IX 日本の経済思想と経済学：日本経済思想史研究——課題と展望（井上琢智）／江戸時代経済思想史研究への一視角（小室正紀）／近代日本の市民生活と経済学——日本経済学史像の再構築のために（松野尾裕）編集後記（荒牧正憲）

- ⑤ 英文論集第1巻：*Economic Thought and Modernization in Japan*, ed. by Shiro Sugihara and Toshihiro Tanaka. In Association with The Society for The History of Economic Thought, Japan. Edward Elgar, 1998. (xxii+182) pp.

Preface Toshihiro Tanaka

Introduction: Modernization and the development of economic thought in Japan Shiro Sugihara

- 1 Trends in economic thought in the Tokugawa period Masamichi Komuro
- 2 Enlightenment and economic thought in Meiji Japan: Yukichi Fukuzawa and Ukichi Taguchi Jiro Kumagai
- 3 The Japanese social policy school: its formation and breakup Takashi Fujii
- 4 Two inquirers on the divide: Tokuzo Fukuda and Hajime Kawakami Takutoshi Inoue and Kiichiro Yagi
- 5 The debate on Japanese capitalism: the *Koza* faction and its perception of society Takaho Ando
- 6 General equilibrium theory and beyond: Yasuma Takata and Kei Shibata Takashi Negishi
- 7 Modernization and the studies of Adam Smith in Japan during and after World War II: Kazuo Okochi, Zenya Takashima and Yoshihiko Uchida Satoshi Niimura
- 8 Economic development and economic thought after World War II: non-Marxian economists on development, trade and industry Aiko Ikeo
- 9 Economic development and economic thought after World War II:

economic development and Marxian political economy

・ ・ ・ ・ Toshio Yamada

General bibliography/Name index/Subject index

- ⑥ 学会創立50周年記念・経済学史学会編『経済思想史辞典』（丸善，2000年6月，vi+497ページ）

B. 定期刊行物（現在刊行中のもの）

- ① 『経済学史学会年報』（1963年創刊。毎年，原則として11月発行）
- ② 「経済学史学会ニュース」（1992年7月創刊。93年より年2回発行）：幹事会報告，会員移動，地方部会報告要旨，国際学会情報，学会会議報告等を掲載。
- ③ 「経済学史学会大会報告集」（第1号〔1995年10月，第59回大会以降，毎年大会前に会員に郵送〕）
- （②・③の発行に伴い，『年報』は特集，研究動向，論文，書評等を掲載）
- ④ 「経済学史学会会員名簿」（隔年刊）

C. 学会史

- ① 『日本における経済学史研究10年の歩み——研究学史学会10年史——』（日本学術会議第3部監修，経済学史学会10年史刊行会，1961年5月）
- ② 『経済学史学会30年史』（経済学史学会，1980年11月）
- ③ 『経済学史学会50年史』（経済学史学会，2000年9月）

D. 経済学古典の復刻

- 1 *The Economic Writings of Sir William Petty*, edited by C. H. Hull, 1899, 2 vols. (1955年5月刊)
- 2 James Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, 1767, 1st edition, 2 vols. (1957年11月刊)
- 3 Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, from *Works*, 1822, with *Account of the Life and Writings of Adam Smith, LL.D.* by Dugald Stewart. (1959年11月刊)

E. その他（廃刊となった定期刊行物等）

- ① 『経済学史学会ニュース』（第1号〔1961年3月〕——第8号〔1968年4月〕）
- ② 『経済学史学会関西部会通信』（関西部会事務局，第1号〔1959年9月〕——第12号〔1963年7月〕）
- ③ 『経済学史学会西南部会報』（西南部会事務局，第1号〔1963年8月〕——第10号〔1972年8月〕）
- ④ 『経済学史学会西南部会通信』（西南部会事務局，第1号〔1977年11月〕）

XI 『年報』における特集・学界展望・研究動向等リスト

A. 特集

第28号（1990年）：アダム・スミス没後200周年記念特集

I 研究動向：スミス研究の現状と課題（次項・研究動向，参照）

II スミス没後200周年記念名古屋国際シンポジウム要約

第29号（1991年）：マーシャル『原理』100周年記念特集

マーシャル『原理』の方法的・思想的性格（橋本昭一）

マーシャル『原理』の静学（坂口正志）

マーシャル『原理』の動学（永澤越郎）

マーシャル『原理』とケンブリッジ学派（根井雅弘）

第33号（1995年）：スミス，リカードウ，マーシャル——周辺からの照射

アダム・スミス：穏健派とケイムズとシヴィック・ヒューマニズム
（有江大介）

リカードウ：アーチボルド・アリソンの保護主義（服部正治）

マーシャル：歴史学派の時代からの照射（西沢保）

第34号（1996年）：制度進化の思想と経済学

<社会経済システムの制度分析>に向けて——「制度の経済学」への一視点
（磯谷明德）

マーシャルの進化論研究の発端——哲学から心理学へ（磯川曠）

ヴェブレンにおける制度進化の理論（高哲男）

ハイエクと制度進化の経済学——自生的秩序と国家（池田幸弘）

第35号 (1997年) : 政策形成と経済学——1930-40年代を中心として

戦間期日本の景気政策の理論的基礎: 井上・高橋両蔵相の場合

(笹原正五)

第二次大戦前後のフランスにおける経済政策と経済学の<革新>: ケインズ主義の導入に関連して

(廣田 功)

総力戦: ニューディールとシステム社会

(山之内靖)

戦間期イギリス経済政策とケインズ

(玉井龍象)

第36号 (1998年) : 歴史研究の新潮流と経済思想

「ジェントルマン資本主義」論とアダム・スミス

(渡辺恵一)

「ジェントルマン資本主義」論と J. A. ホブスン研究——経済学史・思想史研究の視点から——

(姫野順一)

モラル・エコノミーとポリティカル・エコノミー

(音無通宏)

近代世界システム論と歴史認識の転換

(松岡利道)

第37号 (1999年) : 金融危機の経済思想

18世紀の金融危機と金融思想——金融市場・資本移動・ペーパー・マネー

(奥田 聡)

現代の金融危機とマルクス信用論の射程

(川波洋一)

ケインズ経済学の現代的評価

(黒木龍三)

B. 学会展望, 研究動向

第1号 (1963年)

重農学派

(渡辺輝雄・吉原泰助)

古典学派

(平瀬巳之吉・中村賢一郎)

初期社会主義

(水田 洋)

第2号 (1964年)

重商主義

(杉山忠平)

マルクス経済学の形成

(山中隆次・佐藤金三郎)

第3号 (1965年)

Marx の思想史的研究

(服部文男)

近代経済学史研究——とくにマーシャル研究を中心に——

(宮崎義一)

第4号 (1966年)

- マックス・ウェーバー研究 (出口勇蔵)
 古典派蓄積論の形成と発展 (羽鳥卓也)
 貨幣・信用学説史の研究 (高木暢哉・中村廣治)

第5号 (1967年)

- 歴史学派 (小林 昇)
 制度学派——ヴェブレン研究の動向—— (中山 大)
 イギリス社会主義思想 (木村正身)
 フランス社会主義思想 (野地洋行)

第6号 (1968年)

- マルクス経済学——とくに競争論研究について—— (遊部久蔵)
 マルクス主義思想の継承と発展 (山口和男)
 日本経済思想史——古典派経済学のわが国への導入と展開——
 (真実一男・溝川喜一)

第7号 (1969年)

- ローザンヌ学派経済学 (松浦 保)
 『資本論』100年とマルクス経済学 (種瀬 茂・松石勝彦)

第8号 (1970年)

- レーニン研究の動向——その一局面について—— (松岡 保)
 ケインズ経済学の学史的的研究——その課題および方法を中心として——
 (有田一郎)

第9号 (1971年)

- イギリス労働運動史上のロバート・オーエン
 ——生誕200年を記念して—— (飯田 鼎)
 新版「ヘーゲル復興」の動向——生誕200年をふりかえって——
 (細見 英)

第10号 (1972年)

- Ricardo 研究 (中村廣治)
 近代経済学史研究——近代経済学100年—— (早坂 忠)

第11号 (1973年)

- J.ミルおよびJ.S.ミル (杉原四郎・福原行三)
 リカードウ研究における西欧と日本——リカードウ・シンポジウム——
 第12号 (1974年)
 ユートピア思想 (縫田清二)
 啓蒙期の社会思想 (浜林正夫)
- 第13号 (1975年)
 帝国主義論の学説史的研究——ドイツ社会民主党を中心に——
 (松岡利道)
- 第14号 (1976年)
 アイルランド問題 (上野 格)
- 第15号 (1977年)
 アダム・スミス研究の現状 (鈴木 亮・天羽康夫)
- 第16号 (1978年)
 マルクス研究の新動向——経済学 (山田鋭夫)
 マルクス研究の新動向——思想 (今村仁司)
- 第17号 (1979年)
 日本経済思想史——「社会政策学会」と河上 肇——
 (坂本武人・杉原四郎)
- 第18号 (1980年)
 帝国主義研究の現状——カウツキー及びヒルファディング研究を中心に——
 相田愼一・飯田裕康
- 第19号 (1981年)
 アメリカ経済思想史 白井 厚・高 哲男
 経済思想史におけるロシア論 田中真晴・小島修一
- 第20号 (1982年)
 貨幣・信用学説史研究 中村廣治・荒牧正憲
 フランス経済学史 大田一廣・岡田純一
- 第21号 (1983年)
 マルクス研究 八柳良次郎
 シュムペーター研究 大野忠男

- 第22号 (1984年)
ケインズ研究 早坂 忠
- 第23号 (1985年)
スミス研究 小柳公洋・関源太郎
リカードウ研究 水田 健
- 第24号 (1986年)
オーストリア学派研究 八木紀一郎
最近の経済学方法論 佐藤隆三
- 第25号 (1987年)
J. S. ミル研究 馬渡尚憲
経済学史・経済思想史通史 石井信之
- 第26号 (1988年)
欧米のマルサス研究 橋本比登志
経済学史・社会思想史関係書誌 今井義夫・内田 博・岸川富士夫・
近田錠二・永井義雄・堀田誠三
- 第27号 (1989年。本号から学会展望に代えて研究動向を掲載。同時に、会員から投稿論文を公募し、審査のうえ掲載。)
研究動向：方法論の歴史から (馬渡尚憲) / スコットランド啓蒙——最近の研究動向 (田中秀夫) / ローダーデール蔵書について (服部正治・大森郁夫) / 最近のマーシャル研究 (橋本昭一)
- 第28号 (1990年) 研究動向：スミス研究の現状と課題
内外の思想史研究を中心に (星野彰男) / 内外の経済学研究を中心に (関源太郎) / 内外のスミス国家論・政策論研究を中心に (和田重司)
- 第30号 (1992年) 研究動向：重商主義研究の新局面 (大倉正雄) / 19世紀フランス古典派経済学 (栗田啓子) / 最近の『資本論』形成史研究 (内田弘) / ケンブリッジ学派における二つの流れ——景気変動論を中心として (平井俊顕) / シュンペーター研究の過去と未来 (金指 基)
- 第31号 (1993年) 研究動向：啓蒙の担い手と啓蒙末期の諸問題——スコットランドの場合 (篠原 久) / 古典派の経済理論と現代 (堂目卓生) / フーリエ研究によせて (大塚昇三) / オーストリア学派研究——創始者

- 達の研究を中心に（塘 茂樹）／経済学史上の公共経済学（川俣雅弘）
- 第32号（1994年）研究動向：ヒューム社会科学の歴史像（坂本達哉）／マン
 チェスター派とその周辺（熊谷次郎）／欧米における最近のマルクス経済
 学の展開——現代資本主義論と価値論論争に関わって（千賀重義）／『一
 般理論』形成史研究の現在（藤井賢治）／経済学と環境問題（工藤秀明）
- 第33号（1995年）研究動向：ケネー以前のフランス経済学（米田昇平）／古
 典派経済学の賃金理論（出雲雅志）／修正主義論争と帝国主義論史（上条
 勇）／ワルラス研究の新動向（中久保邦夫）／経済と倫理（塩野谷祐一）
- 第34号（1996年）研究動向：最近のジョン・ロック研究（生越利昭）／古典
 派国際貿易論の諸潮流（野口 旭）／社会主義体制の放棄とマルクス思想
 （植村邦彦）／ケインズ学派の諸潮流（河野良太）／制度の経済学とレ
 ギュラシオン理論（清水耕一）
- 第35号（1997年）研究動向：ジェイムズ・ステュアート研究の現段階（大友
 敏明）／古典派とポリティカル・エコノミーの普及（飯田裕康）／マルク
 ス商品・貨幣論研究の現段階（正木八郎）／ヴィクセル・コネクションの
 可能性：貨幣的経済理論の1潮流（小峯 敦）／フェミニズムと経済学（安
 川悦子）
- 第36号（1998年）研究動向：マルサスにおける重農主義・農業主義・農業保
 護論——最近の研究から——（渡会勝義）／『資本論』成立史研究の新
 段階（大村 泉）／最近のスラッフア研究の動向（松本有一）／Recent
 Japanese Studies in the Development of Keynes's Thought: An
 Evaluation（平井利顕）
- 第37号（1999年）研究動向：アダム・スミス研究の動向（田中正司）／市場
 社会論による経済社会構想（杉浦克己）／ロバートソンとホートリーのマ
 クロ的貨幣理論——ケインズ以外の戦間期イギリスの貨幣・景気循環論
 に関する研究動向（小原英隆）／The Studies in American Institutional
 Economics in Japan（田中敏弘）

C. 論文

- 第27号（1989年）：『国富論』における数量的方法の問題（只腰親和）／マ

ルサスの『人口論』と『経済学原理』（中西泰之）／近代経済学史における一つのパラドックスをめぐって——初期ポエーム・バヴェルク研究（塘茂樹）／ケインズ『一般理論』と投機——レイヨンフーヴッドの議論の検討（加納正雄）

第28号（1990年）：アダム・スミスの地代把握について——穀産地規定と地代性格の転換（佐藤滋正）

第29号（1991年）：K. ヴイクセルの経済学とその歴史的背景（池尾愛子）

第30号（1992年）：戦後マルサスの穀物法改正論（羽鳥卓也）／商業社会把握の政治的インプリケーション——マルサスの周辺（深貝保則）／リカードウの知的世界と経済学——リカードウの一未公開書簡をめぐって（飯田裕康）／カール・メンガーのジャーナリズム経験（八木紀一郎）／エルヴェシウス；功利主義における名誉心——道徳哲学から政治会改革へ（森村敏己）／初期のJ.S. ミルと貨幣数量説——『経済学原理』への課題の形成（竹内 洋）／ワルラスと国家——平等・競争・企業者（御崎加代子）／ケインズ『一般理論』における資産の集計構造と金融政策（加納正雄）

第31号（1993年）：山片蟠桃論——儒教的経済論の可能性（逆井孝仁）／いわゆるパウリング版『ベンサム全集』の成立過程と編集者問題（音無通宏）／ヴィルヘルム・ロツシャーの歴史的方法——『歴史的方法による国家経済学講義要綱』刊行150周年にあたって（田村信一）／効用の個人間比較をめぐって（松嶋敦茂）／トマス・アキナスの経済論——公正価格を中心に（森岡邦泰）／マーシャルにおける組織と分配——自由資本概念をめぐって（藤井賢治）／ケインズの社会哲学——自由・計画・社会主義（鍋島直樹）／米市場についての統計学的研究——日本における初期の計量経済学研究（池尾愛子）

第32号（1994年）：ケネー「経済表」再考（菱山 泉）／貨幣的分析の諸相とヘンリー・ソートン（水田 健）／貨幣経済理論史におけるリカードウとヴィクセル（岡田元浩）／Smith's Numerical Examples of the Division of Labour (Takashi Negishi)／ソートン『紙券信用論』の可能性——信用貨幣の流通根拠と「流通必要量」（大黒弘慈）／ホートレーからケイ

- ンズへ——「商人経済論」と乗数理論の影響（小峯 敦）／日本における「啓蒙の経済学」の思想的水脈——制度化研究の視点から（松野尾裕）
- 第33号（1995年）：エンゲルスの理論活動の意義と問題——没後100年を記念して（保住敏彦）／ウィーン体制期フランス産業思想の一断面——サン・シモン把握の新視角（東 基樹）／J.S.ミル相互需要説をめぐる諸問題——W. ソートンとW. ヒューウェルの影響（藤本正富）／経済学の制度化とマーシャル評価——研究計画の競合と選択（藤井賢治）／ケインズ『貨幣論』と利子理論（加納正雄）／ハイエクと進化（江頭 進）／The Methodology of Econometrics and Disturbance Term in Macroeconomic Models（山崎好裕）
- 第34号（1996年）：J.S.ミルの社会科学論——経済学批判をめぐって（松井名津）／ウェブにおける労働組合運動論と社会改革構想（江里口拓）／マーシャル『産業と商業』の動態論——「標準化」による組織化の進展（藤井賢治）
- 第35号（1997年）：J.S.ミル相互需要説の先行者——R. トレンズ, M. ロングフィールドおよびJ. バニントン（藤本正富）／アーヴィング・フィッシャーの利子率決定論——「利子率」の主要内容と意義（中路 敬）／The Influence of Ramsey's Critique on Keynes's Method of Economics（山崎好裕）
- 第36号（1998年）：リカードウ新機械論の論理（星野富一）／ノーマン総裁とケインズ——公定歩合の効果と合理化問題（小峯 敦）／カレツキアンの経済学とカレツキの経済学——資本主義の長期発展理論をめぐって（鍋島直樹）／Wakefield on Colonial Government and Patronage（近藤高弘）
- 第37号（1999年）：D. リカードウ『公債制度論』の理論構造——「等価定理」の政治的意味（益永 淳）／マルサス『人口論』初版における農業重視論（深貝保則）／新古典派経済学の哲学的源流——デカルトとポパー（山本英司）／ハイエクと大恐慌——理論と観察の狭間で（江頭 進）／カレツキと貨幣経済の理論（服部茂幸）

XII 声明書・訴え・要望書

1 警職法問題についての声明

(第18回大会, 1958〔昭和33〕年11月2日)

現在国会において審議中の警察官職務執行法改正案は基本的人権を侵害し学問・思想の自由および言論・出版の自由を圧迫するおそれがあるものとみとめられる。よってわれわれは同法案に反対の意を表明する。

2 大学管理法案反対声明

(第26回大会, 1962〔昭和37〕年11月10日)

学問研究の自由が、いかなる政治権力の介入にたいしても守られなければならないことは、すべての研究者がゆずりえぬ大前提としているところであって、われわれもまた現在の時点において、あらためてこれを確認したいとおもう。したがってわれわれは、最近の中教審答申にもとづく大学管理の法制化にたいして、深い憂慮の念を表明し、大学の自治と学問の自由が、これによっていささかなりともおかされることのないように、当事者ならびに世論につよくうったえるものである。

3 アダム・スミス講義ノートについての訴え

(1963〔昭和38〕年3月19日)

ご存じのように、グラスゴウ大学では国富論刊行200年を記念して決定版スミス全集の編集を企画しており、経済学史学会でもこれに協力することを申しあわせました。ところが、この全集にふくまれるはずのグラスゴウ大学講義ノート（新発見）の取得にあたって、重大な困難が生じ、このままでは全集の企画に致命的な影響をあたえることも、予想されるにいたりました。というのは、ノートの発見者ロージアン氏が、グラスゴウ大学への売却価格をせりあげついに大学としては購入を断念せざるをえぬところまで、きてしまったからです。

この場合、ロージアン氏は、値上げの理由として、日本のある大学をふくむいくつかの買手があらわれたことを、あげているそうです。スミス全集に協力を要請され、それを承諾した学史学会としては、この待望の全集が、こういう事情によって不完全なものとなるのを、黙視するわけにはいかないと

おもいますし、まして、万一じっさいに日本の大学が、無意識にであれ、その原因となっているとすれば、われわれの努力によってこの不幸な事態を究明し解消させるべきではないかと思われまます。われわれが、日本の文化財の国外流出を阻止したいと考えるように、グラスゴウ大学が、その誇りとする教授の講義ノートの国外流出を憂慮するのは、とうぜんであります。

しかもこの場合、ノートがグラスゴウ大学の手にはいれば、死蔵されることなく、全集のなかに公表されますが、国外に出れば、全集の完成が一頓挫するばかりでなく、文字どおり死蔵のおそれもなしとしません。

買手のなかのいわゆる日本の大学の、名称はあきらかになっていません。会員各位がご関係の諸大学について、この点をおしらべ下さり、万一、そのような事実がありましたら、学会事務局にご報告下さるとともに、全力をあげて阻止していただくよう、とくにおねがい申しあげるしだいです。

4 原子力潜水艦入港・核兵器開発反対声明

(第28回大会、1964〔昭和39〕年11月7日)

原子力潜水艦入港問題および核兵器開発の最近の状況については、われわれ社会学者も深刻な関心をよせているものであって、経済学史学会第28回総会は、この点にかんする日本学術会議および原子物理学者の声明をつよく支持し、政府の反省を要望する。

5 大学立法に対する反対声明

(1969〔昭和44〕年6月18日、経済学史学会幹事会)

今日の大学紛争は、現代社会の在り方にふかくかかわっており、当面の事態を処理するだけで、解決される性質のものではない。

しかるに、政府は当面の事態の鎮静を求めて、臨時措置法の名のもとに、大学法を成立させようとしている。このような方策は、大学紛争の根本的解決にならないだけでなく、問題の根源をおおい隠し、わが国の学問・思想の自由に重大な危険をもたらすものと、いわざるをえない。

経済学史および社会思想史の研究に従事するわれわれは、なによりもまず、学問・思想の自由に関心をよせるものであり、会員の意志を結集して、大学立法への反対運動に参加したいと思う。

右、声明する。

6 社会資料センターおよび大学共同利用図書館の設立についての要望

(第36回大会, 1972〔昭和47〕年11月11日, 日本学術会議にたいして)

経済学史・社会思想史の研究にとって, 原資料の確保は, もっとも基本的な前提であります。日本における文書館・図書館の現状は, つぎのような事情により, この前提条件をみたしているとはとうていいいいたいものであります。

- 1 日本における社会運動・経済思想関係の手稿・新聞・記録文書(非合法文書をふくむ)等の保存状態がきわめてわるく, この状態を改善するために, 一昨年「社会資料センター」設立の勧告がなされたにもかかわらず, まだ実現の気運が見られない。
- 2 外国の研究のための古典的な諸資料(出版物をふくむ)については, 第2次大戦末までの政治事情のために, 収集におおきな欠陥があり(たとえば社会主義関係), しかも図書館相互協力体制の不備のために, その不十分な資料でさえ, 所在が不明で利用できない。
- 3 戦後の複写技術の発展により, おおくの複製版がでていますが, いずれもきわめて高価であり, これをすべての個別大学図書館で購入することは, 不可能である。しかも現在早急に購入しておかなければ, 出版物の性格上, ほぼ永久に入手不能になるであろう。

以上のような障害を克服して, 経済学史・社会思想史, さらに一般に社会科学における歴史的諸研究を促進するために, われわれは, 日本学術会議が, 社会資料センターについての勧告の実現に一層の努力を払われること, およびそれと結合して大学共同利用図書館の設立について積極的に検討されることを, 要望します。なお後者については, あらためて学会としての原案を提出する予定です。

7 韓国全斗換政権に関わる有志声明

(第44回大会, 1980年11月8-9日, 大会期間中署名数・151名)

韓国全斗換政権は, 政治的に主張を異にする者を, ただそれだけの理由で, 明白なでっちあげ裁判によって抹殺しようとしている。このような人権無視は, それ自体として容認できないだけでなく, さらに日本政府がそれに手をかけたこと, やがて人権無視の風潮がかつてのファシズムのように国

内に流入してくるであろうことも、看過しえない。この事態に対してわれわれは深い怒りと憂慮を表明し、政府が人権擁護のために適切な措置をとるよう要請する。

経済学史学会第44回大会・出席者有志

8 日本学術会議法の改正についての要望

(1983年6月, 幹事会)

日本学術会議法の一部を改正する法律案はさきの通常国会において継続審議となり、本年度に予定されている臨時国会において、ひきつづき審議がおこなわれる予定である。これにたいして日本学術会議は去る5月の総会においてこの法改正に反対する旨の決議をおこないました。この改正案は、現行の会員公選制を学協会からの推薦にもとづく任命制にきりかえ、また学術会議の各部ごとの定員数や専門別を政令で決定しうるようにするなど、いくつかの問題点をふくんでいます。これらの諸点についての十分な検討はまだおこなわれていません。これらの問題は日本学術会議の本質的性格にかかわるものであり、ひいては日本の学術体制にも大きな影響をおよぼすものです。したがって私たちは、貴院がこの法案について早急な決定をおこなうことなく、学術会議とも密接な連絡をはかりつつ、慎重に審議をかさねられるよう、つよく要望いたします。

経済学史学会幹事会

9 声明

(1988年11月, 経済学史学会第52回大会会員臨時総会)

天皇の発病以来、恐懼・自粛の風潮がたちまち日本全国に醸成され、今や官民一体となって、言論・表現の自由を制約している。われわれはこの勢いが、かつての天皇制の復活につながり、学問・思想の自由を侵すことを深く憂慮する。

最近に至って、自粛に対する批判が一部に聞かれるが、その声はなお不十分である。われわれはこのような事態に対して、危惧の念と批判の意を表明するものである。

1988年11月6日

経済学史学会第52回全国大会会員臨時総会

(付) 報道機関等関係方面送付先に付された代表幹事添え状

冠 省

わたくしたちの学会(会員数802名)では、定例の全国大会の会員総会に

において、現在の状況について声明を出すべしという緊急提案が会員から出されて決議されました。それを受けて臨時幹事会で文案を検討し、学会の予定行事を終了後に会員臨時総会を開き、討議した結果、同封の声明を採択し、報道機関その他に送付することに決まりました。ご参考いただければ幸いです。

早々

1988年11月9日

経済学史学会代表幹事 田中真晴

XIII 国際学会派遣

- 1 国際経済学会連合会議（1953年9月，ローマ） 久保田明光[ⓧ]（[ⓧ]は日本学術会議による国費派遣を示す）
- 2 第25回国際東洋学者会議（1960年8月10日～17日，モスクワ） 守屋典郎[ⓧ]
- 3 第1回国際思想史会議（International Society for the History of Ideas）（1960年8月31日－9月3日，ケンブリッジ大） 出口勇蔵，遊部久蔵
- 4 経済史学会（Economic History Society）大会（1961年3月30日－4月2日，シェフィールド大） 水田 洋[ⓧ]
- 5 第2回国際経済学会連合（IEA）会議（1962年8月30日－9月6日，ウィーン） 宮崎義一[ⓧ]
- 6 アメリカ計量経済学会議・アメリカ経済学会大会（1963年12月27日－29日，ボストン） 越村信二郎[ⓧ]
- 7 第2回啓蒙思想国際会議（1967年8月22日－31日，セントアンドルーズ） 平田清明[ⓧ]
- 8 経済史学会大会（1969年4月11日－13日，ダラム） 浜林正夫[ⓧ]
- 9 第3回経済思想史会議（History of Economic Thought Conference）（1970年1月3－5日，シェフィールド大） 水田 洋[ⓧ]
- 10 第5回国際経済史会議（1970年8月10日－14日，レンニングラード） 杉山忠平 報告論題「日本近代化期における経済思想」
- 11 第6回労働運動史家国際会議（Internationale Tagung der Historiker der Arbeiterbewegung）（1970年9月15日－19日，リンツ） 山口和男[ⓧ]
- 12 第3回啓蒙思想国際会議（1971年7月15日－24日，ナンシー大） 津田内匠[ⓧ]
- 13 第7回労働運動史家国際会議（1971年9月14日－18日，リンツ） 飯田 鼎[ⓧ]
- 14 第5回経済思想史会議（1972年9月4日－7日，バーミンガム大） 溝川 喜一[ⓧ]

- 15 ミル父子記念学会（1973年5月3日－5日，トロント大）杉原四郎[㊦]
- 16 第4回啓蒙思想国際会議（1974年7月13日－19日，エール大）水田 洋
報告論題「スコットランド啓蒙の定義のために」
- 17 第7回経済思想史会議（1974年9月16日－18日，L.S.E.）杉山忠平
- 18 『国富論』200年記念シンポジウム（1976年4月2日－5日，グラスゴ
ウ大）水田 洋[㊦]
- 19 第5回経済学史学会（History of Economics Society）年次会議（1978
年5月24日－27日，トロント大）岡田純一[㊦]
- 20 第12回経済思想史会議（1979年9月12日－14日，バース大）真実一男[㊦]
- 21 1984年 吉澤芳樹：イギリス経済思想史会議
- 22 1985年 田村秀夫：トマス・モア，ジョン・フィッシャー没後450年記
念国際会議
- 23 1986年 杉山忠平：オーストラリア経済学史学会大会
- 24 1988年 田村秀夫：ユートピアと共同体経験国際会議
- 25 1991年 八木紀一郎：経済学史における編集者会議
- 26 1992年 田中正司：アメリカ経済学史学会
- 27 1995年 塘 茂樹：オーストラリア経済学史学会大会
- 28 1996年 玉井龍象：イギリス経済思想史会議
- 29 1999年 田中敏弘：アメリカ経済学史学会

XIV 部会活動

1 北海道部会

1999年9月25日，経済学史学会の5番目の地方部会として，北海道部会が発足した。それまで，北海道在住の会員には関東部会から案内が届いていたが，ここ数年，北海道内の会員数も増加してきたため，独自の部会を結成してはどうかという気運が高まっていた。1998年の全国大会が札幌学院大で開催され，そのさいに学会幹事から北海道部会の結成について打診されたこともあって，部会の実現に向けて動き始めることになった。1999年4月24日，札幌地区の経済学史・経済思想史研究者が集まって開いた研究会において，部会設立へ向けて準備を進めるという方針が合意され，稲村勲（札幌学院

大), 田村信一(北星学園大) 原田明信(札幌大), 森下宏美(北海学園大), 佐々木憲介(北海道大)の5名が, その準備にあたることになった。5名は, 会則ならびに運営上の申し合わせについての原案を作成し, 他の会員にも呼びかけて, 6月24日に「経済学史学会北海道部会設立準備会」を開催した。この準備会において, 9月25日に「設立総会および第1回研究報告会」を開催することが確認され, ここに北海道部会が発足するはこびとなったのである。

設立総会は, 9月25日午後3時から北海道大経済学部で行われ, 代表幹事代理として八木紀一郎常任幹事(京都大)にもご参加いただいた。総会では, 会則および運営上の申し合わせが承認され, 本部会が北海道における経済学史・経済思想史研究の促進を目的とすること, この目的を達成するために毎年少なくとも2回の研究報告会を開催すること, 会務を処理するために任期2年の幹事1名を置くことなどが決まり, 幹事には佐々木憲介会員が選出された。引き続き開催された第1回研究報告会の内容は後記の通りであり, これによって部会活動の第一歩を踏み出した。北海道部会は, 経済学史学会の地方部会のなかで最も小さい部会であり, 発足時点の会員数は30名である。しかし, 少人数であることを逆に利点として, 密度の濃い研究交流を進めることができるものと期待している。(佐々木憲介)

第1回研究報告会(1999年9月25日, 北海道大)

- 1 G.P. スクロープの救貧法論とマルサス批判 森下宏美(北海学園大)
- 2 ゾンバルト『近代資本主義』第2版(1916-27)の大改訂 田村信一(北星学園大)

2 東北部会

東北部会の発足

東北部会は1980年6月14日に発足した。本部会の設立は, 多年の懸案となっていたが, 当時, 東北地方(新潟県を含む)の本学会会員数は30数名にのぼり, 幹事会からかの度重なる働きかけもあった。そうした状況の中で, 発足についての懇談および第1回の部会が, 上記6月14日(土)午後1時から東北大学経済学部会議室で開催される運びとなった。

第1回の部会では、田添恭二会員による経過報告、杉山忠平代表幹事の挨拶に続いて、2つの研究報告が行われた。当日の出席者は約20名であった。懇談の席上、正式に東北部会が発足し、部会幹事（任期2年）は田添恭二会員（福島大）、部会事務局は東北大（服部文男会員、馬渡尚憲会員）に決定した。また部会は、当面、年1回とし、6月の第2、第3など適当な土曜日に行う。報告は毎回2つ、報告時間は45分くらいとする。事務局と開催校は軌道にのるまでは東北大で担当する、等のことが確認された。

部会の発展

第1回部会での確認によって開催校は当初は東北大で、1985年の第6回部会以後は他大学も担当して、第10回までは毎回2名の報告者で開催された。なお、1986年の「経済学史学会東北部会名簿」によれば、部会の会員数は42名、他に準会員（部会のみ参加）が2名となっており、会員数は40名を超えるにいたっている。

発足後10年目の1989年6月に東北大で開催された第10回部会の総会では、部会の組織・運営に関する幹事（田添恭二会員）と事務局（馬渡尚憲会員）との共同の提案（文書の形であらかじめ会員に送付）について、説明と討議が行われた。その結果、次のように確認された。①従来どおり、年1回開催とするが、報告の本数を2から3に増やす。②開催地は宮城県（仙台）と他県の交互とする。③幹事と事務局を統合し、事務局1名のみを置く。その任期は2年として、新潟、山形、福島、宮城、青森、岩手、秋田の7県を巡回する。④1991～92年を第1期の任期として、新しい事務局を発足させる。1989、90年の移行期は現行の幹事・事務局体制である。この第10回部会の総会での確認によって、事務局は、1991年以降は新潟（蛭原良一会員）から始めて、ほぼ2年ごとに各県交替で担当してきている。また、第11回の1990年度以降は、報告者3名をほぼ維持してきている。

部会の現状

発足以来、20年間、当部会も、東北地区の経済学史研究者の間の研究交流・相互研鑽の場として、経済学史研究の発展に着々と成果をあげてきている。組織・運営上も、初期10年間の基礎固めの時期を経て、さらに、上記の確認がなされた第10回部会から今日までの10年間には、民主的かつ明朗な運

営が定着したといえよう。部会の会員数も年々増加し、2000年2月時点で会員64名および準会員2名で、発足当時の2倍になっている。報告も、近年は、新進・中堅の研究者、さらに大学院生による斬新な報告が増えている。関東・関西・西南の3地方部会よりも20余年遅れて発足した東北部会も、すでに20年の歴史を刻んで、今や、他の部会と並んで、わが国の経済学史研究の発展に積極的に貢献しつつある。 (栗田康之)

第1回研究報告会 (1980年6月14日, 東北大経済学部)

- 1 ベンサムの議会改革論と経済学 伊藤宏之 (福島大)
- 2 ジョン・グレイの国民銀行論と労働貨幣 蛭原良一 (新潟大)

第2回例会 (1981年6月13日, 東北大経済学部)

- 1 リカードウ研究の現状——ブローグとホランダーをめぐって——
島 博保 (東北大)
- 2 チュルゴの「紙幣に関する書簡」について 斉藤佳倍 (弘前大)

第3回例会 (1982年6月12日, 東北大経済学部)

- 1 1930年代 Hilferding の Nazis 把握の変遷過程について 黒滝正昭 (宮城学院女子大)
- 2 科学的思考と『資本論』の論理——J. Zeleny の所説の検討—— 早坂啓造 (岩手大)

第4回例会 (1983年6月18日, 東北大経済学部)

- 1 アダム・スミスの「天文学史」と「道徳哲学」について 遠藤和朗 (東北学院大)
- 2 1920年代ロシアにおける『組織=生産学派』の農業改革論について——A. V. チャヤノフを中心に—— 小島 定 (福島大)

第5回例会 (1984年6月9日, 東北大経済学部)

- 1 アンダソン『考察』(1777年)のスミス批判と『国富論』増訂(1784年)問題について 菊池壮蔵 (福島大)
- 2 J. S. ミル『経済学原理』における価値論——舞台設定と基本構成—— 深貝保則 (山形大)

第6回例会 (1985年6月15日, 東北学院大90周年記念館)

1 経済人の認識論的前提——アダム・スミスの場合—— 佐々木憲介
(東北大)

2 労働の売買と労働力の売買——マルクスの古典派「労働の売買」批判と労働力商品概念 鈴木和雄 (弘前大)

第7回例会 (1986年6月14日, 福島大経済学部)

1 ケインズの伸縮的賃金政策批判について 小沼宗一 (東北学院大)

2 古典経済学とトレンズ 野口 真 (秋田経済法科大)

第8回例会 (1987年6月13日, 東北大経済学部)

1 リカードウ機械論の構造 星野富一 (盛岡大)

2 剰余価値論の確立と『資本論』第三部の再編——佐武弘章, 吉田文和両氏の近刊書を手がかりとして—— 大村 泉 (東北大)

第9回例会 (1988年6月18日, 山形大人文学部)

1 エッカリウス『J.S. ミル論駁』の二つの版 (英語版・ドイツ語版) と新『メガ』編集 荒川 繁 (東北大)

2 マルクス主義の三源泉——「経済学・哲学草稿」を中心として—— 畑 孝一 (福島大)

第10回例会 (1989年6月17日, 東北大経済学部)

1 イギリス重商主義の政治学——ジョン・ロック『統治論』の主題と構成—— 伊藤宏之 (福島大)

2 リカードウの機械論と補償説的見解について 蛭原良一 (新潟大)

第11回例会 (1990年6月14日, 弘前大人文学部)

1 ステュアートの譲渡利潤論——田添『サー・ジェイムズ・ステュアートの経済学』に寄せて—— 菊地壮蔵 (福島大)

2 カレッキのマルクス再生産表式論 斧田好雄 (弘前大)

第12回例会 (1991年6月8日, 宮城学院女子大)

1 クラレンス・エアーズの経済思想——新世代の制度主義者—— 高橋 真 (宮城県河南高校)

2 功利主義経済思想・試論——ベンサムとJ.S. ミルをめぐって—— 深貝保則 (山形大)

3 1937年におけるヒルファーディングの視角の転換 黒滝正昭 (宮城学

院女子大)

第13回例会 (1992年6月20日, 新潟大)

- 1 セー価値論の基本構造 畠田英夫 (東北大・院)
- 2 リカードウにおける初期利潤理論と外国貿易 小沼宗一 (東北学院大)
- 3 柳田国男における経済と倫理——『遠野物語』の経済思想史的意義—— 藤井隆至 (新潟大)

第14回例会 (1993年6月26日, 東北学院大)

- 1 G. ウィンスタンリの宗教思想について 芳賀 守 (元・千葉商科大)
- 2 名誉革命体制とD. ヒュームの『政治経済学論集』 遠藤和朗 (東北学院大)
- 3 ガルヴェ『流行論』とヘーゲル市民社会論の成立 池田成一 (岩手大・非会員)

第15回例会 (1994年6月18日, 福島大)

- 1 ワルラス資本形成モデルの社会観——アソシアシオンとの関連について—— 御崎加代子 (山形大)
- 2 宗教と社会主義——J.F. ブレイの『神と人間との結合, および, すべての人類の結合』—— 蛭原良一 (新潟大)
- 3 ケネー生誕300年祭によせて——フランスだより—— 吉原泰助 (非会員・福島大)

第16回例会 (1995年7月15日, 東北大)

- 1 ジェヴォンズの数学的効用理論 阿部秀二郎 (東北大・院)
- 2 『道徳感情論』第6版について——カラス事件をめぐる—— 荒 恵子 (関東学院大)
- 3 『ルードルフ・ヒルファーディングの理論的遺産——『金融資本論』から遺稿まで——』(近代文芸社, 1995年)をめぐる—— 黒滝正明 (宮城学院女子大)

第17回例会 (1996年6月15日, 東北学院大)

- 1 経済進歩に関するリカードウとJ.S. ミル 小沼宗一 (東北学院大)
- 2 マーシャルにおける進化論思想と経済学 金井辰郎 (東北大・院)

3 法人資本主義を考える 田中史郎（秋田短大）

第18回例会（1997年6月21日，東北学院大土樋キャンパス）

- 1 シュンペーターの企業者像 本吉邦子（東北大・院）
- 2 マーシャル『原理』における連続性の認識と方法 榎谷謙二（東北学院大）

第19回例会（1998年6月20日，弘前大）

- 1 ウィリアム・ベティの貨幣論 曾根弘光（東北大・院）
- 2 デュノワイエとサン・シモン——フランス産業主義の一局——
岩本吉弘（福島大）
- 3 J. キチンの謎 栗田康之（秋田経済法科大）

第20回例会（1999年6月12日，東北大）

- 1 ヒュームの黙約について 衛藤聡一（東北大・院）
- 2 アダム・スミスと功利主義——ベンサムとの対比において——
佐々木亮（東北大・院）
- 3 マーシャルと大学教育——経済学教育の普及と発展—— 斧田好雄
（弘前大）

3 関東部会

沿革と現状

『経済学史学会30年史』によれば関東部会は、1951年10月に発足したという。経済学史学会創立から1年半後のことである。部会の開催期日・報告者・テーマなどは『30年史』のほか、『経済学史学会年報』掲載の開催記録（1992年まで）や『経済学史学会ニュース』の記録（1993年以降）により辿ることができる。ただし残念ながらごく一部に記載漏れがあるようで、通算回数を数えることができない。記録がある範囲でほぼ10年刻みの開催回数を数えると、1952-60年が28回、1961-70年が19回、1971-80年が14回、1981-90年が25回、1991-2000年が28回（2000年6月まで）である。

発足当初は年3～5回の頻度で、毎回おおむね1人の報告者であった。なかでも1960年の部会は3回のうち2回が帰国報告であって、留学が日常茶飯となった今となっては時代の隔たりを感じさせる。60年代から70年代にかけ

ては開催回数が減ったけれども、研究大会や共通論題の方式が何度か試みられた。なかでも1963年6月のマックス・ウェーバーを主題としたシンポジウムは、関東部会として初めての研究大会であるばかりでなく、60年代におけるウェーバー研究の気運を高めるものでもあった。また、70年から71年にかけては、「近代経済学100年の意義」という共通論題が2回にわたって企画された。60年代以降、通例の部会でも毎回おおむね2報告が行われている。

70年代には年1回程度の開催となったが、80年代初めからは2年間の任期を目安にした部会幹事とそれを補佐するメンバーを置く方式が確立するなかで、毎年3回程度の部会が開催されている。97年から3年間は部会幹事を補佐するメンバーはとくに設けられなかったが、部会幹事所属大学の地理的条件を勘案して、会場手配について都区内の大学所属の会員に多大な応援をいただいた。

1980年代前半にはほぼ毎回50名を超える出席者があったが、90年代に入ってから、時に20名程度の出席のこともあった。これはおそらく、経済学史・思想史研究のなかでの研究細分化による関心の拡散や、さまざまな研究会の活発化に伴う部会の吸引力低下といった背景によるものと思われる。この状況をうけて、関東部会では以下のような工夫が試みられつつあり、最近では毎回30人以上の出席というレベルに回復している。

最近の部会運営の工夫として、第1に、しばしば共通テーマが設定された点をあげることができる。「スミス経済学の出自をめぐって」(1992年3月)、「1848年——『宣言』と革命——」(1998年3月)、「ケインズ、ナイト、戦間期経済」(1999年6月)、「市民社会論の再検討」(2000年6月)などである。第2に、外国人研究者の報告を取り入れた点である。関東部会では1977年のミーク教授(Adam Smith and Karl Marx)、84年の朱紹文教授(最近の中国における『資本論』研究)、88年のウィンチ教授(The Enlightenment and the Science of the Legislation)以降しばらく間が開いたけれども、1999年から2000年にかけては4回連続で来日中の外国人研究者に報告していただいた。広範な日本語文献の渉猟に基づき日本におけるウェーバー研究史を報告したシュヴェントカー博士は、1963年シンポジウムと同じ関東部会での報告を殊のほか喜んでいた。第3に、報告者に院生ら若手と中堅以上を組合せ

たり、予定討論者をアレンジするなど、プログラム設定にバラエティを持たせている。

今後、研究の国際化への一層の対応、『年報』の特集・学会展望や全国大会のフォーラムなどと連動した部会プログラムのアレンジなど、さまざまな試みが可能と思われる。とくに若い世代が積極的に報告や質疑に加わることを期待したい。

なお、関東部会の郵送案内は、関東地域（長野・山梨・静岡を含む）に在勤の会員および幹事・監事のほか、1999年秋の北海道部会発足までは北海道の会員にも届けられてきた。部会幹事の事務面では1997年以降、学協会サポートセンターによる会員名簿の管理と宛名ラヴェルの提供により正確さ・作業量とも大幅に改善された。しかし、毎回400名を超える案内の袋詰め・発送作業は未だ部会幹事の“手弁当”に委ねられている。費用削減もかねて、SHET・ML（経済学史学会のメーリング・リスト）で案内を代替するなど、工夫の余地があろう。（深貝 保則）

研究報告

1952（昭和27）年6月1日 東京大

経済学における古典と近代 杉本栄一（一橋大）

同 9月27日 法政大

マックス・ウェーバー——方法論争について—— 安藤英治（城蹊大）

同 10月25日 中央大

二つの経済学——その概念構成—— 平瀬巳之吉（専修大）

同 12月20日 早稲田大

1 トマス・モア——「ユートピア」における経済思想 松田 寛（早稲田大）

2 ケネー「経済表」の均衡体系の攪乱について 久保田明光（早稲田大）

1953（昭和28）年2月7日 立教大

経済学方法論について 宮川 実（立教大）

同 4月1日 慶応義塾大

西欧経済思想受容の在り方——わが国における合理思想の淵源——

野村兼太郎（慶応義塾大）

同 6月20日 専修大

リカードオ経済学の問題点 玉野井芳郎（東京大）

同 9月12日 中央大

価値形態と交換過程 中野 正（法政大）

同 12月5日 専修大

内田義彦著『経済学の生誕』合評（民主主義科学者協会と共催） 宮崎犀

一（国学院大） 吉沢芳樹（東京大）

1954（昭和29）年2月13日 中央大

マルサスとリカードオ 玉野井芳郎（東京大）

同 7月9日 中央大

高島善哉著『社会科学入門』をめぐって 高島善哉氏（一橋大）を囲む座
談会

同 9月25日 中央大

再生産表式と恐慌 高木幸二郎（中央大）

同 10月23日 東京大

リカードオ経済学の社会性 戸田武雄（静岡大）

同 12月23日 早稲田大

スミス研究の問題点について 高島善哉（一橋大）

1955（昭和30）年6月4日 法政大

リカードオ経済学の生成と労働価値説との関連 時永 淑（法政大）

同 7月2日 慶応義塾大

リカードオの議会改革論と経済学の分析視角 吉沢芳樹（東京大）

同 9月17日 法政大

シュンペーター『経済分析の歴史』の方法論について 山田雄三（一橋
大）

同 10月22日 専修大

経済学におけるイデアル・タイプス概念について 安藤英治（成蹊大）

1956（昭和31）年6月30日 専修大

1 景気変動理論の理論構造と19世紀後半の西欧経済 城座和夫（都立

大)

2 マルクス恐慌論の再検討 堀江忠男 (早稲田大)

同 9月29日 専修大

シュンペーターの景気変動論について——特に恐慌現象に関連して——

伊達邦春 (早稲田大)

同 11月20日 専修大

恐慌論研究の方法について 石原忠男 (中央大)

1957 (昭和32) 年 6月22日 慶応義塾大

R. ミークの古典学派研究について 吉田洋一 (専修大)

同 10月26日 法政大

ミーク著『労働価値説の研究』について 尾形 憲 (法政大)

1958 (昭和33) 年 4月5日 一橋如水会館

国富把握の体系としてのケネーの経済表 渡辺輝雄 (東京経済大)

1959 (昭和34) 年 9月26日 東京大

労働価値学説における「生産」概念の二重性と微視的方法の併用の問題

大熊信行 (神奈川大)

1960 (昭和35) 年 3月26日 東京大

欧州から帰って 水田 洋 (名古屋大)

同 10月15日 立教大

アベ・ニコラ・ボードー「経済表の説明」の考究 吉原泰助 (東京大)

同 12月3日 立教大

ヨーロッパから帰りて 渡辺輝雄 (東京経済大)

1961 (昭和36) 年 2月18日 立教大

恐慌論史の再検討——ヒルファディングをめぐって—— 高山満 (東京
経済大)

同 7月8日 一橋如水会館

ベルンシュタインと帝国主義論史——方法論的一考察—— 熊谷一男
(一橋大)

同 9月28日 一橋如水会館

フンボルト大学150年祭 大塚金之助 (一橋大)

1962 (昭和37) 年 1 月 20 日 一橋如水会館

最近のポーランド経済学界について 石原忠男 (中央大)

同 6 月 25 日 明治大

「国際経済史学会」に出席して 水田 洋 (名古屋大)

同 9 月 28 日 明治大

ウィリアム・ペティをめぐる 松川七郎 (一橋大) 高野利治 (関東学院大)

1963 (昭和38) 年 6 月 2 日 第 1 回研究大会 慶応義塾大

1 マックス・ウェーバーの人間と学問——マリアンネ夫人による伝記
をめぐって 安藤英治 (成蹊大)

2 マックス・ウェーバーの宗教社会学の方法について 内田芳明 (神奈川大)

3 G.D.S.の編纂者としてのマックス・ウェーバー 住谷一彦 (立教大)

1964 (昭和39) 年 6 月 6 日 第 2 回研究大会 早稲田大

1 イギリス革命とジョン・ロック 浜林正夫 (小樽商科大)

2 ロックにおける政治と経済 平井俊彦 (京都大)

1966 (昭和41) 年 3 月 26 日 国学院大

アダム・スミスにおける道徳と経済 星野彰男 (関東学院大)

同 5 月 21 日 研究大会 国学院大

1 イギリス留学雑感 上野 格 (成城大)

2 ホブソンの独占論 磯部浩一 (明治学院大)

3 『経済学批判要綱』と『資本論』との理論的連繫 平田清明 (名古屋大)

同 9 月 24 日 部会大会 関東学院大

1 ウィリアム・タムソンの女性解放思想 鎌田武治 (横浜国立大)

2 ロバート・オーウェンとウィリアム・ゴドウィン 白井 厚 (慶応義塾大)

3 フリードリッヒ・リストにおける「土地整理」の観念について 小林昇 (立教大)

1967 (昭和42) 年 4 月22日 関東学院大

- 1 ロック自然法思想の再検討——アブラムズの試論に関連させて——
田中正司 (横浜市立大)
- 2 ルソーの『社会契約論』の理論構造と資本主義 野地洋行 (慶応義塾大)

同 6月24日 東京経済大

- 1 マックス・ウェーバーの「プラークマ」思想とその周辺 内田芳明 (神奈川大)
- 2 ミルとマルクス——アイルランド問題をめぐって—— 高島光郎 (横浜国立大)

1967 (昭和42) 年 9 月30日 東京経済大

- 1 ジョン・ロックの初期思想——“Two Tracts”を中心に—— 中村恒矩 (東京経済大)
- 2 カンティロンの経済表の基本的性格 中村賢一郎 (明治大)

1968 (昭和43) 年 1 月27日 東京経済大

シスモンディについて 吉田静一 (神奈川大)

同 5月18日 上智大

- 1 歴史理論としての市民社会論 平田清明 (名古屋大)
予定討論者 大野精三郎 (一橋大)
- 2 イタリアにおけるローザンヌ学派経済学 松浦 保 (慶応義塾大)
予定討論者 上原一男 (早稲田大)

同 10月19日 上智大

宗教戦争期における市民社会のイデオロギー——絶対主義成立期における政策主体—— 西川 潤 (早稲田大)

1970 (昭和45) 年 5 月23日 専修大

共通論題 ジョン・ロック研究

- 1 ロックの「市民社会」論——ロックにおける政治と経済—— 田中正司 (横浜市立大)
 - 2 ロックの経済思想とその周辺 浜林正夫 (東京教育大)
- 同 10月17日 國學院大

共通論題 近代経済学100年の意義

1 マーシャルと新古典派 柏崎利之輔 (早稲田大)

2 効用分析の学史的意義 中村賢一郎 (明治大)

1971 (昭和46) 年 5 月 22 日 國學院大

共通論題 近代経済学100年の意義

1 近代経済学におけるワルラスとマーシャル 柏崎利之輔 (早稲田大)

2 完全競争に対するシュムペーターの評価の変遷について 玉野井芳郎
(東京大)

3 日本における「近代経済学」 早坂 忠 (東京大)

1971 (昭和46) 年 12 月 18 日 文京女子短期大

1 J.S. ミルとベンサム —— ベンサムの功利の概念とその方法をめぐって —— 四野宮三郎 (高崎経済大)

2 経済学クラブとイギリス古典経済学の展開 藤塚知義 (武蔵大)

1972 (昭和47) 年 5 月 27 日 文京女子短期大

経済学史研究の新動向 —— 限界革命百年記念国際会議に出席して ——
松浦 保 (慶応義塾大)

同 12 月 2 日 明治大

1 マックス・ウェーバーと近代 安藤英治 (成蹊大)

2 初期マルクスをめぐって 良知 力 (一橋大)

1973 (昭和48) 年 10 月 13 日 一橋大

1 マカロックとJ.S. ミル —— 土地所有論をめぐって —— 高島光郎
(横浜国立大)

2 日本における近代経済学導入史について 早坂 忠 (東京大)

1974 (昭和49) 年 6 月 1 日 専修大

1 古典派と新古典派 —— 地代論の観点から —— 美濃口武雄 (一橋大)

2 限界主義・古典学派・マルクス —— ウィンチの報告にふれて ——
宮崎犀一 (中央大)

1975 (昭和50) 年 6 月 14 日 東京都立大

1 スミス価値論の謎と市民社会の思想体質 和田重司 (中央大)

- 2 『金融資本論』体系における恐慌=景気循環論——その位置と構造—— 高山 満 (東京経済大)

1976 (昭和51) 年 5月22日 部会大会 成城大

- 1 アダム・スミスの傲慢論と力の観点 星野彰男 (関東学院大)
2 スミス経済学にたいする最近の研究動向——S・ホランダールの新著を中心に—— 岡田純一 (早稲田大)

1977 (昭和52) 年 3月22日 成城大

Adam Smith and Karl Marx Ronald L. Meek

同 6月18日 中央大

共通論題 思想形成における国際的契機

- 1 オウエンの思想形成とアメリカ 土方直史 (中央大)
コメント 飯田 鼎 (慶応義塾大)
2 トマス・ジェファソンとフランス重農主義 白井 厚 (慶応義塾大)
コメント 津田内匠 (一橋大)

1978 (昭和53) 年 6月10日 横浜市立大

- 1 ローダーデールの経済政策論 服部正治 (立教大)
2 ケネーとルソー——その統治論の比較検討—— 高橋 誠 (中央大)
3 エドワード・カーペンター, 人と思想 都築忠七 (一橋大)

1979 (昭和54) 年 6月2日 法政大

- 1 コンディヤック経済理論の基本構成 大田一廣 (早稲田大)
代表討論 津田内匠 (一橋大)
2 リカードウ研究の一焦点——『原理』生成過程の解釈をめぐって—— 千賀重義 (横浜市立大)

1980 (昭和55) 年度第1回例会 (6月7日, 立教大)

- 1 フリードリッヒ・リストの鉄道政策——Verkehr論の視角から—— 大谷津晴夫 (上智大)
2 <貨幣的経済学>としてのJ. ステュアート『原理』について——最適人口論と関連させて—— 大森郁夫 (早稲田大)

同・第2回例会 (1981年3月28日, 立教大)

- 1 書評：Donald Winch, *Adam Smith's Politics*, 1978. 佐々木武（東京医科大学歯科大）
- 2 書評：Samuel Hollander, *The Economics of David Ricardo*, 1979. 服部正治（立教大）・千賀重義（横浜市立大）

1981年度例会（6月20日，法政大）

- 1 『資本論』体系の成立過程における手稿『経済学批判（1861-63年）』の意義——『マルクス・エンゲルス著作集』ロシア語第2版，第48巻の刊行によせて—— 原伸子（法政大）
- 2 マブリのフィジオクラシー批判をめぐって 高橋誠（中央大）

1982年度例会（6月5日，法政大）

- 1 ジョン・ミラーの市民社会論成立史 太田要（立教大・院）
- 2 リカードウ『原理』（第三版）価値論の改訂について 岡本利光（法政大・院）
- 3 二月革命期ブルードンの「経済革命」論 藤田勝次郎（國學院大）

1983年度第1回例会（6月4日，立教大）

- 1 社会的剰余の発見とマルクス「経済表」 安孫子誠男（千葉大）
- 2 マルクス没後100年記念リンツ集会に出席して——ローヤン報告「いわゆる“1844年経哲草稿”問題」を中心として—— 山中隆次（中央大）

同・第2回例会（1984年3月31日，立教大）

- 1 ヴェルテンベルク憲法闘争期のヘーゲルとリスト 中西毅（立教大・院）
- 2 『国富論』第3版のスミス 野沢敏治（千葉大）
- 3 リカードウの分配論と貨幣価値論 吉澤芳樹（専修大）

1984年度第1回例会（6月23日，一橋大）

- 1 D. ヒュームの人間労働観とインダストリー論 坂本達哉（慶應義塾大）
- 2 イギリス急進主義研究試論——英仏の交流にも触れつつ—— 永井義雄（名古屋大）

同・第2回例会（10月20日，同上）

- 1 経済学の生誕と『法学講義』——分業・交換性向論の出自と批判対象をめぐって—— 田中正司（一橋大）
- 2 最近の中国における『資本論』研究 朱 昭文（中国社会科学院経済研究所）

同・第3回例会（1985年1月12日，同上）

- 1 リカードウ経済学研究の現状 水田 健（法政大）
- 2 パリ時代のマルクスをめぐって——『フォアヴェルツ』（Vorwärts）を中心に—— 的場昭弘（一橋大）

同・第4回例会（1985年3月23日，同上）

- 1 穀物法論争史上のマルサス 服部正治（立教大）
- 2 後期マルサスの穀物法論——『人口論』第5版の改訂について—— 羽鳥卓也（関東学院大）

1985年度第1回例会（6月1日，慶應義塾大）

- 1 ドイツ第二帝政とカール・カウツキー——『通商政策と社会民主党』（1901）を中心に—— 相田慎一（専修大北海道短大）
- 2 信用論史上におけるマルクス 飯田裕康（慶應義塾大）

同・第2回例会（10月5日，同上）

- 1 ルソーの人間観と歴史観——マルクスとの比較において—— 飯岡秀夫（高崎経済大）
- 2 プルードンの経済思想と信用改革 池上 修（法政大・院）

同・第3回例会（12月7日，同上）

- 1 スミス価値論の再検討——価値＝購買力説の理論的射程をめぐって—— 鈴木信雄（東京電機大）
- 2 ボエーム＝バヴェルクの講義録『国民経済学』について 塘 茂樹（慶應義塾大・院）

1986年度第1回例会（4月26日，中央大駿河台記念館）

- 1 マルクス再生産論形成史——「経済表」の成立とその揚棄を中心に—— 宮川 彰（東京都立大）
- 2 「土地所有」と『資本論』——「プラン問題」との関連で—— 小川浩八郎（中央大）

同・第2回例会（6月28日，同上）

- 1 ドイツ自由主義の源流——F. リストと『国家辞典』—— 手塚真（桜美林大）
- 2 ヴァイトリングの労働者銀行——ブルードンからの影響の有無—— 石塚正英（立正大）

同・第3回例会（10月18日，同上）

- 1 イタリア経済学史上におけるリソルジメント——G. フェッラーリの批判的経済学の構想—— 黒須純一郎（中央大）
- 2 リカードウ価値論について 水田 健（法政大）

同・第4回例会（1986年2月7日，同上）

- 1 J.S.ミルの経済学方法論 立川 潔（中央大）
- 2 東インド会社のJ.S.ミル——原住民教育の問題に関説しつつ—— 高島光郎（横浜国立大）

1987年度第1回例会（5月30日，日本大）

- 1 ジェイムズ・ステュアートの機械的数量説批判 大森郁夫（早稲田大）
- 2 労働価値論の起源——ウィリアム・ベティを中心に—— 浜林正夫（一橋大）

同・第2回例会（10月17日，同上）

- 1 欧米価値論研究におけるマルクスとスラッフア 石塚良次（専修大）
- 2 シュンペーター体系と二元論の問題 金指 基（日本大）

同・第3回例会（1988年3月19日，同上）

- 1 W.C.ミッチェルの社会的知性論——J. デューイとの思想的関連をめぐって—— 斎藤宏之（日本大）
- 2 トウック・『物価史』・経済学クラブ——トウック・ニューマーチ共著『物価史』全6巻の訳了を機会に—— 藤塚知義（大東文化大）

特別講演会（1988年6月4日，同上）

Prof. Donald Winch (University of Sussex, UK), The Enlightenment and the Science of the Legislator.

1988年度例会（1989年3月18日，同上）

- 1 ドゥーガルド・ステュアートの経済学——『経済学講義』における「人口」と「国富」—— 太田 要（法政大・非）
- 2 マックス・ヴェーバーの経済思想——政策思想と「近代」の認識—— 小林 純（高千穂商科大）

1989年度第1回例会（6月3日，慶應義塾大）

- 1 <商人の政治>から<市民の政治>へ——18世紀前半ナポリ王国における「重商主義」とその批判者たち—— 奥田 敬（一橋大）
- 2 マルサスの「一般的供給過剰」の理論 渡会勝義（明治学院大）

同・第2回例会（10月7日，同上）

テーマ：千賀重義著『リカードウ政治経済学研究』（1989年4月刊）をめぐって 佐藤有史（慶應義塾大・院）・水田 健（法政大）
リジョインダー 千賀重義（横浜市大）

同・第3回例会（1990年3月17日，同上）

テーマ：内田義彦追悼——その学問的世界の理解と継承のために——

- 1 初期の内田義彦——『生誕』にいたるまで—— 酒井 進（専修大）
- 2 『生誕』の今日的意義——内田義彦の学問的作法をめぐって—— 田中正司（神奈川大）
- 3 経済学における市民社会論の意義——高島善哉，内田義彦，B. ジェソップ—— 平田清明（神奈川大）

1990年度例会（7月7日，慶應義塾大）

- 1 イギリス歴史学派 西沢 保（一橋大）
- 2 リカードウの賃金論について 出雲雅志（学振）

1991年度第1回例会（5月18日，中央大駿河台記念館）

- 1 オーストリア学派における伝統の形成と多様性の喪失 東清二郎（江戸川学園）
- 2 なぜ『労働と正義』なのか？——学会への問題提起として—— 有江大介（日本福祉大）

同・第2回例会（9月21日，中央大）

- 1 マルクスと社会主義——マルクス研究の課題—— 石塚良次（専修

大)

2 マルクスの社会主義論 山中隆次 (中央大)

同・第3回例会 (1992年3月14日, 中央大)

共通テーマ: スミス経済学の出自をめぐって

1 アダム・スミスの自然法学と『道徳感情論』——プーフェンドルフ『人間と市民の義務』との関連で—— 森本 孝 (慶應義塾大・院)

2 アダム・スミスと自然神学——作用因と目的因の論理を中心に—— 田中正司 (神奈川大)

1992年度第1回例会 (5月30日, 同上)

1 穀物法論争と経済学——自著『穀物法論争』(1991年)から—— 服部正治 (立教大)

2 プルードンの分権国家論——ルソー批判—— 藤田勝次郎 (國學院大)

同・第2回例会 (10月3日, 同上)

1 「歴史的時間」を実現する体系としてケインズを読む 吉田雅昭 (専修大)

2 ケインズ『一般理論』形成史 浅野栄一 (中央大)

同・第3回例会 (1993年3月13日, 同上)

1 『共産党宣言』と19世紀前半の労働者運動——アソツィアツィオン運動の構想—— 村上俊介 (専修大)

2 KommunistenはParteiを超えているか 石塚正英 (社会思想史の窓刊行会)

1993年度第1回例会 (6月5日, 青山学院大)

1 アダム・スミス『哲学論文集』をめぐって 只腰親和 (横浜市立大)

2 シスモンディとマルサス——一般的供給過剰をめぐって—— 渡会勝義 (明治学院大)

同・第2回例会 (10月2日, 同上)

1 アダム・スミスとストア哲学——自己規制論をめぐって—— 伊藤哲 (関東学院大)

- 2 ハチスン・ヒューム・スミス——自生的秩序と情念—— 知念英行
(流通経済大)

同・第3回例会(1994年3月19日, 同上)

- 1 リカーディアン・ポリティクスとは何か 佐藤有史(洗足学院大・
非)
- 2 J.S.ミル経済思想の政治性 深貝保則(神奈川大)

1994年度第1回例会(1994年6月11日, 同上)

- 1 ケインズとカレッツキ——「投資誘因」をめぐる—— 緒方俊雄(中
央大)
- 2 ハイエクの市場社会観 星野彰男(関東学院大)

同・第2回例会(1994年12月10日, 同上)

- 1 ペーター・ミシュラーの経済学——メンガー方法論との関係を中心
に—— 池田幸弘(慶応義塾大)
- 2 勢力説をめぐるポエーム・バヴェルクと柴田敬 根岸 隆(青山学院
大)

同・第3回例会(1995年3月11日, 同上)

- 1 イギリス経済の「相対的衰退」とアシュリー, マーシャル 西沢 保
(一橋大)
- 2 新オーストリア学派の「文化的進化」の概念をめぐる 中村秀一(千
葉経済大)

1995年度第1回例会(1995年6月3日, 成城大)

- 1 アダム・スミスの周辺——啓蒙の範囲・担い手・科学—— 有江大
介(横浜国立大)
- 2 リカードウとスラッファ——労働から循環へ—— 水田 健(東日
本国際大)

同・第2回例会(1995年10月7日, 同上)

- 1 ハチスンのマデヴィル批判 八幡清文(フェリス女学院大)
- 2 ルソーの社会経済思想 浅野 清(東洋大)

同・第3回例会(1996年3月16日, 同上)

- 1 ヘーゲル社会理論の射程——コルポラツィオンの諸相——

高柳良治（國學院大）

- 2 市民社会，産業社会，文明社会——坂本達哉『ヒュームの文明社会——勤労・知識・自由』（創文社，1995. 12）を読む——佐々木武（東京医科歯科大）

1996年度第1回例会（1996年7月6日，同上）

- 1 リカードウ価値論について——中村廣治『リカードウ経済学研究』（九大出版会，1996年3月）を読む——千賀重義（横浜市立大）

同・第2回例会（1996年12月7日，同上）

- 1 Kahn Papers から見た『短期の経済学』 袴田兆彦（中央大）

同・第3回例会（1997年3月15日，同上）

- 1 J.S.ミルの植民地論——アイルランドとの関係で——池田和宏（成城大）
- 2 啓蒙思想とフランス革命——サン・ジュストの場合を参考にして——山崎耕一（武蔵大）

1997年度第1回例会（1997年5月31日，東京都立大）

- 1 大森郁夫『ステュアートとスミス』合評会
大森郁夫『ステュアートとスミス——「巧妙な手」と「見えざる手」の経済理論——』（ミネルヴァ書房，1996年）
コメンター 水田 健（東日本国際大）
八幡清文（フェリス女学院大）
リプライ 大森郁夫（早稲田大）

同・第2回例会（1997年10月4日，明治学院大白金校舎）

- 1 マーシャル後のケンブリッジ経済学——組織の喪失と市場の不完全性——藤井 賢治（青山学院大）
- 2 高田保馬とJ.M.ケインズ 田中秀臣（上武大）

同・第3回例会（1998年3月14日，専修大神田校舎）

共通テーマ：1848年——『宣言』と革命——

- 1 1848年革命と『共産党宣言』 的場昭弘（神奈川大）
- 2 『共産党宣言』における「個人的所有」と「アソツィアツィオン」
篠原敏昭（法政大）

3 ルイ・ブランと1848年革命 高草木光一（慶応義塾大）

コメンター 伊藤 誠（國學院大）

村上俊介（専修大）

1998年度第1回例会（1998年4月25日，明治大駿河台校舎）

共通テーマ：財政・公債の経済思想

- 1 固有の重商主義期の財政思想——C. ダヴナントとW. パルトニー—— 大倉正雄（拓殖大）
- 2 D. リカードウの減債基金批判——議会改革の主張との関連で—— 益永 淳（中央大・院）

同・第2回例会（1998年11月14日，早稲田大）

共通テーマ：マルサスとリカードウ

- 1 マルサスにおける重農主義・農業主義・農業保護論——ホランダーのマルサス論を中心に—— 渡会勝義（一橋大）
- 2 リカードの貨幣理論——数量説と価値論—— 竹永 進（大東文化大）

同・第3回例会（1999年2月27日，明治大駿河台キャンパス）

共通テーマ：メンガーとヴェーバー

- 1 カール・メンガー『国民経済学原理』の成立 池田幸弘（慶応義塾大）
- 2 日本のマックス・ヴェーバー受容 Wolfgang Schwentker（デュッセルドルフ大）

1999年度第1回例会（1999年6月5日，東京都立大）

共通テーマ：ケインズ，ナイト，戦間期経済

- 1 J.M.ケインズの政治・経済思想と新自由主義——ケインズとホブソン—— 八田幸二（中央大・院）
- 2 British Economic Historians and the Study of J. M. Keynes's Economic Ideas in the 1930s Alan Booth (Univ. of Exeter/Hitotshubashi Univ.)
- 3 フランク・ナイトにおける市場経済の倫理的検討 佐藤方宜（慶応義塾大・院）

同・第2回例会（1999年9月11日、中央大駿河台会館）

- 1 初期J.S.ミルの社会改革思想における教育の意義 野田邦彦（青山学院大・院）
- 2 フェスロンの経済思想 森村敏己（一橋大）
- 3 Towards a History of Education: Hobbes, Smith and Bentham
Prof. Marco Guidi (Universita di Brescia, Italy)

同・第3回例会（2000年3月20日、青山学院大総研ビル）

- 1 1840年代のアメリカにおけるフリーエ主義——同時代の株式会社を巡る諸言説との対比—— 石塚幸太郎（一橋大・院）
- 2 マンデヴィルの分業メカニズム——『悪徳』概念の認識論的側面——
中野聡子（明治学院大）
- 3 Thought Experiments in the Writings of the Older Austrian School
of Economics: Menger, Wieser, Boehm-Bawerk, von Mises, and
Rothbard Professor Laurence S. Moss (Babson College)

予定討論者：塘 茂樹（京都産業大）

中山智香子（熊本大）

4 関西部会

沿革と現状

関西部会は1952年秋の経済学史学会第6回大会で承認され、同年12月13日に関西学院大学で第1回の例会を開いた。例会は長年、春秋冬と年3回ずつ開催され、1963年からは、そのうちの春の例会が部会大会と位置づけられるようになった。通例の例会は、自由論題が中心であるが、部会大会では、しばしば共通論題をたててセッションが組織されている。また、海外研究者の講演がプログラムに組み込まれることもある。しかし、1990年代に入ると、各大学の学期や入試の多様化から秋の例会を設定することに支障が大きくなったので、1995年から秋の例会をなくし、5～6月と12月の土曜日の年2回開催となって現在にいたっている。

関西部会は近畿2府5県のほかに、愛知、岐阜、福井、石川、富山の中部地方、岡山、鳥取、徳島、愛媛、高知の中四国地方の一部をカヴァーしてい

る。会員数は、2000年3月現在、257人である（学協会サポートセンター調べ）。例会開催地は、はじめ、京都地区、大阪地区、神戸地区でまわりもちに選定されていたが、1987年からは中部地区がこれに加わった。設立以来数年の間は、事務局を関西学院におきながら、出口勇蔵、小谷義次、久保芳和の3会員が、それぞれ京都、大阪、神戸の3地区を代表する部会幹事として運営にあたった。1958年以来、部会幹事は原則として2年任期で交代することになり、事務局もまわりもちになった。また、中部地区も例会開催のローテーションに加わって以来、部会幹事を出して運営に参加している。

関西部会の初期の活動として記録に留められるべきことは、『経済学史学会年報』が発行される前の1959年から1963年にかけて『関西部会通信』を12号刊行して、その先駆けをしたことである。これは当時関西大学に所属していた杉原四郎会員のイニシアティブによるところが大きい。

1980年に刊行された『経済学史学会30年史』の当部会の回顧においては、1963年までが「部会の成立と成長への努力がなされた時期」、そのあと1973年までの10年間が、部会大会の共通論題に重点がおかれた「実質的充実への努力の期間」と特徴づけたうえで、それ以後の時期については「敢えて言えば多様化の時期」とされている。1970年代半ばには、すでに部会大会において会員全体に魅力を感じさせる共通論題の設定に困難が感じられるようになったとのことである。部会大会における共通論題の設定は、1980年代後半以後に再び活発になった時期がある。これは、人数が多いだけでなく、ある程度共通の時代感覚をもった団塊世代の研究者が部会活動の中心に成長したことを反映しているのではないだろうか。

しかし、1980、90年代は研究の対象、方法、準拠枠組みに置ける「多様化」がますます進行した時期でもある。古典派およびマルクス理論という経済学史研究におけるかつての中心軸が失われていくなかで、若手の経済学史・思想史研究者は、専門性は高いものの、より少数で分散しているように思える。また、学会が創立されて半世紀を経過するなかで、かつては常連であった年配会員の顔ぶれにも欠席が目立つようになった。こうした多様化と世代ごとの分極化のなかでは、例会の報告が、特定のテーマや領域に集中した場合には、それに関心をもたない会員の足を遠ざけることにもなりかねな

い。そのため、部会大会で共通論題が設定されることが少なくなり、また通常の例会においても研究報告の組み合わせに工夫をこらさなければならなくなっている。

最近では、通常の例会では2件、部会大会の際には3件の研究報告がなされている。参加者は少ない時は20人程度、多い時で40～50人程度である。ときに鋭い質疑応答がなされるが、学問をともに愛する研究者のコミュニティの雰囲気はつねに維持されている。コーヒー・ブレイクの際の歓談も楽しみである。

本部会のような個々の大学を超えた研究会は、確立した研究者にとってだけでなく、大学院生を含む若手研究者にとっても貴重である。というのは、近年進展している大学院の整備ないし重点化は、個々の大学ごとに研究者の育成が閉鎖的になる危険をも蔵しているからである。部会は、確立した研究者の相互交流の場であるとともに、若手研究者を成長させる場でもある。その点では、例会の研究報告と討論の前と後の段階も含めて、実質的な討論を充実させることが望まれる。本部会は1999年度までに137回の例会をつみ重ねた蓄積をもっているが、研究の多様化と世代的な差異をのりこえた経済学史・経済思想史研究のフォーラム（広場）とするための努力がなおも継続されなければならないだろう。（八木紀一郎）

研究報告

第1回（1952〔昭和27〕年12月13日 関西学院大）

J. S. Mill の経済政策について 福原行三（浪速大）

第2回（1953〔昭和28〕年2月7日 同志社大）

French Mercantilism Charles Woolsey Cole

第3回（1953〔昭和28〕年6月20日 大阪市立大）

1 壙太利学派生成期における若干の方法的問題 林 治一（神戸大）

2 マブリ研究 田中真晴（京都大）

第4回（1953〔昭和28〕年9月26日 立命館大）

1 フォイエルバッハと市民革命 平井俊彦（京都大）

2 商品の端緒的二重性 梯 明秀（立命館大）

第5回（1954〔昭和29〕年2月20日 神戸大）

- 1 『資本論』における利潤率についての一考察 和田貞夫 (浪速大)
- 2 トーマス社会論の存在論的基礎 野尻武敏 (神戸大)

第6回 (1954〔昭和29〕年6月26日 大阪女子大)

- 1 経済学史の対象と課題 白杉庄一郎 (滋賀大)
- 2 経済学史の方法 出口勇蔵 (京都大)

第7回 (1954〔昭和29〕年9月25日 京都大)

共通論題 経済学史の研究方法 (シンポジウム)

- 1 島津亮二 (京都大)
- 2 林 治一 (神戸大)
- 3 相沢秀一 (大阪市立大)

第8回 (1955〔昭和30〕年2月26日 関西学院大)

- 1 ミルトンの社会思想 豆本 薫 (滋賀大)
- 2 マンデヴィルとスミス 田中敏弘 (関西学院大)

第9回 (1955〔昭和30〕年6月18日 関西大)

リカードウ理論の性格 松尾 博 (滋賀大)

第10回 (1955〔昭和30〕年10月1日 同志社大)

初期重商主義についての一考察 白杉庄一郎 (滋賀大)

第11回 (1956〔昭和31〕年1月28日 甲南大)

スミスの富裕進歩論について 宮内 博 (関西学院大)

第12回 (1956〔昭和31〕年6月30日 大阪市立大)

リカードウの再生産論 入江 奨 (松山商科大)

第13回 (1956〔昭和31〕年9月29日 京都大)

資本蓄積及び恐慌にかんするリカードウの理論について 松田弘三 (立命館大)

第14回 (1957〔昭和32〕年2月16日 神戸大)

堀 経夫博士還暦記念論文集『古典派経済学の研究』について (書評)
行沢健三 (関西学院大)

第15回 (1957〔昭和32〕年9月28日 大阪女子大)

ミーク『労働価値説研究』について

- 1 アダム・スミス (第2章) を中心として 田中真晴 (京都大)

2 第3章以降 宮本義男 (和歌山大)

第16回 (1958〔昭和33〕年3月22日 立命館大)

クリフ・レスリーの経済学方法論——イギリス歴史学派の一研究——
岸田 理 (愛知学院大)

第17回 (1958〔昭和33〕年6月28日 甲南大)

リカアドウの価値論と分配論との関係についての一考察 中村一雄 (神戸大)

第18回 (1958〔昭和33〕年9月27日 関西大)

初期マルクスの一考察——経済学批判への端緒としての「ジェームズ・ミル評注」を中心として—— 重田晃一 (関西大)

第19回 (1959〔昭和34〕年1月31日 同志社大)

重商主義についての一つの問題——ジョン・ウイラーを中心として——
相見志郎 (同志社大)

第20回 (1959〔昭和34〕年6月27日 神戸商科大)

経済学史の方法について 高木正雄 (神戸商科大)

第21回 (1959〔昭和34〕年9月26日 大阪府立大)

- 1 眞実一男著『機械と失業』を読んで 豊倉三子雄 (関西学院大)
- 2 豊倉三子雄著『古典派恐慌論』を読んで 溝川喜一 (甲南大)

第22回 (1960〔昭和35〕年1月30日 滋賀大)

- 1 特別剰余価値と虚偽の社会的価値 白杉庄一郎 (滋賀大)
- 2 最近のヨーロッパ経済学界事情 水田 洋 (名古屋大)

第23回 (1960〔昭和35〕年6月25日 神戸大)

トレンズの価値論について 南方寛一 (神戸大)

第24回 (1960〔昭和35〕年10月1日 桃山学院大)

明治末期の米穀関税論争 梅津和郎 (大阪外国語大)

第25回 (1961〔昭和36〕年1月28日 立命館大)

- 1 商品論の展開方法について——宇野教授の所説によせて—— 岡崎
栄松 (立命館大)
- 2 ヒストリ・オヴ・アイディアの第1回国際学会に出席して 出口勇蔵
(京都大)

第26回 (1961〔昭和36〕年6月24日 甲南大)

A・H・ラザーシチェフ「ペテルブルグよりモスクワへの旅」 松田 勇
(大阪市青少年問題協議会)

第27回 (1961〔昭和36〕年9月30日 大阪市立大)

- 1 ジェームズ・ミルの初期の経済学について——『商業擁護論』における社会繁栄論と消費論を中心に—— 林 登良雄 (龍谷大)
- 2 フランスの印象 (スライド上映) 河野健二 (京都大)

第28回 (1962〔昭和37〕年1月27日 京都大)

- 1 ケネー経済表の分析 平田清明 (名古屋大)
- 2 『ミル評註』と『経哲手稿』 細見 英 (立命館大)

第29回 (1962〔昭和37〕年6月30日 関西学院大)

- 1 古典派賃金論 藤岡孝四郎 (大阪府立大)
- 2 Economic History Society 大会に出席して (国際学会出席報告) 水田 洋 (名古屋大)

第30回 (1962〔昭和37〕年9月22日 桃山学院大)

マルサスの資本蓄積と恐慌 橋本比登志 (関西学院大)

第31回 (1963〔昭和38〕年1月26日 同志社大)

使用価値の捨象について——岡崎栄松氏による白杉教授批判の検討——
吉田茂芳 (竜谷大)

第32回 (1963〔昭和38〕年5月26日 神戸大)

- 1 E. G. Wakefield の資本蓄積論——かれの古典学派への寄与についての一論—— 保坂直達 (神戸大)
- 2 ゴッドウインの古代ローマ的観念 大久保嘉三 (大阪学院大)
- 3 アメリカにおけるマックス・ウェーバー研究 (Max Weber Research in America) (講演) Hans H. Gerth (ウイスコンシン大)

第33回 (1963〔昭和38〕年9月28日 大阪外国語大)

- 1 J・S・ミルの財産論についての一考察 松山昌司 (南山大)
- 2 わが国の古典派経済学研究史について 杉原四郎 (関西大)

第34回 (1964〔昭和39〕年1月25日 神戸商科大)

- 1 ナロードニキのロシア資本主義没落論——ヴォロンツォフのばあ

い—— 松岡 保 (京都大)

2 マーシャルにおける生物学的概念 南方寛一 (神戸大)

第35回 (1964〔昭和39〕年5月31日 関西大)

共通論題 19世紀末のイギリス経済思想をめぐって

1 経済学『革新』期における連続的要因と非連続的要因—— W.S.

ジェヴォンズについて—— 入江 奨 (松山商科大)

2 マーシャルにおける経済成長観 菱山 泉 (京都大)

3 ウイリアム・モリスの社会主義論 木村正身 (香川大)

第36回 (1964〔昭和39〕年9月26日 滋賀大)

1 『国富論』における政策分析ノート 和田重司 (大阪経済大)

2 景気分析の基本問題—— 1つの学史的・比較論的考察—— 永友育
雄 (桃山学院大)

第37回 (1965〔昭和40〕年1月23日 桃山学院大)

1 マーシャル外部経済論について 斧田好雄 (関西学院大)

2 ヴェブレン経済学の思想的背景 中山 大 (甲南大)

第38回 (1965〔昭和40〕年6月13日 京都大)

共通論題 各国におけるイギリス古典学派の導入と展開

1 日本におけるスミス 山崎 怜 (香川大)

2 日本におけるリカード 真実一男 (大阪市立大)

3 ドイツにおけるイギリス古典学派の導入と展開 山口和男 (甲南
大)・細見 英 (立命館大)

4 アメリカにおけるイギリス古典学派の導入と展開 三辺清一郎 (桃山
学院大)

5 フランスにおけるイギリス古典学派の導入と展開 溝川喜一 (京都
大)

討論 司会者 岸本誠二郎・杉原四郎・出口勇蔵・水田 洋

第39回 (1965〔昭和40〕年11月27日 甲南大)

1 19世紀アメリカ経済学における保守と革新 久保芳和 (関西学院大)

2 学史研究の一動向—— 原蓄と重商主義論 河野健二 (京都大)

第40回 (1966〔昭和41〕年1月29日 立命館大)

- 1 プレハーノフの著作刊行史と研究史について 田中真晴（京都大）
- 2 宇野弘蔵教授の『原理論』とくに『流通論』の方法について 佐藤金三郎（大阪市立大）

第41回（1966〔昭和41〕年5月28日 関西学院大）

共通論題 マルクスと諸思想の交錯

- 1 プルードンとマルクス 坂本慶一（龍谷大）
- 2 ボエーム・バヴェルクとマルクス 林 治一（神戸大）
- 3 ヴェブレンとマルクス 松尾 博（滋賀大）

総括 出口勇蔵（京都大）

第42回（1966〔昭和41〕年9月17日 大阪経済大）

- 1 労働力範疇の吟味——形成史的に 高橋正立（龍谷大）
- 2 マルサス『人口論』における労働ファンダ論 羽鳥卓也（岡山大）

第43回（1967〔昭和42〕年1月28日 神戸商科大）

- 1 マックス・ウェーバーにおける合理性の問題 大林信治（神戸商科大）
- 2 トマス・アクィナスによる私有制基礎づけの論拠について 野尻武敏（神戸大）

第44回（1967〔昭和42〕年5月27日 桃山学院大）

共通論題 現代マルクス主義の思想史的背景

- 1 後期マルクス研究の現状と問題点 杉原四郎（関西大）
- 2 ドイツ・マルクス主義
ベルンシュタイン 久松俊一（京都大）
ローザ・ルクセンブルク 竹本信弘（京都大）
- 3 ロシア・マルクス主義 田中真晴（京都大）

総合討論 司会者 河野健二（京都大）・羽鳥卓也（岡山大）

第45回（1967〔昭和42〕年9月23日 龍谷大）

- 1 マルクスの資本蓄積論の形成について 大津定美（龍谷大）
- 2 貨幣本質論の一考察——ベンディクセンの名目主義的貨幣理論を中心—— 三上正之（大阪産業大）

第46回（1968〔昭和43〕年1月27日 関西大）

1 経済思想家としてのパークリー——「パークリー論争」をめぐって—— 戒田郁夫（関西大）

2 合評 経済学史学会編『資本論の成立』

問題提起者 平井俊彦（京都大）・宮本義男（和歌山大）

第47回（1968〔昭和43〕年5月25日 同志社大）

1 スミス研究の一視点——社会主義の立場より—— 見野貞夫（近畿大）

2 マルクスにおける資本回転論の生成——『要綱』の流動資本・固定資本をめぐって—— 山田鋭夫（名古屋大）

共通論題 明治期の社会経済思想

司会 河野健二（京都大）

3 田口卯吉の資本主義論 溝川喜一（京都大）

4 社会政策学会の成立についての一考察——金井・桑田・高野を中心に—— 坂本武人（同志社女子大）

5 明治期の人口思想 市原亮平（関西大）

第48回（1968〔昭和43〕年9月28日 神戸大）

1 ヘンリー・ジョージの地代論 山壽義三郎（神戸大）

2 リカードの資本理論 森 茂也（南山大）

第49回（1969〔昭和44〕年2月1日 立命館大）

シュンペーター体系の再検討 浜崎正規（立命館大）

（なお、次に予定されていた 田川恒夫会員（京都大）の報告「オーストリア・マルクス主義の民族理論——オットー・バウアーを中心として」は行なわれず、同会員が「大学問題」について問題提起を行ない、討論会に切りかえられた。）

第50回（1969〔昭和44〕年5月31日 甲南大）

共通論題 経済学史・社会思想史における1930年代

1 問題提起 水田 洋（名古屋大）

2 マルクス経済学における1930年代 細見 英（立命館大）

3 近代経済学における1930年代 永友育雄（桃山学院大）

討論・総括 司会者 岸本誠二郎（國學院大）・田中真晴（京都大）

第51回 (1969〔昭和44〕年10月25日 大阪府立大)

- 1 レオン・ワルラスの土地国有論 立半雄彦 (大阪府立大)
- 2 資本論における賃労働分析と国家 和田重司 (大阪経済大)

第52回 (1970〔昭和45〕年2月21日 神戸大)

- 1 ヒルデブランドの価値論 橋本昭一 (関西大)
- 2 リカードの価値論と分配論 南方寛一 (神戸大)

第53回 (1970〔昭和45〕年5月30日 大阪府立大)

- 1 価値論の再検討——リカードの価値理論とワルラス的価値理論——
服部容教 (大阪府立大)

共通論題 海外における経済学史研究

- 2 ボルドー大学——J.B.セー紀行など—— 橋本比登志 (四国学院大)
- 3 ケンブリッジ大学——最近の動向など 菱山 泉 (京都大)
- 4 モスクワ ML 研究所——ME 遺稿の出版など—— 佐藤金三郎 (大阪市立大)

共同討論

第54回 (1970〔昭和45〕年9月26日 京都大)

- 1 市民革命の経済理論——ロック経済理論の意義—— 稲村 勲 (立命館大)
- 2 三月前=革命期におけるフォイエルバッハの問題 寺田光雄 (名古屋大)

第55回 (1971〔昭和46〕年1月30日 大阪産業大)

- 1 ヒルファーディングの帝国主義論——『金融資本論』の成立過程、
特徴、位置について 保住敏彦 (大阪商業大)
- 2 アムステルダム社会史国際研究所の成立について 山口和男 (甲南大)

第56回 (1971〔昭和46〕年5月29日 龍谷大)

- 1 リカードウにおける資本蓄積論と貨幣信用論 千賀重義 (名古屋大)

共通論題 近代経済学生成期の諸問題

- 2 ローザンヌ学派の現代的反省——ワルラスの一般均衡理論を中心と

して—— 山下 博 (同志社大)

3 新古典学派の意義と特徴—— 古典学派との対比を中心として——
南方寛一 (神戸大)

4 オーストリア学派成立の歴史的背景とその理論的特徴—— 主として
C.メンガーを中心とする周辺の考察—— 末永隆甫 (大阪市立大)

討論

司会者 菱山 泉 (京都大)・杉原四郎 (関西大)・林 治一 (神戸大)

第57回 (1971〔昭和46〕年10月9日 神戸大)

1 マーシャルと経済学の歩み—— 近代経済学100年の意義—— 保坂
直達 (神戸商科大)

2 新厚生経済学の成立 植松忠博 (京都大)

第58回 (1972〔昭和47〕年1月29日 京都社会福祉会館 当番校 同志社大)

1 平和的帝国主義論と帝国主義的経済主義—— SPDの帝国主義認
識—— 大野節夫 (同志社大)

2 ロシア論におけるマルクスとエンゲルス 淡路憲治 (岡山大)

第59回 (1972〔昭和47〕年6月10日 神戸商科大)

1 近代経済学からみたリカードウについて 服部容教 (大阪府立大)

2 わが国における最近のリカードウ研究 中村廣治 (大分大)

3 リカードウ研究50年を顧みて (講演) 堀 経夫 (芦屋大)

第60回 (1972〔昭和47〕年9月30日 関西大)

1 『ドイツ・イデオロギー』再論—— 「哲学意識」批判としての『ド
イツ・イデオロギー』—— 重田晃一 (関西大)

2 V.パレートにおける経済学と社会学—— 社会的効用理論を中心とし
て—— 松嶋敦茂 (滋賀大)

第61回 (1973〔昭和48〕年1月20日 関西学院大)

1 労働者による産業管理思想について—— G. D. H. コールのギルド社
会主義を中心に—— 三浦愛三 (名古屋大)

2 アダム・スミスにおける「同感」と「観察者」 篠原 久 (関西学院
大)

第62回 (1973〔昭和48〕年5月26日 大阪府立大)

- 1 ジョナサン・スウィフトとアイルランド通貨問題 守矢 洋 (大阪市立大)
- 2 ヒルデブランドの経済発展段階論 橋本昭一 (関西大)
- 3 現代ヨーロッパにおけるルカーチとフランクフルト学派研究 平井俊彦 (京都大)
- 4 トロント大学におけるミル父子記念学会について 杉原四郎 (甲南大)

第63回 (1973〔昭和48〕年10月6日 滋賀大)

- 1 J.S.ミルと現代——没後100年に寄せて—— (公開講演) 杉原四郎 (甲南大)
- 2 J.S.ミル経済学試論集第5論文について 長谷川隆彦 (関西外国語大)
- 3 ミルとオーエン 永井義雄 (金沢大)

第64回 (1974〔昭和49〕年1月26日 大阪大)

- 1 価値の生産価格への「転化問題」をめぐって 津戸正広 (大阪府立大)
- 2 1880年代から1890年代のイギリス社会主義——ハインドマンと社会民主連盟の評価をめぐって—— 安川悦子 (名古屋市立女子短期大)

第65回 (1974〔昭和49〕年5月25日 立命館大)

- 1 マルクス思想の出発点——『学位論文』と『準備ノート』を中心として—— 正木八郎 (大阪市立大)
- 2 W.S.ジェボンズの科学方法論——J.S.ミル批判の一側面——井上琢智 (関西学院大)
- 3 W.バジヨットの古典派経済学把握 岸田 理 (龍谷大)

第66回 (1974〔昭和49〕年9月28日 甲南大)

- 1 ジョン・ロックの財産論の歴史的意義——かれの労働観に関連して—— 生越利昭 (神戸商科大)
- 2 リカードウ「比較生産費説」の原型理解と変型理解 行沢健三 (京都大)

第67回 (1975〔昭和50〕年1月25日 京都大)

- 1 マルクスの労働価値説 梅沢直樹 (京都大)
- 2 「ナポレオンの観念」について 河野健二 (京都大)

第68回 (1975〔昭和50〕年5月24日 神戸大)

- 1 スラフファ評価をめぐる若干の論争について 松本有一 (大阪市立大)
- 2 メンガーと「限界革命」 上宮正一郎 (神戸大)
- 3 J.B.クラークと限界主義 田中敏弘 (関西学院大)

第69回 (1975〔昭和50〕年10月4日 関西大)

- 1 リカードウとマルサスとの利潤論争——両者の『諸原理』を中心として—— 岡本祐次 (三重短期大)
- 2 スラフファとマルクス——価値と価格を中心として—— 岡本義行 (京都大)

第70回 (1976〔昭和51〕年1月24日 神戸商科大)

- 1 ホップズ社会哲学の成立過程 田中秀夫 (京都大)
- 2 マーシャルの派生需要論——『経済学原理』の改訂との関連で—— 磯川 曠 (近畿大)

第71回 (1976〔昭和51〕年5月29日 大阪市立大)

- 1 J.ステュアート『経済学原理』における市民社会成立史論——A.スミスとの関連において—— 飯塚正朝 (大阪市立大)
- 2 『道徳感情論』についての一考察 天羽康夫 (高知大)
- 3 スミスの「富裕の自然的コース」についての一試論 関 劭 (神戸学院大)

シンポジウム 司会者 羽鳥卓也 (岡山大)・田中敏弘 (関西学院大)

第72回 (1976〔昭和51〕年10月2日 龍谷大)

- 1 日本における近代経済学——その方法論的一断面—— 葛西孝平 (京都教育大)
- 2 フェッラーラの経済学説について 橋本比登志 (京都産業大)

第73回 (1977〔昭和52〕年1月22日 近畿大)

- 1 マルクス利潤率低下論 若森章孝 (関西大)

- 2 ミル「生産分配二分論」と『原理』の構成について 熊谷次郎 (桃山学院大)

第74回 (1977〔昭和52〕年4月4日 京都大)

- 1 マルクスの「価値の生産価格への転化」について——特に『資本論』第3部の論理次元と競争との関連から——伊藤正純 (名古屋大)
- 2 1814年のリカードウの利潤率低下論 羽鳥卓也 (岡山大)
- 3 Karl Marx and Piero Sraffa (講演) R. L. Meek

第75回 (1977〔昭和52〕年9月24日 神戸大)

- 1 S. ベイリーの価値論と60年代初頭のマルクス 竹永 進 (大阪市立大)
- 2 A. ワルラスの稀少性について 中久保邦夫 (神戸大)

第76回 (1978〔昭和53〕年1月28日 京都産業大)

- 1 リカードウ=マルサスの恐慌論争 佐久間英明 (京都大)
- 2 地代論と生産価格・市場価値論——『資本論』成立史の側面から——松尾 博 (滋賀大)

第77回 (1978〔昭和53〕年4月3日 関西学院大)

- 1 リカードウの賃金論——労働の自然価格と市場価格を中心として——丸山武志 (大阪市立大)
- 2 アルフレッド・マーシャルの限界生産力説について 坂口正志 (富山大)
- 3 ウェーバーの貨幣論 田中真晴 (甲南大)
- 4 Adam Smith: The Functions of Government (講演) Andrew S. Skinner (Univ. of Glasgow)

第78回 (1978〔昭和53〕年9月16日 大阪経済大)

- 1 『諸国民の富』第3編の政治史的接近 久保田克美 (大阪経済大)
- 2 ノミナリズムの貨幣認識と労働貨幣論批判——マルクス価値形態論の生成——齊藤日出治 (名古屋大)

第79回 (1979〔昭和54〕年1月27日 神戸学院大)

- 1 J. F. ブレイの社会的権力論 岸 徹 (京都大)

2 スラッフアの標準商品の実証 宮本順介 (神戸商科大)

第80回 (1979〔昭和54〕年5月26日 関西大)

- 1 相対的剰余価値の諸生産方法について——相対的剰余価値論の成立と発展にそって—— 佐武弘章 (大阪社会事業短期大)
- 2 領有法則の転回と再生産表式 安孫子誠男 (京都大)
- 3 『国富論』第3・4編の関連についての一考察——現状批判としての「哲学的歴史」の方法—— 渡辺恵一 (大阪市立大)

第81回 (1979〔昭和54年9月29日 京都教育大)

- 1 パレートにおける『合理性』の意義について 松嶋敦茂 (滋賀大)
- 2 限界費用論とケインズの価格論 菅野英機 (天理大)

第82回 (1980〔昭和55年1月19日 阪南大)

- 1 ヒュームのアメリカ論——ヒューム『書簡集』より—— 田中秀夫 (京都大)
- 2 価値形態論の形成 尼寺義弘 (阪南大)

第83回 (1980年度部会大会, 1980年5月31日, 同志社大)

- 1 マーシャルのヴィジョンと企業理論について 出口康博 (大阪府立大・院)
- 2 共通論題:『小林昇経済学史著作集』をめぐって
 - (1) 司会者のことば 杉原四郎 (甲南大)
 - (2) 重商主義 田中敏弘 (関西学院大)
 - (3) ステュアート 山崎 怜 (香川大)
 - (4) スミス 羽鳥卓也 (岡山大)
 - (5) リスト 田中真晴 (甲南大)

第84回 (1980年9月27日, 神戸大)

- 1 穀物法論争とマルサス 横山照樹 (同志社大)
- 2 レーニンのロシア社会認識——後発資本主義把握の方法に関連して—— 太田仁樹 (名古屋大)

第85回 (1981年1月31日, 立命館大)

- 1 経済学史の意義と方法 上野俊樹 (立命館大)
- 2 ロシアにおける農民経済研究 小島修一 (甲南大)

第86回 (1981年度部会大会, 1981年5月30日, 甲南大)

- 1 古典派経済学の形成と国家破産 北村裕明 (京都大・院)
- 2 スミス植民地論の一考察——スミス・アメリカ植民地論の一解釈—— 渡辺邦博 (大阪市立大・院)
- 3 共通論題: 教科としての経済学史
 - (1) 日本の場合 溝川喜一 (京都大)
 - (2) イギリスその他の場合 山崎 怜 (香川大)
 - (3) フランスの場合 橋本比登志 (京都産業大)
 - (4) アメリカ合衆国の場合 田中敏弘 (関西学院大)
 - (5) 予定発言 真実一男 (大阪市立大)
 - (6) 予定発言 田中真晴 (甲南大)

第87回 (1981年9月26日, 大阪商業大)

- 1 アダム・スミスの学問論とヒューム哲学 生越利明 (神戸商科大)
- 2 正徳4年の貨幣改鑄思想——新井白石の思想を中心に—— 藤井定義 (大阪府立大)

第88回 (1982年1月30日, 神戸女学院大)

- 1 イギリス新自由主義と社会改良——世紀転換期における「社会問題」の把握をめぐる—— 安保則夫 (関西学院大)
- 2 企業理論の必要性和現状における問題点 吉見政志 (京都学園大)

第89回 (1982年度部会大会, 1982年5月29日, 関西大)

- 1 リカードウ地代論形成史の一側面——「農業投資の有利性」命題をめぐる—— 羽鳥卓也 (岡山大)
- 2 共通論題: 『資本論』と第3世界研究
 - (1) 資本の国際化と資本循環論——C. パロワの所説によせて—— 奥村和久 (京都大)
 - (2) 生産様式接合の理論と『資本論』 若森章孝 (関西大)

特別講演: A. S. Skinner, Adam Smith: Rhetoric and Communication of Ideas.

第90回 (1982年9月25日, 岡山大)

- 1 リカードウ穀物モデル分配論をめぐる羽鳥説とホランダール説

中村廣治（広島大）

- 2 資本循環論における商品資本分析 清水耕一（同志社大）
- 3 ベーム＝バヴェルク資本理論の形成過程——資料紹介を中心に
して—— 八木紀一郎（岡山大）

第91回（1983年1月22日，大阪府立大）

- 1 マルサス理論の一考察——『人口原理』と『経済学原理』との内的
関連を中心として 柳田芳伸（関西大）
- 2 現代資本主義社会における恐慌論の意義 三好愛子（四国女子大）

第92回（1983年度部会大会，1983年5月28日，滋賀大）

- 1 『国富論』における銀価変動の意義について 渡辺邦博（大阪市立
大）
- 2 シュムペーターと資本主義の将来 大野忠男（追手門学院大）
- 3 マルクス，エンゲルスと農民 星野 中（大阪市立大）

第93回（1983年9月24日，神戸商科大）

- 1 マルティン・ルターの経済思想について——公正価格論を中心
に—— 鍛冶直紀（大阪大）
- 2 マルサスにおける自然法思想と功利主義思想——『人口論』を中心
として—— 大村照夫（名古屋学院大）

第94回（1984年1月21日，京都大楽友会館）

- 1 マルクス生産価格論の再検討 梅沢直樹（滋賀大）
- 2 パスティアとミル経済学 長谷川隆彦（福山大）

なお，A. W. Coats（Nottingham Univ.）の講演が次のように行われた。

- (1) Economists in Government（1983年11月1日，大阪市立大文化交流
センター）
- (2) Recent Developments in the Methodology of Economics（11月4
日，甲南大）
- (3) The Past, Present, and Future of American Institutionalism（11月7
日，関西学院大）

第95回（1984年度部会大会，1984年5月19日，神戸大）

共通論題：マーシャルとケインズ——ケンブリッジ学派をめぐって——

- 1 マーシャルの一日本人翻訳者あて手紙 橋本昭一 (関西大)
- 2 ケインズ学説における資産選択と有効需要——企業者 vs 資産家—— 黒木龍三 (京大)
- 3 ケインズと古典派の公準 服部容教 (大阪市立大)

第96回 (1984年9月22日, 近畿大)

- 1 スミス価値論の理論構造 新村 聡 (岡山大)
- 2 マルクス価値形態論の課題と問題点 吉田 紘 (静岡女子短大)

第97回 (1985年1月19日, 関西学院大)

- 1 第一次大戦下のヒルファディング 河野裕康 (金城学院大)
- 2 マカロックにおける機械問題の展開——現状分析としての意義—— 野原秀次 (同志社大)

特別講演会 (1984年10月5日, 京都産業大)

M. Blaug: Marx と Schumpeter における企業家

第98回 (1985年度部会大会, 1985年5月25日, 桃山学院大)

共通論題: マルサス

- 1 『人口論』における農業保護論の検討 横山照樹 (同志社大)
コメンテーター 大村照夫 (名古屋学院大)
- 2 価値尺度論争史上のマルサス 中矢俊博 (南山大)
コメンテーター 中村廣治 (広島大)
- 3 マルサスの「人口原理」における論理について——『人口論』と経済学との関連—— 入江 奨 (松山商科大)
コメンテーター 柳田芳伸 (関西大)

第99回 (1985年9月28日, 龍谷大)

- 1 フランシス・A. ウォーカーの経済思想と初期マーシャルの経済学説 西岡幹雄 (同志社大)
- 2 F. ムロンとフランス古典経済学 大田一廣 (阪南大)

第100回 (1986年1月18日, 大阪市立大)

- 1 イギリス社会科学振興協会について 井上琢智 (関西学院大)
- 2 ドイツ社会民主党における「マルクス＝ラサール問題」 松岡利道 (龍谷大)

第101回（1986年度部会大会，1986年5月31日，立命館大）

共通論題：20世紀前半のマルクス主義の諸潮流

- 1 カウツキー主義の形成とその特徴 保住敏彦（愛知大）
- 2 オットー・バウアーとオーストロ・マルクス主義 上条 勇（金沢大）
- 3 アントン・パネクークのレーテ思想 内田 博（名古屋経済大）

第102回（1986年9月22日，神戸学院大）

- 1 シスモンディの経済学——マクロ動学による分析—— 堂目卓生（京都大）
- 2 宇野利右衛門と工業教育会の思想——日本における近代的労働＝生活過程像の成立—— 杉原 薫（ロンドン大）

第103回（1987年1月17日，同志社女子大）

- 1 商品世界の成立と価値形態論——マルクスにおける商品世界批判とその基礎づけ—— 遠山弘徳（大阪市立大・院）
- 2 価値の生産価格への転化——『資本論』第3部第10章草稿での構想の発掘—— 大野節夫（同志社大）

第104回（1987年度部会大会，1987年5月23日，関西学院大）

- 1 J. ステュアートの『経済学原理』について 竹本 洋（大阪経済大）
- 2 19世紀末の自由貿易論 熊谷次郎（桃山学院大）
- 3 『産業経済学』から『経済学原理』へ——マーシャル経済思想の展開—— 橋本昭一（関西大）

第105回（1987年9月25日，大阪産業大）

- 1 『一般理論』における投資関数の形成過程について 林田治男（大阪産業大）
- 2 ロードベルトウスの近代社会形成論 溝端 剛（京都大・院）

第106回（1988年1月30日，神戸大）

- 1 マルサス人口波動論の構造と意義 中西泰之（学振）
- 2 19世紀末イギリスにおける貧困問題認識について 安保則夫（関西学院大）

第107回（1988年度部会大会，1988年5月28日，大阪府立大）

- 1 ジョン・ローの信用論 二階堂達郎 (京都大・院)
- 2 ケインズ理論と貸付資金説 服部容教 (大阪市立大)
- 3 特別報告 Prof. Donald Winch (University of Sussex, UK): The Uses and Abuses of the History of the Social Sciences

第108回 (1988年9月11日, 愛知学院大)

- 1 若き J.S. ミルの思想形成における問題点——精神的危機から1840年頃まで—— 山辺知紀 (金沢大)
- 2 パルプス帝国主義論の現代的意義 田中良明 (愛知大)

第109回 (1989年1月28日, 近畿大)

- 1 ロバートソンとケインズにおける調整メカニズムの異同
—— *Banking Policy and Price Level* と *Treatise on Money* を中心に—— 吉田雅明 (京都大・院)
- 2 L. ワルラスと数学的手法 中久保邦夫 (尾道短大)

第110回 (1989年度部会大会, 1989年5月27日, 京都大)

- 1 トマス・ペインの経済理論 中谷武雄 (徳島大)
- 2 ミニ・シンポジウム: 今世紀初頭における経済学の制度化
 - a. マーシャルとケンブリッジにおける経済学の制度化 橋本昭 (関西大)
 - b. 日本における商科大学の創設過程 西沢 保 (大阪市立大)

第111回 (1989年10月7日, 関西学院大)

- 1 アダム・スミスの「分業論」と「貨幣論」との関連について 越智良二 (松山大・院)
- 2 講座派と学史・思想史研究 杉原四郎 (関西大/甲南大・名誉)

第112回 (1990年1月20日, 滋賀大)

- 1 価値表現の論理——マルクス価値形態論と価値範疇—— 河合 夫 (大阪市立大)
- 2 「極大満足説」と功利主義経済学 松嶋淳茂 (滋賀大)

第113回 (1990年度部会大会, 1990年5月26日, 関西大)

特集 内田義彦の思想と学問

- 1 内田義彦とイギリス思想史研究 田中秀夫 (京都大)

2 内田義彦の近代フランス 安藤隆穂 (名古屋大)

3 マルクス主義と内田義彦 山田鋭夫 (名古屋大)

第114回 (1990年9月22日, 愛知大)

1 フランク・ナイトの社会哲学 山本貴之 (大阪大・院)

2 レギュレーション理論における市場・制度・国家——資本主義と民主主義—— 若森章孝 (関西大)

第115回 (1991年1月26日, 神戸商科大)

1 ウェップ夫妻の協同組合論の構造 藤井 透 (京都大・院)

2 解体期ナポリ啓蒙の諸側面——ヴィーコの復活とスミス及びルソーの反響を中心に—— 奥田 敬 (甲南大)

第116回 (1991年度部会大会, 1991年5月25日, 大阪経済大)

特集：市場・制度・国家をめぐって

1 アダム・スミスにおける市場・制度・国家 新村 聡 (岡山大)

2 メンガー三兄弟とオーストリア国家 八木紀一郎 (京都大)

3 ヴェブレンにおける《市場・制度・国家》——『営利企業の理論』と「不在所有」を中心に—— 高 哲男 (広島大)

第117回 (1991年9月21日, 京都学園大)

1 鎖国の思想——ケンペルとフィヒテ—— 溝端 剛 (大阪府立大・非)

2 シスモンディの著作をめぐって——ペッシャ町立図書館所蔵のシスモンディ・コレクションを中心に—— 小池 渺 (関西大)

第118回 (1992年1月25日, 姫路独協大)

1 ハロッドの経済動学体系の発展について 篠崎敏雄 (香川大)

2 カール・フォン・ロテックの社会契約論 坂 昌樹 (名古屋大)

第119回 (1992年6月5日, 同志社大)

共通テーマ：マルクス経済学と現代

1 社会主義像と思想の問題 田中真晴 (龍谷大)

2 「貨幣的価値論」の可能性 正木八郎 (大阪市立大)

3 マルクス経済学と近代化論 梅沢直樹 (滋賀大)

第120回 (1992年9月26日, 名古屋大)

- 1 ドイツ社会主義におけるアソツィアツィオン構想——C.F. グリープの場合—— 近田錠二 (日本福祉大・非)
- 2 ヴィクセルからケインズへ——投資主導の貨幣経済論とその生成—— 岡田元浩 (甲南大)

第121回 (1993年1月23日, 大阪市立大)

- 1 マルクスのサーヴィス論に関する諸説の再検討 飯田哲文 (同志社大・院)
- 2 ケイムブリジでのスラッファ——Sraffa Collectionを中心にして—— 松本有一 (関西学院大)

第122回 (1993年5月22日, 金沢大)

- 1 シャックルの不確実性下の意思決定の理論 依田高典 (京都大・院)
- 2 レドレールと『世論の理論』 安藤隆穂 (名古屋大)
- 3 オットー・バウアーと民族問題 上条 勇 (金沢大)

第123回 (1993年9月25日, 龍谷大)

- 1 労働と陶冶——J.S.ミルのモラル・サイエンス—— 松井名津 (大阪市立大・院)
- 2 貨幣による商品の取得のパラダイム 大野節夫 (同志社大)

第124回 (1994年1月29日, 神戸大)

- 1 経済進歩における労働者の役割——マーシャル経済学を中心として—— 近藤真司 (龍谷大)
- 2 マルサスと民衆教育 柳沢哲哉 (香川大)

第125回 (1994年5月28日, 桃山学院大)

- 1 John Stuart Mill's Wages Fund Recantation——A Lakatosian Analysis—— John Vint (Manchester Metropolitan Univ.)
- 2 シスモンディ価値論の再検討 岡久啓一 (大阪市立大・院)

第126回 (1994年9月24日, 名城大)

- 1 経済学の未成立——カントの所有権論—— 坂 昌樹 (桃山学院大)
- 2 J. ステュアート『経済の原理』第2編について 竹本 洋 (大阪経済大)

第127回 (1995年1月21日, 福井県立大)

- 1 マルサスの課税論 堂目卓生 (立命館大)
- 2 ヴィクセルの貨幣理論 河野良太 (松山大)

第128回 (1995年5月27日, 関西学院大)

- 1 貨幣生成論批判への一視角——宇野氏および山口氏の貨幣生成論について——片岡浩二 (大阪市立大・院)
- 2 ジョーン・ロビンソンの経済モデルにおける金利生活者の役割 服部茂幸 (奈良産業大)
- 3 ケネー研究の現状と課題——ケネー生誕300年記念国際シンポジウムに触れて——大田一廣 (阪南大)

第129回 (1995年12月9日, 大阪産業大)

- 1 ハイエクの貨幣経済論 江頭進 (京都大・院)
- 2 ボワイエ・モデルと制度分析——レギュレーション理論とカルドアの成長理論の交点をめぐって——中原隆幸 (名古屋市立大)
- 3 G. ガルニエの経済思想 喜多見洋 (大阪産業大)

第130回 (1996年6月1日, 京都大)

- 1 Ludwig M. Lachmann のラディカル主観主義について 浜田寅彦 (大阪市立大・院)
- 2 ケインズ没後50年——ノーベル経済学受賞者に見る現代経済学の流れ——根井雅弘 (京都大)
- 3 ケインズの企業者像 林田治男 (大阪産業大)

第131回 (1996年12月7日, 大阪市立大術交流会館)

- 1 初期バークの文明社会論——『カトリック教徒刑罰法論』の自然権論を基軸に——中澤信彦 (大阪市立大・院)
- 2 19世紀前半の経済学の大衆化——ホエートリとエリスの経済学教育の試みを中心として——上宮正一郎 (神戸大)

第132回 (1997年6月7日, 名古屋市立大)

- 1 アダム・スミスの『道徳感情論』と『諸国民の富』の比定——自然神学の観点から——村越好男 (国立豊田高専)
- 2 J. A. ホブスンにおける分配論と自由論 尾崎邦博 (名古屋大)

- 3 労働時間の経済学——個人史と社会史における生活時間の配分仮説—— 安藤金男（名古屋市立大）

第133回（1997年12月13日，甲南大）

- 1 経済思想史におけるモラル・エコノミー論の射程：ホント&イグナティエフ『『国富論』における必要と正義』再読 中澤信彦（大阪市立大・院）
- 2 アダム・スミスと租税転嫁論の政治学 渡辺恵・（京都学園大）

第134回（1998年5月30日，大阪大豊中キャンパス）

- 1 ピグー厚生経済学の形成過程 本郷 亮（関西学院大・院）
- 2 *The Keynes-Sraffa conception and the general equilibrium system* 岡田元浩（甲南大）
- 3 アナリティカル・マルクシズムについて 高増 明（大阪産業大）
- 4 ブルームズベリー・グループとメイナード・ケインズ——ヴァジニア・ウルフの誤解—— 中矢俊博（南山大）

第135回（1998年12月12日，滋賀大彦根キャンパス）

- 1 ビアトリス・ホッター（ウェブ）の協同組合論——初期ウェブの社会改革構想との関連で—— 江里口拓（愛知県立大）
- 2 カレツキと貨幣経済の理論 服部茂幸（奈良産業大）
- 3 ローザンヌ大学ワルラス文庫について 御崎加代子（滋賀大）

第136回（1999年5月29日，甲南大）

- 1 ヘンリー・マーティン（Henry Martin）の重商主義 熊谷次郎（桃山学院大）
- 2 ケインズのインフレーション論の学説史的意義——『貨幣改革論』の分析を中心として 西川弘展（大阪市立大・院）
- 3 第二次大戦後日本経済学の学術的環境（池尾愛子編『日本の経済学と経済学者』 八木紀一郎（京都大）

第137回（1999年12月18日，南山大）

- 1 アマルティア・センにおける公理的アプローチ——1970年代の貧困に関する指標の論議を素材として—— 松本将規（名古屋大・院）

2 市場経済と経済の組織化——ヒルファディングとポロックの見解をめぐって—— 保住敏彦（愛知大）

5 西南部会

発足の経緯と組織

西南部会は1956〔昭和31〕年1月21日に発足した。第12回大会（1955年11月5～6日、大阪市立大）に出席した会員を中心に、5日、同所で九州地方部会設立準備会を開き、設立の趣旨や時期、世話役校（九州大）等につき協議した。世話役校は準備会に出席しなかった会員の意向も打診し、56年1月21日に九州大学で経済学史学会九州地方部会（仮称）の第1回研究会を開いた。その総会で、以下の事項が協議・決定された。①名称を経済学史学会西南部会とし、広く中国・四国の一部（広島・山口、愛媛）の会員を含める。②年2、3回程度の例会をもつ。③（⑤の組織方針との関連から）年会費を200円にする。④部会幹事や幹事校を置かず、関係書類の整理や会の運営は主催校の持ち回りとし、自由で独立な研究者の協力組織とする。⑤研究分野や会員を狭く限定しない（地方部会のみを認める）。

例会の拡大と事務局の設置

第10回例会（1961〔昭和36〕年2月11日、大分大）で、連絡事務の便宜上、事務局を九州大学経済学部（高木暢哉研究室）に置き、合わせて幹事校（九州大、福岡大、西南大）と各大学より2名程度の代表者ないし委員を出して事務局を構成し、連合組織としての会の運営を保持することを申し合わせた。さらに、全国大会の年1回開催の決定に伴い、夏の例会を2日間とし、第2日目に有志による研究会をもつことにした。この研究会は第20回例会（1966〔昭和41〕年1月27日、八幡大）より例会ごとに行うことになり、第25回例会（1968〔昭和43〕年7月6～7日、大分大）より例会の一環として、2日目午前中を1論題についての研究討議の場とすることに決定した。

会員数の推移と運営の改善

発足当初の会員数は68名（本部会員37名）であったが、会員組織は多数の地方部会のみを会員を含み、専門分野も多岐にわたり、いわば学史を中心とする総合学会の観があった。また当時としては数少ない研究発表の場でも

あった。各種の学会活動が活発となり、部会活動も盛んになるにつれて学史・思想史の専門研究者の入会が増え、研究も次第に学史・思想史を中心とするようになったが、当初の組織の特性は現在も微かに継承されている。2000年3月現在の本部会員数は138名、部会会員数は38名である。

事務局は大学紛争時に一時（1969～70年）荒牧正憲会員の自宅に移されたが、再び九州大学経済学部・高木研究室に戻り、1974（昭和49）年からは荒牧研究室に引き継がれ、関源太郎研究室を経て、現在は高哲男研究室に置かれている。なお、1964〔昭和39〕年度から会計監査が正規に設けられた。

会員が増加するなかで研究活動の活発化を図るため、第34回例会（1973〔昭和48〕年1月27日、九州大）で中国・四国・九州の3ブロックで地区ごとに運営委員を決めたが、事務局依存の状態が続いたため、1994（平成6）年から再び地区ごとに運営委員（うち1人が部会世話人）を定め、そのメンバーが主体となって部会の運営にあたることになった。今回は中国・四国、北九州・大分、福岡、長崎・佐賀、熊本・宮崎、鹿児島・沖縄のブロックに分けて委員を出し、世話人は各地区の持ち回りとしている。

活動の現状

当初は多数の地方部会のみを会員を含み、経済理論・統計学・金融論・労働経済学等に関する研究報告も稀ではなく、いわば総合学会的特徴を持っていたが、現在はほとんどが学史・思想史分野の報告である。そうして全国大会と同様に、そのなかで多様化（スコットランド啓蒙、アメリカ経済思想史等）が進み、設立時の特徴はほぼ消失している。

部会活動の成果として特記すべきことは、第15回例会（1963〔昭和38〕年9月7日、長崎大）より重ねられた研究会での討議のなかから、会員の研究成果の確認と深化のための一里塚を作ってほしいという意見が出され、研究と討議を集約する経済学史学会西南部会編の著作を刊行したことである。『近代経済学史研究』（ミネルヴァ書房、1972〔昭和47〕年）および『経済学史研究』（ミネルヴァ書房、1973〔昭和48〕年）がそれである。いずれも（故）高木暢哉名誉会員の主導によるところが大きい。

従来、例会は原則として7月と1月に行われてきたが、入試の多様化等の理由から現在は6月と12月に開催している。このうち夏の例会は原則として

2日間とし、2日目に研究会を持つことに変わりはない。これはひとつ（1人）のテーマを半日間、充分時間を割いて報告・討議するものである。研究の多様化した近年では、それぞれの会員が研究成果を纏めた著作を次々に刊行しているため、それを著者が要約・紹介したうえで、合評する形をとることが多い。（中宮光隆）

研究報告

第1回（1956年1月21日 九州大）

- 1 リカアドウ経済学の構造 中村廣治（九州大）
- 2 穀物法論争におけるマルサスとリカアドウ 横溝軌一（西南学院大）
- 3 ケネーの賃金論 狭田喜義（広島大）

第2回（1956年6月9日 山口大）

- 1 重商主義解体時における東印度貿易論 藤本保太（山口大）
- 2 生産関係について 内田一男（山口大）
- 3 リカアドウの初期の経済理論の楽観的性格について 林登良雄（広島大）

第3回（1957年1月19日 福岡大）

- 1 人間関係論に関する一考察——E.メイヨーの思想について 副田満輝（九州大）
- 2 J.S.ミル社会思想の一考察 池田一浩（長崎大）
- 3 近代経済学の形成と発展
 - (イ) 特に限界原理を中心として 高木真助（山口大）
 - (ロ) 限界生産力説の発展に寄せて 狭田喜義（広島大）

第4回（1957年7月6日 九州大）

- 1 独占資本主義の諸問題——帝国主義論の方法について—— 馬場元二（久留米大）
- 2 効用理論の発展と社会的効用函数の決定について 有田一郎（熊本大）
- 3 労資関係論の位置づけ——経営民主主義の問題—— 川崎文治（長崎大）
- 4 労働価値論論争史の一齣 川口武彦（九州大）

第5回 (1958年1月25日 久留米大)

- 1 近世初頭におけるドイツの商業資本について 松田 緝 (久留米大)
- 2 金属流通と紙券流通——リカアドウ貨幣論の一考察—— 深町郁弥 (九州大)
- 3 過少消費説の現代的課題 前田豊昭 (広島大)
- 4 石川興二「創造的世界経済学序説」(『経済論叢』第80巻第4号)分析 有田一郎 (熊本大)

第6回 (1958年7月5・6日 広島大)

第1日

- 1 絶対主義と商業資本 山村延昭 (九州大)
- 2 労働価値説の一問題 長岡 豊 (福岡大)
- 3 トーマス・マンの経済理論 遠山 馨 (西南学院大)
- 4 ペティとフランクリンの価値論をめぐって 三辺清一郎 (尾道短期大)

第2日

再生産論について (自由討議) 建林正喜 (広島大), 高木暢哉 (九州大), 高木幸二郎 (九州大)

第7回 (1959年1月31日 西南学院大)

- 1 大塚教授の「信用関係の展開」について 川島信義 (九州大)
- 2 固定資本の回転と恐慌 建林正喜 (広島大)
- 3 信用学説の展開 高木暢哉 (九州大)

第8回 (1959年7月11日 長崎大)

- 1 貨幣取引資本について 菅 知彦 (鹿児島県立短期大)
- 2 マルクス経済学の方法に関する問題点 馬場元二 (久留米大)
- 3 利子付資本と信用理論——古典学派とマルクス—— 竹村脩一 (大分大)
- 4 適正価格論としての厚生経済学 高木真助 (山口大)

第9回 (1960年9月3日 福岡大)

- 1 ジェイムズ・ステュアートの銀行理論 川島信義 (九州大)
- 2 マーシャルの価値論について 宮崎喜代司 (久留米大)

- 3 チュルゴーにおける自由交易思想の展開 岩根典夫 (西南学院大)

第10回 (1961年2月11日 大分大)

- 1 シュムペーター革新理論の基本性格 岩野茂道 (九州大)
- 2 トーマス・マン「財宝論」の解釈をめぐって 遠山 馨 (西南学院大)
- 3 ヒックスの「賃銀論」について 西 太郎 (佐賀大)
- 4 ケネー賃銀論の性格について 狭田喜義 (広島大)
- 5 最近の欧米経済事情について 高木暢哉 (九州大)

第11回 (1961年7月8日 山口大)

- 1 経済学及び経済思想史観 高木真助 (山口大)
- 2 労働価値説からみたリカードウの貨幣論について 吹春寛一 (九州大)
- 3 マーシャルの分配論について 宮崎喜代司 (久留米大)
- 4 労働党の声明——進歩のための計画—— 本吉敬治 (福岡大)
- 5 産業の交替と技術選択 藤本保太 (山口大)

第12回 (1962年1月20日 西南学院大)

- 1 1793年恐慌とフランス・ベアリング 中村廣治 (大分大)
- 2 利潤率の傾向的低下の法則について 長岡 豊 (福岡大)
- 3 「グレシャムの法則」の学史的考察 岩松繁俊 (長崎大)
- 4 テュルゴー賃銀論の理論的構造 狭田喜義 (広島大)
- 5 学説の問題意識と体系の構造 長野敏一 (熊本商科大)

第13回 (1962年7月7日 熊本商科大)

- 1 金融資本の概念をめぐって 鈴木芳徳 (九州大)
- 2 貨幣の必然性について 竹村脩一 (大分大)
- 3 ケインジアン均衡組織の展開 武野秀樹 (九州大)
- 4 フランス主観主義価値説の誕生 岩野典夫 (西南学院大)

第14回 (1963年1月27日 九州大)

- 1 1620年代初期の経済政策 遠山 馨 (西南学院大)
- 2 価値形態の概念をめぐって 宮崎喜代司 (広島大)
- 3 景気分析の学史的考察 高木真助 (山口大)

- 4 ヨーロッパの印象 高木幸二郎 (九州大)

第15回 (1963年9月7日 長崎大)

- 1 分配の経済・経営の理論 川崎文治 (長崎大)
- 2 『資本論』体系と競争の展開について 逢坂 充 (九州大)
- 3 カルドアの成長理論について 河野善隆 (長崎県立短期大)
- 4 近代経済学の学史的考察 高木真助 (山口大)
- 5 経済学史の方法と課題 高木暢哉 (九州大)

第16回 (1964年1月25日 西南学院大)

- 1 「転形問題」の一考察 阿部真也 (福岡大)
- 2 T.アットウッドの経済理論 荒牧正憲 (九州大)
- 3 労働価値論史からみたジェヴォンズの経済理論 入江 奨 (松山商科大)
- 4 貨幣数量説の跡づけ 中沢慶之助 (西南学院大)

第17回 (1964年9月5日 松山商科大)

- 1 19世紀後期イギリスの大不況について 藤田暁男 (九州大)
- 2 ジェイムズ・ステュアートの「外国貿易」論 川島信義 (西南学院大)
- 3 貨幣数量説私見 山下宇一 (松山商科大)
- 4 生活賃金説と賃金体系の決定原則 狭田喜義 (広島大)
- 5 マルサスにおけるセエ法則批判の論理 中村廣治 (大分大)

第18回 (1965年1月29日 福岡大)

- 1 勘定モデル・経済モデル・政策モデルの関係——特に政策分析の観点から—— 伊東政則 (福岡大)
- 2 「世界市場」と「世界経済」の概念規定について 有賀定彦 (下関市立大)
- 3 マーシャル理論の特徴について——その法則観を中心に—— 藤田暁男 (九州大)
- 4 経済学原理におけるいわゆる宇野理論の根本的問題点 馬場元二 (久留米大)

第19回 (1965年7月10日 九州大)

- 1 貨幣論における国家規定について——『経済学批判要綱』を中心として—— 深町郁弥 (九州大)
- 2 マーシャル体系とケインズ経済学 有田一郎 (熊本大)
- 3 イギリス議会の成立とエドワード3世の財政政策 山村延昭 (西南学院大)
- 4 社会変動の型 藤本保太 (山口大)
- 5 トマス・モアの「ユートピア」と社会主義 伊達 功 (松山商科大)

第20回 (1966年1月29日 八幡大)

- 1 古典派経済学者の教育論争 池田一浩 (佐賀大)
- 2 ケインズの『貨幣改革論』と『貨幣論』 有田一郎 (熊本大)
- 3 スミスの労働体系論 入江 奨 (松山商科大)

第21回 (1966年7月9日 熊本商科大)

- 1 スミスの財政学についての考察 広渡貞喜 (九州大)
- 2 リカード・マルサスの「恐慌」論争に関する一匿名の著書について 逢坂 充 (熊本商科大)
- 3 資本蓄積論争の端緒——リカード・マルサス間の地金論争における—— 中村廣治 (大分大)
- 4 ケインズの人口理論について 有田一郎 (熊本大)

第22回 (1967年1月28日 西南学院大)

- 1 ヒルファーディングの貨幣論に関する一考察 野田弘英 (九州大)
- 2 シュムペーター経済学の背景 河野善隆 (長崎県立大)
- 3 計量経済学の学史的考察 高木真助 (西南学院大)
- 4 経済学史研究の方法と課題 高木暢哉 (九州大)

第23回 (1967年7月8日 広島大)

- 1 『国富論』における富裕の自然的序次について 小柳公洋 (九州大)
- 2 ソヴィエトの生産力概念と分業論争 中峯照悦 (広島大)
- 3 J. S. ミルの資本蓄積論について 荒牧正憲 (九州大)

第24回 (1968年1月27日 九州産業大)

- 1 G.v. Mayrの統計調査論について 世利幹雄 (九州産業大)
- 2 “Tenant”問題について——Land Question—— 池田照彦 (熊本大)

商科大)

- 3 社会思想史の学問的性格について 伊達 功 (松山商科大)
- 4 マーシャルの『経済学原理』における経済主体の活動についての考え
方について 藤田暁男 (九州共立大)

第25回 (1968年7月6・7日 大分大)

第1日

- 1 ケインズ体系における価格理論の地位と問題点 林田睦次 (福岡大)
- 2 マルクス経済学の方法と体系に関する若干の問題 宮崎喜代司 (広島
大)
- 3 ケインズ以後の経済学の展開 藤本保太 (山口大)
- 4 マーシャルとマルクスにかんするノート——「活動」・「労働」両
概念の対比を中心に—— 井手口一夫 (福岡大)

第2日 (研究会)

マーシャルとマルクスに関するノート——「活動」・「労働」両概念の
対比を中心に—— 井手口一夫 (福岡大)

第26回 (1969年1月25・26日 九州大)

- 1 剰余価値生産と労働力の価値変動 川淵スミ (九州大)
- 2 計画的経済成長モデルについて——制御理解の利用—— 時政 昴
(九州大)
- 3 財政学の方法をめぐる——武田隆夫教授の見解を中心に—— 古
川卓万 (九州大)
- 4 ミル経済学における第4篇の意義について 荒牧正憲 (九州大)

第2日 (研究会)

ミル経済学における第4篇の意義について 荒牧正憲 (九州大)

第27回 (1969年7月12・13日 長崎大)

第1日

- 1 バートランド・ラッセルの平和運動とその思想 岩松繁俊 (長崎大)
- 2 アダム・スミスの「生産的労働」論に対する一考察——ジェイム
ズ・スチュアートの「インダストリ」論の分析視角からの一つの接
近—— 丸山広一 (長崎国際経済大)

3 マーシャルよりケインズへ 有田一郎 (熊本大)

第2日 (研究会)

マーシャルよりケインズへ 有田一郎 (熊本大)

第28回 (1970年1月17・18日 福岡大)

第1日

1 ケインズ以後の経済学——一般均衡学派の雇用理論の一考察——
林田睦次 (福岡大)

2 アダム・スミスの公債論 古川卓万 (大分大)

3 ケインズモデルの図示について 武野秀樹 (九州大)

第2日 (研究会)

ケインズモデルの図示について 武野秀樹 (九州大)

第29回 (1970年7月11・12日 松山商科大)

第1日

1 「3月前」期におけるフォイエルバッハとマルクス 佐藤誠 (九州大)

2 アダム・スミスのブリテン・アイルランド・北アメリカ合邦論について 小柳公洋 (北九州大)

3 国家と経済——古典派財政論の評価をめぐって 古川卓万 (大分大)

4 限界主義について 藤本保太 (山口大)

第2日

限界主義について 藤本保太 (山口大)

第30回 (1971年1月23・24日 北九州大)

第1日

1 ジェイムズ・ステュアートの市民社会論について 川島信義 (西南学院大)

2 ヒルファディングの金融資本規定の再検討 野田弘英 (熊本商科大)

3 マーケティング思想の展開 阿部真也 (福岡大)

4 新古典派成長モデルについて 山下正毅 (九州大)

第2日 (研究会)

新古典派成長モデルについて 山下正毅 (九州大)

第31回 (1971年7月12・13日 広島大)

第1日

- 1 市場価値論について 宮田千蔵 (広島大)
- 2 若いレーニンと「ナロードニチェストヴォ」 桂木健次 (九州大)
- 3 イギリス海運諸法の解釈をめぐる若干の問題点 隅田哲司 (広島商科大)
- 4 市民社会派の経済分析について 荒牧正憲 (九州大)

第2日 (研究会)

市民社会派の経済分析について 荒牧正憲 (九州大)

第32回 (1972年1月29・30日 西南学院大)

第1日

- 1 ケインズ体系における弾力性概念について 林田睦次 (徳山大)
- 2 「疎外された労働」について 越智保則 (福岡教育大)
- 3 イギリスの「大不況」(1873-96) とその対策構想の諸相 藤田暁男 (長崎大)
- 4 価値形態論の批判的再構成 宮崎喜代司 (広島大)

第2日 (研究会)

近代経済学の影響 高木真助 (福岡大)

第33回 (1972年7月11・12日 佐賀大)

第1日

- 1 アダム・スミスの農業論 鈴木 亮 (佐賀大)
- 2 ヒルファディングの株式資本論について 野田弘英 (熊本商科大)
- 3 マックス・ヴェーバーの官僚制論批判 久間清俊 (九州大)
- 4 コアと均衡理論 細江守紀 (九州大)

第2日 (研究会)

『近代経済学史研究』(経済学史学会西南部会編)をめぐって 狭田喜義 (広島大) 井手口一夫 (福岡大) ほか

第34回 (1973年1月27・28日 九州大)

第1日

- 1 資産選択理論について 江副憲昭 (九州大)
- 2 マルクス主義とエンゲルス —— わが国のエンゲルス研究史の回顧を通して —— 坂脇昭吉 (鹿児島大)
- 3 統計学史上におけるケトラー 高橋政明 (鹿児島大)
- 4 チャーチストの土地計画について 古賀秀男 (山口大)

第2日 (研究会)

古典学派におけるマルサスの位置づけ 入江 奨 (松山商科大)

第35回 (1973年7月19・20日 山口大)

第1日

- 1 ブレトンウッズ体制の再検討 —— その諸説について —— 平 勝廣 (九州大)
- 2 最適成長理論について 時政 昴 (西南学院大)
- 3 スミスにおける「アメリカ型」国民経済への再転換について 小柳公洋 (北九州大)
- 4 ステュアートの経済学体系と歴史意識 川島信義 (西南学院大)

第2日 (研究会)

ステュアートをめぐって 川島信義 (西南学院大)

第36回 (1974年1月25・26日 福岡大)

第1日

- 1 初期マルクスにおける市民社会批判体系について 梅井道生 (福岡大)
- 2 市場均衡の安定性について —— 模索過程と非模索過程 —— 是枝正啓 (九州大)
- 3 マックス・ヴェーバーの経済政策論の一考察 久間清俊 (九州大)
- 4 『資本論』における価値形態論の方法と思想 下平尾勲 (佐賀大)

第2日 (研究会)

社会科学, 社会思想の方法をめぐって 伊達 功 (松山商科大)

第37回 (1974年7月13・14日 鹿児島大)

第1日

- 1 R.G. ホートリーの戦後ポンド論 吉沢法生 (九州大)

- 2 ハロッド経済動学の体系と基本方程式 篠崎敏雄 (愛媛大)
- 3 サミュエル・ハートリブの貧民救済と教育思想について——「ロンドンの慈善」を中心に—— 芳賀 守 (徳山大)
- 4 『国富論』後半体系をめぐって 小柳公洋 (北九州大)

第2日 (研究会)

『国富論』後半体系をめぐって 小柳公洋 (北九州大)

第38回 (1975年1月25・26日 北九州大)

第1日

- 1 経済余剰と便益測定 松沢俊雄 (九州大)
- 2 ヴェブレンにおける「貸付信用」と株式会社 高 哲男 (九州大)
- 3 自然・人間・産業——一つの資源配分論 藤本保太 (山口大)
- 4 古典派経済学の現代的意義 中村廣治 (大分大)

第2日

古典派経済学の現代的意義 中村廣治 (大分大)

第39回 (1975年7月12・13日 広島大)

第1日

- 1 顕示選好理論について 田中広滋 (九州大)
- 2 利潤率と資本の有機的構成の高度化——『資本論』第3巻第3篇の検討—— 宮田千蔵 (福山大)
- 3 アダム・スミス信用論にみるナショナリズム 川島信義 (西南学院大)
- 4 J.S.ミルの「社会哲学」の内容と意義について 荒牧正憲 (九州大)

第2日 (研究会)

J.S.ミルの「社会哲学」の内容と意義について 荒牧正憲 (九州大)

第40回 (1976年1月24・25日 大分大)

第1日

- 1 歴史学派のカルテル論争とM.ウェーバーの位置 小野隆弘 (九州大)
- 2 「プロレタリアート」派のポーランド論と若きローザ 岡村東洋光 (九州大)

3 ハロッドの動学的利子論——ケインズ利子論の発展として—— 篠崎敏雄 (愛媛大)

4 マルクスの「疎外された労働」について 梅井道生 (福岡大)

第2日

マルクスの「疎外された労働」について 梅井道生 (福岡大)

第41回 (1976年7月12・13日 西南学院大)

第1日

1 インフレーションと失業——Philips Curve と (Counter) Clockwise Cycleの理論的検討—— 寺田宏洲 (九州共立大)

2 生産価格論におけるいわゆる「転化問題」についての一考察——剰余価値の分配過程と費用価格の生産価格化—— 森岡敬史 (広島大)

3 『国富論』における富裕と安全 小柳公洋 (北九州大)

第2日 (研究会)

『国富論』における富裕と安全 小柳公洋 (北九州大)

第42回 (1977年1月29・30日 長崎大)

第1日

1 アダム・スミスの資本蓄積論について 関源太郎 (九州大)

2 戦後西ドイツ経済政策思想について 佐藤 誠 (九州大)

3 我国に於けるケインズ「一般理論」研究40年の歩み 林田睦次 (徳山大)

4 『資本論』の基本構造——一つの問題提起—— 宮崎喜代司 (広島大)

第2日

『資本論』の基本構造——一つの問題提起—— 宮崎喜代司 (広島大)

第43回 (1977年7月11・12日 九州大)

第1日

1 F.リスト貿易論の一考察 森戸政信 (福岡大)

2 ヒルファディング独占論の研究動向 坂本 正 (九州大・院)

3 フォン・ノイマンモデルの一展開 細江守紀 (八幡大)

4 『要綱』における富概念の展開 越智保則（福岡教育大）

第2日（研究会）

『要綱』における富概念の展開と人類史視角 越智保則（福岡教育大）

第44回（1978年1月28・29日 北九州大）

第1日

- 1 A. マーシャル《複合的準地代》概念の定立と『経済学原理』に於けるその意義 井田高之（福岡大）
- 2 都市経済学の一視角 慶田 収（九州大）
- 3 西独財形政策の政策思想をめぐって 佐藤 誠（西南女学院短期大）
- 4 マルクス資本理論の生成過程について 高倉泰夫（九州大）

第2日（研究会）

マルクス資本理論の生成過程について 高倉泰夫（九州大）

第45回（1978年7月14・15日 鹿児島経済大）

第1日

- 1 マーシャル「国民所得」概念の形成過程について——賃金および利潤基金を中心に—— 井上栄喜（福岡大）
- 2 1920年代の連銀政策とB. ストロングの見解について 永田裕司（九州大）
- 3 二次計画法のアルゴリズム 田中謙一郎（長崎大）
- 4 リカードウの資本蓄積論 中村廣治（大分大）

第2日

リカードウの資本蓄積論 中村廣治（大分大）

第46回（1979年1月27・28日 松山商科大）

第1日

- 1 「パリ草稿」に関する一考察——経済学批判と歴史把握の視座の形成—— 秋田 清（九州大）
- 2 一般的利潤率の形成・低下過程について——「恐慌の一層発展した可能性」の確定のために—— 渡辺利文（松山商科大）
- 3 左右田学説とマルクス主義 渡植彦太郎（松山商科大）
- 4 アダム・スミスの重商主義批判——その階級的性格をめぐって——

川島信義 (西南学院大)

第2日 (研究会)

アダム・スミスの重商主義批判——その階級的性格をめぐって—— 川

島信義 (西南学院大)

第47回 (1979年7月12・13日 西南学院大)

第1日

- 1 「貨幣資本と現実資本」論の形成過程——J. ウイルソンの貨幣恐慌論—— 川波洋一 (九州大)
- 2 F. リストの発展段階説 森戸政信 (伊万里商高)
- 3 寡占経済下の経済変動 藪田雅弘 (九州大)
- 4 19世紀末アメリカにおける経済学の動向 高 哲男 (広島大)

第2日 (研究会)

19世紀末アメリカにおける経済学の動向 高 哲男 (広島大)

第48回 (1980年1月26・27日 広島大)

第1日

- 1 スミス経済学における若干の諸問題——第1編を中心に—— 中村廣治 (広島大)
- 2 いわゆる中央銀行とは何か——イングランド銀行の史的展開との関連で—— 藤田幸雄 (九州大)
- 3 リカードウにおける価値と自然価格との乖離——1820年の資料を検討して—— 羽鳥卓也 (岡山大)
- 4 イギリス重商主義の形成に関する一考察 隅田哲司 (広島修道大)

第2日

- 1 J. A. ホブスンの「過剰貯蓄論」 姫野順一 (長崎大)
- 2 A. マーシャルの《代表的企業》概念について 井田高之 (福岡大)
- 3 『国富論』の歴史把握と経済理論 飯塚正朝 (佐賀大)

第49回 (1980年7月11・12日, 博多会館)

(記録欠落)

第50回 (1981年1月24・25日, 佐賀大)

- 1 リカードウの貿易論 丸山武志 (大分大)

- 2 国際経済論より見たポランニー 前田芳人（八幡大）
- 3 『資本論』における価値と流通費 中尾訓生（山口大）
- 4 ヘーゲル『歴史哲学』研究について 川崎卓郎左衛門（青雲学園）
（研究会）共通論題：ヘーゲル『歴史哲学』研究について
話題提供者：川崎卓郎左衛門

第51回（1981年7月13・14日，九州大）

- 1 アダム・スミス賃金論の一側面——18世紀人口論争との関連で——
関源太郎（九州大）
- 2 資源配分機構における誘導手段 北原真木（九州共立大）
- 3 リカードウ価値尺度論の新資料について 中村廣治（広島大）
- 4 Bacon's *Essays* の読み方——イギリス社会哲学の「先鞭」としての
読解の試み—— 高橋真司（長崎総合科学大）
（研究会）共通論題：イギリス社会哲学の「先鞭」としての Bacon's *Essays*
の読解の試み

話題提供者：高橋真司

第52回（1982年1月23・24日，山口大）

- 1 リカードウの賃金論 池田俊久（福岡大）
- 2 マルクス「生産価格」論の形成とリカードウ「価値修正」論——『剰
余価値学説史』におけるマルクスとリカードウ 秋田 清（九州
大）
- 3 信用理論における古典派経済学とマルクス 中村廣治（広島大）

第53回（1982年7月13・14日，九州大）

- 1 資本の絶対的過剰生産規定の意義と限界——相対的過剰人口論を中
心として—— 中野 元（九州大）
- 2 不均衡経済理論への一試論 細江守紀（九州大）
- 3 財産制度と物的代謝 中尾訓生（山口大）
- 4 シュルツの生産力理論の歴史的 position —— リストおよびマルクスとの
関連で—— 植村邦彦（熊本大）
（研究会）共通論題：シュルツの生産力理論の歴史的 position —— リストお
よびマルクスとの関連で——

話題提供者：植村邦彦

第54回 (1983年1月29・30日, 熊本商科大)

- 1 J. E. Meade の「新古典派成長理論」について 島上 健 (熊本短大)*
- 2 賃金論研究の基礎的考察——労働力価値の規定方法について——
森岡敬史 (広島経済大・非)
- 3 リカードウにおける生産費説批判の論理 中村廣治 (広島大)
- 4 シスモンディ恐慌論とマルクス 中宮光隆 (熊本女子大)
(研究会) 共通論題：シスモンディの経済思想

話題提供者：中宮光隆

第55回 (1983年7月11・12日, 九州大)

- 1 A. マーシャルの経済分析論について 西村善博 (九州大)*
- 2 「パリ草稿」における労働疎外論の変遷について 梅井道生 (沖縄国際大)
- 3 経済変動理論の構造 林田睦次 (徳山大)
- 4 マルクス信用論の方法と展開 楊枝嗣朗 (佐賀大)*
(研究会) 現代アメリカとヴェブレン

話題提供者：高 哲男 (広島大)

第56回 (1984年1月28・29日, 大分大)

- 1 租税改革と一時的非効率 緒方 隆 (八幡大)*
- 2 「バジヨットの原理」について 金井雄一 (佐賀大)
- 3 リカードウ価値論——最近の論稿, 千賀・吉澤説に関連して——
池田俊久 (福岡大)
- 4 リカード体系の現代的解釈 駄田井正 (久留米大)
(研究会) リカード体系の現代的解釈

話題提供者：駄田井正

第57回 (1984年7月11・12日, 西南学院大)

- 1 ケインズ有効需要論に関する一考察 山田信一 (九州大)*
コメンター：藪田雅弘 (福岡大)*
- 2 アダム・スミスにおけるアナロジーについて——「天文学史」を中心にして—— 村松茂美 (熊本商科大)

コメンター：小柳公洋（北九州大）

3 J.S.ミルの社会哲学の特色 荒牧正憲（九州大）

（研究会）J.S.ミルの社会哲学の特色

話題提供者：荒牧正憲

第58回（1985年1月19日，北九州大）

1 ジョン・ロック『市民政府論』における市民社会論について

岡村東洋光（九州産業大）

2 不確実性下の経済均衡に関する一考察 有定愛展（九州大）*

3 ドイツ民主共和国における国家資本主義と計画経済 杉田憲道（九州大）

4 高田保馬の貧困・社会主義および生産力に関する見解 金田良治（徳山大）

第59回（1985年7月13・14日，熊本女子大）

1 ケインズ『貨幣論』（1930年）における資本蓄積の構造認識 鈴木典夫（九州大）

2 マルクスの資本回転論 石橋貞男（九州産業大）*

3 地域の経済計算——地域分割について—— 金丸 哲（鹿児島大）*

4 マルクス所有論の原像とヘーゲル 越智保則（福岡教育大）

（研究会）共通論題：マルクス所有論の原像とヘーゲル

話題提供者：越智保則

第60回（1986年1月18・19日，九州大）

1 J.S.ミル「利潤率低下論」の「法則」性について 諸泉俊介（九州大・院）

2 有効需要と価格——スラッフイアン・アプローチからみた有効需要の原理—— 永田聖二（九州大・院）

3 J.A.ホブスンにおける経済学の形成と新自由主義 姫野順一（長崎大）

4 『国富論』と未開発地域——18世紀スコットランド高地地方の事例をめぐって—— 飯塚正朝（佐賀大）

（研究会）共通論題：『国富論』と未開発地域——18世紀スコットラン

下高地地方の事例をめぐって——

話題提供者：飯塚正朝

第61回（1986年7月14・15日，長崎大）

- 1 探索活動と価格分散 永星浩一（長崎大）*
- 2 『経済学・哲学草稿』（序文・第一草稿・第二草稿・第三草稿・第四草稿）における第四草稿と第一草稿との内容の関連について 川崎卓郎左衛門（青雲学園）
- 3 我が国のケンズ『一般理論』研究50年の進展過程——半世紀間の基幹の研究業績の軌跡の展望と一研究進展段階説の提示—— 林田陸次（徳山大）
- 4 アダム・スミスの資本蓄積論 川島信義（西南学院大）
（研究会）共通論題：アダム・ファergusンと腐敗について

話題提供者：小柳公洋（北九州大）

第62回（1987年1月17・18日，福岡大）

- 1 A. マーシャル「代表的企業」についての考察 岩下伸朗（九州大）
- 2 特殊訓練仮説について 福澤勝彦（九州大）*
- 3 ブルードン晩年の所有論 齊藤悦則（鹿児島県立短大）
- 4 『経済表』直前期のフランス経済学の動向——グルネー，フォルボネ，カンティロンをめぐって—— 米田昇平（下関市立大）
（研究会）共通論題：『経済表』直前期のフランス経済学の動向——グルネー，フォルボネ，カンティロンをめぐって——

話題提供者：米田昇平

第63回（1987年7月13・14日，徳山大）

- 1 ケインズ有効需要論の展開——『貨幣論』を中心に—— 山田信一（八幡大）
- 2 『有閑階級の理論』における経済社会分析の方法について 高哲男（広島大）
- 3 機能的多元国家論とマルクス主義（経済）国家論——高田保馬のマルクス主義国家論批判を中心にして—— 金田良治（徳山大）

- 4 主観価値説の基本的性格——W. S. JevonsとE. von Böhm-Bawerk——
狭田喜義（広島経済大）
- 5 マルクスの労働期間論について 亀崎澄夫（広島修道大）
- 6 貴金属通貨と古典派 有田 稔（徳山大）
- 7 リカードウ『原理』（初版）への反響——『ブリティッシュ・レビュー』
の「書評」を中心に—— 中村廣治（広島大）

第64回（1988年2月20・21日，久留米大）

- 1 ケインズ経済学とケインジアン 大矢野栄次（佐賀大）
 - 2 ケインズ『貨幣改革論』の形成 鈴木典夫（福岡教育大）
 - 3 J. アンダスン『諸考察』（*Observations on the Means of Exciting a Spirit
of National Industry*……, 1777）の主題と構成 飯塚正朝（佐賀大）
 - 4 初期マルクスの思想形成過程 渋谷 正（鹿児島大）
 - 5 『亡命者偉人伝』の意義 橋本直樹（鹿児島大）
- （研究会）共通論題：1840・50年代のマルクス——初期マルクスの思想
形成過程

話題提供者：渋谷 正

『亡命者偉人伝』の意義：橋本直樹

第65回（1988年7月9・10日，広島大）

- 1 1730年代スコットランドにおける「経済改良」思想について
——F. リンズィとT. メルヴィルを中心に—— 関源太郎（九州
大）
 - 2 A. マーシャルの「準地代」について 岩下伸朗（九州大）
 - 3 新古典派の方法論とケインズの方法論 駄田井正（久留米大）
- （研究会）共通論題：J. ステュアートにおける「近代の危機」と政治経
済学の成立

話題提供者：川島信義（西南学院大）

第66回（1989年1月14・15日，西南学院大）

- 1 ハンキーとバジヨット——二つの銀行業の原理—— 藤田幸雄（九
州大）
- 2 経済厚生と国際資本移動——一国モデルにおける財政ショックの厚

生経済分析——前田純一（九州大）*

- 3 ジョン・ロック「所有」(property)の理論について 岡村東洋光（九州産業大）

（研究会）共通論題：スコットランドのフランス革命——トマス・ミューアの場合——話題提供者：鈴木 亮（佐賀大）

第67回（1989年7月16・17日，佐賀大）

- 1 貨幣貸金率と物価水準——Ricardoの場合——関根順一（九州大）
- 2 バジョット「ピール銀行条例」批判の視角 藤田幸雄（九州大）
- 3 平和論としての戦争責任論——民衆における加害・被害の二重構造——岩松繁俊（長崎大）
- 4 マーシャル経済学体系と「代表的企業」 岩下伸朗（九州大）

（研究会）共通論題：マルサスの租税論

話題提供者：柳田芳伸（長崎県立国際経済大）

第68回（1990年1月20・21日，九州産業大）

- 1 マーシャル経済学における「組織」・「企業者」 藤井賢治（九州産業大）
- 2 変動為替相場と財政・金融政策——資産選択アプローチ——秋山優（九州大）*
- 3 A. フレッチャー『対話』の一考察 村松茂美（熊本商科大）
- 4 ケネー「経済表の分析」の吟味と再構成 八尾信光（鹿児島経済大）
- 5 マルクスの生産諸関係論 高倉泰夫（長崎大）

第69回（1990年7月7・8日，熊本商科大）

- 1 マルクス価値論と消費の問題——現代社会理論として——溝上孝夫（九州大）*
- 2 英米におけるJ. A. ホブスンの再評価と研究の動向 姫野順一（長崎大）
- 3 F. ハチスンの道徳哲学体系について 小柳公洋（北九州大）

（研究会）共通論題：スミス地代論，富国・貧国論争，J. アンダスン

話題提供者：飯塚正朝（佐賀大）

第70回（1991年1月26・27日，九州大）

- 1 リカードウ体系とセー法則 遠藤哲広 (九州共立大)
- 2 不完備契約に関する基本問題 三浦 功 (九州大)*
- 3 古典派経済学とシスモンディ 中宮光隆 (熊本女子大)
- 4 アダム・スミスの地代論 高 哲男 (広島大)

(研究会) 共通論題：シュルツとマルクス —— 「近代」の自己認識 ——
植村邦彦 (熊本大)

第71回 (1991年7月6・7日, 久留米大)

- 1 Ricardo の三つの調整過程 関根順一 (九州大・院)
- 2 ジョン・ロックの利子論と交換的正義 —— 普遍的他者による二重倫理の否定 —— 古川順一 (日本文理大)
- 3 オウエンの協同主義 1820-21年 丸山武志 (大分大)
- 4 蓄積論における J.S. ミルと K. マルクス 荒牧正憲 (福岡大・非)

第72回 (1992年1月18・19日, 広島大)

- 1 マルサスとリカードウ —— 「一般的過剰」論争研究管見 —— 中村廣治 (広島大)
- 2 ベンサムにおける経済と政治 近藤加代子 (九州芸術工科大)
- 3 J.S. ミルの静態・動態峻別論について —— ミルにおける経済学方法論との関連で —— 諸泉俊介 (九州大)
- 4 ヴェブレンの世界とその現代的意義をめぐって 高 哲男 (広島大)

第73回 (1992年7月4・5日, 北九州大)

- 1 プルードンの手稿に見る『経済学』の企て 斉藤悦則 (鹿児島県立短大)
- 2 J. A. ホブスンにおける市場と組織 姫野順一 (長崎大)
- 3 J. ステュアート「商業大国」盛衰の理論 川島信義 (西南学院大)
- 4 平和の思想家ホップズ —— ホップズ解釈との関連で —— 高橋真司 (長崎総合科学大)

第74回 (1993年1月23・24日, 西南学院大)

- 1 『産業と貿易』におけるマーシャルの視座について 岩下伸朗 (福岡女学院大)
- 2 ハイエク『自由の条件』第24章「教育と研究」をめぐって 鈴木典夫

(福岡教育大)

- 3 穀物奨励金制度を巡る A. スミスと J. アンダスン 飯塚正朝 (佐賀大)
- 4 F. ハチスンの市民社会観とスコットランド啓蒙 小柳公洋 (北九州大)

第75回 (1993年7月3・4日, 松山大)

- 1 アダム・スミスの資本投下の自然的順序論 越智良二 (済美高校)
- 2 スラッファにおける基礎的体系と非基礎的体系——二つの定義の関係について—— 宮本順介 (松山大)
- 3 サー・ウィリアム・シートンのスコットランド経済開発論 関源太郎 (九州大)

(研究会)「労働の二重性」について 赤間道夫 (愛媛大)

第76回 (1994年1月22・23日, 九州産業大)

- 1 ウェイクフィールドの植民の経済学 近藤高弘 (九州大・院)
- 2 支配労働量と数量単位——ケインズ理論における数量測定の考え方—— 山田信一 (九州国際大)
- 3 ホブソンの価格形成——ホブソンのレントの概念—— 大水善寛 (第一経済大)
- 4 マルクスの「解放」像——『ユダヤ人問題』論争に即して—— 植村邦彦 (熊本大)
- 5 マルクスはいかに経済的諸論述を解釈したか 中尾訓生 (山口大)

第77回 (1994年7月2日, 大分大)

- 1 ウェップ夫妻における「産業の進歩」と労働組合 江里口拓 (九州大・院)
- 2 マカロクのオウエン批判——*The Scotsman* にみる「社会主義」観—— 出雲雅志 (松山大)
- 3 二つのロック論をめぐって——アッシュクラフトとタリーを素材に—— 岡村東洋光 (九州産業大)
- 4 18世紀前半スコットランド「経済改良」思想の展開構造 関源太郎 (九州大)

第78回 (1994年12月10・11日, 熊本学園大)

- 1 アーヴィング・フィッシャー『資本と所得の本質』の論理構造
——彼の経済学の体系的理解を求めて—— 中路 敬 (九州大・院)
- 2 関数的収穫逓減と記述的収穫逓減——P.H.ウィクステードのRicardian地代論批判について—— 宮本順介 (松山大)
- 3 『国富論』第1編第11章「地代について」のもつ意味をめぐって
高 哲男 (九州大)
- 4 『経済学の成立——アダム・スミスと近代自然法学——』(御茶の水書房, 1994)をめぐって 新村 聡 (岡山大)

第79回 (1995年6月24日, 福岡女学院大)

- 1 「アダム・スミスの価値尺度論」に関するP. シロス・ラビーニの所論 (1976年) 中川栄治 (広島経済大)
- 2 1850年のマルクス/エンゲルスの恐慌・革命観 橋本直樹 (鹿児島大)
- 3 ホブスンの自由貿易論 姫野順一 (長崎大)

第80回 (1995年12月9日, 久留米大)

- 1 西欧主流派経済学の流れ——Brems, *Pioneering Economic Theory, 1630-1980*を翻訳して—— 駄田井正 (久留米大)
- 2 J.S.ミルの外国貿易論——『試論集』第一論文を中心に——
諸泉俊介 (長崎大)
- 3 フランスにおける奢侈論の展開——フォルボネを中心として——
米田昇平 (下関市立大)

第81回 (1996年7月6・7日, 鹿児島大)

- 1 J.B.v.シュヴァイツァーの労働組合論 後藤 洋 (鹿児島大)
- 2 企業の行動原理の再検討 梶原 博 (別府大短大部)
- 3 C. バベッジの経営管理思想について 村田和博 (広島大・院)
- 4 Ricardian価値論の学説史上の位置について——『Ricardian経済学研究』余滴—— 中村廣治 (熊本学園大)

第82回 (1996年12月7日, 九州大)

- 1 萩原鐮太郎における自律的発展の思想——田口卯吉の自由貿易主義との対比で——木嶋久美（九州大・院）
- 2 ラムゼイをめぐる問題群——確率・時間・合理性——山崎好裕（福岡大）
- 3 マーシャル経済学における政府論——『産業と交易』を中心に——岩下伸朗（福岡女学院大）

第83回（1997年6月28日，長崎大）

- 1 セー法則体系の位置づけ 松尾 匡（久留米大）
- 2 R. フィルマーの政治思想 岡村東洋光（九州産業大）
- 3 私有財産権（制度）弁証史序説——経済思想史的に——中村廣治（熊本学園大）

第84回（1997年11月29日，久留米大）

- 1 古典派外国貿易論の展開：トレンズとJ.S. ミルを中心として 諸泉俊介（長崎大）
- 2 17世紀末イギリスにおける世界君主制度 村松茂美（熊本学園大）
- 3 J. ステュアートにおける流通必要貨幣量の問題——「国内流通」と「対外流通」——川島信義（西南学院大）

第85回（1998年6月27・28日，熊本県立大）

- 1 ラムゼイと『一般理論』の起源 山崎好裕（福岡大）
- 2 『ジョン・ロックの政治社会論』をめぐる 岡村東洋光（九州産業大）
- 3 「経済学説史上におけるシスモンディの特徴」をめぐる 中宮光隆（熊本県立大）

研究会：中宮光隆著『シスモンディ経済学研究』について——著者による要約と質疑・討論——

第86回（1998年12月5日，福岡大セミナーハウス）

- 1 価値の理論の変遷と諸科学の理論 荒川章義（九州大）
- 2 マルクス主義における市民社会と高度資本主義観 久間清俊（熊本県立大）
- 3 リカードウの「地金案」 中村廣治（九州産業大）

第87回 (1999年7月3・4日, 佐賀大)

- 1 リカードウ新機械論について 遠藤哲広 (九州共立大)
- 2 マルサスとシーニョア 柳田芳伸 (長崎県立大)
- 3 J. ステュアートにおける利子論の二重構造 川島信義 (西南学院大)
- 4 唯物論について考える —— 流通論から生産論へ —— 宮崎喜代司
(広島大・名誉)

研究会：オウエンのユートピアと共生社会 丸山武志 (大分大)

第88回 (1999年12月11日, 北九州大)

- 1 戦時中の石橋湛山 —— 広域経済批判を中心に —— 木嶋久美子 (学振)
- 2 J.R. コモンズとニューディール改革思想 —— 社会保障を中心に —— 高 哲男 (九州大)
- 3 『「土地」と「地代」の経済学的研究』(時潮社, 1998年) 佐藤滋正
(尾道短期大)

人名索引 (50音順)

- あ
- 相澤秀一 50, 155
 相田愼一 66, 79, 85, 94, 97, 118, 145
 相見志郎 5, 34~37, 47, 56, 156
 赤羽豊治郎 61
 赤羽裕 59, 63
 赤間道夫 93, 100, 198
 秋田清 71, 189, 191
 秋山優 196
 揚武雄 79
 浅田統一郎 93
 浅野栄一 148
 浅野清 66, 149
 アシュリー, W. J. 94, 112, 149
 アッシュクラフト 198
 東晋太郎 50, 60
 東清二郎 80, 147
 東基樹 94, 122
 遊部久蔵 32~37, 47, 50, 61, 109, 110, 111, 117, 128
 アトウッド, T. 75, 181
 安孫子誠男 144, 166
 アブラズム 141
 阿部秀二郎 96, 134
 阿部貞也 181, 184
 阿部照男 62
 天野為之 78
 天羽康夫 63, 81, 118, 164
 荒恵子 134
 新井白石 167
 荒川章義 95, 200
 荒川繁 82, 133
 荒牧正憲 17, 36~41, 42, 61, 63, 88, 113, 118, 177, 181~183, 185, 187, 193, 197
 有江大介 41~42, 77, 84, 90, 93, 94, 115, 147, 149
 有賀貞彦 181
 有定愛展 193
 アリストテレス 67, 84, 95
 アリソン, A. 115
 有田一郎 56, 61, 63, 64, 117, 178, 179, 182, 184
- 有田稔 55, 195
 アルチュセール, L. 77
 淡路憲治 66, 162
 アンダーソン, J. 60, 83, 132, 195, 196, 198
 安藤英治 51, 137, 138, 140, 142
 安藤金男 65, 67, 71, 83, 93, 175
 安藤隆徳 41~42, 73, 112, 113, 172, 173
 安保則夫 167, 170
- い
- 飯岡秀夫 145
 飯田和人 75
 飯田鼎 37~40, 56, 61, 65, 70, 73, 89, 111, 117, 128, 143
 飯田哲文 173
 飯田裕康 40~42, 66, 98, 112, 118, 120, 121, 145
 飯塚一郎 49, 164, 194, 195, 198
 飯塚正朝 68, 83, 164, 190, 193~196, 198
 イグナティエフ, M. 175
 池尾愛子 41~42, 78, 87, 89, 93, 98, 112, 113, 121, 175
 池上修 88, 112, 145
 池田一新 57
 池田一浩 178, 182
 池田和宏 96, 150
 池田成一 134
 池田俊久 80, 191, 192
 池田照彦 182
 池田幸弘 80, 102, 112, 115, 149, 151
 井坂市助 53, 57, 66
 石井信之 41, 77, 111, 119
 石垣博美 52
 石川郁男 110
 石川興一 55, 56, 58, 62, 179
 石田梅巖 49
 石塚幸太郎 152
 石塚正英 146, 148
 石塚良次 73, 146, 147
 石橋貞男 193
- 石橋湛山 89, 201
 石原忠男 33, 34~37, 48, 52, 53, 139, 140
 出雲雅志 80, 83, 95, 101, 120, 147, 198
 石本美代子 51
 磯谷明德 115
 磯川曠 87, 102, 115, 164
 磯部浩一 140
 依田高典 93, 173
 井田高之 73, 189, 190
 市岡義章 87
 市原亮平 160
 井手川一夫 63, 183, 185
 伊藤誠一郎 88, 102
 伊藤哲 148
 伊藤宏之 132, 133
 伊藤正純 165
 伊東正則 181
 伊藤誠 151
 伊東光晴 38~41, 43, 61, 107, 111
 稲村勲 65, 89, 129, 161
 井上英喜 189
 井上準之助 116
 井上琢吾 40~42, 67, 83, 91, 113, 163, 169
 井上泰夫 92
 井上義朗 90, 94
 井原西鶴 51
 今井義夫 65, 75, 97, 119
 今村仁司 118
 井村喜代子 52
 入江奨 36~38, 48, 51, 155, 158, 169, 181, 182, 186
 岩下伸朗 86, 194, 195, 196, 197, 200
 岩根典夫 63, 65, 180
 岩野茂道 180
 岩松繁俊 180, 183, 196
 岩本吉弘 88, 93, 135
- う
- ヴァイトリング, W. C. 146
 ヴイクスティード, P. H. 199
 ヴイクセル, J. G. K. 78, 87, 93, 97, 120, 121, 173, 174

- ヴィーゴ, G 172
 ヴィーザー, F. 83, 152
 ウィーラー, J. 156
 ウイルソン, J. 190
 ウイルソン, T. 50
 ウィンスタンリ, G. 134
 ウィンチ, D. 136, 142, 144, 146, 171
 ヴイント, J. 173
 ウェイランド, F. 76
 ウェークフィールド, E. D. 67, 122, 157, 198
 ウェストン 82
 上田辰之助 32~33, 49, 51
 上野格 61, 63, 70, 78, 81, 118, 140
 上野喬 72, 75, 79, 82, 86, 88, 92
 上野俊樹 166
 ウェーバー, Marianne 140
 ウェーバー, Max 12, 49, 55, 60, 67, 77, 84, 88, 94, 96, 99, 106, 108, 117, 136, 137, 140, 141, 142, 147, 151, 157, 159, 165, 185~187
 上原一夫 141
 ウェップ(ポッター), B. 172, 175, 198
 ウェップ, S. 122, 172, 175, 198
 ヴェブレン, T. B. 52, 72, 78, 92, 102, 112, 115, 117, 158, 159, 172, 187, 192, 197
 植松忠博 162
 上宮正一郎 164, 174
 植村邦彦 73, 81, 112, 120, 191~193, 197, 198
 ヴェントゥーリ, F. 67, 108
 ウォーカー, F. A. 169
 ヴォリンダー 55
 ウォーレス, R. 54
 ヴォロンツォフ 157
 宇佐美義尚 84
 宇治田富蔵 58
 内井惣七 99
 内田一男 178
 内田弘 42, 76, 112, 119
 内田博 119, 170
 内田芳明 140, 141
 内田義彦 32~38, 47, 56, 107, 113, 138, 147, 171, 172
 ウッド, W. 58
 宇野弘蔵 70, 156, 159, 174, 181
 宇野利右衛門 170
 梅井道生 186, 188, 192
 梅沢直樹 164, 168, 172
 梅谷泰夫 5
 梅津和郎 156
 梅津順一 72, 87, 93
 ウルフ, V. 175
 え
 エアーズ, C. E 133
 エイメリー, L. S 96
 エックリウス J. G. 133
 江副憲昭 186
 恵谷弘 95
 江頭進 122, 174
 衛藤聡一 135
 エドワード3世 182
 蛭原良一 58, 60, 69, 85, 88, 131, 132, 133, 134
 江里口拓 122, 175, 198
 エリス, W. 174
 エルヴェシウス, C. A. 87, 121
 エンゲルス, F. 66, 72, 73, 91, 98, 122, 144, 161, 162, 168, 186, 199
 遠藤和朗 132, 134
 遠藤哲広 80, 87, 197, 201
 お
 オウエン, R. 55, 59, 65, 85, 117, 140, 143, 163, 197, 198, 201
 逢坂充 60, 181, 182
 大石高久 75
 大石泰彦 5
 大内秀明 62, 63
 大久保嘉蔵 157
 大熊信之 62, 64, 66, 139
 大倉正雄 83, 91, 119, 151
 大河内一男 32~33, 42, 51, 106, 113
 大崎正治 80
 大島雄一 53
 大田一廣 78, 86, 118, 143, 169, 174
 太田要 86, 144, 147
 太田仁樹 94, 166
 大津定美 159
 大塚金之助 iii, 4, 30, 32~34, 42, 106, 110, 139
 大塚昇三 86, 119
 大塚久雄 179
 大友敏明 77, 82, 95, 120
 大野信三 34, 60
 大野清三郎 5, 35~36, 48, 57, 141
 大野節夫 86, 97, 162, 170, 173
 大野忠男 65, 78, 118, 168
 大林信治 159
 大淵素行 69
 大水善寛 76, 198
 大村泉 73, 91, 120, 133
 大村照夫 168, 169
 大谷津晴夫 72, 143
 大森郁夫 39~42, 67, 84, 102, 119, 143, 146, 150
 大矢野栄次 195
 岡茂男 48
 尾形憲 139
 緒方隆 192
 緒方俊雄 69, 70, 149
 岡崎榮松 57, 62, 156, 157
 岡田純一 36~38, 54, 58, 67, 111, 118, 129, 143
 岡田元浩 121, 173, 175
 岡久啓一 173
 岡村邦輔 56
 岡村東洋光 85, 187, 193, 196, 198, 200
 岡本利光 144
 岡本博之 52
 岡本祐次 164
 岡本義行 164
 置塩信雄 107
 小川浩八郎 145
 奥田聡 87, 91, 102, 116
 奥田敬 86, 101, 147, 172
 奥村和久 167
 奥山忠信 77, 112
 生越利昭 120, 163, 167
 尾崎邦博 174
 小平民生 81
 越智保則 185, 189, 193
 越智良二 171, 198

- 音無通宏 41~42, 74, 88, 116, 121
 小野隆弘 187
 斧田好雄 87, 133, 135, 158
 小沼宗一 79, 93, 98, 133, 134
 小原英隆 99, 120
 折原浩 80
- か
- 戒田郁夫 60, 160
 海保青陵 59
 カウツキー, K. 66, 79, 85, 94, 118, 145, 170
 賀川豊彦 64
 梯明秀 50, 56, 154
 葛西孝平 87, 164
 葛西勝 95
 鍛冶直紀 168
 柏崎利之輔 49, 60, 67, 142
 梶原博 199
 ガース, H. H. 108, 157
 片岡浩二 174
 片山幡桃 91, 121
 桂木健次 65, 72, 80, 93, 185
 加藤一夫 50
 加藤寛孝 90
 加藤泰雄 56
 金井辰郎 134
 金井延 160
 金井雄一 112, 192
 金子甫 60
 金子ハルオ 54
 金指基 85, 119, 146
 金田重喜 55
 金田良治 74, 193, 194
 金丸哲 193
 加納正雄 121, 122
 カーペンター, E. 143
 釜賀雅史 72
 鎌田鵬 53
 鎌田武治 59, 140
 上久保敏 101
 神里公 80
 上条勇 94, 120, 170, 173
 神代光朗 78, 89
 神武庸四郎 38
 亀崎澄夫 195
 カラス 134
 ガランティ, J. M. 86
 ガリアーニ, F. 87, 93
 ガルヴェ 134
 カルドア, N. 174, 181
- ガルニエ, G. 174
 カレッキ, M. 122, 133, 149, 175
 河合一夫 171
 河上肇 14, 56, 58, 67, 107, 113, 118
 川口武彦 178
 川久保見志 76, 94
 川崎(田口)卓郎左衛門 68, 73, 81, 91, 191, 194
 川崎文治 178, 181
 川島信義 38~42, 60~62, 71, 74, 81, 84, 89, 110, 179, 181, 184, 186, 187, 190, 194, 195, 197, 200, 201
 川尻武 49
 川名隆史 79
 川波洋一 116, 190
 河西勝 95
 河野健二 10, 34~38, 42, 47, 49, 54, 58, 68, 70, 111, 157, 158, 159, 160, 164
 河野裕康 73, 89, 169
 河野良太 120, 174
 川淵スミ 183
 川俣雅弘 83, 93, 98, 120
 川本勝美 75
 カーン, R. F. 150
 カンティロン, R. 141, 194
 カント, I. 173
- き
- 気賀健三 51
 菊池壮蔵 132, 133
 木崎喜代治 69, 110
 岸徹 165
 岸川富士夫 119
 岸田理 156, 163
 岸本重陳 68
 岸本誠二郎 32~35, 36, 37, 42, 50, 106, 158, 160
 木嶋久美 200, 201
 北原真木 191
 喜多見洋 79, 100, 174
 北村裕明 167
 キチン, J. 135
 ギディ, M. 152
 木下富夫 71
 木原行雄 67, 76
 木村正美 5, 34~35, 36, 48, 57, 60, 117, 158
- く
- 楠井隆三 48
 クチンスキー, J. 108
 工藤秀明 98, 120
 クニース, K. G. A. 48
 久保誠 95
 久保芳和 iii, 5, 33~38, 47, 57, 61, 71, 72, 153, 158
 久保田明光 iii, 4~7, 13, 29, 31, 32~5, 42, 106, 128, 137
 久保田克美 165
 久間清俊 185, 186, 200
 熊谷一男 57, 139
 熊谷次郎 71, 74, 99, 113, 120, 165, 170, 175
 熊沢蕃山 57
 クラーク, J. B. 112, 164
 倉田稔 65, 89, 94, 97
 グリーブ, C. F. 173
 グリュン, K. 82
 グルネ, V. de 70, 194
 クールノー, A. A. 112
 久留間鮫造 32~33, 37, 42, 50, 69
 栗田啓子 41~42, 74, 75, 87, 100, 112, 119
 栗田康之 132, 135
 グレイ, J. 95, 132
 グレシャム, T. 180
 黒木龍三 116, 169
 黒須純一郎 87, 146
 黒滝正昭 76, 92, 97, 132~134
 桑田熊蔵 160
- け
- ケアリー, H. C. 83
 ケアリー, J. 57
 慶田収 189
 ケアンズ, J. E. 80
 ケイムズ, Lord 81, 90, 115
 ケインズ, J. M. 16, 57, 61, 63, 64, 71, 75, 76, 78, 83, 84, 90, 92~95, 96~100, 104, 107, 108, 112, 116, 117, 119~122, 133, 136, 148, ~151, 166,

- 168, 169, 171,
173, 174, 175,
178, 180, 182
~185, 188,
192, 193~195,
198
- ケトレー, L. A. J 186.
- ケネー, F. 6, 16, 47, 54, 58,
62, 67, 92, 103,
104, 106, 120,
121, 134, 137,
139, 143, 157,
174, 178, 180,
196
- ゲルツェン 75
- ケンペル 172
- こ
- 小池湖 172
- 河野善隆 181, 182
- ゴェルケ 65
- 古賀秀男 186
- 小島定 132
- 小島修一 118, 166
- 越村信三郎 32~36, 47, 53,
54, 106, 128
- ゴッセン, H. H. 83
- 小谷義次 5, 153
- コーツ, A. W. 15, 77, 108,
168
- 後藤洋 199
- ゴドウイン, W. 54, 140, 157
- ゴットル, F. von 55
- 小林里次 91
- 小林純 96, 147
- 小林昇 iii, 5, 13, 15, 32~38,
42, 47, 50, 52, 55, 56,
59, 61, 68, 69, 74, 78,
79, 84, 95, 111, 117,
140, 166
- 小林弥六 72, 77, 89, 95
- コブデン, R. 71
- 小峯敦 92, 97, 98, 100, 120,
122
- 小村純 96, 147
- 小室正紀 113
- コモンズ, J. R. 201
- 小柳公洋 41, 68, 119, 182,
184, 186~188, 193,
194, 196, 198
- コール, C. W. 7, 108, 154
- コール, G. D. H. 162
- 是枝正啓 186
- コンディアック, E. B. de 47, 143
- 近藤英次 88, 98
- 近藤加代子 85, 197
- 近藤真司 173
- 近藤高弘 122, 198
- コンドルセ, Marquise de 73
- さ
- 斉藤悦則 71, 74, 194, 197
- 斉藤隆子 90
- 斉藤日出治 165
- 斎藤宏之 146
- 斉藤義介 67
- 斉藤佳倍 132
- 酒井進 39, 72, 77, 147
- 逆井孝仁 91, 111, 121
- 酒枝義旗 53, 56
- 阪上孝 71
- 榎原巖 48, 49
- 坂口明義 79
- 坂口正志 115, 165
- 坂田太郎 54, 106
- 坂本慶一 55, 58, 62, 71, 82,
159
- 坂本武人 118, 160
- 坂本正 188
- 坂本達哉 20, 41~42, 94, 120,
144, 150
- 坂本彌三郎 iii, 4, 30, 32, 33,
37, 42, 65
- 坂脇昭吉 186
- 佐久間英明 165
- 佐々木晃 40, 92
- 佐々木憲介 80, 130, 133
- 佐々木武 110, 144, 150
- 佐々木亮 135
- 佐々野謙治 73
- 笹原正吾 95, 116
- 佐武弘章 71, 133, 166
- 佐藤金三郎 36~39, 64, 68,
106, 110, 116,
159, 161
- 佐藤滋正 86, 121, 201
- 佐藤茂行 64, 71
- 佐藤茂男 70
- 佐藤誠 184, 188, 189
- 佐藤方宣 151
- 佐藤有史 85, 98, 101, 147,
149
- 佐藤隆三 119
- 真田哲也 79
- サルバドリ, N. 93
- 佐和隆行 107
- サン・シモン 55, 58, 64, 93,
122, 135
- サン・ジュスト 150
- サンマルタン 63
- し
- シェヴォンズ, W. S. 67, 83, 93, 96,
134, 158, 163,
181, 195
- ジェソツップ, B. 147
- ジェファースン, T. 68, 72,
143
- シェルヴェリエ, A. E. 60, 71
- 塩野谷裕一 20, 40~42, 78,
80, 96, 98, 99,
120
- 重田晃一 10, 59, 109, 156,
162
- 重田澄男 37
- シスモンディ, S. de 51, 52, 53, 58,
71, 77, 85, 93,
109, 112, 141,
148, 170, 172,
173, 192, 197,
- シートン, W. 198
- 品川清治 62
- シーニョア, N. W. 201
- 篠崎敏雄 66, 90, 172, 187,
188
- 篠原敏明 77, 100, 150
- 篠原久 76, 81, 119, 162
- 四野宮三郎 64, 66, 74, 99,
142
- 司馬江漢 51
- 柴四朗 70
- 柴田敬 106, 113, 149
- 柴田武男 74
- 洪川則雄 70
- 澁澤栄一 62, 73, 91
- 渋谷一郎 51
- 渋谷行雄 52
- 渋谷正 95, 112, 195
- 島博保 79, 132
- 島上健 192
- 島津亮二 50, 155
- 清水耕一 120, 168
- 清水正昭 70
- 清水川繁雄 54
- 下平尾勲 186
- シャックル, G. L. S. 173
- シャムレー, P. E. 71, 108
- シュヴァイツァー, J. B. von 199

- シュヴァリエ, M. 75, 79, 82, 86, 88
 シュヴァリエ, S. 72
 シュヴェントカー, W. 136, 151
 朱紹文 136, 145
 シュバン, O. 100
 シュビートホフ, A. A. C. 53
 寿福真美 82
 シュモラー, G. 88, 112
 シュルツ, W. 64, 73, 81, 191, 192, 197
 シンペーター, J. A. 16, 52, 64, 65, 78, 80, 85, 86, 89, 94, 100, 104, 118, 119, 135, 138, 139, 142, 146, 160, 168, 169, 180, 182
 城座和夫 53, 56, 63, 66, 138, 142
 ジョージ, H. 160
 ジョーゼスキュレーゲン, N. 80
 ジョーンズ, R. 48, 50, 85
 白井厚 54, 68, 72, 118, 140, 143
 シロス・ラビーニ, P. 199
 白杉庄一郎 32~33, 47, 57, 155, 156, 157
 新宮晋 92
- す**
 スウィフト, J. 163
 末永茂喜 33~36, 49, 51, 55
 末永隆甫 162
 菅知彦 179
 菅野英機 166
 杉浦克己 97, 120
 杉浦秀一 76, 81
 杉田憲道 193
 スキナー, A. S. 108, 165, 167
 杉原薫 170
 杉原四郎 iii, 5, 10, 13, 15, 20, 33~39, 42, 48, 55, 62, 64, 67, 70, 78, 106, 107, 110, 111, 113, 118, 129, 153, 157~159, 162, 163, 166, 171
 杉本栄一 137
 杉山清 47
 杉山忠平 13, 34~39, 42, 56,
- 70, 107, 110, 111, 116, 128, 129, 131
 杉山富士雄 99
 スクロープ, G. P. 130
 鈴木章俊 96
 鈴木和雄 133
 鈴木鴻一郎 47
 鈴木正三 63
 鈴木信雄 72, 145
 鈴木典夫 193, 195, 197
 鈴木芳徳 180
 鈴木亮 66, 110, 118, 185, 196
 スターリン 51
 ステュアート, J. 7, 55, 60~62, 65, 67, 71, 74, 82, 84, 86, 89, 91, 104, 108, 110, 112, 114, 120, 133, 143, 146, 150, 164, 166, 170, 173, 179, 181, 183, 184, 186, 187, 195, 197, 200, 201
 ステュアート, D. 81, 86, 114, 147, 181
 ストロング, B. 189
 スペンサー, H. 87
 スpens, W. 48
 鷲見研作 85
 スミス, A. 7, 16, 47~49, 51, 53, 56, 59, 61, 63, ~77, 79, 81~83, 85~90, 92, 93, 97, 98, 102, 103, 104, 107, 108, 110~116, 118~121, 123, 132, 133, 135, 136, 138, 140, 142~145, 148~150, 152, 155, 158, 160, 162, 164~167, 169, 171, 172, 174, 175, 182~192, 194, 196~199
 隅田哲司 185, 190
 住谷悦司 48
 住谷一彦 40, 91, 96, 140
 隅谷三喜男 47
- 豆本薫 51, 155
 朱紹文 136, 145
 スラッフア, P. 68, 87, 97, 99, 108, 120, 146, 149, 164~166, 173, 175, 193, 198
- せ**
 セー, J.-B. 58, 74, 79, 87, 90, 94, 134, 161, 181, 197, 200
 関源太郎 40~42, 70, 82, 119, 177, 188, 191, 195, 198
 関劬 164
 関未代策 33~36
 関口宏 95
 関根順一 196, 197
 瀬地山敏 78
 世利幹雄 182
 セン, A. 101, 175
 千賀重義 40~42, 65, 85, 93, 101, 112, 120, 143, 144, 147, 150, 161, 192
 全斗煥 125
- そ**
 左右田喜一郎 189
 副田満輝 178
 曾我純 76
 ソディ, F. 80
 曾根弘光 135
 ソーントン, H. 91, 93, 121
 ソーントン, W. T. 80, 122
 ゾンバルト, W. 95, 130
- た**
 大黒弘慈 102, 121
 大門一樹 51
 大道安次郎 32~33, 42, 48, 49, 52, 53, 106
 ダウナント, C. 83, 88, 151
 高哲男 40~42, 72, 78, 82, 92, 96, 101, 102, 112, 115, 118, 172, 177, 187, 190, 192, 194, 197, 201
 高木彰 63, 67
 高木幸二郎 36, 57, 109, 138, 179, 181
 高木真助 178, 179, 180, 181,

182, 185
高木暢哉 14, 33~37, 42, 53,
117, 176, 177, 179,
180, 181, 182
高木正雄 156
高草木光一 151
高倉泰夫 189, 196
高島善哉 32~33, 42, 113,
138, 147
高島光郎 58, 109, 141, 142,
146
高田保馬 74, 98, 113, 150
193, 194
高野岩三郎 95, 160
高野利治 59, 140, 193, 195
高橋和男 73, 83
高橋是清 116
高橋聡 96
高橋真司 67, 191, 197
高橋誠一郎 iii, 4, 5, 30, 32,
37, 42
高橋誠 143, 144
高橋真 133
高橋政明 186
高橋正立 56, 159
高増明 175
高柳良治 150
高山満 139, 143
田川恒夫 160
田口卯吉 113, 160, 200
武井博之 86
竹内洋 88, 121
武田隆夫 183
竹永進 84, 101, 112, 151, 165
武野秀樹 180, 184
竹村脩一 179, 180
竹本信弘 159
竹本(守屋)洋 iii, 20, 39~42,
84, 102, 112,
163, 170, 173
田添恭二 5, 40, 41, 47, 59, 82,
86, 131, 133
多田顕 49, 51~53, 55~57,
59, 60, 62~64, 66, 67,
70, 73, 91
駄田井正 85, 192, 195, 199
只腰親和 71, 77, 120, 148
立入広太郎 36, 37~38
立川潔 80, 92, 146
タッカー, J. 50
伊達功 182, 183, 186
伊達邦春 52, 139

建林正喜 179
田中丘隅 59
田中謙一郎 189
田中史郎 135
田中正司 38~40, 55, 60, 66,
68, 79, 82, 85, 93,
110, 112, 120, 129,
141, 144, 147, 148
田中敏弘 4, 15, 17, 20, 33~
40, 41~43, 51, 59,
62, 73, 81, 102, 111
~113, 120, 129,
155, 164, 166, 167
田中秀夫 4, 20, 39, 42, 81, 88,
94, 112, 119, 164,
166, 171
田中秀臣 92, 98, 100, 150
田中広慈 187
田中真晴 5, 10, 13, 16, 35~
39, 42, 51, 58, 66,
75, 107, 118, 127,
154, 155, 159, 160,
165~167, 172
田中求 100
田中良明 171
種瀬茂 117
玉井龍象 40, 41, 78, 94, 97,
107, 116, 129
玉野井芳郎 36~39, 47, 50,
57, 62, 64, 65, 67
~69, 71, 74, 138,
142
田村信一 74, 75, 88, 96, 112,
121, 130
田村秀夫 5, 37~40, 42, 50,
67, 129
ダルジャンソン 70
ターリー 198
ダレー, H. E. 72
ターンブル 94
ち
チェインバレン 64, 85
近田錠二 119, 173
近野登
チチェーリン 76,
知念英行 149
チャイルド, J. 59
チャヤーノフ, A. V. 132
チュウネン, J. H. von 56, 85
チュルゴ, A. R. J. 47, 61, 77,
110, 132,
180

チョイ・ヤン・バク 98
張博珍 101
長幸男 70, 84, 91, 111
つ
ツレニニー, J. 132
津島陽子 66, 71,
津内内匠 16, 18, 19, 37~41,
61, 69, 70, 79, 86,
110, 128, 143
都築忠七 36, 110, 143
津戸正広 163
都留重人 107
て
デイドロ, D. 54
ディフォウ, D. 51
デカルト, R. 89, 122
出口康博 166
出口勇蔵 5, 13, 15, 32~37,
42, 48, 50, 61, 106,
107, 117, 128, 153,
155, 156, 158, 159
デザミ, T. 83
手島塔庵 49
手塚真 146
デューイ, J. 146
デュト, C. 86
デュノワイエ, C. P. J. 135
デュブイ, A. J. E. J. 49
デュモン, E. 100
寺尾琢磨 48
寺田宏州 188
寺田光雄 161
と
トインビー, A. 48
土井日出夫 80, 83
トゥック, T. 146
渡植彦太郎 189
堂目卓夫 99, 119, 170, 174
遠山馨 59, 179, 180
遠山弘徳 82, 170
時永淑 39~40, 42, 65, 138
時政島 183, 186
徳富蘇峰 87
徳増栄太郎 32~33
戸田武雄 138
トーマス・アクィナス 121, 155,
159
富塚良三 50, 51, 69
ドミトリエフ, V. K. 80
塘茂樹 81, 96, 120, 121, 129,
145, 152
豊倉三子雄 65, 156

- トラシ, D. de 88
 鳥居伸好 81
 トレンズ, R. 122, 133, 156,
 200
 トンプソン(タムソン), W. 54, 69,
 140
- な
- ナイト, F. H. 136, 151, 172
 永井義雄 37~42, 54, 59, 66,
 98, 99, 112, 119,
 144, 163
 中江桂子 90, 92
 中江藤樹 51
 長尾伸一 82, 95, 102
 中尾訓生 191, 198
 長岡豊 179, 180
 中川栄治 75, 199
 中川弘 76
 中久保邦夫 78, 120, 165, 171
 中澤越郎 115
 中澤慶之助 181
 中澤信彦 174, 175
 中路敬 95, 122, 199
 長洲一二 33~35, 48
 永田聖二 193
 永田裕司 189
 永谷清 92, 95
 中谷武雄 74, 97, 171
 永友育雄 158, 160
 長繩光男 75
 中西毅 77, 144
 中西泰之 83, 121, 170
 中野聡子 92, 152
 中野正 50, 51, 138
 中野徹三 61, 62
 中野元 191
 長野敏一 180
 仲原隆幸 174
 永星浩一 194
 中峯照悦 182
 中宮光隆 71, 77, 112, 178,
 192, 197, 200
 中村一雄 156
 中村賢一郎 10, 61, 64, 70,
 116, 141, 142
 中村秀一 90, 149
 中村至朗 63, 66, 68, 80, 88,
 91
 中村宗悦 100
 中村貞二 60
 中村恒矩 141
 中村廣治 iii, iv, 4, 18, 21,
- 37~41, 52, 63, 65,
 77, 81, 86, 101, 112,
 117, 118, 150, 162,
 168, 169, 178, 180
 ~182, 187, 189,
 190~192, 195, 197,
 199, 200
 中矢俊博 71, 84, 169, 175
 中山大 58, 117, 158
 中山智香子 92, 100, 152
 長山雅幸 83
 鍋島直樹 121, 122
 ナポレオン 164
- に
- 新村聡 40~42, 70, 79, 90, 92,
 94, 97, 112, 113, 169,
 172, 199
 二階堂達郎 171
 ニコルソン, J. S. 85
 西太郎 180
 尼寺義弘 166
 西岡幹雄 169
 西垣恒矩 67
 西川潤 63, 79, 97, 141
 西川弘展 175
 西沢保 40~42, 75, 94, 112,
 115, 147, 149, 171
 西村孝夫 48, 53
 西村崇 100
 西村弘 73
 西村善博 192
 西山久徳 60
 二瓶敏 57
 ニュウトン, I. 82, 95
 ニューマーチ, W. 146
- ぬ
- 縫田清二 48, 118
- ね
- 根井雅弘 112, 115, 174
 根岸隆 16, 20, 39~42, 73, 76,
 79, 80, 85, 90, 111,
 113, 121, 149
- の
- ノイマン, J. von 188
 野口旭 87, 93, 98, 120
 野口真 133
 野沢敏治 64, 81, 87, 144
 野地洋行 55, 71, 117, 141
 野尻武敏 155, 159
 野田邦彦 152
 野田弘英 182, 184, 185
 野々村一雄 53
- 野原秀次 169
 ノーマン 98, 122
 野村兼太郎 32, 33, 138
- は
- ハイエク, F. A. von 16, 80, 83,
 99, 101, 102,
 115, 122,
 149, 174,
 197
 ハインドマン, H. M. 163
 バウアー, O. 94, 160, 170,
 173
 バウリング 88, 121
 芳賀守 61, 64, 70, 134, 187
 バーガー, T. 96
 バガーノ, F. M. 101
 袴田兆彦 150
 萩原隼太郎 200
 バーク, E. 174
 ハクストハウゼン 75
 バークリー, G. 160
 狭田喜義 34~37, 38, 39, 42,
 54, 178, 180, 181,
 185, 195
 橋本純二 54
 橋本昭一 39~42, 65, 87, 112,
 115, 119, 161, 163,
 169, 170, 171
 橋本努 99, 102
 橋本直樹 195, 199
 橋本比登志 41~42, 60, 83,
 119, 157, 161,
 164, 167
 バジヨット, W. 163, 192,
 195, 196
 バスティア, C. F. 168
 長谷川隆彦 163, 168
 畑孝一 59, 64, 133
 八田幸二 100, 151
 畠田英夫 90, 134
 ハチスン, T. W. 149, 196,
 198
 服部茂幸 122, 174, 175
 服部文男 36, 39, 66, 76, 109,
 116, 131
 服部正治 40~42, 72, 85, 92,
 94, 96, 97, 112, 115,
 119, 143~145, 148
 服部容教 38, 161, 162, 169,
 171
 羽鳥卓也 5, 13, 34~39, 42,
 49, 52, 61, 63, 65,

- 69, 70, 83, 110,
117, 121, 145, 159,
164~168, 190
- ハートリブ, S. 70, 187
- バニントン, J. 122
- バネクーク, A. 170
- 馬場啓之助 62
- 馬場元二 56, 178, 179, 181
- バベッジ, C. 199
- 浜崎正規 58, 160
- 浜田寅彦 174
- 浜林正夫 5, 13, 34~39, 42,
53, 60, 68, 69, 110,
111, 118, 128, 140,
141, 146
- 原伸子 76, 144
- 原田明信 130
- 原田哲史 96
- 早坂啓造 132
- 早坂忠 37~39, 64, 67, 69, 74,
75, 78, 111, 117, 119,
142
- 林康二 89
- 林治一 10, 34~37, 50, 61, 64,
154, 155, 159, 162
- 林子平 60
- 林達 89
- 林登良雄 58, 157, 178
- 林直道 54, 56
- 林田治男 170, 174
- 林田睦次 183~185, 188, 192,
194
- 早瀬利雄 54, 57
- ハリントン, J. 53
- ハル, C. H. 7, 114
- バルトニー, W. 91, 151
- バルプス, A. G. 171
- バレート, V. F. D. 65, 85,
93, 162,
166
- ハロッド, R. F. 56, 66, 90,
99, 172,
187, 188
- パロワ, C. 167
- 坂昌樹 172, 173
- ハンキー 195
- ひ
- ビゲー, A. C. 98, 101, 175
- 久松俊一 159
- 土方直史 85, 143
- 菱山泉 iii, 5, 36~40, 47, 54,
61, 66, 69, 78, 79, 87,
92, 121, 158, 161, 162
- 肥前栄一 75
- 日高晋 57
- ヒックス, J. R. 90, 180
- 姫野順一 89, 116, 190, 193,
196, 197, 199
- ヒューウエル, W. 122
- ヒューム, D. 59, 62, 63, 82,
94, 120, 134,
135, 144, 149,
150, 166, 167
- 平勝廣 186
- 平井俊顕 42, 75, 78, 92, 98,
112, 119, 120
- 平井俊彦 5, 35~40, 42, 53,
56, 59, 60, 140, 154,
160, 163
- 平石修 91, 93, 96
- 平瀬己之吉 10, 32~36, 49,
50, 76, 116, 137
- 平田清明 34~40, 48, 52, 56,
58, 61, 63, 76, 92,
109, 110, 128, 140,
141, 147, 157
- 平野絢子 50
- ヒルデブランド, B. 65, 161,
163
- ヒルファディング, R. 48, 57, 65,
66, 73, 76,
85, 89, 92,
97, 104, 118,
132~134,
139, 161,
169, 176,
182, 184,
185, 188
- 廣田明 64
- 廣田功 116
- 広渡定喜 182
- ふ
- ファーガスン, A. 57, 63, 81,
194
- ファーミン 64
- フィッシャー, I. 95, 122,
199
- フィッシャー, J. 129
- フィヒテ, J. G. 80, 172
- フィリップス, A. W. 188
- フィルマー, R. 66, 200
- フェヌロン 152
- フェッラーラ, F. 164
- フェッラーリ, G. 146
- フォイエルバッハ, L. A. 68, 154,
161, 184
- フォルボネ, F. V. D. 194, 199
- 深貝保則 41~42, 73, 83, 94,
99, 112, 121, 122,
132, 133, 137, 149
- 深町郁弥 179, 182
- 吹春寛一 180
- 福澤勝彦 194
- 福澤論吉 64, 67, 70, 73, 84,
87, 91, 113
- 福田進治 99
- 福田徳三 113
- 福原行三 5, 52, 118, 154
- 福原好喜 69
- 藤井賢治 102, 120~122, 150,
196
- 藤井定義 60, 167
- 藤井隆至 113, 134
- 藤井透 89, 172
- 藤岡孝四郎 67, 157
- 藤田暁男 67, 74, 87, 181, 183,
185, 190
- 藤田勝次郎 144, 148
- 藤田幸雄 190, 195, 196
- 藤塚知義 53, 69, 110, 142,
146
- 藤野正二郎 107
- 藤原昭夫 76, 91
- 藤本正富 92, 99, 122
- 藤本保太 178, 180, 182~184,
187
- ブース, A. 151
- 船越経三 38~39
- 舟橋喜恵 63, 82
- プーフェンドルフ, S. F. von 89, 148
- ブラウグ, M. 15, 79, 108,
132, 169
- ブラン, J. J. L. 151
- フランクリン, B. 47~49,
51, 52, 54,
179
- フーリエ, F. M. C. 82, 86,
119, 152
- ブリダット, B. P. 95
- ブルーアム, H. P. 81
- 古川順一 80, 197
- 古川卓万 183, 184
- 古澤友吉 48, 57
- ブルードン, P. J. 62, 64, 65,
71, 74, 103,
109, 112,

- 144~146,
148, 159,
194, 197
ブレイ, J. F. 61, 63, 134,
165
フレッチャー, A. 86, 196
ブレハーフ, G. V. 58, 159
ブレムズ 199
ブレン, J. M. 90, 109
へ
ベアリング, F. 180
ベイコン 61, 191
ベイリー, S. 47, 69, 77, 95,
165
ペイン, T. 171
ペクル, C. 88
ヘーゲル, G. W. F. 62, 77, 109,
117, 134,
144, 149,
191, 193
ヘス, M. 56, 59, 61, 64, 109
ベティ, W. 7, 58, 59, 61, 65,
103, 114, 135,
140, 146, 179
ベルスーリ 92
ベルンシュタイン, E. 66, 139,
159
ベンサム, J. 51, 88, 98, 100,
121, 132, 133,
135, 142, 152,
197
ヘンダーソン, H. D. 100
ベンディクセン, F. 159
ほ
ホエートリー, R. 174
ボエム・バヴェルク 81, 96,
121, 145,
149, 152,
159, 168,
195
ポコック, J. G. A. 84, 109
保坂直達 64, 157, 162
ホジスキ, T. 59
星野彰男 38, 39~42, 66, 68,
82, 98, 119, 140,
143, 149
星野中 168
星野富一 84, 96, 122, 133
保住敏彦 73, 97, 122, 161,
170, 176
細江守紀 185, 188, 191
細見英 62, 109, 117, 157, 158,
160
堀田誠三 77, 93, 112, 119
ホップズ, T. 47, 55, 67, 152,
164, 197
ボテロ, G. 56
ボードー, A. N. 139
ホートレー, R. G. 92, 120,
121, 186
ホーナー, F. 87
ボバー, K. R. 122
ホブゾン, J. A. 76, 89, 95,
100, 116,
140, 151,
174, 190,
193, 196~
199
ホランダール, S. 68, 95, 108,
132, 143,
144, 151,
167
ボランニー, K. 100, 191
堀経雄 iii, 4, 7, 10, 11, 13, 29,
32~35, 37, 42, 47, 49,
59, 106, 109, 155, 162
堀家文吉郎 47
堀江忠男 55, 62, 139
堀川マリ子 5
ボリングブルック, H. S. J. 69
ボルトケヴィッチ, L. von 80, 91
ポロック 176
ボワイエ, R. 174
ボワギルベール, P. 79, 86
本郷亮 101, 175
本田利明 70
ホント, I. 175
ま
舞出長五郎 iii, 4, 29, 32~33,
42
マイヤー, G. von 182
前田豊昭 179
前田純一 196
前田芳人 191
前原正美 89, 98
マカロック, J. R. 99, 142,
169, 198
正木八郎 120, 163, 172
真実一男 13, 34~39, 42, 49,
65, 70, 117, 129,
156, 158, 167
マーシヤル, A. 16, 60, 62~64,
67, 70, 73, 74,
86, 87, 94, 98,
102, 104, 112,
115, 116, 119,
121, 122, 134,
135, 142, 149,
150, 158, 162,
164~166, 168,
169~171, 173,
179~184, 189,
190, 192, 194
~196, 197,
200
榎谷謙二 135
益永淳 100, 122, 151
松井名津 99, 122, 173
松石勝彦 117
松浦高嶺 52
松浦保 65, 117, 141, 142
松尾匡 200
松尾博 6, 37~38, 58, 72, 155,
159, 165
松岡寛爾 55
松岡保 66, 117, 157
松岡利道 65, 116, 118, 169
松川七郎 34~36, 59, 140
松崎昇 77
松澤俊雄 187
松嶋敦茂 65, 112, 121, 162,
166, 171
松田勇 157
松田弘三 55, 59, 69, 155
松田寛 32, 50, 137
松田頼 178
松平定信 52, 55, 62
松野尾裕 91, 113, 122
松橋透 74
松本将規 175
松本有一 68, 120, 164, 173
松山昌司 157
マーティン, H. 175
的場昭弘 79, 99, 145, 150
マブリ, G. 48, 144, 154
マルクス, K. 6~8, 12, 15,
16, 47~49, 51
~57, 59, 61~
66, 68, 69, 71
~73, 75~77,
79, 81~83, 85,
86, 88, 90~92,
95, 97~100,
103, 104, 106,
108, 109, 111,
112, 116~118,

120, 133, 136,
139, 141~148,
156, 159~165,
168~173, 179,
183, 184, 186,
188~193, 195
~199, 201
マルサス, T. R. 48~50, 60, 63,
71, 74, 77, 83,
85, 87, 88, 90,
98, 103, 104,
109, 112, 119
~122, 130,
138, 145, 147,
148, 151, 157,
159, 164~166,
168~174, 178,
181, 182, 196,
197, 201
丸山広一 183
丸山武志 101, 165, 190, 197,
201
馬渡尚憲 iii, iv, 18, 20, 27,
39~41, 72, 76, 83,
87, 90, 99, 111, 119,
131
マン, T. 59, 70, 179, 180
マンデヴィル, B. de 51, 74, 92,
149, 152,
155
マントウ 78
み
三浦愛三 162
三浦功 197
三上正之 56, 159
ミーク, R. L. 53, 108, 136,
139, 143, 155,
165
御崎加代子 88, 97, 121, 134,
175
三島憲之 101
ミシュラー, P. 149
水田健 76, 82, 91, 101, 112,
119, 121, 145, 146,
147, 149, 150
水田珠枝 99
水田洋 iii, 6, 10, 13, 15, 21,
32~39, 42, 47, 62, 63,
66, 68, 71, 74, 84, 86,
110, 116, 128, 129,
139, 140, 156, 157,
158, 160

ミーゼス, L. E. von 100, 152
溝上孝夫 196
溝川喜一 6, 37~40, 48, 58,
65, 90, 111, 117,
128, 156, 158, 160,
167
溝畑剛 170, 172
ミツチエル, W. C. 146
ミード, J. E. 192
南方寛一 60, 156, 158, 161,
162
三邊清一郎 48, 49, 51, 52, 54,
158, 179
南亮三郎 56
見野貞夫 160
美濃口武雄 142
美濃村暢喜 70
宮内博 155
宮川彰 69, 76, 85, 145
宮川実 137
宮崎喜代司 179, 180, 183,
185, 188, 201
宮崎犀一 36, 37~40, 49, 57,
60, 61, 69, 74, 75,
91, 111, 138, 142
宮崎義一 39, 53, 116, 128
宮田千蔵 185, 187
宮本憲一 107
宮本順介 166, 198, 199
宮本義男 156, 160
三好愛子 168
ミュア, T. 196
ミュルダール, K. G. 58
ミラー, J. 56, 94, 144
ミル, J. 48, 58, 74, 88, 98,
118, 129, 156, 157,
163
ミル, J. S. 6, 52, 55, 58, 63,
64, 66, 67, 72~
74, 76, 78, 80, 83,
88~93, 95, 96,
98, 99, 104, 106,
109, 112, 118,
119, 121, 122,
129, 132~134,
141, 142, 146,
149, 150, 152,
154, 157, 163,
165, 168, 171,
173, 178, 182,
183, 187, 193,
197, 199, 200

ミルトン, J. 51, 155
む
向井公敏 77
武者小路信和 100
武藤正平 52, 58
武藤光朗 49
村上俊介 82, 148, 151
村越好男 174
村田和博 199
村田安雄 55
村松茂美 41, 86, 192, 196,
200
室鳩巢 49
ムロン, F. 169
め
メイヨー, E. 178
メルヴィル, T. 195
メンガー, C. 16, 71, 73, 80,
88, 121, 149,
151, 152, 162,
164, 172
も
モア, T. 50, 129, 137, 182
モス, L. S. 152
望月清司 65
望月通 72
望月俊明 72
元吉敬治 180
元吉祥子 41, 100, 135
森茂也 51, 65, 160
森静朗 59, 64, 67
森東吾 106
森岡敬司 188, 192
森岡邦泰 89, 95, 121
森川喜美雄 62, 109
森下宏美 130
モリス, W. 57, 95, 158
森田勉 56
森戸政信 188, 190
森本孝 89, 148
森村敏己 87, 121, 152
守屋典郎 128
諸泉俊介 193, 197, 199, 200
モンクレティアン, A. de 62
モンテスキュー, C. L. 90
や
八尾信光 92, 196
八木紀一郎 iii, 20, 39~42,
71, 78, 83, 88, 96,
101, 102, 112,
113, 119, 121,
129, 130, 154,

- 168, 172, 175
八木久志 97
矢嶋道文 70
安川(安藤)悦子 58, 60, 120, 163
八柳良治郎 118
矢内原忠雄 73
柳澤治 96
柳澤哲也 87, 173
柳田國男 134
柳田芳伸 168, 169, 196, 201
八幡清文 74, 149, 150
藪田雅弘 190, 192
山鹿素行 66
山川義雄 32, 33, 34~36, 47
山口和男 55, 117, 128, 158, 161
山口重克 174
山崎耕一 74, 150
山崎怜 36~41, 42, 56, 74, 79, 81, 82, 102, 111, 158, 166, 167
山崎弘之 83, 93
山崎益吉 70, 91
山崎義三郎 160
山崎好裕 93, 96, 122, 200
山下宇一 181
山下博 42, 51, 62, 64, 162
山下正毅 184, 185
山田信一 192, 194, 198
山田銳夫 40~42, 64, 76, 112, 114, 118, 160, 172
山田雄三 51, 138
山中隆次 40~41, 56, 76, 94, 109, 112, 116, 144, 148
山之内靖 68, 116
山辺知紀 71, 171
山村延昭 179, 182
山本英二 75
山本英司 122
山本広太郎 75
山本貴之 172
山本二三丸 53
ゆ
行澤健三 47, 155, 163
よ
楊枝嗣朗 192
横井小楠 70
横溝軌一 178
横山照樹 90, 166, 169
横山正彦 32~37, 48, 50, 54, 62, 106
吉川洋 107
吉澤法生 186
吉澤芳樹 13, 16, 17, 37~40, 42, 48, 52, 64, 69, 76, 77, 129, 138, 144, 192
吉田茂芳 157
吉田静一 54, 58, 59, 68, 141
吉田憲夫 69
吉田紘 169
吉田文和 133
吉田雅明 85, 148, 171
吉田洋一 139
吉田義三 53
吉原泰助 10, 56, 109, 116, 134, 139
吉見政志 167
米川紀生 86, 94
米田昇平 86, 120, 194, 199
米田康彦
ら
ラサール, F. 77, 169
ラスキン, J. 48
良知力 36, 62, 110, 142
ラックマン, L. M. 174
ラッセル, B. 183
ラザーシチェフ 51, 157
ラムズィ, G. 58
ラムゼイ, F. P. 96, 122, 200
り
リカードウ, D. 6, 47~52, 61, 63~65, 68, 70, 72, 74, 76, 77, 79, 80~88, 90, 91, 93, 95, 96, 100, 101, 103, 104, 108, 109, 112, 115, 117, ~119, 121, 122, 132~134, 138, 143~151, 155, 156, 158, 160~165, 167, 178~180, 182, 189~192, 195, ~197, 199, 200, 201
リード, T. 76, 79
リスト, F. 53, 61, 72, 77, 95, 140, 143, 144, 146, 166, 188, 190, 191
立半雄彦 161
リンズィ, F. 195
る
ルカーチ, G. 53, 163
ルクセンブルグ, R. 65, 89, 107, 159, 187
ルソー, J. J. 47, 52, 72, 141, 143, 145, 148, 149, 172
ルター, M. 168
ルフューヴル, H. 108
ルロワ=ポーリユー 79
れ
レイ, J. 61, 99
レイオンフーヴド, A. 121
レスリー, C. 156
レドレール 173
レーニン, V. 51, 66, 73, 103, 117, 166, 185
ろ
ロー, J. 59, 77, 171
ロージアン 123
ローダーデール, J. M. 81, 119, 143
ロック, J. 49, 59, 60, 80, 85, 120, 133, 140, 141, 161, 163, 193, 196, 197, 198, 200
ロッシャー, W. 121
ロテック, K. von 172
ロートバルト 152
ロードベルトウス, J. K. 170
ロバーツ, L. 53
ロバートソン, D. H. 120, 171
ロビンズ, L. 100
ロビンソン, J. V. 174
ローヤン 144
ロングフィールド, S. M. 122
わ
ワイトリング, W. 56
若田部昌澄 99
若森章孝 164, 167, 172
若森みどり 100
和田貞夫 155
和田重司 37~42, 59, 60, 62, 65, 68, 83, 84, 86, 110, 119, 142, 158, 161
和田強 91, 95

渡辺昭 57
渡辺国広 48
渡辺邦博 112, 167, 168
渡辺恵一 82, 90, 116, 166,
175
渡辺健 106
渡辺源次郎 39~40, 50, 55,
57, 59
渡辺茂樹 66
渡辺輝雄 10, 34~36, 50, 54,
58, 59, 116, 139
渡辺利文 189
渡会勝義 41~42, 72, 90, 91,
98, 101, 112, 120,
147, 148, 151
ワルラス, A. A. 165
ワルラスM. E. L. 16, 62, 66,
71, 78, 80,
88, 93, 97,
104, 112,
120, 121,
134, 142,
161, 165,
171, 175

経済学史学会50年史

2000（平成12）年9月10日印刷

2000（平成12）年9月15日発行

編者 経済学史学会

発行者 経済学史学会

代表幹事 馬渡尚憲

印刷者 よしみ工産株式会社

発行所 経済学史学会事務局

〒980-8576 仙台市青葉区川内

東北大学経済学部 馬渡研究室

Tel : 022-217-6275

Fax : 022-217-6321

FIFTY YEARS OF THE SOCIETY FOR THE HISTORY OF ECONOMIC THOUGHT

September 2000

edited by

THE SOCIETY FOR THE HISTORY OF ECONOMIC THOUGHT, JAPAN

Tohoku University, Sendai, Japan

CONTENTS

PREFACE Shoken Mawataru, President iii

PART I

FIFTY YEARS OF THE SOCIETY FOR THE HISTORY OF
ECONOMIC THOUGHT ... Hiroji Nakamura, Ex-President 3

PART II RECORDS

I	Rules and Regulations	25
II	Directors, Offices and other Officers	32
III	Trend and Changes in Number of Members	44
IV	Subscriptions and Finance (1999)	46
V	List of Papers read before the Annual Meetings	47
VI	List of Common and Forum Themes discussed at the Annual Meetings	103
VII	List of Universities where the Annual Meetings were held	105
VIII	Public Lectures and International Meetings	106
IX	Special Lectures by Foreign Scholars	108
X	Publications	109
XI	List of Special Issues, Survey and other Articles in <i>Annals</i> (formerly <i>The Annual Bulletin</i>) of the SHET	115
XII	Proclamations and Appeals	123
XIII	Members sent to the International Conferences	128
XIV	Branch Activities	129

Name Index